辭苑

あ

あ ㊀五十音圖「あ行」の第一の音。㊁母音の一。口を廣く開き、舌の後部を少しく高め、聲帶を振動させて發する母音。㊂「安」の草體。

あ 【足】(名) あし。(古語)

あ 【畦】(名) あぜ。(古語)

あ 【啞】(名) ㊀おし。ものの言へない人。㊁鳥の聲。

あ 【阿】(名) ㊀なだ(丘陵)。㊁くま(曲隅)。㊂おもねること。㊃きし(岸)。㊄むれ(棟)。㊅のき(簷)。㊆人を呼ぶ時の冠詞。㊇佛弟子の名。「一難」。㊈アフリカの略稱。「南一戰爭」。

あ 【亞】(名・接頭) ㊀つぎ。次位。「一相」。㊁たくひ。「一流」。㊂【化】化合物の成分の割合の少いこと。㊃【地】アジヤの略。

あ 【彼】(代) かれ。あれ。(古語) 【地】アジヤの略。

あ 【我・吾】(代) われ。(古語)

あ 【唯】(感) 返事をする時の聲。

あ 【如彼】(副) あのやうに。

あ 【嗚呼・嗟・噫】(感) ㊀ものに感じて發する聲。㊁呼びかける聲。㊂「嗟」「噫」は歎息の場合に限る。㊃「嗚呼」は廣く歎息・賞美の場合に用ひる。

ああ 【啞啞】(感)「あくあく」と讀む時は、「笑ふ聲」の意。㊀鳥の聲。㊁鳥の聲。㊂小兒の聲。

アーヴィング [Washington Irving] (名) 【人】米國の文學者。「スケッチ・ブック」「アルハンブラ」等の著がある。(一七八九—一八五九)

アーガス・カメラ [Argus-camera] (名) 豆寫

アーキオロジー [Archeology] (名) 考古學。

アーキテクチュア [Architecture] (名) 建築學。建築樣式。

アーギュメント [Argument] (名) 議論。

アーク [Arc] (名) 弧。 **—ライト** [Arc-light] (名) ことう(弧燈)。この燈では、放電による發光部分が弧狀であるから、この名がある。炭素棒に電流を通じて、太陽のやうな強烈な白色光を放たせる燈。

アークティック・オーシャン [Arctic Ocean] (名) 【地】北氷洋。北極海。北極圈內(北緯六六度三三分以北)の海洋。

アークライト [Sir Richard Arkwright] (名) 【人】イギリス人。紡績機械發明家。製絲業者。(一七三二—一七九二)

アーケイズム [Archaism] (名) 古語。古體。擬古主義。

アーケイック [Archaic] (英・形) 古風雅拙な趣のあるさま。

アーケード [Arcade] (名) 【建】大建築の內部に設けた通路で、通路の上には硝子張りやその他の覆がある。 **—ストーア** [Arcade-store] (名) アーケードの兩側に並ぶ商店。

〔ドーケーア〕

アーサーおうでんせつ……わ…「—王傳說」(名) 【佛】[Arthurian legend] 英國の傳說で、アーサー王及び騎士の物語。シーアルマン傳說及びニーベルンゲン傳說とともに歐洲三大傳說の一。この物語は、ロバート・ヴェースのアルーターズ物語に歌はれ、散文としては、トマス・マロリの「アーサー王の死」、詩としては、ロード・テニソンの「アディ・ルス・オヴ・ヒキングス」に敍述せられてゐる。

アース [Earth] (名) ㊀土地。㊁アヂオの接地。接「地線」。

アーチ [Arch] (名) ㊀石又は煉瓦・コンクリートなどを材料として弧形に造つた眼鏡橋。㊁杉・檜等の薄で包んだ線門。㊂【建】建築上の技法の一。石材・煉瓦・コンクリート等を特殊の方法で曲線形に築き、桁材と同一の目的に使用したもの。拱(せりもち)迫持。

アーチー [Archy] (名) 【軍】飛行機を射擊する大砲。

アーティスト [Artist] (名) 藝術家。

アーティフィシャル [Artificial] (英・形) 人工的。技巧的。 **—アイヴォリー・タイプ** [Artificial Ivory-type] (名) 人造象牙印畫。 **—ライト・フォトグラフィー** [Artificial-light-photography] (名) 人造光線寫眞術。

アート [Art] (名) 藝術。技術。

アートタイトル [Art-title] (名) 意匠を凝らした映畫字幕。

アートタイプ [Arto-type] (名) 精巧なコロタイプの一種。無光澤な寫眞印刷の一種。

アートディレクター [Art-director] (名) 映畫の舞臺・衣裳・小道具・裝飾等美術に關する監督。

アートトフォアアート [Art for art] (句) 藝術至上主義。十九世紀に、ウォルター・ペイターなどが、初めて稱へた藝術の絕對的獨立を主張する說。藝術の爲の藝術。

アートトフォアライフ [Art for life] (句) 人生の爲の藝術。文藝上の自然主義や人道主義は、根本をこの主義の上に置いた。

アートペーパー [Art-paper] (名) 外面に鑛物質のものを塗り、平滑にした洋紙で、光澤があり、多く寫眞版の印刷に用ひる。

アーノルド [Matthew Arnold] (名) 【人】イギリスの批評家・詩人。トマス・アーノルドの子。「ターシス」「カルチュア・エンド・アナキー」「文學とドグマ」等の著がある。(一八二二—一八八八)

アーノルド [Thomas Arnold] (名) 【人】イギリスの教育家・歷史家。「羅馬史」の著がある。(一七九五—一八四二)

アーベント [獨 Abend] (名) ㊀夕方。㊁特殊の目的で夕方から開く演奏會・講演會・映畫會等。

アーマチュア [Armature] (名) 【機】發電機や電動機の中にあつて回轉する部分で、發電機には發電子といひ、電動機には電動子といふ。

アーミスティス・デー [Armistice Day] (名) 世界大戰休戰記念日である十一月十一日。

ああむじょう……ぢやう…「隱無情」(名) 【文】十九世紀のフランスに於ける小說家ヴィクトル・ユーゴーのレ・ミゼラーブル (Les Miserables) の飜譯名。ジャン・ヴァルジャンといふ不運な男の一生を中心として、祇會の寄醋な道義に、それぞれ打ちのめされ、清い愛によつて難へる經過を描寫した小說。一八六二年刊。

アームストロング [William George Armstrong] (名) 【人】イギリスの工學技師・發明家。水力機械・大砲・蒸氣起電機等を發明し、ケンブリッヂ大學からLL・Dの學位を受け、又ボルン(男爵)を授けられ、貴族に列せられた。(一八一〇—一九〇八)

—かいしゃ……くわ…「—會社」(名) イギリスの軍械・軍器製造所で、アームストロング砲は、同社製造の後裝・施條の大砲である。

アームチェア [Arm-chair] (名) 【樂】肘掛椅子。安樂椅子。

アーメン [Amen] (名) 【宗】キリスト教で、祈禱の後に稱へる語。もと、ヘブライ語で、「誠實」「甘諾の意」。

ああら (感) あら。あれ。

アール [Are] (名) メートル法の地積の單位。一〇〇平方メートルで、我が三〇坪一合五勺に當る。

アール・ヌーヴォー [佛 Art Nouveau] (名) 【美】九〇〇年頃、フランスに流行した美術上の一樣式。色彩や線は輕淡な主とし、特に自由な曲線を用ひることを特色とする。

あい 【愛】(名) ㊀なさけをかけること。かはゆがること。㊁男女の思ひあふこと。戀愛。ラヴ(love)。㊂【宗】キリスト教で、神が人類に幸福を與へること。他の人類を兄弟と思つてかはゆがること。

あい 【哀】(名) ㊀かなしみ。㊁あはれむこと。

あい 【鮎】(名) 【動】「あゆ」の誤。

あい 【藍】(名) 【植】蓼(たで)科の一年生草本。葉

は廣楕圓形又は卵形で互生する。秋、葉腋から花梗を抽き、紅色の花を穂狀花序に綴り、花後、小果を結ぶ。葉から染料をとる。㊁蓼草から製した天然染料。

㊀あいいろ〔藍色〕(名) 藍で染めた色。青より濃く、紺よりは淡い色。**―いろ**〔藍色〕(名) 藍で染めた色。青

(㊀) 藍

―がえし〔藍返〕(名) 横糸のある上を更に藍で染めたもの。**―がみ**〔藍紙〕(名) つゆくさ等の染草の汁で藍色に染めた紙。こんがみ。**―がめ**〔藍瓶〕(名) 藍の汁を貯へる瓶。藍壺。**―がま**〔藍隈〕(名) 藍色に染めた革。藍革。**―さめ**〔藍鮫〕(名)〔動〕靜岡縣の近海に產する鮫の一種。體色青く、腹部は白い。皮を刀の柄に用ひる。**―しるし**〔藍汁〕(名) 藍をとかした汁。**―ずみ**〔藍墨〕(名)(あおすみ)〔青墨〕。**―ずり**〔藍摺〕(名) 藍で模樣を摺りつけた布帛。あやすり。あんずり。**―ぞめ**〔藍染〕(名) 藍で染めた色。**―そめつけ**〔藍染附青華瓷〕(名) 支那製の磁器の一。藍で著色して濃淡をあらはしたもの。**―たけ**〔藍茸〕(名)【植】はつたけ初茸。**―たて**〔藍蓼〕(名)【植】あい(藍)の。**―だて**〔藍建〕(名) 藍に水に溶解せぬから、藍玉を還元し白藍として、アルカリ性液に溶解させる法。**―だま**〔藍玉〕(名) 藍の葉を醗酵させたもの。固めた染料。**―つぼ**〔藍壺〕(名)(あいがめ)。**―なめし**〔藍革〕(名)(あいがわ)。**―ねずみ**〔藍鼠〕(名) 藍色がかった鼠色。あるけねずみ。**―ばな**〔藍花〕(名) ㊀【植】つゆくさ(露草)。㊁藍瓶に浮かぶ泡。**―ぼう**〔藍棒〕(名)(あいいろう)(藍蠟)。**―みどろ**〔藍【植】藍藻類の淡水藻。不潔の水面に藍色をなして浮かぶ。**―みるちゃ**〔藍海松茶〕(名) 萌葱色の濃くして黒すんだ染色。**―ろう**〔藍蠟〕(名) ㊀藍瓶の縁に浮かんだ泡の藍を取って乾かして棒狀にしたもの。㊁古い藍布に苛性ソーダ・鉛などを加へて煮出した藍を棒狀にしたもの。

あい〔會・遇・逢〕(名) あふこと。對面。

あい〔相〕(名) ㊀酒の相手。㊁(あいすち)〔相槌〕。㊂同類。仲間。㊃應答。合圖。

あい〔相〕(接頭) ㊀互に。ともどもに。㊁手紙の文で、動詞の上に添へて語調を整へる語。「變ちず」**―うち**〔相撃・相打〕(名) 同時にうちあふこと。相討。㊁一人の敵を味方二人で討つこと。

―おい〔相老〕(名) 夫婦がともに年寄ること。

―おもいぐさ〔相思草〕(名)【植】たばこ(煙草)。**―かご**〔相駕籠〕(名) 二人がいっしょに一挺の駕籠に乘ること。**―がさ**〔相傘〕(名) 二人で物をかつぐ時の一方のもの。**―かた**〔相方〕(名) ㊀(あいて)。㊁遊客の相手になる遊女。**―かまえて**〔相構へて〕(副) 必ずの決して。**―きゃく**〔相客〕(名) ㊀二人以上の客が宿屋で同室に泊ること。又、その人。㊁二人以上の客が同時に或家の客になったこと。又、その人。**―くせまい**〔相曲舞〕(名) 二人で舞ふ曲舞。**―こ**〔相子〕(名) 互に勝負のないこと。**―ご**〔相碁〕(名) 技倆のよくあふ碁。**―さげ**〔相提・げ〕(名) 印籠と胴亂と、又は煙管筒と煙草入とを、同時に腰にさげること。**―さし**〔相差〕(名) 相撲四十八手の一。互に相手の脇に手をさしこむこと。**―し**〔相仕〕(名) 借家(名) 一つ棟の中に共に借家をすること。**―じゃくや**〔相作〕(名) てつだひ。助手。**―ずち**〔相槌〕(名) ㊀互にうち合はす槌。㊁話の調子をあはすこと。**―すま**〔相棲・合槫〕(名) 襟先の秤の幅。一つ所に共に住むこと。**―せき**〔相闘〕(名) 東西兩大關の中の次位のもの。**―たがいに**〔相互に〕(副) ともどもに。互に太刀で斬りあふこと。**―だち**〔相太刀〕(名) 互に二人の人が、同じ店で商ひをすること。**―だな**〔相店〕(名) 二人の人が、同じ棟の家に借家すること。**―でし**〔相弟子〕(名) 同じ師に就いて學ぶ人。**―でん**〔相殿〕(名)(あいどの)。**―どこ**〔相床〕(名) 一間に並べ敷く床。**―どの**〔相殿〕(名)【神】同じ社殿に二柱以上の神を合祀すること。**―とぶろう**〔相訪ふ・自動・ハ四〕互にたづねあふ。**―ともに**〔相共に〕(副) いっしょに。ともどもに。**―どり**〔相取〕(名) 共謀の詐欺。**―なげ**〔相投〕(名) 相撲の手の一で、相手が投げようとするのをすりよって背負ひ投げにすること。**―ね**〔相寝〕(名) ともね。**―のつち**〔相槌〕(名)(あいすち)。**―のり**〔相乘〕(名) 車などにともに乘ること。又その乘の人。**―はん**〔相版〕(名) 二人以上共同で出版すること。又、その人。**―ばん**〔相番〕(名) 共に番を務めること。又、その人。當番のなかま。**―ぶきょう**〔相奉行〕(名) 同役の奉行。**―ぶん**〔相分〕(名) お互っこ。**―ほう**〔相棒〕(名) ㊀一つの駕籠や春などをいっしょにかつぐ相手の人。㊁仲間。**―ぼれ**〔相惚〕(名) 男女の互に思ひあふこと。**―ま**〔相間〕(名) あひだ。あひひま。**―まご**〔相孫〕(名) 共に孫になる關係のもの。**―またい**〔相間小間〕(名) あひだのひま。**―みたがいに**〔相見互に〕(名) 互に助け合ふこと。**―むこ**〔相聟・相婿〕(名) ㊀妻の姉妹の夫。㊁姉妹のむこの互称。**―もち**〔相持〕(名) ㊀入費を平等に負擔すること。㊁兩方に優劣のないこと。㊂相共に助け合ふ關係。**―やく**〔相役〕(名) どうやく(同役)。**―やけ**〔相舅〕(名)(あいがわ)。嫁・聟方の舅姑相對する稱。**―やど**〔相宿〕(名) 同じ宿に泊りあふこと。又、その人。**やり**〔相槍〕(名) 一人の敵に味方二三人で槍を持って戰ふこと。**―よみ**〔相讀〕(名) ㊀ともに讀むこと。㊁讀人。**―よめ**〔相嫁〕(名) 夫の兄弟の妻。

あい〔間〕(名) ㊀あひだ。あはひ。すき。ま。㊁事と事との間に行ふわざ。㊂能樂の中入に出る狂言師。㊃(あいいごと)。㊄春と夏、秋と冬との間。**―あか**〔間赤〕(名) 江戸時代の奥女中が打着と下着との間に着た紅色の小袖。**―がみ**〔間紙〕(名) ものとものとの間に挿む紙。**―ぎ**〔間着〕(名)(あいふく)。間服。**―ぎり**〔間切〕(名) 竹の節と節との間を切って作った笛。一節切(ひとよぎり)の類。**―ぎん**〔間銀〕(名) 口錢。手數料。**―ごま**〔間駒〕(名) 將棋で間のふせぎに おく駒。**―じろ**〔間白〕(名) 江戸時代に、奥女中が襦袗の打着と下着との間に着た白い小袖。**―なし**〔間無し・形・一〕 へだてがない。區別がない。しかたがない。うちつけである。(古語)

―の〔間女〕(名) 茶屋女と傾城の間の女。**―のかき**〔間垣〕(名) 庭又は路地などのしきりの垣。**―のかね**〔間矩〕(名) 折半した二線間の角度。**―のきょうげん**〔間狂言〕(名) ㊀冬の顔見世と春の二のかぶりの間に行ふ芝居狂言。㊁仕手が樂屋にはひって、後の仕手の裝束に改める間に行ふ能狂言。**―のくさび**〔間楔〕(名) ㊀材と材との間にうちこんで、つなぎとめるくさび。㊁一定の仕事の暇に他の事をなすこと。**―のしゅく**〔間宿〕(名) 兩窟間の立て場。**―のすさび**〔間遊〕(名) 定まったことをする暇に、慰みにするわざ。**―のつなぎ**〔間繋〕(名) ㊀物と物とをつなぐもの。㊁或事のひまに他の事をなすこと。**―のて**〔間手〕(名) 眼と眼との間には さむる音曲。調子を合はせて中にはさみ入れるもの。合手。**―の**〔間間〕(名) ㊀主な二つの室の中間にある室。㊁京間と田舍間との中間の間。**―ふく**〔間服・合服〕(名) 春と秋と、卽ち冬と夏、夏と冬との中間に着る洋服。

あいあい〔諧諧〕(名・副) ㊀草木の茂るさま。㊁多く盛んなさま。㊂心のやはらいだまま。「さま」。

あいあいあい〔諧諧諧〕(名・副) 雲霞の集まりたなびくのしの。共有。

あいあいあい〔哀哀哀〕(名・副) 深く哀しむさま。

あいあいあい〔欸乃〕(名・副) あいだい。あいない。

あいあい〔相合・合〕(名) 相共にすること。共同

一本の傘を二人でさすこと。多く男女二人の場合にいふ。あひがさ。

アイアン[Iron](名)(普通にはなまって「アイロン」といふ。)❶鐵又は鐵製品。❷西洋ひのし。❸髪の毛をちぢらせる小形の鏝。❹ゴルフ用の鐵の杖。**—ディシプリン**[Iron discipline](名)【社】軍人に對する軍律、又は共産黨員に對する黨律の如く、絶對に破るべ、絶對の規律。**—ロー**[Iron law](名)❶人間の意思では變更することのできぬ法則。鐵則。❷【經】賃銀鐵則。現在の資本主義經濟組織では、勞働者の賃銀は增加させる望みがないといふラッサールの說。即ち勞働賃銀が上れば勞働者が殖加して賃銀が低下する。故に勞働者は生活費用として必要な額以上の賃銀を、永久得ることが出來ないとの說。

あい-いく[愛育](名)かはゆがって育てること。

あい-いしゃ[合醫者](名)その人をよく診察し、適藥を投ずる醫者。

あい-いん[愛飲](名)好んで飲用すること。

あい-いん[合印](名)譜簿・書類のひきあはせにおす印。わりいん。あひばん。

アイヴァンホー[Ivanhoe](名)【文】イギリスの文豪サー・ウォルター・スコットの歴史小說。騎士アイヴァンホーを主人公としたもの。一八二〇年刊。

アイヴォリー[Ivory](名)❶象牙。❷名刺などに用ひる象牙色の光澤ある厚い洋紙。**—タワー**[Ivory tower](名)❶象牙の塔。自己の好む靜寂な詩的美の生活をするために文藝家などが一人で籠る別天地。

アイ・エフ・ティー・ユー[I·F·T·U](名)【社】[International Federation of Trade Unions の略]國際勞働組合聯盟。第二インターナショナル系勞働組合の國際的聯合で、赤色勞働組合に對抗し、社會民主主義を標榜する。その本部がオランダのアムステルダムにあるので、「アムステルダム・インターナショナル」とも稱する。

あい-えん[愛緣](名)【佛】慈愛の緣。

あい-えん[哀婉](名)哀れにやさしいこと。

あい-えん[哀猿](名)悲しい聲で啼く猿。

あい-えん[合緣](名)むつびあふことのできる緣。**—きえん**[合緣奇緣](名)❶合ふも合はぬも緣によること。❷不思議な緣。

あい-おい[相生](名)いつしょに生び出ること。おないどし。**—さし**[相生插](名)男松と女松とを插し、根じめに戴柑子を用ひたもの。**—のまつ**[相生松](名)兵庫縣加古郡高砂町高砂神社の境內の鐵松。高砂の松。**—ぼん**[相生盆](名)婚禮の祝に用ひる男島と女島とを並べた盆景。**—むすび**[相生結](名)普通の女結びの一端を更にその結目に通した紐の結び方。

アイ・オー・ユー[I·O·U](名)【商】(I owe you の略語)あなたから借用しました意。借用をあらはす商業用の略語。

あい-おれくぎ[合折釘](名)直角に曲って、兩端の尖った釘。

あい-か[哀歌](名)悲しい心持をあらはした歌。

あい-かき[合峽](名)【建】二箇の木又は石を接合するに、その端を互に半分づつ缺いて合はせること。又、その物。

あい-かぎ[合鍵](名)一つのかぎの外に、その一つのかぎの外に入れる三味線。❸芝居の竹の間に入れる三味線。❹諸の大鼓・小鼓・太鼓・笛の囃子。

あい-がも[間鴨](名)【動】野生の眞鴨と青首鴨とのあひの子。

あい-がん[愛玩](名)大切にしてもてあそぶこと。

あい-がん[哀願](名)なげきがふこと。事情を述べて熱心に願ふこと。

あい-き[愛妓](名)かはゆく思ふ藝娼妓。

あい-きこえ[相聞](名)萬葉集中の歌體の一で、男女・親子・兄弟・夫婦・知己等の相思の歌。さうもん(相聞)。

あい-きゅう[哀泣](名)かなしみ泣くこと。

あい-きゅう[鰥鰥](名)❶鮎の年を經たもの。❷于持鮎の異稱。

あい-きょう[愛郷](名)生まれ故郷を愛すること。**—しん**[愛郷心](名)愛郷の精神。

あい-きょう[愛敬](名)❶人づきのよいこと。あいそのよいこと。世辭のよいこと。❷顏のかはゆらしいこと。❸俳優が花道で見物の方へ見えをすること。**—あいぜん**[愛敬愛染](名)【佛】(あいぜんみょうおう)愛染明王。**—あばた**[愛敬痘痕](名)愛敬があるやうに見えるあばた。**—げ**[愛敬毛](名)女の髮や頭髮のおくれ毛。顏に愛敬を添へるからいふ。**—しょうばい**[愛敬商賣](名)俳優・遊郭・愛敬がなくては立合(あきなひ)ぬ商賣。**—ずきあい**[愛敬附合](名)なみなみのつきあひ。普通の交際。**—ずく**[愛敬附く](自動・カ四)愛敬があるやうになる。**—そう**[愛敬相](名)佛の容貌。**—び**[愛敬日](名)【經】(Days of grace)手形滿期の後、支拂を延期する日數。慰惠日。**—べに**[愛敬紅](名)目尻や頬・耳たぶにつける紅。**—ぼくろ**[愛敬黑子](名)かはゆく見えるほくろ。**—まもり**[愛敬守](名)婚禮の時、新婦が襟にかける守。**—もち**[愛敬餅](名)婚禮後三日目に男姑に贈る餅。みかのもち(三日餅)。

あい-きょう[愛嬌](名)(あいきょう)(愛敬)。

あい-きょう[愛樂](名)【佛】愛し好むこと。

あい-ぎん[愛吟](名)愛する詩歌を吟すること。「詩歌。

あい-ぎん[哀吟](名)悲しい情をうつし表はした

あい-ぐすり[合藥](名)その人の病に特效ある藥。適藥。

あい-くち[合口](名)❶あはせめ。❷話のよくあふ人。❸つばのない短刀。七寸五分。

あい-くる-し[愛くるし](形・二)大層かはゆらしい。こぼれる程のあいきょうがある。

—い[愛くるしい](形)「あいくるしい」の口語。**—げ**[愛くるしげ](名)あいくるしいやうす。**—さ**[愛くるしさ](名)あいくるしいこと。又、その樣子。

あい-ぐんじょうやく[愛琿條約](名)愛琿は清洲國黑龍江省の都會。咸豐八年(一八五八)清・露の間に黑龍江を兩國の國境とすることに就いて、この地で結ばれた條約。

あい-け[藍氣](名)藍色を帶びてゐること。

—ねずみ[藍氣鼠](名)(あいねずみ)。

あい-けい[愛敬](名)愛し敬ふこと。

あい-けん[合拳](名)拳の遊技で二人が同じ手を出すこと。❷馴れあひ。合意。

あい-げん[愛眼](名)【佛】佛の慈悲の眼。

あい-こ[愛顧](名)目をかけてやること。引立てること。ひいき。

あい-ご[愛護](名)かはゆがり保護すること。

あい-ご[愛語](名)【佛】菩薩が衆生に對し、慈しみのことばをかけること。又、そのことば。

あい-こう[愛好](名)愛しこのむこと。

あい-こう[愛幸](名)かはゆがること。きにいり。

あい-こう[隘巷](名)せまくるしくきたないまち。

あい-こう[哀號](名)人の死をかなしんで泣きさけぶこと。

あい-こく[哀哭](名)聲を擧げて悲しみ泣くこと。

あい-こく[愛國](名)我が國を愛すること。**—しん**[愛國心](名)自分の生まれた國土を愛する精神。祖國愛。**—ちょきん**[愛國貯金](名)外債を早く返還する目的で、一人一日一錢づつ預け入れて、六年間の據置郵便貯金をすること。**—ふじんかい**[愛國婦人會](名)明治三十四年、奥村五百子の創設した婦人團體。戰死者の遺族・傷兵の救護と一般社會事業に貢獻する を目的とする。

あい-ことば[合詞](名)かねてうちあはせてある合圖の詞。かねてしめし合せてある暗號語。

アイコノクラズム[Iconoclasm](名)偶像破壞。❷アイコン(像又は偶像)を壞すこと。❸哲學・宗教・道德上、絕對權威と目されてゐた神や道德信條を無視して、正確な認識を得ようとすること。❹迷信的思想を打破すること。

アイ・サイト [Eye-sight] (名) ㊀視力。㊁観察。

あいさがも [秋沙鴨] (名) 【動】あいさがも。

あいさつ [挨拶] (名) ㊀お辞儀。應對。㊁答禮。返辭。㊂仲裁。あつかひ。㊃二人の仲。**—きる** (なりたれる) [挨拶切る] (自動、ラ四) 關係を絶つ。**—にん** [挨拶人] (名) 仲裁人。**—よし** [挨拶好] (名) 仲よし。

あいざわせいしさい (あひざはせいしさい) [會澤正志齋] (名) 【人】水戸藩の儒者。名は安、通稱は恒藏。藤田幽谷の門に學ぶ。彰考館總裁。烈公の政務にあつかる。『新論』『迎賓策』『迎直毘鑑』『學制略記』等の著がある。文久三年(一八六三)歿。年八十二。

あいさん [愛餐] (名) 【宗】(Agape) 昔、キリスト教信者の間に學ぶ。教會に月日を惜しむこと。㊁善と友愛との趣旨で行つたもの。

あいし [哀子] (名) 支那で、親の忌中にこもる子。

あいし [哀史] (名) 悲しい事柄の歴史。あはれな物語。

あいし [愛子] (名) あいじ(愛兒)。

あいし [哀辭] (名) 人の死を悲しむ文。

あいじ [愛兒] (名) かはゆがる子。寵愛する子。

あいじつ [愛日] (名) ㊀月日を惜しむこと。㊁(左傳文公七年の註に「冬日可愛」とあるに基づく)冬の日。㊂揚子法言孝至篇に孝子愛「日」とあるに基づく)孝養。

あい-じゃく [愛惜] (名) をしむこと。をしんで大切にすること。あいせき。

あい-じゃく (あひ…) [合酌] (名) お互に酌をしながらにやくこと。愛執。**—しょうし** [愛著生死] (名) 無常の人間世界に愛著すること。

あいしゅう [愛執] (名) かはゆくて思ひきりにくいこと。愛著。

あいじゅつ [愛恤] (名) 愛しあはれむこと。

あいじゅつ [哀恤] (名) かなしみあはれむこと。

あいしょう (やうと) [合性] (名) ㊀男女の生年月日を五行にあはせ考へて、縁の有無を定めること。㊁心持のよくあふこと。相性。

あいしょう [愛誦] (名) 愛ので誦すこと。

あいしょう (やうと) [哀傷] (名) かなしみいたむこと。**—か** [哀傷歌] (名) 人の死を悲しむ歌。

あいしょう (せう) [愛姿] (名) かはゆいめかけ。おもひびの。

あいじょう (やうと) [哀情] (名) 悲しく思ふ心。

あいじょう (やうと) [愛情] (名) かはゆく思ふ心。

あいじる (あひ…) [合印・合符] (名) ㊀敵と紛れぬ爲の味方のしるし。㊁まちがひの起らぬ爲に、つぎめにつける符號。

あい-じん [愛人] (名) かはゆく思ふ人。戀人。

アイシンギョロ-し [愛親覺羅氏] (名) 支那清朝帝室の姓。

アイシングラス [Isin-glass] (名) 魚類の浮囊。

あい-す (せしてする) [愛す] (他動、サ變) ㊀かはゆがる。㊁すく。この む。㊂大切にする。

アイス [Ice] (名) ㊀氷。㊁(アイスクリームの略。㊂(アイスクリームの譯語、氷菓子と音が通ずるからいふ)「高利貸」の俗稱。**—キャンディ** [Ice-candy] (名) 圓形棒狀の氷菓子。**—バーグ** [Ice-berg] (名) ㊀冷かな感情の人。**—ハウス** [Ice-house] (名) ひむろ。氷室。貯氷所。**—ボックス** [Ice-box] (名) 食料品を冷藏する箱。冷藏庫。**—ホッケー** [Ice-hockey] (名) 氷上で、スケートを使つてするホッケー。**—リンク** [Ice-rink] (名) 氷滑りをする所。スケート場。

あいず (あひず) [會津] (名) 【地】福島縣西部の盆地。東南部に若松市がある。

ぬり [會津塗] (名) 會津地方から産出する漆器。天正間に始まるといふ。**—ごよみ** [會津暦] (名) 【地】磐梯山の異名。**—ふじ** [會津富士] (名) 【地】磐梯山の異名。**—ぼん** [會津盆] (名) 會津後の盆。**—やき** [會津燒] (名) 會津から産出する磁器。福島縣大沼郡本郷村で、正保年間に燒き始めたもの。**—ろうそく** (ろうそく) [會津蠟燭] (名) 會津から産出する蠟燭。純白で、花模樣などを描いたもの。

あいず (あひず) [合圖] (名) 互に約束を定めておいて、その方法で事を知らせること。信號。

アイス・クリーム [Ice-cream] (名) 牛乳と卵黄に香味を加へて凍らせた菓子。**—サンデー** [Ice-cream sundae] (名) 一種の飲料。果物汁で味をつけたアイスクリーム。**—ソーダ** [Ice-cream soda] (名) 一種の清涼飲料の一種。アイスクリームとソーダ水を混じたもの。

あいず-ちゅうじょう (あひづ…) [會津中將] (名) 【人】ほしなまさゆき(保科正之)。

あいず-ちゅうなごん (あひづ…) [會津中納言] (名) 【人】うえすぎかげかつ(上杉景勝)。

あいず-ん (あひづ…) [會津小鐵] (名) 【人】江戸の俠客。本名は上坂仙吉。會津侯に愛せられた。明治十八年(二五五)歿。享年未詳。

アイスランド [Iceland] (名) 【地】大西洋北部の一大島。面積約十萬二千方粁。獨立の君主國で、デンマーク王が王位を兼ねてゐる。首府はライキャヴィック。イスランド。

あい-ず (あひ…) [相掏] (名) 惡事の仲間。掏摸(すり)とつれ立つてその惡事を助ける仲間。相盜。

あい-せき [愛惜] (名) あいじゃく。

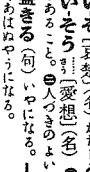
あい-せき [哀惜] (名) かなしみをしむこと。

あい-せき [哀戚] (名) かなしみいたむこと。

あい-ぜん [靄然] (名・副) あいあい(藹藹)。

あい-ぜん [靄然] (名・副) あいあい(藹藹)。

あい-ぜん [愛染] (名) ㊀煩惱愛の執著心。㊁【佛】(あいぜんみょうおう)。**—ぐま** [愛染隈] (名) 劇で、愛染明王に扮する時につかふ隈取。**—ほう** (ほう) [愛染法] (名) 【佛】眞言宗で、息災・延命などを愛染明王に祈る修法。**—みょうおう** (みょう) [愛染明王] (名) 【佛】外相は欲惡の情をあらはしてゐるが、内心は愛著な本體とする愛の神。


【王明染愛】

あいたい [愛戴] (名) ㊀靈の たなびくさま。㊁

あいだい [欸乃] (名) 船歌。船頭歌。あいあい。

あいだがら (あひだ) [間柄] (名) 關係。つづきあひ。

あいだぐい (あひだ) [間食] (名) 一定の食事以外に食する食物。かんしょく。

あいたけびと (あひ…) [相宴人・共食者] (名) 全身赤色、三目・六臂で、頭に獅子冠をいただく。

あい-そ [哀訴] (名) ㊀なげき訴へること。㊁事情を述べて訴へること。哀願。悲訴。

あい-そ [愛想] (名) 「あいそうの訛。**—ずかし** (かし) [愛想盡] (名) 人にすげなくして絶交を求める意あらはすこと。

あい-そ [哀楚] (名) かなしみいたむこと。

あい-そう (さう) [愛想] (名) ㊀人をもてなすに愛敬のあること。㊁人づきのよいこと。㊂勘定。**—が** (がう) [盡きる] (句) いやになる。**—をつかす** (句) とりあはぬやうになる。

あい-ぞう [愛憎] (名) 愛すること憎むこと。

あい-そく [愛息] (名) かはゆいむすこ。

あい-た [愛他] (名) 他人を愛すること。**—しゅぎ** [愛他主義] (名) 【倫】(Altruism) フランスのオーギュスト・コントの創唱で、他人の幸福利益を爲の目的とする倫理學說。(利己主義の對)

あいだ (あひだ) [間] (名) なか。うち。あはひ。㊁すきま。たえま。㊂時。折。

あいだ (あひだ) [間・接續] から。ゆゑに。ほどに。

あいだ (あひだ) [相對] (名) ㊀さしむかひで事を行ふこと。㊁相談して事をなすこと。㊂上下優劣のなこと。相談してすること。**—じに** [相對死] (名) 互に承知してすること。**—ずく** (ずく) [相對壺] (名) 互に承情死。心中。**—そうば** (さう…) [相對相場] (名) 【經】相對賣買で定めた相場。**—ばいばい** (ばい) [相對賣買] (名) 【經】賣人と買人とが相對で契約をする賣買。

あいたい [愛戴] (名) ㊀靈の たなびくさま。㊁

あいだい [欸乃] (名) 船歌。船頭歌。あいあい。

あいだがら (あひだ) [間柄] (名) 關係。つづきあひ。

あいだぐい (あひだ) [間食] (名) 一定の食事以外に食する食物。かんしょく。

あいたけびと (あひ…) [相宴人・共食者] (名) 饗

あいたしこ〔感〕あ、痛い。(元祿頃の語)

あいだてなし〔間隔無し〕〔形、一〕道理にはづれた。分別がない。わきまへがない。(古語)

あいたどころ〔朝所〕〔名〕あしたどころ。

アイタブリュー・ダブリュー〔I·W·W.〕〔名〕【社】Industrial Workers of the World の略〕世界産業勞働者同盟。勞働者の生産機能得・貨金制度の廢止を目的とする米國の左傾的勞働團體。

あいだもの〔間物〕〔名〕あびだぐひのもの。かんしょく(間食)の物。

あいだよ〔間夜〕〔名〕契った男女の遇はぬ夜。

あいだる〔愛垂る〕〔自動、ラ下二〕甘える。(古語)

あいたんどころ〔朝所〕〔名〕あしたどころ。

あいちょう〔愛重〕〔名〕愛し重んずること。大切にすること。

あいつ〔彼奴〕〔代〕罵っていふ時の第三人稱。やつ。あやつ。きゃつ。

あいつう〔哀痛〕〔名〕かなしみいたむこと。

あいつく〔合附く〕〔他動、カ下二〕斬りあふ。

あいて〔相手〕〔名〕❶事を共にする時の一方の人。**—かた**〔相手方〕〔名〕❷相手に當る人。❸〔法〕法律行爲の當事者の一方から他の一方を呼ぶ稱。**—ごのみ**〔相手好〕〔名〕相手をそれと指して望むこと。**—しだい**〔相手次第〕〔名〕相手の出やう如何によって自分の態度をかへること。**—ずく**〔相手づく〕〔名〕前條に同じ。**—ど・る**〔相手取る〕〔他動、ラ四〕あひてにとって爭ふ。**—かはれど主(し)かはらず**〔句〕相手は次次にかはっても、これに對する人の同じなのにいふ。**—のさする功名**〔句〕自分の力が勝れたのではなくて、相手の劣ってゐる爲に、意外の功名を奏することがあるにいふ。

アイディア〔Idea〕〔名〕❶【哲】觀念。❷考。❸理想。❹想像。

アイディアライズ〔Idealize〕〔英・動〕理想化する。想像化する。

アイディアリスト〔Idealist〕〔名〕❶理想家。理想主義者。❷【哲】唯心論者。觀念論者。

アイディアリズム〔Idealism〕〔名〕❶理想主義。❷【哲】唯心論。觀念論。

アイディアル〔Ideal〕〔英・形〕❶理想的。❷典型的。**—カラー**〔Ideal-collar〕〔名〕❶簡單に洗濯のできる種類のカラー。❷オーバーコート又はレーンコートの詰襟式の物。

アイディル〔Idyll〕〔名〕【文】田園の風物等を敍述した詩。牧歌。

あいとう〔哀悼〕〔名〕人の死をかなしみいたむこと。

あいどう〔哀働〕〔名〕かなしんで大聲で泣くこと。

あいどく〔愛讀〕〔名〕愛して讀むこと。**—しゃ**〔愛讀者〕〔名〕愛讀する人。

アイドル〔Idol〕〔名〕❶偶像。❷聖像。❸錯誤。誤謬觀念。❹寵愛してゐるもの。

アイドル・システム〔Idle-system〕〔名〕【社】工場に於ける一種の失業救濟法。工場經營者が生産を減ずる爲に、職工の解雇を行はずして、勞働時間を減じ、以て賃銀の低下を計ること。

あいな〔愛無〕〔名〕面白くないさま。

あいない〔欸乃〕〔名〕あいだい。

あいなし〔愛無し〕〔形、一〕かはゆげがない。面白くない。分別がない。

あいなだのみ〔あい無頼〕〔名〕〔副〕あひてにならぬ頼み。(古語)

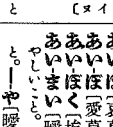
あいなめ〔鮎並〕〔名〕あゆなめ。鮎並。

—の・まつり〔相嘗〕〔名〕〔あいむべのまつり〕。

—の・まつり〔相嘗祭〕〔名〕〔あいむべのまつり〕。

あいにく〔生憎〕〔副〕❶意外に。❷折ゐるく。

アイヌ〔Ainu〕〔名〕現在北海道・樺太に住する一種族。嘗ては內地にも住して國史上えみし(蝦夷)・えぞ(蝦夷)と呼ばれた。人種學的には歐羅巴人種の一分派に蒙古人種の血を交へてゐる。言語は形態學的には抱合語に屬し、さながら言語の島の觀がある。眼窩凹み、顴骨突で、頭髮は黑く波狀若しくは直毛なし、體毛の濃いこと等を體質上の重なる特徴とする。性質溫和、男女共に耳輪をつけ、特に女は入墨を施し、衣服は楡の皮の纖維で製したアッツシ(厚司)を以て製する。しかし、今日に於いて狩獵生活より農業生活に入ると共に、固有の習俗を捨てて急激に和人化しつつある。



〔ヌイア〕

アイノ〔Aino〕〔名〕「アイヌ」の略稱。

あいの・こ〔間子〕〔名〕❶異種の生物又は異人種間に生まれた子。混血兒。❷何れともつかぬ中間のもの。**—ぶね**〔間子船〕〔名〕和洋折衷の船。**—べんとう**〔間子辨當〕〔名〕米の飯に西洋料理の副食物を添へた辨當。

あいの・の・やま〔間山〕〔名〕【地】三重縣宇治山田市古市の地名。內宮・外宮の間にある。尾部坂。山邊で歌はれた、悲哀な俗曲。**—ぶし**〔間山節〕〔名〕昔、伊勢國參宮街道間の印。

あいばん〔相引〕〔名〕❶わりいん。割符。❷互にひきあふこと。❸勝負が決せぬので互に退くこと。❹男女の密通。(逢引)婦人の脇の縫目。❺演劇で、聲を抜けぬやうにする爲、後頭で結ぶ紐。❻あいびきのおび。**—の・お**〔相引緒〕〔名〕鰹の名所。胸板につけた緒。胴を釣るに用ひる。

あいびき〔逢引婦曳〕〔名〕男女の密會。相引。

あいびん〔哀憫哀愍〕〔名〕かなしみあはれむこと。

あいぶ〔愛撫〕〔名〕かはゆがること。

あいふだ〔合札〕〔名〕物品を預った證據にひきかへに渡す札。

あいべつ〔哀別〕〔名〕わかれを悲しむこと。

あいべつ〔愛別〕〔名〕愛する人と心なちすれ別れること。**—りく**〔愛別離苦〕〔名〕【佛】親・兄弟・妻子など、愛する人と生別・死別する心の苦しみ。愛別離。

あい・べら〔合篦〕〔名〕裁縫の時、あひじるしに篦の跡をつけること。

あいほ〔哀墓〕〔名〕墓は悲しむこと。「ふこと。

あいほ〔愛墓〕〔名〕いつくしみ墓ふこと。深く墓

あいほく〔埃墨〕〔名〕すす。油煙。

あいまい〔曖昧〕〔名〕❶はっきりしないこと。あやしいこと。たしかでないこと。❷うしろぐらいこと。

あいまい〔合雜〕〔名〕能で、二人で舞ふこと。

あいみん〔愛民〕〔名〕人民をいつくしみめぐむこと。

あいみん〔哀愍〕〔名〕あはれみ。なさけ。「と。

あいむべ〔相嘗〕〔名〕〔あいむべのまつり〕。

—の・まつり〔相嘗祭〕〔名〕【神】昔、十一月の初の卯の日に、新穀を神に供する祭。定められた諸社に官から幣帛を奉られる。

あい・もん〔合紋〕〔名〕❶多勢の者が揃ひで同じ紋をつけること。❷符合すること。一致すること。

あい・や〔感〕あはいや。ああさうでない。相手の動作をおさへとめようとする時のかけごゑ。相手を呼びとめる時のかけごゑ。

あい・ゆう〔隘勇〕〔名〕臺灣生蕃の警戒・防禦に當る臺灣人の壯丁。**—せん**〔隘勇線〕〔名〕隘勇の警戒線。

あいよく〔愛欲・愛慾〕〔名〕❶愛著の欲望。❷愛

あいら〔彼等〕〔代〕かれら。あいつら。

アイラヴ・ユー〔I love you〕〔句〕❶私はあなたを愛します。❷我が國で、安價な戀愛の意に用ひる。

あい・らく〔哀樂〕〔名〕悲しみと樂しみと。「る。

あい・らし〔愛らしい〕〔形、一〕かはゆらしい。**—い**〔愛らしい〕〔形、一〕かはゆらしいこの口語。**—げ**〔愛らしげ〕〔名〕かはゆらしいさま。**—さ**〔愛らしさ〕〔名〕かはゆらしいこと。又、その程度。

アイリス・アウト〔Irisout〕〔名〕丸絞り閉ち。映畫で、畫面の周圍から段段暗黑になって消えてしまふこと。

アイリス・イン〔Irisin〕〔名〕丸絞り開き。映畫

で、暗黒面の中心から段段明るくなって全畫面の映し出されること。

アイルランド [Ireland] (名) 【地】イギリスの大アリテン島と相並んだ西方の島で、自由國を組織し、政府と議會とを有し、イギリス國王の任命する總督が之を統べてゐる。面積約八萬四千方粁。ダブリンは其の首府である。

あい-れん [愛戀] (名) 愛し戀ふること。深く慕ふ。

あい-れん [愛憐] (名) あはれむこと。

あい-れん [哀戀] (名) ㊀慕ひ悲しむこと。㊁遂げ得ぬ戀。悲戀。

あい-ろ [隘路] (名) 狹い路。狹くけはしい路。

あい-ろ [文色] (名) ㊀あや。條理。模樣。㊁姿。㊂區別。けぢめ。(古語)

あいろ-こいろ (代) あなたこなた。

アイロニー [Irony] (名) ㊀反語。㊁あてこすり。㊂皮肉。㊃諷刺。

アイロン [Iron] (名) アイアン。

あい-わ [哀話] (名) 悲しい話。悲しい情話。

あい-わたる [逢渡る] (自動・ラ四) 男女が情を通じながら長い年月を經る。(古語)

アインシュタイン [Albert Einstein] (名) 【人】現代の理論物理學者。ニュートンの學説に反對する相對性原理の首唱者。ユダヤ系のドイツ人で、スウェスに歸化した。(相對性原理講話「アインシュタイン全集」等の著がある。(一八七九)

アインフュールング [獨 Einführung] (名) 【心】或對象から誘起された感情が、主觀的感情と合一する作用。感情移入。

あう [會ふ・遇ふ・逢ふ・遭ふ・値ふ] (自動・ハ四)(おう)の口語。

あうふ [合ふ] (自動・ハ四)(おう)の口語。

アヴァン-ガルド [佛 Avant-garde] (名) ㊀前衛。㊁フランス映畫界の新人一派が、非商業的な標榜した、映畫の價値を純藝術的になすを目的として製作した新興映畫。前衛映畫。

アヴァンチュール [佛 Aventure] (名) ㊀偶發事件。椿事。㊁冒險。㊂享樂的冒險。戀愛遊戯。

アヴェック [佛 Avec] (名) 同伴。婦人の同伴。

アヴェニュー [Avenue] (名) 大通り。並木路。

アヴェ-マリヤ [羅 Ave Maria] (名) 【宗】キリスト教で、聖母マリヤを讃美する新禱の詞。

アウエル-とう [一燈] [Auer's lamp] (名) 【理】アウエル氏の發明に係る白熱燈。

アヴォアルデュポイズ-とう [一衡] (名) 衡で、十六オンスを一ポンドとするもの。

アヴォガドロ [Amedeo Avogadro di Quaregna] (名) 【人】イタリーの物理學者。分子・原子說の發見者。(一七七六)

アヴォグスツス [Augustus] (名) 【人】ガイウス・オクタヴィアヌス (Caius Octavianus) が、ローマ元老院から受けた尊號。叔父にして養父なるケーザルの殺後、第二次三頭政治を組織し、後、ローマ帝國第一代の皇帝となった。この時代はローマ文化の黃金時代を現出し、世に「アウグスツス時代」といふ。(紀元前一九九)

アウグスティヌス [Aurelius Augustinus] (名) 【人】イタリーの神學者・哲學者、世にセント・アウガスティンといふ。「懺悔錄」の著がある。(三五四)

アウステルリッツ [Austerlitz] (名) 【地】オーストリヤ國モラヴィヤ州の一市。一八〇五年十二月、ナポレオン一世がこの地でオーストリヤのフランシス一世及びロシヤのアレクサンドル一世の聯合軍を破った。

アウト [Out] (名) ㊀庭球・卓球で、一定の線外に球の出ること。㊁野球で、打者や走塁者が死者となること。—**オヴ-デート** [Out-of-date] (句) ㊀時代おくれ。—**オヴ-バウンド** [Out of bound] (句) ゴルフ用語。球がコースの區劃外に出ること。—**オヴ-ファッション** [Out of fashion] (句) ㊀廢式。㊁流行おくれ。㊂陳腐な。—**オヴ-プリント** [Out of print] (句) 絶版。—**オヴ-ワーク** [Out of work] (名) 失業。—**カーヴ** [Out-curve] (名) 野球で、投手が打者の近くで打者に對して外方に急轉向するやうに投げる曲球。—**サイド** [Outside] (名) ㊀外面。㊁外部。㊂外界。—**ドロップ** [Out-drop] (名) 野球で、投手が打者の近くで打者に對し外下方に急轉向するやうに投げる曲球。—**アウト-カーヴとドロップの混合球。—ドアーセット** [Outdoor set] (名) 映畫用語。野外撮影場。野外舞臺裝置。—**フィールド** [Out-field] (名) 野球グラウンドの外野。ダイヤモンドの(內野)の外方に展開する部分。(內野の對)—**フォーカス** [Out-focus] (名) 映畫技巧で、焦點を故意に外づして撮影すること。—**プレーヤー** [Out-player] (名) 庭球で、球を受ける側にゐる者。—**ライン** [Outline] (名) ㊀外國線。㊁輪郭。㊂概略。—**ルック** [Outlook] (名) ㊀眺望。景色。㊁大觀。

アウフ-ヘーベン [獨 Aufheben] (名) 【哲】二つの矛盾した概念が調和統一して、一層高い概念が生み出されること。止揚。揚棄。

あうら [足占] (名) 昔の占法の、戒目標に對して進みながら、一歩一歩に吉凶の辭をかはるがはる唱へ、目標に達した時の辭如何によって占ったもの。(古語)

アウロラ [Aurora] (名) 【地】極光。

あうん [阿吽・阿呀] (名) (梵 Ahum) ㊀「阿」は開口音で「吽」は合口音。㊁初と終と。㊂呼と吸と。㊃【佛】寺院山門の二王の稱。阿は生、吽は死の相。—**の呼吸** (句) 相撲で、競方が同時に立ちあがろうとする氣合。

あえか [饗] (名) 羹應。聽走。(古語)

あえか (名) ㊀よわよわしいさま。㊁いたいけなこと。(古語)

あえき [喘] (名) あへぐこと。せはしく呼吸すること。

あえぐ [喘ぐ] (自動・ガ四) ㊀息をきらす。息ざれがする。㊁せはしく呼吸する。

あえ-しろう [他動・ハ四] ㊀應答する。㊁挨拶する。㊂とりそへる。とりあはす。

あえ-すくり [蠣作] (名) 魚片を他の物にまぜたあへもの。ぬたあへ。

あえ-つき [蠣坏] (名) 蠣物を盛る器。(古語)

あえ-て [敢へて] (副) ㊀しひて。おしきって。㊁少しも。一向に。

あえ-なし [敢無し] (形・ク) ㊀甲がひがない。はりあひがない。すげない。(古語) ㊁愛想がない。我慢しておかう。(古語)

あえ-なん [敢へなん] (句) それで宜しからう。あはせつらはな。(古語)

あえ-ぬく [他動・カ四] ともにつらぬく。あはせつらはな。(古語)

あえば-こうそん [饗庭篁村] (名) 【人】明治大正の小說家。戯曲家。名は與三郎。諷刺・滑稽に獨特・輕妙な筆を揮ふ。大正十一年(一五八二)歿。年六十八。「むら竹」「笹の露」等の外著述が多い。

あえ-もの [饗者] (名) あやかるもの。たしもの。(古語)

あえ-もの [蠣物・和物] (名) 野菜類を味噌などで調理したもの。

あえる [他動・ハ下二] (おう)(蠣へる) (他動・ハ下二) (おう)蠣へるの口語。

あ-えん [亞鉛] (名) 【化】青白色で實の脆い金屬元素。因亞鉛鑛・菱亞鉛鑛等となって存在する。その用途は鍍板に鍍鉛し、若しくは、細線に引伸ばして用ひる。—**てっこう** [亞鉛鐵鑛] (名) 【鑛】鐵石の名稱。八面體式の晶癖を有し、稜角は圓味を帶びる。北アメリカ合衆國ニュージャージーとニューヨークの州界附近の鐵質石灰岩中に、紅亞鉛鑛床の成分として產し、亞鉛及びマンガンを含む鐵鑛として利用される。—**ばん** [亞鉛版] (名) 印刷版。亞鉛の面にニスで描畫し、又、寫眞法を用ひた上、硝酸の稀薄液で一部を腐蝕させて製版。亞鉛凸版。—**まつ** [亞鉛末] (名) 亞鉛の粉末。—**めっき** [亞鉛鍍金] (名)

【化】鐵の腐蝕を防ぐ爲に、その表面を亞鉛でおほふこと。

あえんか……[亞鉛華](名)【化】酸化亞鉛。白色の粉末で、亞鉛を熱して製し、顔料及び藥用とする。

なんこう……[亞鉛華軟膏](名)【藥】亞鉛華と安息香と豚脂とを混じた膏藥。皮膚病に用ひる。

あお[青](名)❶七色の一。❷晴天の空色。❸黑みを帶びた馬の毛色。**—は藍より出でて藍より青し**(句)(荀子勸學篇の句)弟子が先生よりもすぐれるといふ。

あお[青](接頭)他の語の上につけて赤熟などの意をあらはす語。「—侍」。

あお[襖](名)❶厩のあいた袍で、武官の服。❷裕。❸狩衣。

あおあおかさ……[青青葵](名)【植】あおいの一種。綠葉の變色せぬもの。

あおあおずき[青小豆](名)【植】あおづきの變種。

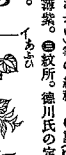
あおあおみがさ[青編笠](名)蘭草で編んだ新しい青い編笠。

あおあらし[青嵐](名)青葉の頃吹き渡る風。

あおあん[青鰡](名)白餡に青粉をまぜたもの。「語。

あおい[葵](名)❶【植】(かもあおい)(たちあおい)(ふゆあおい)等の總稱。❷葵の目。表は薄青、裏は濃紫。❸紋所。德川氏の定紋。かもあふひを用ひる。

—かずら[葵鬘](名)京都市下鴨・上賀茂神社の四月の祭に用ひられた鬘飾。冠にさし又は御簾に鬘葵細辛(ふたはぐ)の葉をかけて鬘に用ひたもの。❷江戸時代に、奥女中が四月の一の酉の日に賀茂祭のに因んで頭に挿した鬘葵細辛の鬘。



—ぐさ[葵草](名)【植】(かもあおい)賀茂葵。

—ごけ[葵苔](名)【植】蘚類(かもあおい)賀茂葵。

あおい[青い](形)(あおし)の口語形又は連體形。「—の目」。表は薄青、裏は濃紫。❸紋所。德川氏の定紋。かもあふひを用ひる。

あおいあおい[葵](名)❶【植】(かもあおい)(たちあおい)(ふゆあおい)等の總稱。❷葵の目。表は薄青、裏は濃紫。❸紋所。德川氏の定紋。かもあふひを用ひる。

あおいあらし[青嵐](名)青葉の頃吹き渡る風。

あおいあん[青鰡](名)白餡に青粉をまぜたもの。「語。

あおいあずき[青小豆](名)【植】あおづきの變種。

あおいあみがさ[青編笠](名)蘭草で編んだ新しい青い編笠。

あおいあらし[青嵐](名)青葉の頃吹き渡る風。

あおいあん[青鰡](名)白餡に青粉をまぜたもの。「語。

あおいいき[青息](名)歎息する時に出ずいき。

—まめ[葵豆](名)【植】蘭亞元豆の一種。花は淡綠色で夏開く。いちこくまめ。

—といき[青息吐息](名)苦息。

あおいさけ[青い酒](名)五色の酒の一。海藻を主成分とした綠色の洋酒で、主にベヂーミント或はアプサン。

あおいし[青石](名)【藝】綠色の石で、建築・石碑等に用ひる。

あおいたこぶ[青板昆布](名)昆布の適當の長さに切り、之を丹鍋(たん)、絲擊・青竹等の溶液で色を附け乾燥したもの。多く料理に用ひる。

あおいとげのくるま[青絲毛車](名)青い撚(よ)絲で屋根を葺いた牛車。皇后・中宮・東宮・准后・攝政・關白等の乘用。

あおいとり[青い鳥](名)❶【文】メルヰーの戯作家メーテルリンクの有名な童話劇。一九〇九年刊。❷前條の內容から幸福の意となる。

あおいはな[青い花](名)十八世紀のドイツの詩人ノヴァリス(Novalis)が「青い花」を人間の理想の象徵」として用ひてから、「理想」をあらはす語となった。

あおいろ[青色](名)❶青。❷かりやすと紫とで染めた色や其の色の衣服。(おおしらつるばみ)(青白橡)。**—すがた**[青色姿](名)麴塵(きくじん)の袍をつけた姿。

あおいろぎさ[青萍](名)【植】水田・池沼に生ずる一年生の草本。葉狀體は楕圓形で小さく、表裏ともに綠色。

あおいろばら[青海原](名)青色の廣廣とした海。大洋。

あおいろま[青馬](名)❶毛が黑くて青みある馬。❷白馬節會の略。

あおいろまもえ[白馬節會](名)古代、正月七日に朝廷で左右の馬寮から二十一匹(後世は二頭)の白馬を庭上に引出して天覽の後、宴を賜ふた儀式。この日、白馬(あをうま)を見れば、年中の邪氣を除くといふ故事によるといふ。

あおうみ[青海](名)青空と見える海。うみ。

あおうみがめ[青海龜・綠鳩龜](名)【動】海龜の一種。甲は暗綠色で、暗黃色の斑點があり、四肢は鰭狀。小笠原・琉球・臺灣附近の海に產する。しやうがくばう(正覺坊)。

〔龜海青〕

あおうめ[青梅](名)❶青色の梅の果實。未熟の梅の實。❷昔の名。香り酸くにがく青梅の風味があるから名づく。**—ずけ**[青梅漬](名)青梅を鹽に漬けたもの。

あおうり[青瓜](名)【植】白瓜の皮青く堅く密須。「國青江(筑紫郡春日村字位(ゐ))産で鍛へた刀。

あおえしもさか[青江下阪](名)昔、儲中馬っていふ諺。

あおおとこ[青男](名)年若く未熟な男を

あおおんな[青女](名)年若く世馴れぬ女。

あおがい[青貝](名)螺鈿の材料に用ひる貝。鮑鶏貝・夜光貝・鮑貝・蟻等の眞珠光を帶びた部分を種類の形に切って、漆器などの面に嵌入して飾とするもの。ちでん(螺鈿)。

あおがえる[青蛙](名)【動】蛙の一種。體は小形であまがへるに似る。全身青綠色で、趾端に吸盤を具し、跳(はね)を有し、樹上に登る。水田・池沼に產し、水邊の草中又は土中に產卵する。あをがはつ。

あおがき[青垣](名)垣のやうにめぐってゐる綠の山。青垣山。**—やま**[青垣山](名)前條に同じ。

あおかげ[青鹿毛](名)馬の毛色。青みを帶び

あおかさ[青傘](名)藍紙で張った日傘。

あおかすげ[青粕毛](名)馬の毛色で青い毛に白い粕を混じたもの。

あおかずら[青葛・清風藤](名)【植】清風藤科の落性蔓灌木。葉は卵形で革質。春の初に黃色の五瓣花を開く。花後、球形の果實を結び、熟すれば深碧色を呈する。せいさんこ。あをきづる。

あおかずら[青葛・清風藤](枕)「綠ろ」にかけていふ枕詞。あをづら。

あおかち[青褐](名)青みを帶びた濃褐色。

あおかびた[青色ベニチリウム屬の菌類の總稱。餅及び糊・果物等に生じ成熟して菌絲から綠色の胞子を飛散させる。

あおがみ[青紙](名)❶青い色の紙。❷藍紙。

あおかみ[青唐紙](名)麴塵(きくじん)の色目。表は黃、裏は青。

あおからぶ[青枯ぶ](自動)(ばべ上一)草木が、青く枯れたやうになる。

あおがれいろ[青枯色](名)麴塵(きくじん)の色。「た羊羹。

あおかん[青羹](名)青柴をゆでて擂りまぜ

あおがんぴ[青雁皮](名)【植】瑞香(ぢんこう)科の常綠灌木。葉は倒狀楕形、全緣で對生し、花は白色で小さく枝端に簇生する。琉球・臺灣の產。樹皮を製紙の原料とする。

あおき[青木](名)❶青葉となった木。生木。

㊀常緑針葉樹。㊁植[山茱萸]科の雌雄異株の常緑灌木。葉は長楕圓形で鋸齒があって對生する。夏の初、帶紫緑色の小花を開き、冬、紅色の實を結ぶ。

あおき-こんよう[青木昆陽](名)【人】江戸幕府の儒官。蘭學の先覺。名は敦書、字は原甫。通稱は文藏。甘薯を取寄せ、研究の上、『蕃薯考』を著して種薯と共に配布した。没後、甘藷先生と稱せられる。明治六年(一四二九)没。年七十二。

あおき-しゅうぞう[青木周藏](名)【人】外交家。子爵。薩山口藩士。外務大臣・全權大使・樞密顧問官。大正三年(一五七四)没。年七十一。

あおきす[青鱸](名)【動】鱸科の海産硬骨魚。體長く、側扁し、色青く、吻尖って尾は細い。

あおきた[青北](名)八月頃の風。

あおきたつ[青北](名)【動】ガ(ガ四)。

あおぎたてる[煽ぎ立てる](他動・ガ下一)(あおぎたつの口語。

あおきつつき[青啄木鳥](名)【動】(あおげら)。

あおきなこ[青黄粉](名)青粉をまぜた黄葉蕎麦。

あおきり[青桐・梧桐](名)【植】梧桐科の落葉喬木。樹皮は緑色、葉は闊大で三尖、長柄を有す。夏、黄白色五瓣の小花群り咲き、豆に似た實を結ぶ。

あおき-ろうい[青木鴛水](名)【人】俳人・浮世草子作者。名は五竜。野野口立圃の門人。歌仙堂良材集等の著がある。

あおきん[青金](名)㊀金箔製造用の地金。

あおぐ[仰ぐ][仰ぐ](自動・ガ四)上を向く。上の方を見る。「と仰ぐ。うやまふ。㊁請ふ。

あおぐ[仰ぐ][仰ぐ](他動・ガ四)㊁たつ扇子や團扇などを振って風を出す。

あおくず[青公卿](名)㊀取るに足らぬ公卿。

㊁流刺で、青隈をして扮する惡公卿。

あおくさ[青草](名)青青とした草。「—ずり[青草擂](名)棚張の白絹や紙に、山葵で花鳥などの模様を青く摺りだしたもの。

あおくさい[(ひ)くさい](形)(あおくさしの口語。

あおくさし[青臭し](形・ク)㊀青草のやうなにほひがする。㊁未熟らしい。

あおくちば[青朽葉](名)㊀青みを帶びた朽葉色。㊁[(ひ)]の色目。表は青黄、裏は青。

あおくびの[青頸](名)【動】頸の羽色の緑の鴨。

あおぐま[青隈](名)俳優が面鑑や惡人に扮する時、藍で顔を青く隈どるもの。

あおぐも[青雲](名)晴れた空。青空。「—の[青雲の](枕)「白雲」「出來」の枕詞。

あおぐろ[青黒](名)㊀青味を帶びた黒い色。黝。㊁染色の名。濃い蟲黄色。㊂[(ひ)]の色目。表は濃い青色、裏はつねの青色。㊃黒く青ばんだ馬の毛色。

あおけ[青毛](名)馬の毛色。青みを帶びて見える黒色のもの。

あおけら[青氣](名)青いさま。

あおけら[青鳥](名)【動】佛法僧目に屬する啄木鳥の一種。背部は黄緑色、腰部は橙黄色、頭上は鮮紅色、尾羽は褐色、下面は帶緑白色、嘴は緑褐色。硬直な尾と趾によって樹幹を攀ちることが巧みである。本州以南及び九州に棲む益鳥。

あおこ[青粉](名)食物を青く色づける粉。「あをのり」の粉末、「おほばがらし」の葉の粉末の類。

あおごけ[青苔](名)青色の苔。

あおさ[青駒](名)【動】毛色が白く青ばの海藻。海中の岩石に著き、葉狀體は緑色で扁平。食用となる。ちさの引。

あおさ[青さ](名)青いこと。又、「その程度。

あおさいろく[青才六](名)(「才六」は下雅の隨語)青丁稚めと罵る語。

あおさぎ[青鷺](名)㊀【動】鷺の一種。普通の鷺よりも大きく、頭と頸とは白く、背は蒼灰色、冠毛は青黒く長い。㊁馬の毛色。淡青い色のもの。

あおさし[青插](名)青麥を煎り、臼でひいて緑のやうによった葉子。

あおさし[青綯](名)青麻で造った鎺さし。

あおさば[青鯖](名)【動】さば(鯖)。

あおさむ[青さむ](自動・マ下一)㊀青くなる。青ばむ。㊁顔の色が青くかはる。

あおさむらい[青侍](名)若年で不馴れな官位の低い侍。

あおさめ[青白眼馬](名)青ばんだ白眼馬。

あおさめ[青鮫](名)【動】軟骨魚類の軟骨魚。體長三米内外に達し、背部は藍色、腹部は黄白色又は白色で、砂粒狀の鱗を被る。鰭は鋭尖、性は兇暴で屢人を噛む。肉は蒲鉾の材料とし、皮、骨を明骨といひ、鰭を堆翅と稱して支那料理に用ひらる。我が國の近海・南洋・地中海に產す。もろざめ。かつなざめ。

あおさめる[青さめる](自動・マ下一)(あおさむの口語。

あおさんごじゅ[青珊瑚珠](名)㊀緑色の珊瑚珠。㊁うかん(琅玕)。

あおし[(ひ)](形・ク)㊀未熟である。「る。㊁植大麻[(ひ)]科の栽培し、靱皮用とする。

あおし[(ひ)][(ひ)](形・ク)㊀青色である。

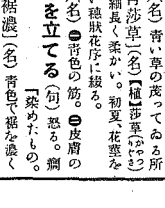
あおし[(ひ)][(ひ)](名)[(ひ)]。

あおじ[青磁](名)㊀青緑色の釉藥[(ひ)]を施した磁器。せいじ。㊁青磁のやうな色。

あおじ[(ひ)][(ひ)](名)【動】雀科の小鳥。頭・背・尾は暗緑色、腹は淡黄色。秋季よく鳴く。あをしとど。青鶸。

あおじ[(ひ)][(ひ)](名)織物の青い地質。

あおじし[青地][青鹿](名)【動】かもしか(羚羊)。



〔雀 蒿〕

あおじそ[青紫蘇](名)【植】紫蘇の一種で、葉・葉柄とも緑色のもの。あをそ。

あおしとど[青鶸](名)(あおじし)。蕃雀。

あおしば[青柴](名)青葉のついた柴。なまきの柴。

あおしま[青島](名)【地】宮崎縣にある島。宮崎市から十六粁。島周二粁。干潮時には陸岸との間に砂路ができ、半島狀を呈する。浦葵[(ひ)]等の亞熱帶植物が叢生してゐる。

あおじま[青縞](名)青縞木綿。無地の紺色木綿。めくらじま。

あおじゃしん[青寫眞](名)普通には青地に白の線であらはした建築・土木・機械等の見取圖面。ふ。感光劑赤血鹽と枸櫞酸鐵アンモニウムの混合液を塗布した感光紙に、原畫を合せて直接日光で焼付ける。白線法・青線法・黒線法の三種がある。アループリント。

あおじょせい[青書生](名)若年で學問の未熟な書生。

あおらつるばみ[青白橡](名)染色の名。櫟の色目の名。青色に帶びた白橡色。刈安草と紫草で染めたもの。きくちん(麴塵)。山鳩色。

あおしりがい[青靴](名)はなだ色に染めたしりがい。

あおじる[青汁](名)ゆでて蔬菜葉を、すりつぶし、白味噌をまぜて、こし、すまし汁でといて魚菜などを入れた料理。

あおず[青酢](名)ゆでた蔬菜葉をすって酢をまぜてこしたもの。

あおずか[青塚](名)青い草の茂ってゐる所。

あおすげ[青菅・青莎草](名)【植】莎草科の多年生草本。葉は細長く柔かい。初夏、花蕊を抽き、緑色の花を、小さい穂狀花序に綴る。

あおすじ[青筋](名)㊀青色の筋。㊁皮膚の上から見える靜脈。「—を立てる(句)怒る。癇癪を起す。

あおすそご[青裾濃](名)青色で裾を濃く染めたもの。

あおすだれ[青簾](名)㊀青竹で編んだ

簾。㊁牛車にかける青簾で編んだ車の簾。

あおすみ【青墨】(名) 藍蝋を墨の形に造った檜具。すって青い汁を出す。あゐすみ。

あおすもも【青李】(名) ㊀【植】熟しても實の赤くならぬ李。㊁熟せぬ李。

あおずり【青摺】(名) 染色法の一。模様を彫った石又は木板に、植物の葉・花・皮等の色素をすり込み、紙・布等を當てて模様を摺り出すこと。又、そのもの。藍摺。

あおせん【青錢】(名) 眞鍮製の寛永通寶。寛永眞鍮錢。青四文錢。あなみせん。

あおそ【青麻】(名) 麻の粗皮。麻縄等をつくる。

あおそら【青空】(名) 青く見える天。蒼天。

あおたぐ【苦櫪木】(名)【植】木犀科の落葉小喬木。樹皮は帶綠灰白色で滑澤、葉は奇數羽狀複葉。六月頃黃白色の小花を開き、翅果を結ぶ。

あおだま【青玉】(名) 紺色の玉。

あおたん【青短】(名) ㊀花ガルタの背色の短冊を描いた牡丹・菊・紅葉の札。㊁青短冊三枚を揃へて取ること。

あおち【烟】(名) あをつこと。

あおちかぜ【烟風】(名) 吹きあふる風。

あおちどり【青千鳥】(名)【植】鬼百合三〇糎内外。卵形の球根があって、下部の葉は倒卵形、上部の葉は披針形。七八月頃莖上に綠色の花を穗狀に著ける。

〔鳥千青〕

あおちゃ【青茶】(名) ㊀一夜の間、灰汁につけて蒸した下等の茶。㊁青ばんだ茶。

あおつ【烟つ】(自動、タ四) ㊀團扇などを振り動かして風を起す。㊁火の勢を熾んにする。㊂鐵をふんで馬をいそがせる。㊃おだてる。㊄酒を勢よく飲む。㊅むやみに買占める。

あおつ【烟つ】(他動、タ四) あふぐ。

あおつずら【青葛】(名)【植】あおかずら。

あおつばき【青椿】(名)【植】つばき。色が青青としてゐるからいふ。

あおで【青手】(名) 棧留縞の中、淺黃縞。

あおでんしゃ【青電車】(名) 赤電車の一つ前の電車で、運轉臺の前面に青電燈をつけてゐるもの。卽ち次が最終電車であることを豫告するもの。

あおと【青砥】(名) 青灰色の砥石。

あおとうしん【青道心】(名) ㊀新たに僧となった人。㊁そんなに佛道に心もいれないで、俄かに起した慈悲心。

あおとかげ【青石龍子】(名)【動】とかげの一種。體色背色を帶び、尾の部分は綠色。

あおとさ【青土佐】(名) 土佐より產する和紙の一種。紙質厚く、薄い雜色のもの。

あおとふじつな【青砥藤綱】(名)【人】鎌倉時代の良吏。北條時賴・時宗に仕へ、引附衆となる。嘗て滑川に錢十文を落し、天下の財の失はれんことを惜しんで、人夫數名を雇ひ、これを探させたといふ逸話で名高い。没年未詳。

あおとんぼ【青蜻蛉】(名)【動】とんぼの一種。體は綠色。背上に三黑條がある。

あおな【青菜】(名) ㊀(「とうな」の)。㊁(「唐菜」)。

あおなし【青梨】(名)【植】野梨。㊀實の形長く、皮の色青く、早く熟する梨。

あおなみ【青波・蒼波】(名) 青青と見える波。

—あおせん【青波錢】(名)(あおせん)(青錢)。

—あおなめし【青草】(名) 青く染めたなめしかは。あゐなめし。

あおに【青丹】(名) ㊀青黑い土。(古語)。㊁(化)(いわくしょう)岩綠青)。㊂濃い青色の上を更に黃に染めた染色。㊃蘇(ねず)の色目。表は濃い青色、裏は薄い青色。

—うち【青丹打】(名) 青丹色に艷を出した布帛。

—ごろも【青丹衣】(名) ㊀青丹の染色の衣。㊁恥のうはぬりをすること。

—よし【青丹よし】(枕)(奈良の枕詞。

あおに【青煮】(名) 殿(との)・義(ぎ)等を青みを失はぬやうに煮ること。銅錢と共にゆで、水氣を去り味醂と鹽とを加へて煮る。

あおにきて【青和幣】(名) 麻で作った幣。

あおにさい【青二才】(名) ㊀年若く經驗の乏しい男。㊁青年を罵っていふ語。

あおにび【青鈍】(名) ㊀青みのある縹(はなだ)色。㊁蘇(ねず)の色目。表裏ともに濃いはなだ色。

あおにょうぼう【青女房】(名) 年若く物馴れない身分の低い女房。

あおぬのこ【青布子】(名) ㊀黑味な衣服。㊁青い染色の布料の半襟。複葉は青綠色で太く、それより細い根を出して、樹幹又は岩上に著生する。葉は長楕圓狀披針形で羽狀に深裂し、四時緑色を呈する。

あおねがずら【水龍骨】(名)【植】水龍骨科の多年生草本。高さ約三〇糎。葉は長楕圓狀披針形で深裂し、四時緑色を呈する。

あおのき【仰】(名) あふのくこと。

—さま【仰樣】(名) あふのいたさま。

あおのく【仰】(名) あをのくこと。

—く【仰く】(自動、カ四) あふむく。

あおのくく【仰くく】(自動、カ四) あふむくく。

あおのくくく【仰くくく】(他動、カ下二) あふむかせる。

あおのくく【仰くく】(他動、カ下二) あをのくこと。あふのき。あをむく。

あおのけ【仰】(名) あをのくこと。あふのき。あをむけ。

—ざま【仰樣】(名) あをむいた樣子。

あおのり【青海苔】(名)【植】綠藻類の海藻。細くして長さ約三〇糎に及ぶ。河水の流入する磯邊の岩などに著生する。乾して食用とする。

あおのろし【青のろし】(名)【動】青大將。

あおば【青葉】(名) ㊀青い木の葉。㊁新たに芽ざした葉。

あおばえ【蒼蠅】(名)【動】黑蠅色。一名くろばへ。㊁蒼蠅の一種。形、體は黑褐色。うろさくつきまとふ者の譬。

あおはか【青墓】(名)【地】おおはか」とも發音する。岐阜縣不破郡垂井と赤坂との間にある村。平治の亂後、源義朝が、子朝長を殺した所。

あおはこべ【青蘚葉】(名)【植】石竹科の多年生草本。高さ約三〇糎、莖の下部は横臥し、葉は廣卵形鈍頭で、毛茸を密生する。夏日、莖頂に綠色の小花を開き、花後、蒴果を結ぶ。

あおばじょう【青葉城】(名)【地】仙臺市青葉山にある伊達氏の酒居城。現在は第二師團司令部の所在地。

あおバス【青—】(名) ㊀外を綠色に塗った乘合自動車。㊁東京乘合自動車會社の乘合自動車の特稱。綠色に塗るからいふ。

あおばすく【青羽木蔦】(名)【動】桑鳩(ふじ)。

あおはだ【青肌】(名) ㊀毛を剃ったあとの青青と見える肌。㊁植物の幹・枝・莖などの皮。㊂【植】冬青(ひさ)科の落葉喬木。高さ約一〇米に達し、樹皮は白灰色で綠色を帶ぶ。葉は互生して廣卵形、尖銳な鋸齒を有する。初夏、葉腋に帶白色の花を簇生す

る。果實は球形、熟して赤色を呈する。まるばうめもどき。

あおばたの[あをばたの]〔青幡の〕〔枕〕おさか〔忍坂〕の腰細く色は青黑い。『枕詞。

あおばち[あをばち]〔青蜂〕(名)【動】じがばち」の一種。

あおばと[あをばと]〔青鳩〕(名)【動】本邦特産の鳩の一種。家鳩より大きく、全身黃綠色で胸先は黃色、嘴は鼻汁。

あおばな[あをばな]〔青洟〕(名)子供などの垂れる青い

あおばないんこ[あをばないんこ]〔青花鸚哥〕(名)【動】一・ん・こ の 一種。羽毛の紺色をなすもの。

あおばのすだれ[あをばのすだれ]〔青葉簾〕(名)昔、四月一日更衣の儀を行はれた時、內裏の南門の柳にかけられた簾。

あおばの・ふえ[あをばの・ふえ]〔青葉笛〕(名)㊀高倉院御祕藏の笛。初名は葉二(はにの)。㊁神戸市の須磨寺にある平敦盛の遺物と傳へられる笛。

あおばはごろも[あをばはごろも]〔青翅羽衣〕(名)【動】同翅目の昆蟲。體長八粍餘、綠色を呈し自粉を裝ふ。幼蟲は自綠の如き蟲を以て覆はれる。六月及び九・十月の二回羽化する。桑・梅・草樹等に寄生し、液汁を吸收する。

あおば・む[あをばむ]〔青ばむ〕(自動、マ四)青味を帶びる。青色になる。

あおばもの[あをばもの]〔青齒者〕(名)雜兵。歩卒。軍中の人夫。

あおはんみょう[あをはんみょう]〔青斑猫〕(名)【動】鞘翅(しょうし)類の昆蟲で、通常の斑猫よりも細く、綠色で黃金色に光り、猛毒を含む。芫菁。カンタリス。

あおび[あをび]〔青火〕(名)㊀青色の火。㊁おにび(鬼火・燐火)。

あおひえ[あをひえ]〔青竹刀〕(名)青竹で造って赤兒の

あおひき[あをひき]〔青引〕(名)【動】蠶の一種。春蠶の青み帶びたもので、絲量は多くないが、絲質は優良である。

あおひげ[あをひげ]〔青髯〕(名)フランスのペローの說話集に出て來る殺人も女房を殺す青髯男。殘酷な男。

あおひとぐさ[あをひとぐさ]〔青人草〕(名)民。民草。

あおみどり[あをみどり]〔青綠〕(名)㊀綠色。㊁【植】接合藻類の淡水藻。綠色で絲狀をなし、水の淀みに浮遊する。春頃だからいふ。陰曆六月の異稱。

あおみどろ[あをみどろ]〔青綿〕(名)【植】接合藻類の淡水藻。綠色で絲狀をなし、水の淀みに浮遊する。

あおみなずき[あをみなずき]〔青水無月〕(名)(青葉の茂る頃だからいふ)陰曆六月の異稱。

あおみばしる[あをみばしる]〔青み走る〕(自動、ラ四)青ばむ。

あおみみょうばん[あをみみょうばん]〔青明礬〕(名)【化】(ろう)

あおみみわたる[あをみみわたる]〔青み渡る〕(自動、ラ四)一體に青くなる。

あおむ[あをむ]〔青む〕(自動、マ四)㊀青くなる。(古語)㊁青ざめる。

あおむき[あをむき]〔仰〕(名)上を向くこと。あふむく。

あおむく[あをむく]〔仰く〕(自動、カ四)上に向く。あふむく。

あおむけ[あをむけ]〔仰〕(名)上を向いたさま。あをむく。こと。あをのけざま。

あおむけざま[あをむけざま]〔仰樣〕(名)あをのけに倒れること。あをむけざま。

あおむける[あをむける]〔仰ける〕(他動、カ下一)(あをむく)あふむくの口語。

あおむ・ける[あをむける]〔仰ける〕(他動、カ下一)(あをむく)あをむくの口語。

あおむ・し[あをむし]〔青蟲〕(名)㊀【動】蛾翅目粉蝶科の蝶の幼蟲。體長約四糎。色は概ね綠色で、果樹・野菜等の害蟲。螟蛉。㊁蝶蛾類の幼蟲で、菜葉などに寄生するものの總稱。

あおめ[あをめ]〔青眼〕(名)眼球の虹彩の青いもの。

あおもぐさ[あをもぐさ]〔青藻草〕(名)【植】綠藻類の海藻。體は綠狀で分岐し、餘綠色の球形又は半球形をなし、岩石又は他の海藻に附著する。

あおもち[あをもち]〔青餅〕(名)野菜類の總稱。疏菜類。

あおもの[あをもの]〔青物〕(名)青物を賣買するところ。

—いち[—いち]〔青物市〕(名)青物を賣買するところ。

—いちば[—いちば]〔青物市場〕(名)【經】蔬菜類、果實類等の現物を取引する市場。

あおもみじ[あをもみじ]〔青紅葉〕(名)㊀まだ紅葉せぬ秋の草木の葉。㊁蘗(ひこばえ)の色目。表は青、裏は黃。

あおもり・し[あをもりし]〔青森市〕(名)【地】青森縣廳所在の地。海陸交通の要地で函館市との間に鐵道聯絡船が往復してゐる。奧羽第一の開港場で、豆粕・米・木材等を輸入し、海產物を輸出する。東部に有名な合浦公園がある。

あおやか[あをやか](名)青いさま。青青と。

あおやぎ[あをやぎ]〔青柳〕(名)青青とした柳。—そう[—そう]〔青柳草〕(名)【植】百合科の多年生草本。高さ八〇糎內外、葉は披針狀で平行脈がある。春、花梗を抽き綠色の小花を圓錐花序に綴る。㊁「あきのきりんさう」の變種。菊科の多年生草本で莖の高さは約一米。根出葉は葉柄長く、莖葉は「よめな」に似る。秋、花穗を抽き、黃色花を著生する。—の春。花梗を抽き綠色の小花を圓錐花序に綴る。㊁「あきのきりんさう」の變種。菊科の多年生草本で莖の高さは約一米。根出葉は葉柄長く、莖葉は「よめな」に似る。秋、花穗を抽き、黃色花を著生する。—の「青柳の」(枕)「かづら」(蔓)「絲」「はら」の枕詞。

あおやなぎ[あをやなぎ]〔青柳〕(名)㊀草木の茂って青青と見える山。㊁仁明天皇の御物の琵琶の名。㊂地)東京市赤坂區青山にある御所。現在は皇太后宮の御殿即ち新御殿大宮御所があり、御苑づゝきに表町御殿即ち青山氏の邸地及び紀州侯邸の一部をあはせたもの。英照皇太后・昭憲皇太后の御所でゐたことがある。

あおやま[あをやま]〔青山〕(名)㊀【地】東京市赤坂區青山にある御所。㊁仁明天皇の御物の琵琶の名。

あおやまの・ぶゆき[あをやまの・ぶゆき]〔青山延于〕(名)

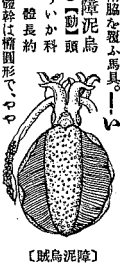
あおやまの・ぶ・ねみち[あをやまの・ぶ・ねみち]〔青山胤通〕(名)【人】醫學博士。男爵。東京帝國大學醫學部長。大正六年(一三五七)歿。年五十九。

【八】水戸の儒者。弘道館撰藪。天保十四年（一八五〇三）没。年六十八。「皇朝史略」の著がある。

あおやぎふき（青柳吹）（名）【鍛】の色目。表は青、裏は黄。春用ひる。

あおり（煽）（名）㊀あふること。㊁餞宴。㊂顧客を呼びたて招くこと。㊃【經】相場をつりあげる爲に買占めること。**—がい**（煽買）（名）【經】相場を煽って騰貴させる爲に買ふこと。**—がけ**（煽掛）（名）相撲の手。四手に組んで押合ふ時、相手の足に我が足を掛け、煽って突き出すこと。**—どめ**（煽止）（名）開いた戸・扉の風に煽られるのを防ぐ爲に、これを壁や柱にとめるに用ひる金具。

あおり（障泥・泥障）（名）革又は毛皮で造った馬腹の両脇を覆ふ馬具。**—いか**（障泥烏賊）（名）【動】頭足類やりいか科の烏賊。體長約八〇糎。體鈴は楕圓形で、やや槍身に似る。體は淡紫色、紺色の細點を密に散布する。烏賊の種類中最も大なるもの。**—いた**（障泥板）（名）【建】棟の左右にある雨押への板。**—をあつ**（句）鐙で障泥をあふる。


〔賊烏泥障〕

あおる（煽る）（他動・ラ四）㊀扇子・團扇等で風を起す。㊁風を送って火勢を熾んにする。㊂鐙をふんで馬を急がす。㊃おだてる。けしかける。㊄酒を勢こんで飲む。㊅【經】相場を暴騰させる爲に、むやみに買占める。

あおるわかめ（煽る・わかめ）（名）【植】褐藻類の昆布科に屬する「わかめ」の一種。帶狀褐色を呈し、約一米位の帶狀をなす。質剛く中肋不明。

あおわらわ（青童）（名）年若く世慣れぬ子供。年若く未熟な童。

あか（赤）（名）㊀あか色。㊁あかこ（赤兒）の略。㊂花ガルタの赤色短冊のふだ。又、それより成る手役。

あかたん。㊃社會主義者。社會主義運動に關係ある者。㊄赤字。**—の他人**（句）縁のない人。全くの他人。

あか（銅）（名）あかがね。どう。

あか（垢）（名）㊀汗の蒸發して殘ったもの。脂や活力を失った上皮・塵埃などの汚物の皮膚についてゐるもの。㊁水中にある有機物の器物に附いたもの。㊂垢を流すこと。㊃汚名。**—を抜く**（句）汚名をすすぐ。

あか（閼伽）（名）【佛】梵 Argha ㊀佛に供へる水。㊁水。㊂佛に供へる水を盛る器。**—いど**（閼伽井）（名）【佛】佛に供へる水を汲む井戸。**—おけ**（閼伽桶）（名）【佛】閼伽水を汲み入れる桶。

かんちょう（閼伽灌頂）（名）【佛】（梵 Abhiseka の譯語）佛道修行者の頭に香水を灌いでその效果を證明する儀式。**—だな**（閼伽棚）（名）【佛】佛前に供へる花・水などをおく棚。**—つき**（閼伽坏）（名）【佛】閼伽の水を佛に供へる器。**—みず**（閼伽水）（名）【佛】佛に供へる水。

あか（塗）（名）船底にたまった水。

あか（赤）（接頭）或語の上において、あらはなさまや全いさまをあらはす語。「—はだか」「—恥」。

あかあか（明明）（名・副）極めて明るいさま。

あかい（赤い）（形）㊀「あかし」の口語。㊁社會主義の思想に染んでゐる。其傾向ある。赤化した。**—くに**（赤い國）（名）過激主義の國。ソヴェート・ロシヤ。**—さけ**（赤い酒）（名）五色酒の一。苺酒・ストローベリーリキュール（Strawberry liqueur）。**—しんにょ**（赤い信女）（名）後家。未亡人。**—わらい**（赤い笑）（名）惡神の戯の中にひそむ氣味わるい笑。

あかい（亞槐）（名）（三槐卽ち三公に亞ぐ意）大納言の唐名。亞相。

あかいこ（赤猪子）（名）【傳】引田部の赤猪子。古事記傳說中の女性。雄略天皇の御寵愛を受けたといふ。

あかいし・さんみゃく（赤石山脈）（名）【地】日根山（三一九二米）を主峯として、山梨・長野・靜岡の三縣に跨る山脈。駒ケ嶽・白根山・赤石山・七面山・身延山・秋葉山等がある。

あかいと・おどし（赤絲縅）（名）あかねぞめ（茜染）の絲でをどした鎧縅。【絲毛の車。

あかいと・げ（赤絲毛）（名）赤絲で、車箱を飾った

あかいも（赤薯・赤藷）（名）【植】薩摩薯の一種で、皮の赤いもの。【葉柄の紫赤色のもの。

あかいろ（赤色）（名）㊀赤い色。㊁あかしらつるばん（赤白樣）。㊂織物の色。經（たて）は紫、緯（よこ）は赤。あかばな。**—のほう**（赤色袍）（名）赤白樣で染めた高貴の方の著用せられる袍。

あかいわし（赤鰯）（名）㊀糠鰯につけた鹽。又、その乾かしたもの。㊁赤く錆びた刀。

あかうきぐさ（赤浮草・滿江紅）（名）【植】楓葉藻（まんりょう）科の水草。葉は小鱗狀で莖に密接し、全體「びのき」の葉に似て紫かく、紅綠色を呈し、池沼・水田に浮生する。

あかうそ（赤鱸）（名）全くのうそ。まつかなうそ。

あかうなぎ（赤鰻）（名）【動】あくうなぎ。

あかうみがめ（海龜）（名）【動】爬蟲類中の龜の一種。體形・體長は「あをうみがめ」に似、その特徴は肋骨甲の十五枚なること、體色の淡紫なることにある。暖海に產し、その肉は臭氣があって食用に適せぬが、甲と腹肪は諸種の用に供せられる。

あかうるし（赤漆）（名）漆に朱又は長砂を交へたもの。「いた鞘」

あかえ（赤繪）（名）主に陶器に赤い繪具でかく。

あかえい（赤鱏）（名）【動】赤鱏科の軟骨魚。「えびこの」の略。體は菱形で平たく、長い尾を有し、一箇乃至三箇の刺があって防禦用をなす。これに鑿されればその部分を切りとられねばならぬから注意を要する。背の中央に砂粒狀の突起が連續し、背は暗褐色で、邊緣は黃色。

あかえそ（赤鰐）（名）【動】鱗科の海產硬骨魚。體は稍・長く扁側せず。體長二四糎位。體の上部は暗色、側方及び腹面は淡黃色で、背部の側方には八—九箇の暗赤色の横紋がある。

あかえぞまつ（赤蝦夷松）（名）【植】松柏科の常綠喬木。長枝だけあって短枝はない。樹皮は赤褐色で、葉は毬果のある枝では、短厚で稍彎曲するが、毬果のない枝では細長くして、斷面は菱形。毬果は下垂し、長楕圓狀又は卵狀圓形なし、圓頭・圓脚で、暗紫色。苞鱗は、小さく披針形をなす。本州以北に多い。

あかえび（赤蝦・赤海老）（名）【動】蝦の一種で、體は淡紅色に淺蕃色を交へ、長さ約一〇糎。甲尊全面細毛を以て蔽はれる。

あかえぼし（赤烏帽子）（名）㊀赤塗の烏帽子。㊁物ずきな人。**亞主のすきなし**（句）夫の好みは妻が誤めても無效なこと。

あかえり（赤襟）（名）㊀赤色の襟。㊁少女。㊂年若の婦者。生玉。

あかえんぼ（赤大口）（名）袴の一種。緋で、をどしたもの。

あかおどし（赤縅）（名）鎧の赤絲又は赤革

あかおどり（赤貝）㊀【動】原動科目、鬼蛤（おにがい）科の海產二枚貝。介殼は、蛤に似て大きく、外面は淡褐色で、內面は白色。肉は赤味を帶ぶ。㊁蛤肉。

あかがえる（赤蛙）（名）【動】體色赤褐色で暗褐色の斑のある蛙。疳の藥となる。【語】

あかかがち（赤酸漿）（名）【植】ほほずき。（古語）

あかかき（垢掻）（名）㊀風呂屋で浴客の垢をおとす女。㊁私娼の一種。

あかがきげんぞう（赤垣源藏）（名）【人】赤穗義士の一人。赤垣（あかがき）源藏の歌舞伎名。

あかかげ（赤鹿毛）（名）馬の毛色。赤みを帶びた褐色のもの。

あかがさ（赤瘡）（名）【醫】はしか。（古語）

あかがし（赤樫・赤橿）（名）【植】殼斗科の常綠喬木。外皮は黑黑色。高さ一〇米位に達する。葉は長楕圓形で尖頭、全緣、花は單性、雌雄異株、葇荑花

序に配列し、五月頃褐色の花を開く。實は椎の實に似る。材は堅く、船・車等用途が廣い。おほばがし。

あかがしら〔赤頭〕(名) 油氣のないばさばさの髪。「髪。ばさばさ髪。

あかがしわ〔赤柏〕(名) ㊀【植】あかめがしわ。〔赤芽柯〕。㊁あかいひ。赤飯。

あかかすげ〔赤糟毛〕(名) 馬の毛色。赤みがかった灰色に白い差毛のあるもの。「の異名。

あかかたばみ〔赤酸漿草〕(名)【植】かたばみ。

あかガッパ〔赤合羽〕(名) 赤い柳油紙で造った合羽。江戸時代には下人が用ひた。

あかがに〔赤蟹〕(名)【動】山谷・溪間・川・堤等に穴居する一種の蟹。小形で螯は赤い。やまがに。

あかがね〔銅〕(名)【化】赤黒い色の金屬。彈力強く延性に富むもの。又、種種の合金をつくる。あかい。どう。**—いろ**〔銅色〕(名) 銅に似て赤黒く光澤ある色。

あかかぶら〔赤蕪〕(名)【植】根の表皮の赤紫色

あかかみきり〔赤天牛〕(名)【動】かみきり(天牛)の一種。頭部は三角形で濃赤色。杉材の害蟲。

あかがり〔雌〕(名) あかがれ。

あかかり〔赤狩〕(名) 社會主義者を狩出すこと。なめし皮。**—おどし**〔赤革縅〕(名) 赤革を用ひた鎧の縅。

あかがわら〔赤瓦〕(名) ㊀洋風家屋の屋根に用ひる赤色の喰合式セメント製の瓦。㊁安價な文化生活。

あかき〔赤木〕(名) ㊀皮を剝った木。(黒木の對) ㊁赤い色の木材。梅・蘇芳(すはう)・花櫚(くわりん)・紫檀の類。㊂【植】㋐大蘇(すはう)科に屬する熱帶産の喬木。葉は三出の複葉。花は細小で蕚生する。材は赤く、白色の木理があって美しい。㋑同じ(いちい)の一位)。㊃【動】(名) 花櫚(くわりん)の材で造った刀の柄。

あかぎ〔足掻〕(名) ㊀あがくこと。㊁わるさわぎ。いたづら。㊂もがき苦しむこと。**—じに**〔足掻死〕(名) 手足をもがき苦しんで死ぬこと。

あかぎこ〔赤城湖〕(名)【地】群馬縣赤城山にある火口原湖。湖面海拔一三二〇米。東西二粁・南北一粁。大沼ともいふ。古稱石垣沼。

あかきこころ〔赤心〕(名) まこころ。

あかぎさん〔赤城山〕(名)【地】群馬縣東部の火山。標名・妙義とともに上野の三山と稱せられる。海拔一八二六米。前橋市の東北約二十粁。「鳥」。

あかきじ〔赤雉〕(名)【動】きぎす(けちょう)〔錦雞

あかきっぷ〔赤切符〕(名) 汽車の三等乘車券。

あかきぬ〔赤衣〕(名) ㊀【佛】軍荼利(ぐんだり)明王修法の時、眞言宗、僧の着る赤色の衣。㊁五位の人の着る緋色の袍。㊂赤色の狩衣を着た檢非遣使配下の下司。**—すがた**〔赤衣姿〕(名) 五位の官人の正裝。**—の**〔赤衣の〕〔枕〕〔ひたうら〕の枕詞。

あかきび〔丹黍〕(名)【植】「もちきび」の一種。熟すれば穂色が赤味を帶びる。

あかきみ〔我君〕(代) 男を親しんでいふ對稱代名詞。わぎみ。〔古語〕

あかぎり〔赤桐〕(名)【植】「ひぎり」の異名。

あかぎれ〔皸〕(名)【醫】寒さに犯されて手足の皮の裂けて痛むもの。あかがり。

あかく〔足掻く〕(自動、カ四)㊀馬が地を掻くやうにして歩む。㊁氣をもむ。㊂もがく。手足を動かす。㊃わるさをする。

あかくさ〔赤草〕(名)【植】「はうきぐさ」の異名。

あかぐすり〔赤藥〕(名) 人參と辰砂とでつくった赤色の丸藥。急病に用ひたもの。

あかぐそく〔赤具足〕(名) 小札(こざね)を赤漆で塗り、赤絲で綴した具足。「を帶びた村雲色。

あかくちば〔赤朽葉〕(名) 蹇(ひづめ)の色目。赤み褐色、耳小さく毛中に沒する。尾小にして毛は長く、やや粗。樺太・カムチャツカ・シベリヤ・北歐・北米等に產する。肉は食用とし、毛皮は敷物とする。くろけぐま。

あかくま〔赤熊〕(名)【動】熊(ひぐま)の一種。

あかさ〔赤沙〕(名)【動】あかい。こと。又、その程度。

あかさ〔赤差〕(名)【植】原野に自生する藜科の一年生草本。葉は約一米、葉は卵形で、緑に缺刻・鋸齒を有し、互生する。夏、紫狀の綠黃色の細花を開く。

あかさ〔赤麻〕(名)【植】根の表皮の赤紫色

あかさ〔赤麻〕(名)【植】あかめがしわ。〔赤芽柯〕。㊁あかいひ。赤飯。

てて淡路島に對す。附近の海濱は明石の浦で景勝の地である。**—ちぢみ**[明石縮](名)縦に皺縮ある生織色織物。さらさらした高級の薄物で、古く明石の人が製したといひ、天明年間、明石次郎の創製したのともいふ。京都西陣と新潟縣十日町とが本場である。**—ぶね**[明石船](名)明石・大阪間の乗合船。

あかし[明釣](名)篝火たき魚を寄せて釣ること。

あかし[證](名)證據。證明。**—びと**[證人](名)しょうにん(證人)。**—ぶみ**[證書](名)㊀神佛に心中を述べた文。願文。㊁卒業證書。證明書。

あかし[赤し](形、一)㊀赤色である。㊁まことがある。㊂危險思想を有する。

あかし[明し](形、一)あかるい。あきらかである。

あかじ[赤字](名)㊀(校正に赤インキを用ひるからいふ)初校をした校正刷。㊁(不足額をあらはす數字には赤色の字を用ひるからいふ)政府などで、歳入よりも歳出の超過したこと。又、銀行會社等で、支出が收入よりも超過して缺損したこと。**—こうさい**[赤字公債](名)【經】國家が收入不足を填補する目的で發行する公債。

あかじ……ぢ[赤地](名)織物の地の赤いもの。その織物。

あかしお[赤潮](名)硅藻類や微生物の群集

あかしくらす[明し暮す](自動、サ四)夜をあかし日をくらす。月日をおくる。

あかしそ[赤紫蘇](名)【植】蓼科の一年生草本。

あかしたま[赤石玉・明石玉](名)㊀赤く光る玉(赤石玉)。㊁人造珊瑚(明石玉)。

あかしで[赤亜柳・見風乾](名)【植】樺木科の落葉喬木。高さ一五米位、樹皮は黒褐色、葉は卵狀楕圓形で鋸齒な具へ、材は淡黄白色で硬く、櫛や器具の柄とし、又、桃茸を造る楕木に用ひる。

あかじみ[垢染](名)あかじむこと。

あかじみる[垢染みる](自動、マ四)垢染むこと。

あかじむ[垢染む](自動、マ四)垢がつく。

あかじむ[垢染む](自動、マ上二)垢染むこと。

アカシヤ[Acacia](名)㊀【植】おもに熱帯・亞熱帯に產する莢科の喬木又は灌木で、合歡木(ねむの木)に似て、枝に針がある。葉は偶數羽狀複葉、葉柄は變形して假葉をなす。初夏の頃、無數の黄色又は白色の小花を穗狀花序に綴り、芳香は濃艶である。㊁街路樹として用ひられる「いぬアカシヤ」の俗稱。

あかしゃこ[赤蝦蛄](名)【動】蝦の一種で殼線の紋樣があり、喉地の深海に產する。

あかしらが[赤白髮](名)赤み帶びたしらが。

あかしらつるばみ[赤白橡](名)黄櫨(ぶし)と茜(あかね)で染めた色。

あかしんぶん[赤新聞](名)㊀赤紙の新聞。㊁社會の裏面をすっぱぬく醜惡新聞。始め、この種の新聞が赤い紙を用ひたからいふ。「あける。(古語)

あかす[明かす](他動、サ四)ひらく。

あかす[明かす](他動、サ四)㊀あかるくする。㊁夜をすごす。

あかす[飽かす](他動、サ四)飽きさせる。

あかずく[垢附く](自動、カ四)垢がつく。

あかすぐり(名)【植】虎耳草(ゆきのした)科の落葉灌木。ヨーロッパの原產。高さ約一米。葉は圓形で、三—五裂し、花は綠色又は褐色で、花後、赤色・球形の漿果を結ぶ。

あかすさ[赤苞](名)古綱を水に浸して切った苞。

あかすじ・つちばち[赤條土蜂](名)【動】蜂の一種。黑色大形で、翅は赤褐色を呈し、第三腹節に二箇の赤黄紋を有するが、合して一帶となることがある。觸角の上部は黄色を呈する。蚕蛹である。

あかずみ[赤墨](名)しゅずみ。

あかずな[赤砂](名)(こんごうしゃ×金剛砂)。

あかすり[垢磨](名)垢を摺落すに用ひる布片。

あか・そ[赤苧・赤麻](名)【植】苧麻。「かるむし」の一種。苧は赤く、葉は卵圓形で、緣邊に粗鋸齒を有し、對生する。皮から絲をとる。

あか・ぞなえ[赤備](名)具足・指物・鞍・轡などの武具を赤色にした一隊。

あかぞめえもん……[赤染衛門](名)【人】平安朝の女流歌人。赤染時用(ときもち)の女、實は平兼盛の女。大江匡衡の妻。その歌集を「赤染衛門集」といふ。

あかだ[阿伽陀](名)【佛】(梵Agada)眞言秘密の靈藥。解毒劑。**—ぐすり**[阿伽陀藥](名)酒の異名。

あが[縣](名)㊀昔、諸國にあった天皇の御領地。㊁縣主の支配地。㊂地方官の任國。㊃あなか。**—じんじゃ**[縣神社](名)【神】京都府久世郡宇治町にある神社。祭神は平等院地主の神或は木花咲耶姫命と傳へられる。**—ぬし**[縣主](名)上古、あがたの世襲の長官。**—の・いど**[縣井戸](名)山城にあった井戸で、蛙山吹の名所。**—の・みやこ**[縣宮](名)【神】大內裏西方の北門にあった神社。**—の・みやつこ**[縣造](名)國造の下で縣を治めた職。**—み**[縣見](名)田舍見物。地方を巡視。(古語)**—み**[縣神子](名)小さい弓を張き、合掌瞑目の上、神おろしして神託を告げる女。**—めし**[縣召](名)昔、正月十一日から十三日までの間に地方官を召して任官せられた公事。**—めし・の・じもく**[縣召除目](名)(たい×血鯛)あがためし。

あか・だいい[赤鯛](名)【動】體色の赤い鯛。(ちで表皮の赤いもの。㊁【能】裏面急進的左翼的で、眞實に右翼的な行動をするもの。

あか・だいじん[赤大臣](名)赤色の狩衣を着た蛾の一種。體長約一翅(名)【動】蛺蝶科に屬する個の白斑があり、翅底と外方に二箇の橙赤色の渦狀紋がある。後翅は暗褐色で外緣は橙赤色を呈し、二列の黑斑がある。

あか・だま[赤玉](名)㊀赤い玉。㊁こはく(琥珀)。㊂佐渡から產する赤色の庭石。「(蔕柑子)。

あかだまのくさ[赤玉木](名)【植】やぶこうじ

あかたん[赤短](名)[赤玉木](名)【植】ヤブコウジ

あかち[分・頒](名)あかつこと。わかち。(古語)

あがち[賜兒](名)罪をあがなふに用ひる乳兒。昔、陰暦六月と十二月との大祓に用ひた人形。(古語)

あかちだ[班田](名)昔人民に分ち與へた田。

あかつ[分つ・頒つ](他動、タ四)わかつ。(古語)

あかつき[曉](名)(明時(あかつき)の轉)夜のあける頃。よあけ。あけがた。**—おき**[曉起](名)あけがたに起きること。**—かた**[曉方](名)よあけの頃。**—ぐさ**[曉種](名)曉鐘の音。(古語)**—ずき**[曉月](名)あけがたの月。ありあけづきがたの月の殘つてゐる頃。**—ずくよ**[曉月夜](名)あけがたの月のない頃。**—やみ**[闇](名)あけがたの暗い頃。

あかつきげ[赤月毛・赤鴇毛](名)馬の毛色。

あかつく[垢附く](自動、カ四)あかづく。よごれる。

あかつくたん[亞褐炭](名)【鑛】あたん(亞炭)。

あかつち[赤土](名)㊀赤い黄色の粘土。㊁赤黑色の繪具。㊂煙草の一種。茨城縣久慈郡の產。葉の色が赤土に似てゐるからいふ。

あかつばき[赤椿](名)【植】茜(あかね)科の多年生草本。莖は斜上し、長さ三〇乃至四〇糎。葉は三出し、小葉は廣楕圓形で、圓頭又は凹頭。葉・莖共に細毛を有する。夏、莖の上部の葉腋に紅紫色の小蝶形花を多數密集し、花後莢を結ぶ。牧草又は綠肥に用ひる。むらさきつめくさ。

あかつら〔赤面・赭面〕(名)㊀あかがれ色の顔。多くは人を罵る時にいふ。㊁演劇で、敵役又は盛形の稱。多くは顔を赤く塗るからいふ。

あかてつ〔赤鐵〕(名)【植】赤鐵科の常綠喬木。葉は革質で長楕圓形。花は褐色で葉腋に開き、漿果を結ぶ。材は建築又は船舶の材とする。

アカデミー〔Academy〕(名)㊀【哲】ギリシヤのアテネ市外アカデマイヤ林苑による聖地で、プラトンがここの樹木の下で生徒を教育したので、その學派をいふ。㊁文學・美術・科學等の學術上の團體。㊂專門學校。高等學校。大學。㊃學士院。

アカデミック〔Academic〕(英・名・形)㊀官學的。㊁學究的。㊂古い型に囚はれてゐるさま。㊃プラトン派の徒。㊄專門學校・高等學校・大學の學生。㊅學士院會員。

あかてる〔赤照〕(名)芝居でソジウムを燃して舞臺に赤光を發せしめること。

あかてロ〔赤一テロ〔Red-terror〕(名)暗殺等直接行動によって、社會革命を遂行しようとする左翼のテロル。

あかでんしゃ〔赤電車〕(名)最終電車で運轉臺の前面に赤い電球をつけてゐるもの。

あかとき〔曉〕(名)あかつき。(古語)

あかとど〔淦止〕(名)舟中に淦の入るのを塞ぐ栓。

あかとり〔淦取〕(名)あかとりしゃく。

あかとりしゃく〔淦取杓〕(名)船中の淦を汲み出す杓。あかくみ。

あかとりぞめ〔赤取染〕(名)赤色に、間の狹くあかとんぼ〔赤蜻蛉〕(名)㊀【動】とんぼの一種。形、常のより小さく、體色の赤ばんだもの。あかふんぼ。㊁江戸時代に、鎧兜を背負って運搬した人足。

あかな〔赤菜〕(名)【植】油菜の一種。葉・根ともに紫色を帶び、葉には種子から油を搾る。

あがない〔贖〕(名)あがなふこと。あがなふ金品。

あがなう〔購・贖〕(他動、ハ四)(あがのう)の口語。

あかな〔赤菜〕(名)【植】油菜の一種。葉・根ともに紫色を帶び、葉には種子から油を搾る。

あかないあがなう〔贖・購〕(他動、ハ四)(あがのう)の口語。

あかなす〔赤茄子〕(名)【植】茄科の一年生草本。葉は羽狀複葉。夏、黃花を開く。實は球形。赤熟又は黃熟する。多く生食し、又、ソースに製する。トマト。

あかなべ〔銅鍋〕(名)㊀銅製の鍋。㊁尻の輕い落ちつかぬ女を嘲っていふ語。

あかなまず〔赤鯰〕(名)【動】鯰の一種。體長約九糎、體色赤茶色。胸鰭の刺に觸れれば人を螫す。山間の清流に產する。

あかに〔赤埴〕(名)赤土。あかはにに。(古語)

あかにし〔赤螺〕(名)㊀【動】腹足類の巻貝。貝殼は短紡錘形。表面は淡褐色で、縱走の暗褐色斑點がある。內部は赤い。㊁吝嗇の人を嘲っていふ語。

あかにしょうけん〔赤荷證券〕(名)【經】保險附の船荷證券。あかふなにしょうけん(赤船荷證券)。

あかにゅうどう〔赤入道〕(名)【人】山名持豐の異名。

あかぬけ〔垢拔〕(名)㊀皮膚の綺麗なこと。㊁やぼでないこと。㊂素人くさくないこと。

あかぬける〔垢拔ける〕(自動、カ下一)㊀垢が除かれて皮膚が綺麗になる。㊁俗氣はなれる。

あかね〔茜・茜草〕(名)㊀【植】茜草科の多年生蔓草。莖は方形で中空、外部に刺がある。一節毎に四葉を出す。葉は長卵形。秋、黃白色の花を葉腋に着ける。根は赤色の染料又は藥用とする。㊁茜色(暗赤色)の略。

〔㊀ねかね〕

あかねいろ〔茜色〕(名)茜の根で染めた色。赤色の稍・沈んだ色。あかね。

あかねさす〔枕・日・晝・君・紫〕等の枕詞。

あかねすみれ〔茜菫〕(名)【植】菫菜科の多年生草本。全體毛茸多く、無莖種で、最下葉は圓形、他は卵形、基脚は往往心臟形をなし鈍頭、邊緣に鈍鋸齒がある。葉柄の上端に翅を有する。春、紅紫色長穗の花を開く。

あかねぞめ〔茜染〕(名)茜色に染めること。又、その染めた物。

あかねまく〔茜幕〕(名)茜色の幕。

あかねもめん〔茜木綿〕(名)茜染の木綿。

あかねり〔赤練〕(名)赤色の絹絹。

あがのう〔贈・贈〕(他動、ハ四)㊀金品を出して罪をつぐなふ。㊁代物を出してつぐなふ。

あがのう〔購・贖〕(他動、ハ四)㊀買殿に奉仕する藏人の着る衣。(古語)

あかは〔明衣〕(名)神事に仕へる人や天皇の御湯衣。(名)あがは。(古語)

あかば〔赤葉〕(名)枯れて赤く黃ばんだ葉。

あかバイ〔赤一〕(名)自動車が規定外の速度を出すのを取締る警視廳の赤塗の追跡用オートバイ。

あかはげ〔赤禿〕(名)㊀髮のすっかり禿げたこと。又、その人。㊁山の金く禿げてゐること。

あかはだか〔赤裸〕(名)㊀【植】はだかむぎ。裸麥。㊁まっぱだか。あかはだか。

あかはぢ〔赤蜂〕(名)【動】あかすじつちばち。赤條土蜂。

あかはつだけ〔赤初茸〕(名)【植】初茸の一種。傘の表面は赤色、質硬くして粘液に富む。夏季、濕潤の地に生じ、食用となる。あかはつ。

あかはた〔赤旗〕(名)㊀【植】はたはた。㊁赤旗事件。

あかはだ〔赤肌・赤膚〕(名)㊀赤くむけたはだ。㊁あかはだか。

あかはじ〔赤恥〕(名)多くの人中で、かく恥。

あかはた〔赤旗〕(名)㊀赤地の旗。㊁平氏の旗。㊂革命派又は過激派の赤色の旗。

あかはじ〔赤櫨〕(名)櫨(はぜ)の色目。表は黃赤、裏は萌黃色。

あかはじ〔赤櫨の粗製品。

あかはつ〔赤鰹〕(名)鰹の一種。

あかはら〔赤腹〕(名)㊀【動】燕雀類の鳥。形は鶺鴒に似て頭黑く、胸・腹は狐色、背と翅とは青鼠色。㊁(うぐひす)の石斑魚。

あかばる〔垢張る〕(他動、ラ四)垢にまみれる。

あかひき〔赤蓼・赤蟾蜍〕(名)【動】赤褐色のひきがへる。

あかびき〔赤引・赤熱〕(名)【動】蠶の一種。春蠶。

あかびきのいと〔赤引絲〕(名)光って麗しい絲。伊勢神宮の六月・十二月の月次祭に調進して、神衣を織るに用ひるもの。(古語)

あかひげ〔赤髭〕(名)㊀赤いひげ。㊁歐米人を罵っていふ語。㊂【動】燕雀類の小鳥。駒鳥に似て雄は橙黃赤色、雌は栗赤色。りうきうごま。

あかひも〔赤紐〕(名)小忌衣(をみ)を着けた時、右肩に打ちかけて前後に垂れ下げた紐。上古は赤色であったが、後世は、濃紫及び蘇芳に、鳥・蝶を描いた二條の紐を用ひた。たれひも。**—の**〔赤紐の〕(枕)「ながくの枕詞。「赤色で、赤色の染料に供せらる。

あかひゅう〔赤苴〕(名)【植】苴の一種。莖・葉共に紫色。

あかふ〔赤斑〕(名)あかぶち(赤斑)。

あかふくもち〔赤福餅〕(名)指でおさへたかた

あかばな〔赤花・柳葉菜〕(名)㊀【植】草木の花の赤いもの。㊁柳葉菜(なばな)科の多年生の草本。山野の濕地に自生する。莖は長楕圓形で、鋸齒を有し、稍・總狀をなして開く。種子は微細で長白毛を有し、飛散する。

〔㊁なばなかあ〕

あかばな〔赤花〕(名)㊀赤花で染めた色。㊁あかばな(赤鼻)(名)色の赤い鼻。さくらだ。

あかばな〔赤鼻〕(名)【地】東京市王子區の町名。

あかばね〔赤羽〕(名)【地】東京市北多摩郡一驛。「つく。赤らむ。

あかばむ〔赤ばむ〕(自動、マ四)赤く色

あかはら〔赤腹〕(名)㊀【動】せきれい(赤羽)。

あかばる〔赤ばる〕(自動、ラ四)赤くなる。

あかひる〔赤蛭〕(名)㊀赤い蛭。㊁(うぐひす)の石斑魚。

あかぶち〔赤斑〕(名)赤い斑点。

あかぶち〔赤斑〕(名)【植】草の一種。

あかぶち〔赤斑〕(名)あかふ(赤斑)。

あかぶくろ〔赤袋〕(名)㊀赤い袋。㊁【動】燕雀類の小鳥。駒鳥に似て雄は橙黃赤色、雌は栗赤色。りうきうごま。

あかふくもち〔赤福餅〕(名)指でおさへたかた

のある餅。ころもち。宇治山田市の名物。

あか・ふだ〔赤札〕(名)❶寫眞の乾板の紫藍色だけに感光する部の稱。❷あかたん(赤短)。❸見切品。賣約證商品。又は展覽會落選作品。

あかふち〔赤斑〕(名)赤いまだら。あかふ。

あかふなにしょうけん〔赤船荷證券〕(名)【經】保險附の船荷證券。赤荷證券。

あかべ〔赤目〕(名)あかめ(赤目)の轉。

あかべた〔赤下手〕(名)傘くずのへた。まるっきり(たなこと)。

あかべら〔赤遍羅〕(名)【動】鰹鯖目遍羅科の海產魚。「きっぷせん」の雌をいふ。

あかべんけい〔赤辨慶〕(名)道心堅固で浮氣を「場で乘客の手荷物を運搬する人。ぜんぜん者。

あか・ぼう〔赤帽〕(名)❶赤色の帽子。❷停車

あか・ぼうず〔赤坊主〕(名)【植】小麥の一變種。芒なく、果實の赤色なるもの。

あか・ぼうふり〔赤子孑子〕(名)【動】赤いぼうふり。

あか・ぼうふり〔赤子孑子〕(名)【動】赤いぼうふり。

あか・ぼし〔明星〕(名)【天】金星。—の(明星の)〔枕〕「あくる」の枕詞。

あか・ぼとけ〔吾佛〕(名)わが持佛のやうに大切に思ふ人。

あかぼん〔赤本〕(名)❶江戸時代に於ける表紙の赤い繪雙紙。享保以來江戸で刊行した。寶暦以後廢れ、黃表紙がそに代って流行した。❷粗製の安價な本。

あかま〔淦間〕(名)中程の低い所。和船の水あかの集まる所で、

あかまい〔赤舞〕(名)【植】煙草の一種。茨城縣久慈郡太田附近に產する。葉の色が赤土に似る。あかっち。

あかまいし〔赤間石〕(名)【鑛】山口縣厚狹郡豐浦郡から產する赤褐色の輝綠凝灰石で、硯材・庭石とする。あかま。あかまがせき。

あかまえだれ〔赤前垂〕(名)紅晒の前垂をかけた料理屋・宿屋・遊女屋などの女中。

あかまが・せき〔赤間關〕(名)【地】下關の舊稱。馬關。「—の硯」。

あかまぐさ〔赤間草〕(名)【植】(さわあららぎ)

あかます〔赤鱒〕(名)【動】鰲色で、肉は紅色を帶びた鱒の一種。べにます。

あかまだらか〔赤斑蚊〕(名)【動】蚊の一種。形稍小、體色淡褐色、腹・脚に褐色の輪紋がある。

あかまつ〔赤松〕(名)【植】松柏科の常綠喬木。樹皮や芽は赤褐色。材は建築用・薪炭用・西洋紙の材料となる。めまつ(雌松)。

あかまつ・のりむら〔赤松則村〕(名)【人】播磨の國守。蘭髮して國心といふ。元弘の亂に勤王の功があったが、後、足利尊氏に屈した。正平五年(一三一〇)歿。年七十四。

あかまのみや〔赤間宮〕(名)【神】下關市にある官幣中社。安德天皇を祀る。「に近く、色は暗褐色。

あかまめ〔赤豆〕(名)【植】大豆の變種。實は圓形

あかみ〔赤身〕(名)❶動物の肉の赤い部分。❷木材の中心の帶紅色の部分。心材。

あかみ〔赤味〕(名)❶赤い色さし。❷赤さの度合。

あがみ〔我身〕(代)❶そち。そなた。❷わがみ。自分。

あかみそ〔赤味噌〕(名)麥麹で作った赤色の味噌。「增。味は鹹い。田舍味噌・仙臺味噌の類。

あかみ・ばしる〔赤み走る〕(自動ラ四)赤むし。赤みがさす。

あかむ〔(めむ)むる〕〔赤む〕(自動、マ四)赤くなる。赤みがさす。

あが・む〔(めむ)むる〕〔崇む〕(他動、マ下二)あがめる。たっとぶ。大切にする。

あかむけ〔赤剝〕(名)【動】鯉科の硬骨魚。鯉に似て、體長約六〇糎。鰭・鱗は赤く、全身薄茶色。海底の岩礁內に棲む。あかもつ。

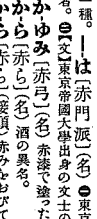
あかむらさき〔赤紫〕(名)【植】植物の赤い新芽。

あかめ〔赤芽〕(名)【動】蝸(古語)

あかめ〔赤目〕(名)❶瞳(古語)❷充血した目。血走った目。❸眼球の虹彩が赤色を呈するもの。虹彩色素の缺乏による。❹下のまぶたをひき下げ赤い目裏を見せて小兒をおどし、又は人を卑しめ、否定の意をあらはすこと。あかべ。あかんべい。❺【動】あかめだけ(赤目鯛)。

あかめだい〔赤目鯛〕(名)【動】笠子(ちだい)科の魚。形「めばる」に似て、目も口も大きく、全身赤色で綠斑がある。おきめばる。あかめ。夏日、白色の花が穗をなして咲く。

あかめ・がしわ〔赤芽槲〕(名)【植】大戟(たかだま)科の落葉喬木。高さ五米位。葉は互生し、廣卵形で三又は五の尖端がある。材は軟く床柱等に用ひられる。芽の色が赤いからいふ。あかがしは。あづさ。



〔槲芽赤〕

あかめふぐ〔赤目河豚〕(名)【動】河豚の一種。體色は赤味を帶びた黃褐色で、背部に赤褐色の斑紋がある。鰭は淡褐色で、尾鰭の先端は稍・黑い。河豚類中、美味であるが、毒性も甚だしい。

あかめる〔(めむ)むる〕〔赤める〕(他動、マ下二)「あかむ」の口語。

あがめる〔(めむ)むる〕〔崇める〕(他動、マ下二)「あがむ」の口語。

あがもう〔(もふ)もふる〕〔崇まふ〕(他動、ハ下二)あがむる。(古語)

あか・もがさ〔赤疱瘡・赤斑瘡〕(名)【醫】はしか(麻疹)。

あか・もく〔赤海藻〕(名)【植】褐色藻類、馬尾藻(ほんだわら)屬の海藻。莖・葉・根の三部に分つた得、莖部は細長で細枝あり、葉は三種位で、葉柄を有し、線形で缺刻がある。又、鋸齒があって稍・赤味を帶び、全體は褐色。淺海の岩礁の多い處に自生する。肥料又は沃度製造の原料とする。

あかもず〔赤鵙・赤百舌〕(名)【動】燕雀目、鳥科の小鳥。頭から尾羽まで濃い赤茶色を帶び、眼の上に白い眉がある。

あか・もつ〔赤鯉〕(名)【動】あかむけ。

あか・もの(名)【植】石南(しゃくなげ)科の常綠小灌木。高山の石間に生じ、高さ約三〇糎。莖は細くして赤褐色。葉は卵形で尖り、綠邊に鋸齒を有する。夏日、梢上に鐘形の小白花をつけ、實は圓くして紅熟し、味は甘い。いはばぜ。

あがもの〔贖物〕(名)贖をする時、罪の代償として「て出す物。(古語)

あか・もん〔赤門〕(名)❶朱塗の門。❷東京帝國大學の異稱。正門の南の門が朱塗である爲、此の稱がある。もと前田邸の正門であった。❸印刷用西洋紙の一種。—は〔赤門派〕(名)❹東京帝國大學出身者。❺〔文〕東京帝國大學出身の文士のグループ。

あかゆみ〔赤弓〕(名)赤漆で塗った弓。

あから〔赤ら〕(名)酒の異名。

あから〔赤ら〕(接頭)赤みをおびて美しいこと。

あからがお〔赤ら顏〕(名)赤みをおびた顏。

あからけ・し〔赤らけし〕(形、一)赤いやうだ。うるはしい。(古語)

あからさま〔名副〕❶たちまち。にはかに。❷かりそめ。(古語)❸あらは。あきらか。(古語)

あからしまかぜ〔暴風〕(名)はやて。暴風。(古語)

あからひく〔赤ら引く〕(枕)「朝」「膚」の枕詞。

あからぶ〔赤ら(ばむ)ぶる〕〔赤らぶ〕(自動、バ四)赤くなる。赤らむ。(古語)

あからぶ〔赤ら(ばむ)ぶる〕〔赤らぶ〕(他動、バ下二)「赤くする。あからむ。

あからぶ〔明ら(らむ)ぶる〕〔明らぶ〕(自動、バ四)あきらむ(明きらむ)。(古語)

あからむ〔赤ら(ばむ)む〕〔赤らむ〕(自動、マ四)赤くなる。あからぶ。

あからむ〔赤ら(ばむ)む〕〔赤らむ〕(他動、マ下二)赤くする。あからぶ。

あからめ〔外見〕(名)❶わきみ。よそみ。(古語)❷(意に見えないやうになること。(古語)❸夫が他の女に心を移すこと。(古語)

あからめる〔(めむ)むる〕〔赤らめる〕(他動、マ下二)「あからむ」の口語。

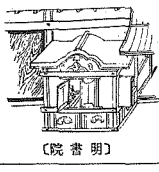
あかり〔明〕(名)❶光線。ひかり。❷燈火。❸疑をはらす證據。あかし。—さき〔明先〕(名)光のさして來る方。—しょいん(…ゐん)〔明書院〕

（名）床の間の側にあって、窓附で縁側の方へ出張った所。あかりどこ。つけしょうゐん。―！

しょうじ[やしき][明障子]（名）明かりを取る爲の障子。現今の障子。さうじ。―！**そうじ**[明障子]（名）（あかりしょうじ。〈古語〉）―！

だち[明太刀]（名）㊀儀式に用ひる太刀。儀刀。㊁遺物に用ひる太刀。實用にはならぬ太刀。―！**ど**[明床]（名）（あかりしょいん。〈明書院〉。）―！**と**[明取]（名）室内に光をとり入れる窓。―！**ま**[明窗・明窓]（名）あかりとり。〈明取。〉

あがり[上]（名）㊀のぼること。あがること。㊁上達。㊂物價の騰貴。㊃しまひ。をはり。㊄魚・蟲などの死ぬこと。㊅雙六の勝負のきまる所。㊆あがりもの。㊇收益。利益。㊈成就。㊉あがりばな。―**うける**[上り請ける]（他動・カ下一）物價の騰貴するを待ちうけて儲けること。―**おり**[上下]（名）あがるとおりると。しょうか。（昇降）。―！**がまち**[上框]（名）家のあがり口のかまち。―！**かぶと**[上冑]（名）㊀端午の節句の紙の冑。―**くち**[上口]（名）㊁家・階段ののぼり口。―**さがり**[上下]（名）あがるときがると。―**ぜん**[上膳]（名）食後の膳。―**だか**[上高]（名）收入。收穫。―**たるよ**[上世]（名）太古。大昔。―**だん**[上段]（名）高い處に登る階段。階。―**ち**[上地]（名）沒收せられた土地。―**つく**[上り付く]（他動・カ四）飲みくひする習慣がつく。―**なまず**[上鯰]（名）㊀死んだ鯰。㊁遊海に金錢をつかひ果した者。―**ば**[上場]（名）㊀上陸する所。㊁浴場の脱衣場。―**はな**[上端]（名）人家の出入口。でばな。―**はな**[上端]（名）煎じたばかりの茶。でばな。―**ふじ**[上藤]（名）敎所の名。藤の花を上で圓く抱きあはせた形の紋。―**ふ**[上蹈]（名）玄關や店先等にぬぎすてたトンビや帽子などを竊取る賊。―**め**[上目]（名）㊀上の方へひきつった目。㊁物價の上りかけの時。―**も**[上物]（名）㊀神佛の供物。㊁田畑の收穫物。㊂官に沒收せられた物。㊃廢物。不用品。すたりもの。―**やしき**[上屋敷]（名）江戸時代に官に沒收せられた屋敷。―**ゆ**[上湯]（名）入浴後、體を清めるに用ひる湯。〈古語〉


〔院書明〕

あがり[殯]（名）屍をしばらくなきまおくところ。

あがり[上]（接尾）某の勤めをして來た人。巡査―。

あがりうま[跳馬・騰馬]（名）踊りはねる馬。

あがりさき[揚座敷]（名）江戸時代の江戸傳馬町の牢屋の一部。五百石以下御目見以上の旗本の未決囚を入れた牢屋。―！**いり**[揚座敷入]（名）揚座敷に入れられること。―**もの**[揚座敷者]（名）揚座敷に入れられた者。

あがり[揚間]（名）湯屋の脱衣所。

あがりも[揚屋]（名）江戸時代の江戸傳馬町の牢屋の一部。御目見以下・陪臣・僧侶・醫師・婦人等の未決囚を入れた牢屋。―！**いり**[揚屋入]（名）揚屋に入れられること。―**もの**[揚屋者]（名）揚屋に入れられたもの。

あか・りんご[赤林檎]（名）〔植〕くにりん。紅林檎。

あかるる[赤る]（自動・ラ四）赤くなる。赤らむ。〈古語〉

あかるる[明る]（自動・ラ四）あかるくなる。

あかるる[別る]（自動・ラ下二）「わかる」の古語。

あかる[開かる・明かる]（自動・ラ四）「自然に開く」。開くことができる。

あがる[上がる・揚がる]（自動・ラ四）「上がる」の轉。

あがる[上がる・揚がる]（自動・ラ四）㊀のぼる。㊁達する。㊂價が高くなる。㊃收入になる。㊄參る。㊅成就する。終る。㊆昇進する。㊇雙六などで最後の所に入る。㊈神佛の前に供へられる。㊉風呂が立派である。㊊「上は上達する。のぼる。㊋揚は高くあがる。㊌擧はひきあげる。㊍逆上する。

あがる[上る]（他動・ラ四）「飲み又は食召し―」。㊁尊敬の意をあらはす語。「語。

あかるい[明るい]（形）「あかるし」の口度合。

あかるさ[明るさ]（名）あかるいこと。又、その

あかるし[明るし]（形・一）㊀物がよく見える。あきらかである。「語」

あかるたえた[明妙]（名）あかるい所。

あかるみ[明所]（名）あかるい所。

あかるむ[赤るむ]（自動・マ四）赤い色。

あかん[阿監]（名）宮中の女房の監督。宮中の女中頭。

アカンザス[Acanthus]（名）㊀〔植〕爵牀（ハアカンサス）科の多年生草本。葉は深く裂けて羽狀をなし、夏日、長い花莖を出し、白色の帚形花を穗狀に著ける。古代ギリシャのコリント式建築で、柱頭の飾に用ひたアカンザスの葉の模樣。

あかんべい[赤目]（名）あかめ（赤目の轉說。

あかんぼう[赤坊]（名）あか・ん（赤子）。

あかんぼく[亞灌木]（名）㊀〔植〕草・枝は木質で、枝先の草質なる植物。㊁灌木と草本との中間のもの。山吹・秋の萩。

あき[秋]（名）一年四季の第三。天文學では秋分から冬至まで、氣象學では九月から十一月までの稱。陰曆では七月から九月までの稱。―**高く馬肥ゆ**（句）秋は空が澄み渡って高く晴れ、馬は肥えて逞しくなるといふので、秋は好時節だとの意。―**關**[ゑ]**く**（句）秋が更ける。秋が半ばすぎになる。―**の鹿は笛に寄る**（句）秋の牡鹿は互に戀ふる情が切實だから鹿笛に惹かれて寄り來る。轉じて弱點に乘じ易きにいふ。―**の日は釣瓶落し**（句）秋の日の沒することの速かなことにいふ。

あき[明]（名）㊀あいたところ。㊁しまひ。すきま。㊂から。あきまま。㊃ひま。㊄現在使用せぬもの。―**のかた**[明方]（名）その年の惠方（ゑほう）。その年の歲德神（としとくじん）のある方角。

あき[商]（名）あきなひ。〈古語〉

あき[飽・厭]（名）あくこと。いやなこと。いとふこと。

あぎ[膀顎・鰓顎]（名）あぎと。あご。〈古語〉

あぎ[吾君]（代）〔植〕中央アジヤに產する纖形科の多年生藥草。又、その根の乳液を乾かした藥劑。古來鎭靜劑として賞用せられ、又、灌腸劑に使用せられる。

あきあずき[秋小豆]（名）〔植〕あづきの一品種。秋季結實成熟するもの。

あきいえ[明家]（名）人の住まぬ家。あきや。

あきうど[商人]（名）（あきゅうど。）㊀上古の商人取締役。（古語）㊁姓氏の一。皇別に屬する。

あきおさめ[秋收]（名）秋の收穫。

あきがい[秋買]（名）秋、物を仕入れて冬の商ひの支度をすること。

あきかけて[秋掛て]（副）秋になって。〈古語〉

あきがしわ[秋柏]（枕）「賣る」の枕詞。

あきかぜ[秋風]（名）㊀秋季に吹く風。㊁「秋」を「厭き」にかけて、男女の情愛のかはることにいふ。

―の[秋風の]（枕）「吹く」「ち」「風」の枕詞。

のつき[秋風月]（名）陰曆八月の異稱。

が立つ（句）いやになる。―**に薄の穗**（句）よく飽くことの譬。

あきがた[厭方]（名）いやになった氣味。

あきかたまく[秋任く]（自動・カ下二）秋になるのを待つ。〈古語〉

あきかます[秋師]（名）〔動〕秋にとれるうまい「かます」。

あきから[空殼]（名）中味のなくなった容器。から。

あきからまつそう[秋唐松草]（名）〔植〕毛茛（ハウ）科の多年生草本。高さ約一米。葉は再三羽狀複葉。八月頃淡綠色の小花を開く。觀賞用。

あきがわり[商變]（名）買ったものがいやになって返すこと。

あきぎ[秋蔕]（名）〔植〕秋のれき。〈古語〉―**の**[秋蔕の]（枕）ふたごもりの（二籠の枕詞。

あきぎく【秋菊】(名)【植】秋咲く菊。

あきぎみ【厭氣味】(名)いやになった様子。

あきぎり【秋桐】(名)【植】桐形科の多年生草本。陰地に生ずる。莖に稜あり、方形をなしてゐる。始め横臥し、後、直立す。葉は對生して三叉狀をなし、秋、花穗を生じ、紫色又は黄色の脣形花を開く。

あきぐさ【秋草】(名)【植】秋に立つ穂。

あきぐさ【秋草(の)】(名)【植】秋に花の咲く草本の總稱。**—の**【秋草の】(枕)「結ぶの枕詞。**—の**

はな【秋草花】(名)【植】菊の異名。

あきぐみ【秋茱萸】(名)【植】胡頽子(ゴ)科の落葉灌木。高さ三米前後。葉は長楕圓形で銀色の細鱗がある。初夏、葉腋に數花を繖生し、白色で、後、黄變す結び、自然點を密布する紅色・球形の果實を結び、生食し得る。

あきぐるま【空車】(名)物を載せぬ車。からぐるま。

あきぐ【秋鑿】(名)秋飼ふ鑿。

あきさ【秋沙】(名)【動】鴨の一種。嘴は尖り、稍、狹く、末端鉤狀に曲り、嘴緣には尖った齒を列生し、潜水して魚類を巧みに捕食する。翼は黑白の斑を交へて絲光あり、北方地方に繁殖し、冬季には溫雪地方で越冬する。あいさ。あいさがも。こがも。

あきさく【秋作】(名)秋季に栽培する作物。

あきさ【秋草】(名)【植】菊の異名。

あきさ【秋草】(名)【植】菊の異名。

あきさ【秋草】(名)【植】菊の異名

し、質硬く、夏秋の候、淡黄色の小花を葉腋に開き、花後、扁圓な翅果を結ぶ。材は器具材に供せられる。

あきぬ【秋野】(名) 秋の野。(古語)

あきの【秋野】(名) 秋の野。(古語)

あきのう【商ふ】(他動・ハ四) あきなひする。うりかひをする。

あきのおうぎ【秋扇】(名) (漢の班婕妤が寵を奪はれて、自分を秋になって捨てられた扇に比して怨みた意の詩を賦した故事に基づく) 寵愛の衰へた女の譬。

あきのこえ【秋聲】(名) ⊖淋しい秋風の音。⊖砧(きぬた)の音。

あきのこころ【秋心】(名) ⊖秋になって、淋しく物悲しく思ふ心。⊖あきはてた心。

あきのさかい【秋境】(名) 秋の季節の初めと終り。つゑき。

あきのしも【秋霜】(名) ⊖秋の末の頃の霜。⊖

あきのじもく【秋除目】(名) 往時、院政時代に、在京の諸官吏を秋に任命した儀式。室町時代に廃せられる。官召(かんめし)の除目。

あきのそら【秋空】(名) ⊖秋の頃の空。⊖心の譬。

あきのたのみ【秋田刈】(名) 成熟せる稲。

あきのたむらそう【鼠尾草】(名) 【植】唇形科の多年生草本。高さ約一米に達して直立し、葉の形狀は種種、下向羽狀に分裂するが常とするが、分裂せぬこともあり、長楕圓狀披針形、基部は稍、莖を抱き、莖葉共に毛なく、これを切れば白汁を出す。秋日、上部の葉腋より花穗を抽き、淡黃色の頭狀花を綴る。

あきのはつずき【秋初月】(名) 陰曆七月の異稱。(古語)

あきのはな【秋花】(名) 【植】菊の異稱。

あきのはの【秋葉の】(枕) 「匂ふ」の枕詞。

あきのほ【秋穂】(名) 秋の稲穂。

あきのみや【秋宮】(名) ⊖皇后の御殿。⊖皇后。

あきのもも よ【秋百夜】(名) 甚だしく長い夜。

あきのよながものがたり【秋夜長物語】(名) 【文】室町時代の男色小説。著者不明。應永頃の【作。

あきば【秋場】(名) 秋の頃。秋季。

あきはぎ【秋萩】(名) 【植】はぎ(萩)。—の【秋の】(枕) 「にほふ」「うつろ」「しなふ」の枕詞。

あきはつ【厭果つ】(自動・タ下二) 屢きてしまふ。余くいやになる。

あきばら【明腹】(名) 子を生んで、からになった大腸。元帥・大勳位。明治三十六年(一)五六三)薨御。御年五十七。國葬を以て豐島岡に葬る。

あきひと【商人】(名) あきんど。あきうど。商人。

あきひとしんのう【彰仁親王】(名) 【人】小松宮。伏見宮邦家親王の第四子で御分家、小松宮を稱へられた。近衛師團長・參謀總長に御歴任、陸軍

あきびより【秋日和】(名) よく晴れた秋空。「てない瓶。

あきぶたけ【秋二毛】(名) 鹿の毛皮の名。秋毛に夏毛の交ったもの。夏毛よりも色少しく黑く、まばらに白星がある。

あきはつ【厭つ】(自動・タ下二)

あきべや【明部屋・空部屋】(名) あきまを、人の住んでゐぬ室。

あきほ【秋穂】(名) 秋のみのった稲穂。

あきや【明間・空間】(名) ⊖すきま。⊖あいてゐるへや。あきべや。

あきま【明間・空間】(名) ⊖すきま。⊖あいてゐる間。(古語)

あきまつぐさ【秋待草】(名) 夏の田の異稱。夏田。(古語)

あきみ【吾君】(名) わぎみ。あなた。(古語)

あきみせ【明店】(名) 人の居らぬ店。商品をおかぬ店。あきだな。

あきみつ【飽満つ】(自動・タ四) 十分に飽く。飽滿する。(古語)

あきめく【秋めく】(自動・カ四) 秋らしくなる。

あきめくら【明盲】(名) ⊖外見は見えるやうで、實は見えぬ眼。⊖無學の人。文盲。

あきもの【商品】(名) あきなひすべき品物。

あきもの【明物】(名) 【植】秋熟する桃の實。「なつもの」より大形で、味は旨い。

あきもも【明桃】(名) 人の住んでゐぬ家。

あきや【空家・空屋】(名) ⊖人の住んで居ぬ屋敷。⊖建物のない宅地。

あきやしき【明屋敷・空屋敷】(名) 「ふ」の枕詞。

あきやまの【秋山の】(枕) 「いろなつかし」「したる人。あきびと。あきうど。あきんど。しやうにん。

あきゆうど【商人】(名) 物品の賣買を業とする人。あきびと。あきうど。あきんど。しやうにん。

あきょう【阿嬌】(名) 美人。美形。

あきょう【阿膠】(名) 精製した膠。藥の調合に用ひる。—**ばん**【阿膠版】(名) アート・ダイア。

あぎょう【阿行】(名) 【文法】五十音圖の第一行。卽ち、あ、い、う、え、お、の稱。

あきょうき【阿經忌】(名) 【佛】人の死後の四七日目の忌日。

あきらか【明らか】(名) あかるいさまはっきり。きらかである。

あきらけし【明らけし】(形・ク) あきらかである。

あきらのみや【明宮】(名) 廳神天皇の皇居。大和國高市郡輕島にあった。輕島の宮。

あきらむ【明らむ】(他動・マ下二) ⊖明らかにさとる。くはしく知る。⊖心を晴らす。はらすひ切る。斷念する。

あきらめ【諦め】(名) 思ひきること。斷念。

あきらめる【諦める】(他動・マ下二) 思ひ切る。斷念する。

あきらむ【諦む】(他動・マ下二) 思ひきる。あきらめる。

あきる【飽る】(自動・ラ下二) 物事の意外なのに驚く。あっけにとられる。

あきれ【惘呆】(名) あきれること。—**いる**【惘れ入る】(自動・ラ四) あきれかへる。—**かえる**【惘れ返る】(自動・ラ四) 甚だしくあきれる。—**ざま**【惘樣】(名) あきれた樣子。—**が禮に來る**(句) 甚だしくあきれるにいふ。

あぎれ【足切】(名) 足の指の切疵。あかぎれ。

アキレス【Achilles】(名) 【傳】ホーマーの「イリヤッド」の中心人物。ギリシャの勇士で生來不死身であったが、トロイ戰爭に踵をうたれて戰死した。

アキレスけん【—腱】(名) 【生】踵の上にあって、腓腸筋と比目魚筋を踵の骨に附著させてゐる腱。人體中最大の腱である。

あきれまどう【惘れ惑ふ】(自動・ハ四) あきれて當惑する。あきれかへる。(古語)

あきれる【惘れる】(自動・ラ下一) 「あきる」「惘る」の口語。

あきんど【商人】(名) あきうど。しやうにん。しやうばいにん。—**かたぎ**【商人氣質】(名) 商人らしい氣質。勘定だかいきしつ。—**ぶね**【商人船】(名) 乘客又は商品を運搬する船。あきなひぶね。あきうどぶね。—**や**【商人屋】(名) 商賣を泊める宿。—**は腹を賣り客は下より這ふ**(句) 商人は商品の値を次第にひきさげ、客は底値をつけて次第に値をあげる。

あく【灰】(名) 「はひ」の別名。

あく【灰汁】(名) ⊖灰を水に浸したうは水。アルカリ性を有し、物の汚れを洗ひ、物を染めるに用ひる。⊖植物中に含む澁味のある液。⊖惡くい味。—**あらい**【灰汁洗ひ】(名) 灰汁で汚れを洗ひ落すこと。—**うち**【灰汁打ち】(名) 灰汁を引いて打った紙。—**け**【灰汁氣】(名) 灰汁のけ。—**ぬけ**【灰汁抜ぬ】(名) 澁味などの除かれてさっぱりしたこと。—**ねり**【灰汁練】(名) 藁灰の灰汁で練る練ること。

あく【惡】(名) ⊖よくないこと。正しくないこと。

よくしまと。㊀みにくいこと。いやしいこと。㊁まづいこと。㊂好ましくないこと。快くないこと。㊃罪惡。㊄芝居のかたやく。㊅不吉。**—小なるを以てなすなかれ**(句)(蜀志劉先生傳及び小學の句)劉備が子劉禪に對してした遺言。**—に強ければ善にも強し**(句)大なる惡事をなすもの。

あく【幄】(名)上と四方とをかこって假屋を造るに用ひる幕。あげばり。ひきまく。まくばり。

あく【明く】(自動、カ四)㊀閉ぢられたものが開く。㊁からになる。㊂不用になる。㊃ひまになる。㊄すきまができる。㊅始まる。

あく【明く】(他動、カ下二)㊀閉ぢられたものを開く。㊁からにする。㊂ひまにする。㊃孔をうがつ。㊄隔てる。㊅始める。

あく【明く】(自動、カ下二)㊀あきらかになる。㊁年が經過する。新しい時になる。㊂朝になる。

あく【飽く】(自動、カ四)十分である。

あく【厭く】(自動、カ四)いやになる。

あく【分く】(他動、カ下二)わく(分く)の古語。

あぐ【上ぐ・揚ぐ・擧ぐ】(他動、ガ下二)㊀上へのぼす。㊁奉る。獻上する。㊂神佛に供へる。㊃物を吐く。㊄帆を張る。㊅藝・蹴鞠を招く。㊆あげものをつくる。㊇なしをへる。㊈より分ける。㊉預を高くする。㊊調子を高くする。㊋名をあらはす。㊌昇進させる。㊍(イ)上には上にやる。高くする。食ったものを吐く。(ロ)揚には、かがげる。高くする。(ハ)擧には、上にやる。人を取立てる。推擧する。

【語】「申し—」

あぐ【上ぐ】(接尾)敬動詞に添へて敬意をあらはす。

あくあくし【啞啞】(名・副)笑ふ聲。

あくあくし【悪悪し】(形シク)㊀にくにくしい。㊁いかにもわるさうな。**—げ**【悪悪しげ】(名)あくあくしいさま。**—さ**【悪悪しさ】(名)あくあくしいこと。又、その程度。

あくい【悪意】(名)㊀他人に害を與へようとする心。わるい心。わるだくみ。惡心。㊁【法】惡行爲が、法律上正當な效力に影響を及ぼす事實の存在を知りながら、殊更にこれを實行しようとする惡思。

あくい【悪衣】(名)粗末な着物。粗衣。**—あくしょく**【悪衣悪食】(名)粗末な衣食。

あぐい……ゐ【安居院】(名)【佛】京都市上京區紫野にあった寺の名。比叡山の東塔竹林院の里坊。今は廢墟となってゐる。

あくいん【悪因】(名)わるい結果を生ずる原因。**—あっか**……ゐ【悪因悪果】(名)【佛】わるい原因にはわるい結果が伴なふこと。

あくいん【悪因】(名)【佛】わるい因緣。「あくいんね。」

あくいんねん……ゐん【悪因緣】(名)わるい因緣。

あくうん【悪運】(名)わるい運命。惡運。㊀惡事をなしても報いなくして榮える運命。

あくえき【悪疫】(名)【醫】惡性の流行病。

あくえもんのかみ……【悪右衛門督】(名)【人】ふじわらのぶより)藤原信賴の異名。

あくえん【悪緣】(名)㊀よくない緣。㊁思ふまま にならぬ男女の間がら。又、離れようとしても離れ難い關係であること。

あくがた【悪形】(名)㊀芝居の敵役。㊁惡黨役。

あくがる……れ【憧る】(自動、ラ下二)心が落ちつかない。胸をこがす。あこがる。(古語)

あくがれすぐ……【憧れ過ぐ】(自動、ガ四)あこがれて日を過ぐる。(古語)

あくがれたつ……【憧れ立つ】(自動、タ四)うかれ出る。(古語)

あくがれまどう……【憧れ惑ふ】(自動、ハ四)深くあこがれる。(古語)

あくき【悪戯】(名)いたづら。わるふざけ。

あくぎゃく【悪逆】(名)㊀ひどい惡事。㊁昔の罪名。八虐の一で君父などを殺さんと謀る罪。**—ぶどう**……【悪逆無道】(名)惡逆で道理にそむくこと。「う。不品行。

あくぎょう……【悪行】(名)わるい行。あくかう。

あくぎょう……【悪業】(名)わるいしわざ。わるい結果を生ずる行。

あくさりゅう……りう【悪氣流】(名)飛行家の慢まされる險惡な上層の氣流。

あくげつ【悪月】(名)㊀陰曆五月の異稱。㊁運のわるい月。

あくげつたんぷう【握月擔風】(名)風月を樂しむこと。「惡口。あくごん。

あくげん【悪言】(名)人をあしざまにいふこと。

あくげんた【悪源太】(名)㊀【人】みなもとのよしびら(源義平)の異名。叔父義賢を殺したがちいふ。㊁【文】能の謡曲。惡源太義平が落人になり、石山寺で雞波次郎に捕へられる筋を作ったもの。

あくごう……【悪業】(名)【佛】前世の惡事。

あくご【御座】

あくごん【悪言】(名)あくげん。

あくさい【悪妻】(名)婦德の缺けた妻。ためにならぬ妻。惡婦。「ちっかぬこと。こせこせ。あくせくし。

あくさく【齷齪偓促】(名)小事にかかはってお

あくさけ【灰酒】(名)醸造中に、樽の灰を入れるから、(ふ)味醂に似た一種の酒で、强烈な風味があって、腐敗・變味等の憂がない。

あくさつ【悪札】(名)へたな手紙。

あくさぶ【悪左府】(名)【人】(ふじわらのよりなが)藤原賴長の異名。惡左大臣。

あくさむし【蠍蠍】(名)【動】あぶらむし(油蟲)。

あくじ【悪事】(名)㊀よくない行。㊁わざはひ。災難。**—千里**(句)わるい行はすぐ廣く知れ渡る。

あくじ【啞爾】(名・副)笑ふさま。

あくしょく【悪食】(名)㊀まづい食。粗食。㊁害のあるものを食ふこと。いかものぐひ。

あくしちびょうえ……【悪七兵衛】(名)【人】(たいらのかげきよ)平泉清衡の異名。「にくい病。

あくしつ【悪質】(名)わるい性質。

あくしつ【悪疾】(名)たちのわるい病氣。なほり

アクシデント【Accident】(名)【植】石南科(ツツジ)科の落葉小灌木。高

あくしば(名)あくしょう。

あくしょく【惡食】(名)粗末な食物。粗食。

あくしょく【悪食】(名)㊀動作。行動。㊁演技や映畫の「演技始め」の監督の命令。㊂映畫面の動き。

あくしゃ【幄舍】(名)神事などを行ふ時設ける上と四方に幄(あんとり)をひきまはした假屋。

〔舍幄〕

あくしゅ【悪趣】(名)【佛】惡業の結果、死後、行かねばならぬ苦惱の世界。惡道。

あくしゅ【握手】(名)㊀互に手を握りあふこと。㊁歐米風の禮儀として、親密・和解の意をあらはすに手を握りあふこと。

あくしゅ【悪酒】(名)㊀まづい酒。㊁價の安い酒。

あくしゅう【悪習】(名)わるいならはし。惡習。「にほひ。

あくしゅう……【悪臭】(名)いやなにほひ。不快な

あくじゅう……【悪獸】(名)害をなすけもの。

あくしょ【悪所】(名)㊀よくない所。㊁危險な所。㊂遊蕩をする場所。遊里。**—おち**【悪所落】(名)遊里に行くこと。**—がよい**……ゐ【悪所金】(名)惡所でつかふ金。**—がよいつう**……ゐ【悪所通】(名)遊里に通ふこと。**—ぐるい**……る【悪所狂】(名)常に遊里に入りびたること。**—ば**【悪所場】(名)あくしょ。遊里。**—ぶね**【悪所船】(名)遊里に通ふ船。

あくしょ【悪女】(名)㊀性質のよくない女。㊁姿の醜い女。醜婦。**—の深情**……(句)醜婦は美人に比し、愛情や嫉妬心の深いこと。

あくしょう……【悪性】(名)㊀性質のわるいこと。㊁酒色に耽けるよくない行。遊蕩。㊂病のたちのわるいもの。**—がね**【悪性金】(名)酒色に費す金。遊蕩費。**—ぐるい**……る【悪性狂】(名)遊蕩に耽る。**—じょ**【悪性所】(名)酒色に耽けること。遊里。**—ばなし**【悪性話】(名)酒色の話。**—もの**【悪性者】(名)酒色に耽ける者。

あくしょく【惡食】(名)粗末な食物。粗食。

アクション【Action】(名)㊀動作。行動。㊁演技

あくしん〔悪心〕(名) ㊀わるい心。㊁他人に害を與へようとする心。「ぬけらい。

あくしん〔悪臣〕(名) わるいけらい。ためになら

あくじん〔悪神〕(名) 災を與へる神。まがつかみ。

あくすい〔悪水〕(名) ㊀飲料に適ぜぬ水。㊁汚水。—ろ〔悪水路〕(名) 汚水を流す溝。下水道。

アクスティコン [Acoustiqon] (名) 耳の遠い人が、音を聽取るに用ひる携聲用の器械。傳音器。

あくせ〔悪世〕(名) ㊀惡事の行はれる世の中。㊁末世。澆季。

あくせい〔悪聲〕(名) ㊀聲のわるいこと。㊁わるい氣のたちのわるいこと。「あくさく。

あくせい〔悪性〕(名) ㊀性質のわるいこと。㊁病

あくせくぼこぼこ〔促〕(名) こせこせすること。

あくせつ〔悪説〕(名) ㊀條理の通らない說。㊁害のある言說。「ること。

あくぜつ〔悪舌〕(名) 惡口。他人をあしざまに罵

あくせん〔悪銭〕(名) ㊀粗質の錢。㊁不正で得た金錢。—身に附かず(句) 不正の行がで得た金錢は、無益に消費ぜられて、忽ち盡くるにいふ。

あくせん〔悪戰〕(名) 苦しい戰。

あくせん [Accent] (名) ㊀一語の中で特に力を入れる部分。卽ち一語中の高まり或は強まり。近世西洋語の如きは强弱アクセントを有し、日本語は大體に於いて、高低アクセントを有する。漢詩の平仄、西洋語の詩等の音律的美は之を應用したもの。揚音。强音。㊁發音の調子。

あくそう〔悪瘡〕(名) 惡性のかさ。

あくそう〔悪相〕(名) ㊀わるい人相。兇惡な人相。㊁不吉な現象。「戒律を守らぬ僧。

あくそうもくぞ〔芥藻屑〕(名) 何の役にも立たぬこと。あくたもくた。

あくた〔芥〕(名) ごみ。ちり。くず。

アクダ〔阿骨打〕(名)【人】支那、金の太祖の名。完顏(ワンヤン)氏。勃利鉢の第二子。遼末の衰微に乘じて女眞を平ぐ、會寧に都して一一一一五年金國を建て皇帝と稱した。(一一六六年)

あくたいぶ〔悪太郎〕(名) ㊀美しい紅色。まっか。㊁赤ら顏。

あくたん〔渥丹〕(名) ㊀美しい紅色。まっか。㊁「物。

あくち〔口頭瘡〕(名)【病】口のあたりに出來る腹

あくち〔悪血〕(名) 病毒を含んだ血液。

あくちあっかく〔悪知惡覺〕(名)【佛】佛果を得る妨げとなる邪な知識。

アクチウム [Actium] (名)【地】古ギリシャの地名。今のアルタ灣に臨む岬。紀元前三一年、オクタヴィヤヌスがアントニークレオパトラの軍を破つて、ローマ統一への大業を開いた古戰場。

あくちしき〔悪智識〕(名)【佛】人を惡に導く邪惡のもの。(善智識の對)

アクティヴ [Active] (英、形) ㊀自ら進んでしかける。積極的。能動的。㊁活氣のあるさま。敏活な。

アクティヴィティー [Activity] (名) 活動力。活動性。

アクティング [Acting] (英、名、形) ㊀演技。所作。㊁代理の。臨時の。

あくと〔悪徒〕(名) わるもの。惡黨。

あくと〔蹠〕(名) きびす。かかと。

アクト [Act] (名) 劇又はオペラの一幕。㊁法律。條例。㊂行爲。動作。

あくどい〔あくどい〕(形)「あくどし」の口語。

あくとう〔悪黨〕(名) ㊀わるものなかま。㊁わるものの。惡漢。

あくどう〔悪道〕(名) ㊀わるい道路。難路。險路。㊁【佛】惡業の爲に死後行かねばならぬ苦痛の世界、卽ち地獄・餓鬼・畜生の三道の稱。又、修羅を加へて四惡道ともいふ。惡趣。—もの〔悪道者〕(名) わるもの。いたづらもの。

あくとく〔悪德〕(名) わるい行。わるい心。—きしゃ〔悪德記者〕(名) 人の弱點につけこんでゆすりをする新聞記者。—しんぶん〔悪德新聞〕(名) 社會の墓面をあばいて野卑な記事を載せる新聞。

あくどし〔あくどし〕(形、一)しつこい。くどい。「閒。

アクトレス [Actress] (名) 女優。女役者。

あくにん〔悪人〕(名) あしき人。わるもの。不正な人。—がた〔悪人形〕(名) あくがた。敵役。

あくねしょうちゅう〔阿久根燒酎〕(名) 鹿兒島縣出水郡阿久根から產する燒酎。

あくねる〔厭ねる〕(自動、ナ下一) あぐむ。あきはてる。

あくねん〔悪念〕(名) わるい心。ねちけた考。惡地わるい執念。—りき〔悪念力〕(名) おそろしく思ひこんだ力。「あくしゃ。

あくの〔悪者〕(名) あげたりの中に設けた席。

あくのはな〔悪華〕(名)【文】Les Fleurs de Mal) フランスの詩人で神秘象徵派の始祖ボードレール (Baudelaire)の詩集。不健全・醜穢・頹廢の氣分に充ち、新しい戰慄を創造したものと稱せられた。一八五七年刊。

アクノレッジ [Acknowledge] (英、動) 認「める。認知する。

あくば〔悪馬〕(名) 人に喰ひつく馬。わるいくせの

あくば〔悪婆〕(名) 心のねちけた老女。「ある馬。

あくば〔悪罵〕(名) 口きたなくのしること。

あくばく〔幄幕〕(名) あげたりとまく。陣屋に用ひる幕。

あくび〔欠・欠伸〕(名) 眠い時や退屈な時及び疲勞した時などに自然に口があいて行はれる深呼吸。—がた〔欠形〕(名) 太い竹の五の種にかりの一節に、長方形の穴を切つた花器。「いこと。

あくひつ〔悪筆〕(名) ㊀へたな文字。文字のまつ

あくびょう〔悪評〕(名) わるいうはさ。

あくびょう〔悪病〕(名) ㊀たちのわるい病。㊁不治の病。「を缺く女。

あくふ〔悪婦〕(名) ㊀性質のよくない女。㊁婦德

あくふ〔握符〕(名)【文】選に「握乾符圃坤珍」とあるに出づ。天から天子となるべきめでたいしるしを授けられること。「る。(古語)

あくふ〔悪笑〕(名)【文】ふ、自動、ハ四) あくびをすること。

あくふう〔悪風〕(名) ㊀暴風。㊁わるい風俗。わるいならはし。

あくへい〔悪弊〕(名) わるいならはし。惡習。

あくへき〔悪癖〕(名) わるいくせ。「ぬ木。

あくぼく〔悪木〕(名) 役に立たぬ木。用材とならぬ木。

あくま〔悪魔〕(名)【魔】は(梵 Mara) 善法を妨げ人心を惑はす妖怪。人を惡道に引入れる者。—ごうぶく—がぶく〔悪魔降伏〕(名)【佛】法の力で惡魔を滅すこと。—しゅぎ〔悪魔主義〕(名)【文】デカダン派に屬する文藝的傾向。近代科學を否定し、俗社會を超越すると稱して、實生活を逃避し、好んで醜惡・頹廢・怪異・恐怖等の中に詩美を見出さうとする主義。エドガー・アラン・ポー・ボードレール等によつて代表せられる。—は〔悪魔派〕(名)【文】惡を讃美し、人生の暗黑方面に題材を求め、病

的行爲に強烈な刺戟を與ふる文藝上の一派。惡魔主義者。**—ばらい**[—はらひ]〔惡魔拂〕(名)【宗】祈禱などをして惡魔を追拂ふこと。

あくまで[飽迄](副)十分に。どこまでも。

あぐみ[足組](名)あぐら。趺。(古語)

あくみょう[—みやう]〔惡名〕(名)わるい名。けがれたわるいうはさ。なめい。惡聲。

あくむ[惡夢](名)わるいゆめ。おそろしいゆめ。

あぐむ[ほうがむ]〔足組む・趺む〕(自動・マ四)うみつかれる。あきはてる。(古語)

あくめ[惡馬](名)癖の惡い馬。あくば。

あくめ[惡目](名)わるい場合。わるいこと。

あぐもい[惡名](名)よくない評判。汚名。

あぐもらう[ほうがもらふ]〔足組まふ〕(自動・ハ下二)足を組む。あぐらをかく。あぐむ。(古語)

あくものぐい……[惡物食](名)普通の人の食はない物を好んで食ふこと。

あくや[幄屋](名)あくしゃ(幄舍)。

あくやく[惡役](名)芝居の惡形の役。

あくゆう……[惡友](名)わるい友だち。

あぐら[胡床](名)腰掛。椅子・床几の類。㊁足を組んで坐ること。**—なべ**[胡床鼎](名)大きく平たい鼎。**—ばな**[胡床鼻](名)㊀あぐらをかいて鍋でものを煮ながら食ふこと。㊁【文】假名垣魯文の政治小說の名。明治四年刊。

あく・らつ[惡辣](名)わるくすごいこと。手きびしくたちがわるいこと。甚だしくあること。

あぐり・あみ[揚繰網](名)旋網(あぐみ)の一種。長さ約一八〇米。長方形に打廻して魚群を圍ゥ、網の下縁から繰上げて捕へる。鰯・鰹などの漁に用ひる。

〔みありぐあ〕

アグリーメント[Agreement](名)協定。一致。

アグリカルチュア[Agriculture](名)農業。農藝。農學。**—オフィス**[Agricultur-Office](名)農林省。

あくりょう[—りやう]〔惡靈〕(名)たたりをなす死靈。ものの。怨靈。**—みんぶきょう**[—きやう]〔惡靈民部卿〕(名)【人】ふじわらのただふみ(藤原忠文)の異名。

あく・りょく[握力](名)物を握りしめる力。**—けい**[握力計](名)握力の強弱を測る計器。楕圓形の鋼鐵環と鐵軸と度盛盤及び指針から成り、斤單位で力を表示する。

〔計力握〕

あくるあさ[明朝・翌朝](名)次の日の朝。あくるあした。あすのあさ。「よくてう。あくるあさ。(古語)

あくるあした[明朝・翌朝](名)次の日の朝。

あくるきょう……[明今日](名)翌日。(古語)

あくるつとめて(副)あくる朝早く。(古語)

あくるとし[明年](名)翌年。次の年。

あくるひ[明日](名)次の日。みょうにち。

アグレマン(仏 Agrément)(名)【法】約定。㊁同意。㊂承認。㊃大公使を派遣する時、駐劄國に發し求める承認。「(古語)

あくろう……[惡靈](名)(あくりょう)〈惡鬼〉。

アクロバティック・ダンス[Acrobatic dance](名)大衆向として、奇術などを採り入れたダンス。曲藝ダンス。

アクロレーン[Acrolein](名)【化】無色で、不快な刺戟性の臭氣を有する液體。グリセリンを強熱する時に生ずるもの。

アクロン・こう[—こう]〔—號〕[Akron](名)アメリカ合衆國海軍の有した世界最大の航空船。六五〇萬立方呎のガス容量を有し、長さ七二呎、速度毎時七二・八哩。一九三二年八月發。一九三三年四月ニュージャージー沖で墜落破碎す。

あけ[明](名)㊀あけること。㊁夜あけ。㊂夜。㊃鼓が客に暇をもらふこと。**—のかね**[明鐘](名)夜あけに寺で鳴らす鐘の音。**—のみょうじょう**[—ようじやう]〔明明星〕(名)明方に東天に見える金星。

あけ[朱・緋](名)㊀赤色。緋色。㊁赤い馬の毛色。㊂西で染めた色。「もの。

あげ[揚](名)油で揚げた食品。あぶらあげ。あげぬげあげ。

あげ[上](名)㊀高い所にある田。あげ田。

あげあし[擧足](名)㊀柔道・相撲などで、地を離れてあがった足。㊁いひそこなひ。**—を取る**(句)いひそこなひにつけこんで、相手の弱点を攻める。

あげあぶら[揚油](名)揚物に用ひる油。胡麻油・菜種油・椿油・綿の類。

あげいし[阿兄](名)兄を親しんでいふ稱。「石。

あげいし[上石](名)園碁で奪ひ取った相手の

あげいた[上板・揚板](名)㊀板間の開閉のできる板。㊁あげぶた(上蓋)。

あげうら[上裏](名)【建】上方にあるものの下から見える裏。軒の裏などの類。

あげお……を[上緒](名)おいかけ(綾)。

あげおうぎ[上扇](名)能の上の文句の時、扇を開いて面前を掩ふやうにすること。

あげおとり[上劣](名)兵服して髮あげをした時、却てその前より姿の劣って見えること。(古語)

あげおろし[上下・揚卸](名)㊀あげるとおろすこと。㊁荷を積み・又、おろすこと。「こと。

あげおろし[揚下](名)荷あげ・腰あげをおろす

あげかす[揚滓](名)あげものをしたあとの鍋に殘る油のかす。

あげかすがい[擧鎹](名)あげ戸をとめるかすがひ。(古語)「あけ。

あけがた[明方](名)夜の明けようとする頃。よ

あけがらす[明烏](名)夜あけに鳴く烏。**—ゆめのあわゆき**[明烏夢泡雪](名)【音】新内節。清元節・常磐津節の曲名。作者は鶴賀若狹掾。「浦里時次郎」の名で知られてゐる。㊁【文】芝居の外題名。春日屋時次郎と浦里との關係を仕組んだもの。

あげく[擧句](名)㊀連歌の最後の句。㊁なはし。とどのつまり。結局。**—のはて**[擧句果](名)なはし。最後。

あげくらだし[上下](名)吐くと下すと。吐瀉。

あげくらす[—くらしす]〔明暮す〕(他動・サ四)㊀夜あかし、日を暮す。㊁年月を送る。(古語)

あけくる[—れくるる]〔明暮る〕(自動・ラ下二)夜があけ日が暮れる。月日が過ぎ行く。

あけくれ[明暮](名・副)㊀朝夕。㊁あけてもくれてもいつもいつも。**—なし**[—くれなし]〔明暮無し〕(形・ク)日夜絶える時がない。

あけぐれ[明暗](名)夜の明けようとして、まだ少し暗い時。未明。昧爽。(古語)「行く奥。

あけごし[上奥](名)轅を肩に上げて昇いで

あげごと[獻事・上事](名)神佛に物を供へること。(古語)

あけごろも[緋袍](名)緋色の袍。五位の人の

あけさげ[上下](名)㊀あげるとさげること。㊁ほめるとそしること。㊂物價の騰貴と下落。

あけさる[—れる]〔明去る〕(自動・ラ四)夜があけはなれる。(古語)

あげしおと[上潮](名)さしてくるしほ。さしあげるやうにした蕃椀手。

あげすけ[明透](名)つつみかくさぬこと。又、その人。奥底のないこと。又、その人。

あけずのもん[不明門](名)平生開くことをあけずめ[揚詰](名)藝妓をあげつづけにすること。

あげせん[上錢](名)㊀賣上げの錢。㊁手數料。口錢。㊂日がけ月がけの金。㊃あげだい(揚代)。㊄釣錢。つり。

あげだ[上田](名)高所にある水のない田。あげ。

あげだい[揚代](名)藝妓を招く代金。玉代。

あげだか[上高](名)賣上高。

あげだし[揚出](名)豆腐・茄子などをころもをつけずに、輕く油であげた料理。

あげだたみ〔上畳〕(名) ㊀兩面に表と絲をつけ、畳の上に別に敷きかさねる厚い畳。貴人の御座所又は寝所に用ひる。㊁床下の抜道。「めろ」ともいふ。

あけたて〔開閉〕(名) 戸や障子をあけることとしめること。

あげだま〔上玉・揚玉〕(名) ㊀かぶとの頂上にある金物の名。㊁打毬の語。豫定敗の毬を早く毬門に入れ盡くした組が、更に投げ入れる金色の毬。

あげち〔上地〕(名) 没收せられた土地。あがりち。

あけちみつひで〔明智光秀〕(名)〔人〕武將。通稱十兵衛。織田信長に仕へて丹波國亀山城主となる。天正十年(一五八二)信長を弑するや、僅かに十三日で秀吉に破られて没。年五十七。

あけちらす〔開散らす〕(他動、サ四) 方方の戸・障子などをあけ放す。

あけつげどり〔明告鳥〕(名)〔動〕雞の異稱。

あげつちもん〔上土門〕(名) 左右の丸柱の上に冠木なのせ、その上に土をあげた門。(染門)。

あげつらい〔論〕(名) あげつらふこと。論議。(古語)。

あげつらう〔論ふ〕(他動、ハ四) よくあしを論にあふ。論する。「て。

あげて〔擧げて〕(副) のこらず。すべて。こぞ

あげど〔揚戸〕(名) 上に押上げて開く戸。

あげどうふ〔揚豆腐〕(名) 油で揚げた豆腐。

あけに〔明荷〕(名) ㊀旅行用の一種のつづら。㊁包髪をぜぬ衣物。

あけ・のこる〔明殘る〕(自動、ラ四) 夜がはつきり明けないでまだ月や星などが殘る。

あけの・ひ〔明日〕(名) あくるひ。あす。「と。

あげば〔揚場〕(名) 取引所で、賣買市場に上すこ

あげはな〔揚場〕(名) 船荷を岸に揚げる場所。

あけはなし〔明放・開放〕(名) あけっぱなし。殘らずあけてそのままにしておくこと。

あけはなす〔開放す・明放す〕(他動、サ四) ㊀戸などを殘らずあける。㊁開いたままにしておく。

あけ・はなれる〔明離れる〕(自動、ラ下一)「あけはなる」の口語。

あけはなる〔明離る〕(自動、ラ下二) 夜が全く明ける。

あげは・の・ちょう〔鳳蝶・揚羽蝶〕(名) ㊀〔動〕鱗翅目鳳蝶科の蝶。翅は黒色で、絲黄・黄色の美しい條紋があり、開張八—一二糎。物にとまる時、翅をあげてゐる。㊁紋所の一。物にとまった揚羽蝶を、側面から描いた紋。

あげは・ひめばち〔揚羽姫蜂〕(名)〔動〕姫蜂の一種。胸と腹との上部は赤褐色、下部は黑藍色、翅は黄色、脚は黄褐色に黑斑がある。揚羽蝶の幼蟲に寄生する。

あげはま〔揚濱〕(名) ㊀海濱の砂上に海水を撒布して鹽をとる鹽田。揚濱鹽田。㊁園碁で相手の石を攻めとって占領した場所。

あけはら・う〔あけはろう〕の口語。

あげばり〔揚張・幄〕(名) 四方・上部をかこふ幕。(平張の對)。

あけはろう〔明拂ふ〕(他動、ハ四) ㊀戸・障子をすっかりあける。㊁家や城をあけ渡す。

あけ〔通草・木通〕(名)〔植〕木通科の蔓性落葉灌木。葉は、五葉が一所に着いて掌狀複葉をなし、初夏、淡紫又は白色の花を開き、長楕圓形の實が熟して縦に裂ける。肉は白色をなし、食用となる。あけべ。—**この**は〔通草葉〕(名)〔動〕夜蛾科に屬する大形の美しい蛾。前翅は黑褐色で木の葉狀をなし、後翅は橙黄色で二黑斑がある。幼蟲は、蛇の目狀の斑紋を有し、多く通草の葉を食す。「庇)。

あげ・ひさし〔上庇〕(名) つきあげひさし(突出

あげひばり〔揚雲雀〕(名) 雲雀の空高く舞ひあがること。又、その雲雀。

あけ・ひろ・ぐ〔あけひろげる〕〔開擴ぐ〕(他動、ガ下二) あけてひろくする。おしあける。

あけ・ひろ・げる〔あけひろげる〕〔開擴げる〕(他動、ガ下一)「あけひろぐ」の口語。

あげ・ぶ〔揚麩〕(名) 油で揚げた麩。

あげぶた〔上蓋〕(名) 板間の床をふたのやうに造り、其の下に物を貯へるやうにしたもの。あげいた。

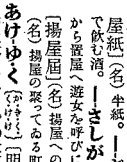
あげぶね〔揚槽〕(名) 醪をもろみを壓搾して、その汁液を受ける槽。「のかぶる帽子。

あげぼうし〔上帽子〕(名) 婚禮の時、花嫁

あげぼうし〔上梳・上鬗紐〕(名) 婦人の手などを上の方に吊りあげて拘束すること。

あげぼの〔曙〕(名) 夜のあけ始める頃。しののめ。—**ぐさ**〔曙草・獐草・桑〕(名)〔植〕櫻の異稱。—**そう**〔曙草・獐草・百草〕(名)〔植〕龍膽科の多年生草本。高さ約一米、葉は長卵形で先端尖り、三箇の主脈を有す。夏秋の候、楕上葉腋に白色の花を開く。合瓣花冠は五裂し、雛瓣花の觀がある。蒴片に綠色の二點及び紫黑色の細點がある。—**ぞめ**〔曙染〕(名) 曙の空のやうに上を紅又は紫にしてぼかした染色。

あげまき〔總角・揚卷〕(名) ㊀昔の子供の髮のゆひ方。ふりわけ髮を左右に分けて結んだもの。又、その子供。㊁あげまきむすび。㊂〔音〕神樂と催馬樂との曲名。㊃女方役者の髮の一。㊄〔動〕鐘類馬蛤(ハ)科の貝。外殼は「まてがひ」に類し、長さ九糎許、殼の外面は茶褐色で、内面は白色を帶ぶ。我が國、陵地の淺海に產する。—**つけ**〔總角附〕(名) 鎧の名所。背部の紐をつける部分。—**むすび**〔揚卷結〕(名) 紐の結方。輪を左右に出し、中ないしただみに組んで結んだもの。みす・文箱などの飾に用ひる。



〔㊀きまげあ〕

あげ・まく〔揚幕〕(名) ㊀能舞臺の橋がかりの出入口の垂れ幕。㊁芝居の花道の出入口の垂れ幕。

あげ・まり〔上優〕(名) 元服して髮あげをした姿の前よりもよく見えること。(古語)。

あげまつ〔上松〕(名)〔地〕長野縣西筑摩郡駒ケ根村の大字。木曾の棧道・寢覚床の奇勝が近くにある。

あげ・まど〔揚窗〕(名) つきあげると、廂のやうになる窗。つきあげまど。「あげて落すこと。

あげ・まり〔上鞠〕(名) 昔の蹴鞠で、巧みに低く蹴

あげまんじゅう〔揚饅頭〕(名) 油で揚げた饅頭。「と。

あげみ〔上身〕(名) 刀の身を切上げて短くすること。

あげみず〔揚水〕(名) 高地へ引きあげる水。

あげむつ〔明六〕(名) 明方の六つ時、即ち卯の刻。今の午前六時。又、その時鳴らす鐘の音。

あげ・もち〔揚餅〕(名) 油であげた餅。

あげもの〔揚物〕(名) ㊀水でといたうどん粉を野菜・魚介類などにまぶし、油であげたもの。㊁ぬすみもの。贓品。

あげ・や〔揚屋〕(名) 遊女を招いて遊ぶ家。—**いり**〔揚屋入〕(名) 遊女が遊女屋(置屋)から揚屋に行くこと。又、其の儀式。—**かしゃ**〔揚屋花車〕(名) やりて婆の頭たちをいふ。—**がみ**〔揚屋紙〕(名) 半紙。—**ざけ**〔揚屋酒〕(名) 揚屋から置屋・遊女を呼びにやる手紙。—**さしがみ**〔揚屋差紙〕(名) 揚屋で飲む酒。—**のとどけ**〔揚屋屆〕(名) 揚屋への附屆。—**まち**〔揚屋町〕(名) 揚屋の聚つてゐる町。

あけ・ゆく〔あけゆく〕(自動、カ四) ㊀夜が次第に明ける。㊁次第に過ぎ行く。

あけらかん(名)(副) ぽんやりしたまま。又、その性質。

あけらかんこう〔朱樂菅江〕(名)〔人〕江戸時代の狂歌師。本名は山崎景貫。寛政十二年(一八四〇)没。年六十一。著に「故混馬鹿集」その他の戯作がある。「ま。

あけらぼん(名、副) 氣が抜けたやうに見えるさ

あける〔明ける〕(自動、カ下一) ㊀

開く。㊀穿つ。㊁からにする。

あける【明ける・開ける・空ける・明ける】(自動・カ下一)「あく」の口語。

あげる【上げる・揚げる・挙げる】(他動・ガ下一)「あぐ」の口語。

あげろのやま【上路山】(名)【地】新潟縣西頸城郡にある山。親不知の上にあり。往古、山姥が棲み、里人を誑かしたと傳へられてゐる。

あけわたし【明渡】(名)あけわたすこと。家屋中にその名が見える。

あけわたす【明渡す】(他動・サ四)家や城を人に渡す。

あけわたる【明渡る】(自動・ラ四)夜がすっかりあけること。

あこ【下火】(名)(字の唐言)【佛】禪宗で、火葬の時、火をつける僧の役名。

あこ【彼所】(代)あそこ。あしこ。かしこ。

あご【網子】(名)網をひく人。(古語)

あご【腭・顎・頤】(名)㊀人や他の或動物の口の上下にあって、發聲や咀嚼を營む器官。あぎ。あぎと。㊁下あごの外面。おとがひ。㊂ものいひ。**—が落ちる**(句)味がうまい。**—が干上がる**(句)生活の道を失ふ。**—で蠅を捕ふ**(句)傲力の衰へた人の譬。**—を宜ひちがへる**(句)見込がちがふ。事が齟齬する。**—を外づす**(句)大いに笑ふ。

あご【網具】(名)網の道具。

あご【飛魚】(名)【動】(とびうお)(飛魚)。

あご【吾子】(代)㊀わが子の稱。(古語)㊁人の子を親しんでいふ稱。㊂親世を親しんでいふ語。(古語)

あこう(赤魚)(名)【動】棘鰭類の魚。(めばる)に似て色赤く、體長約十〇糎。あかうを。あかなを。

あこう【阿衡】(名)(宋綜大甲上篇の語で、「阿」はたのむ。「衡」は物を平にするはかり。天下の人民がそれによって平を得る意)殷の伊尹の任ぜられた官名。總理大臣の類。攝政又は宰相の異稱。

あこう【檍】(名)【植】琉球・薩灣等に産する桑科の常綠喬木。高さ約一五米、梢から氣根を垂れ、地下に入って新樹幹となる。葉は楕圓形で、全緣、革質平滑で長柄を有する。「いちじゅく」に似た隱頭花を着け、豆大の隱頭果を結ぶ。材は美しくて堅く、細工物に用ひる。

あこお【赤穂】(名)【地】兵庫縣赤穂郡にある町。赤穂鹽の産で有名。舊稱加里屋。赤穂城は元和元年(一六一五)池田政綱の築いたもの。後、淺野長直入城し、孫長矩の時除封。

あこぎ【赤穂義士】(名)元祿十五年(一七〇二)十二月十四日の夜、江戸本所松坂町の吉良義央の邸を襲ひて、主君淺野長矩の仇を報いた四十七士。大石良雄・吉田忠左衛門・原惣右衛門・間瀬久太夫・小野寺十內・間喜兵衛・磯貝十郎左衛門・堀部彌兵衛・富森助右衛門・潮田又之丞・早水藤左衛門・赤埴源藏・奥田孫太夫・矢田五郎右衛門・大石瀬左衛門・片岡源五右衛門・近松勘六・大石主税・堀部安兵衛・中村勘助・菅谷半之丞・木村岡右衛門・千馬三郎兵衛・岡野金右衛門・貝賀彌左衛門・大高源吾・不破數右衛門・岡島八十右衛門・吉田澤右衛門・武林唯七・倉橋傳介・村松喜兵衛・杉野十平次・勝田新左衛門・前原伊助・小野寺幸右衛門・間新六・間十次郎・奥田貞右衛門・矢頭右衛門七・村松三太夫・間瀬孫九郎・茅野和助・横川勘平・神崎與五郎・三村次郎左衛門・寺坂吉右衛門。**—きじんろく**(赤穂義人錄)(名)【文】漢文で赤穂義士復讐の事を書いた室鳩巢の著。二卷。元祿十六年の撰。

あこがる【憧る・憬る】(自動・ラ下二)心がうきたつ。おもひなやむ。胸をこがす。魂が身に添はない。あくがる。

あこがれ【憧・憬】(名)あこがれること。愛著。

あこがれる【憧れる】(自動・ラ下一)「あこがる」の口語。

あこぎ【阿漕】(名)古今六帖の「逢ふことをあこぎの島に引く網鯛又はたびのたびさなれば人も知りなん」の歌から、㊀同じ事のたびさなること。㊁際限なく道ならぬことを貪ること。㊂あつかましい。おしつけがましい。**—に**(阿漕に)(副)ひたすらに。しひてしひて。**—やき**【阿漕燒】(名)三重縣阿濃郡阿漕から産出する陶器。釉は稍・青色を帶びた灰色である。

あこぎがうら【阿漕浦】(名)【地】三重縣津市の海濱の一部。景色よく、潮干狩や海水浴に好適の地。又、往古、阿漕平次の傳說により謠曲・院本によって世に知られてゐる。**—に引く網**(句)密事も度重ねれば露へ知れ渡るにいふ。

あこきのへいじ【阿漕平次】(名)【人】阿漕が浦にゐたといはれた漁夫。老母の難病に遭ひ、阿漕ケ浦に禁斷を犯し、良藥の魚・やがら」を獲ようとして網をおろした罪によって簀卷にせられたといふ。

あごだいりき【腭大力】(名)口さきでは大きなことをいふもの。

あこだうり【阿古陀瓜】(名)【植】葫蘆(ひさご)科の蔓性草本。果實は圓く皮は赤い。きんとうぐち紅南瓜。

あこだかた【阿古陀形】(名)㊀青磁の圓形のもの。㊁形圓く頂の四ノ方に突出した兜の鉢。

あごつき【腭附】(名)雇人の賄附なこと。

あごひげ【腭鬚】(名)下あごに生ずるひげ。

あごぶり【頤振】(名)あごをふること。**—三年**(句)尺八の稽古は頤を振るだけでも三年かかる。

あごめ【吾子女】(名)㊀わが娘や他人の娘を親しんで呼ぶ稱呼。㊁賤婢。しつのめ。

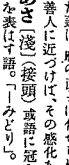
あこめ【袖】(名)㊀中古、婦人の膚に着た着物。又、男子の單衣と下襲の間に着た小袖。(古語)㊁【佛】眞言宗で衆徒が法會の時着た法衣。(古語)**—おうぎ**【袖扇】(名)女が袖を着た時に用ひる檜扇。(古語)**—きぬ**【袖衣】(名)(あこめ)㊀。(古語)**—すがた**【袖姿】(名)袖を着た姿。(古語)**—の—はな**【袖花】(名)【植】すすき(薄)の異稱。(古語)**—ばかま**【袖袴】(名)女が袖を着た時につけた袴。(古語)

あこや【阿古屋】(名)㊀あこやだま。(古語)㊁【文】文耕堂・長谷川千四の合作淨瑠璃「瑠浦兜軍記」中に出る假作人名。平泉澄の情人。㊂京都五條坂にゐた名高い遊女。**—がい**【阿古屋貝】(名)【動】原初帶貝。眞珠貝科の海產の二枚貝。色は帶び黑色、內面は眞珠層。肥料・志摩・能登に養殖され、優良な眞珠を產する。しんじゅがひ。**—もち**【阿古屋餅】(名)阿古屋珠に似たしんこ團子の小さいもの。(伊勢の方言)。

あごんぎょう【阿含經】(名)(梵 Āgama の音譯)【佛】釋迦牟尼の言行錄風の敎典。轉じて小乘經の總名。

あさ【朝】(名)夜明から正午までの間。「經」の總名。

あさ【麻・大麻】(名)【植】桑科の一年生草本。莖は方形で高さ二—三米、滿があり直立する。葉は長柄を有し、葉狀をなし、小葉は披針形で鋸齒を具へる。夏、葉腋に單性花を生じ、雌雄別株で、花後閉果を結ぶ。之をあさのみといふ。夏秋の間に莖を刈り、その內皮から纖維をとる。これを苧(を)といひ、絲・紬・網・帆布・衣服用麻布・ズック等に製する。**—に連(つ)るる蓬**(句)(荀子勸學篇に「蓬生麻中、不扶而直」とあるに基づく)眞直な麻の中に生じた蓬は、麻の直さに化されて、自ら直くなる。人も善人に近づけば、その感化を受けて善人となる。


〔麻〕

あさ【淺】(接頭)或語に冠して、「淺い」「うすい」の意を表はす語。「—みどり」。

あさ【痣・黥】(名)皮膚面に、色素の病的沈著又は充血によって生ずる赤又は紫色の斑紋。

あさ【浅】(名)町村內の一部の名。あさだ。

あさあい【淺藍】(名)藍色の薄いもの。

あさあさ【淺緋】(名)緋色の薄いもの。

あさあけ【朝明・朝開】(名)夜あけ。あけがた。

あさあさ【朝朝】(名・副)毎朝。朝ごと。

あさあさし【淺淺し】(形・二)奥底が見えない。あさはかである。

あさ・あざし【鮮し】(形・二)はっき

りしてゐる。あざやかである。

あさい〔朝寝(ごのね)〕あさね〔朝寝〕。〔古語〕

あさい〔浅い〕〔形〕「あさし」の口語。

あさいい〔朝飯〕〔名〕朝めし。

あさいち〔朝市〕〔名〕朝立つ市。

あさい-ちゅう〔浅井忠〕〔名〕【人】明治初年の洋畫家。江戸の人。我國洋畫界の先覺者で、東京美術學校教授となる。明治四十年(一九〇七)歿。年五十三。

あさい-りょう〔浅井了意〕〔名〕【人】江戸時代の戯作者。雑著家。京都の人。如儡子と號す。寶永六年(一七〇九)歿。年七十。「お伽婢子」「東海道名所記」等の著がある。

あさ-うら〔麻裏〕〔名〕(あさうらぞうり)〔麻裏草履〕〔名〕麻糸のひらうちの組緒を裏につけた草履。

あさ-うり〔浅瓜〕〔名〕【植】しろうり(白瓜)。

あさ-えびす〔朝恵比須〕〔名〕朝早く恵比須様を拝みに行くこと。

あさ-おき〔朝起〕〔名〕朝早く起きること。—は三文の徳〔句〕朝起には利益がある。

あさ-おり〔麻織〕〔名〕麻糸で織った織物。

あさ-がい〔阿座貝〕〔名〕【動】はまぐりの變種。殼の色は薄赤く、肉は白色で美味。琉球に産する。

あさ-がえ-す〔朝返す〕〔他動、サ四〕くりかへす。念を入れる。〔古語〕

あさ-がえり〔朝帰り〕〔名〕❶朝、家に歸ること。❷遊郭から、朝、歸路につくこと。

あさ-がお〔朝顔〕〔名〕❶朝、床からおき出た時の顔つき。❷【植】❶旋花科の一年生纏繞性蔓草本。葉は心臓形で三裂し、互生す。花は漏斗狀をなし、その色には種種ある。夏、朝早く咲き、日中に萎む。花後、球形の果實を結ぶ。牽牛子。蕣花。❷(ときさう)(木槿)。❸(もくげ)(木槿)。❹(あさがほうる)(蜀蝟)。❺朝顔の花の形をしてゐる蒔畫器の擂壁器。❻男便所の排尿陶器。❼(あさがほ)の色目。表も裏も縹色(花色)のもの。—あわせ〔朝顔合〕〔名〕種種の朝顔を持寄って品評すること。—がい〔朝顔貝〕〔名〕【動】腹足類の朝顔貝科の貝。形は蝸牛に似て徑二五粍位。熱色牛透明、つやは朝顔に似る。和歌の浦・小笠原島等に産する。

あさ-ぎ〔浅葱〕〔名〕紺又は紫で、大形に染めた染模様。元祿頃流行したもの。—なり〔朝顔形〕〔名〕器物の形の朝顔の花に似てゐるもの。—にんぎょう〔朝顔人形〕〔名〕朝顔を菊人形に模してつくったもの。—の〔朝顔の〔枕〕〕秀(ほ)に咲く〔縹女星〕。—ひめ〔朝顔姫〕〔名〕(しょくしせい)〔縹女星〕。—やき〔朝顔焼〕〔名〕朝顔の花の形に焼いた陶器。多く便所に用ひる。—の花一時(ひとと)〔句〕物の衰へ易い譬。

あさがおにっき〔朝顔日記〕〔名〕【文】(しょううつしあさがおにっき)〔生寫朝顔日記〕。

あさかがみ〔朝鏡〕〔名〕朝起きて向かふ鏡。〔朝鏡の水にうつしたすがた。又、その場所。

あさかげ〔朝陰〕〔名〕朝・日かげの多いこと。

あさがけ〔朝影〕〔名〕❶朝日影。❷痩せた姿。❸〔朝駈・朝懸〕〔名〕❶早く敵陣に押寄せること。❷早朝の出かけ。❸朝早く鳥を嘯ること。—の駄賃〔句〕朝駈には馬も勢よく、少しの荷物ぐらゐは惜とせぬこと。物事のたやすい譬。

あさか-どんさい〔安積艮齋〕〔名〕【人】江戸時代の儒者。名は重信。岩代國二本松に生まる。詩文に長じ、昌平黌教官となる。萬延元年(一八六〇)歿。年七十一。「艮齋文集」「見山樓詩集」等の著がある。

あさか-しゃ〔浅香社〕〔名〕【文】明治二十五年、落合直文が清新な歌風を鼓吹する爲に起した歌壇革新の會。この門下から、與謝野鐵幹・金子薫園・尾上柴舟・鹽井雨江等が輩出した。

あさ-がすみ〔朝霞〕〔名、枕〕❶朝立つ霞。❷「八重」「ほのか」の枕詞。

あさ-がせ〔朝風〕〔名〕❶朝の風。❷海岸や山谷で、日出後、陸上から海上へ、山頂から谷へ吹きおろす風。❸【動】はやぶさ準の異稱。

あさかた〔朝方〕〔名〕朝の頃。朝のあひだ。

あさかたんばく〔安積澹泊〕〔名〕【人】江戸時代の儒者。名は瑳。水戸の人。朱舜水に學び、國史に通じ、「大日本史」編纂の總裁となる。元文二年(一七三九)歿。年八十二。著書に「大日本史論贊」「烈祖成績」等がある。

あさか-の-ぬま〔安積沼〕〔名〕【地】福島縣安積郡にあった伝説的な沼。同郡山野井村大字日和田の東勝寺の後の小池はその跡だと傳へられる。〔歌枕〕

あさか-の-みや〔朝香宮〕〔名〕明治三十九年、故久邇宮朝彦親王の第八王子鳩彦(はひこ)王のお立てになった宮家。

あさ-がみ〔朝髪〕〔名〕朝、起出た時のみだれ髪。—の〔朝髪の〔枕〕〕乱るるの枕詞。

あさ-がみしも〔麻上下〕〔名〕麻布でつくったかみしも(裃)。江戸時代の儀式用の服。

あさか-やま〔朝香山〕〔名〕【地】三重縣一志郡にある山。紅葉・楚の名所。〔歌枕〕

あさか-やま〔安積山〕〔名〕【地】福島縣安積郡山野井村大字日和田にある山。山麓に安積沼の跡がある。〔歌枕〕

あさ-がら〔白辛樹〕〔名〕【植】癸墩(えんじゅ)科の喬木。葉は卵圓形。春の末、多數の懸垂する白花を開く。實からは油を採る。

あさ-がら〔麻殻・麻幹〕〔名〕麻の皮を剝いだ茎。ながら。あさぎ。

あさ-がらす〔朝烏〕〔名〕【動】朝の頃鳴く烏。あけがらす。

あさ-がり〔朝獵・朝狩〕〔名〕早朝行ふ狩獵。

あさ-がれい〔朝餉〕〔名〕❶天皇の朝の御食事。〔古語〕❷(あさがれいのまま)〔朝餉間〕の略。—のま〔朝餉間〕〔名〕清涼殿西庇にある朝餉をおあがりになる御室。

あさ-かわ〔浅川〕〔名〕【地】東京府南多摩郡の町。甲州街道に沿ひ、中央線の停車驛で、驛の北二粁に大正天皇の「多摩陵」がある。

あさ-き〔麻木〕〔名〕惡木(あくぼく)の轉。不良な材木。

あさ-き〔麻木〕〔名〕【植】あさがら(麻幹)。

あさ-き〔浅黄〕〔名〕薄い黄色。—の-ほう〔浅黄黄袍〕〔名〕無位の親王の袍。淺黄緑色をなす。黄袍(こうほう)。

あさ-ぎ〔浅葱〕〔名〕❶薄い藍色。みづいろ。❷(あさぎ)の色目。表裏ともに薄い藍色のもの。—うら〔浅葱裏〕〔名〕❶衣服のあさぎ色の裏地。❷江戸の武士の衣服の裏地が多くあさぎだったからいふ。勤番者。田舎侍。くにもの。やぼ。ぶこつもの。—さくら〔浅葱桜〕〔名〕【植】櫻の變種。花は一重で白いが、蕚の色が萌葱(もえぎ)だから淺い青色に見える。—まく〔浅葱幕〕〔名〕芝居に用ひるあさぎ色の垂幕。

あさ-ぎた〔朝北〕〔名〕朝の頃吹く北風。

あさ-ぎど〔朝木戸〕〔名〕朝早く芝居の木戸をあけること。

あさ-ぎぬ〔麻衣〕〔名〕❶麻布で作った衣服。❷もと(ふく)(裏服)。

あさ-ぎよめ〔朝清・朝浄〕〔名〕朝の掃除。

あさ-ぎり〔朝霧〕〔名〕朝の頃立つ霧。—ごも〔朝霧隠〕〔名〕朝霧のこめてゐる中。〔古語〕—そう〔朝霧草〕〔名〕【植】菊科の多年生草本。北海道や千島に産し、栽培せられる。高さ約六〇糎に達する。全體に銀白毛を生じ、葉は羽狀に裂け、秋日黄色の、小さい頭狀花を攢簇する。—のけぶり〔朝霧の〔枕〕〕霧・霧の枕詞。

あさ-くさ〔浅草〕〔名〕【地】東京市三十五區の一。又、同區内の淺草寺の境内、又は淺草公園の略。—がみ〔浅草紙〕〔名〕すきがへし紙の下等品。主におしと紙に用ひる。江戸時代に多く淺草から產出したからいふ。—こうえん〔浅草公園〕〔名〕【地】東京市淺草區にある公園。面積約二千百

アール。観音堂・仲店・植込地・瓢箪池・奥行物の盛り場等があって、東京市内第一の民衆的歓楽境である。

—ぐら〔浅草倉〕(名) 浅草にあった江戸幕府の米倉。**—しき**〔浅草式〕(名)(浅草公園に於ける特殊な雰囲気からいふ)安價で強烈で挑發的な氣分。

—たんぽ〔浅草田圃〕(名) 吉原遊郭の後にあった田圃。**—にんぎょう**〔浅草人形〕(名) 浅草の木彫・著色の人形。**—のり**〔浅草海苔〕(名) ㊀植〔東京灣で養殖する海苔で、黒紫色の佳香ある海苔。あまのり。㊁乾海苔の稱。昔、江戸名草で乾海苔の製造が盛んであったための名。江戸名物の一。

あさくちなし〔浅梔〕(名) 染色の名。薄いくちなし色。

あさぐつ〔浅沓〕(名) 黒漆で塗った桐製の沓で、往古、平常裝束著用の時に用ひたもの。

あさくまやま〔朝熊山〕(名)〔地〕あさくまやま。

あさぐも〔朝雲〕(名) 朝の空に立つ雲。

あさぐもり〔朝曇〕(名) 朝の間曇ること。

あさくらきのまるどの〔朝倉木丸殿〕(名) 筑前國朝倉郡宮野村須川にあった齊明天皇の行宮。丸木のまま造られたからいふ。

あさくらしょう〔朝倉山椒・蜀椒・巴椒〕(名)【植】山椒の一種。刺少く、香氣烈しく、葉・實共に普通の山椒より大きい。兵庫縣養父郡朝倉村から多く產出したからいふ。あさくら。なるはじかみ。ふさはじかみ。

あさくらよしかげ〔朝倉義景〕(名)【人】越前國の領主。敏景五世の孫。織田信長・德川家康に攻められて天正元年(一五七三)自殺。年四十三。

あさくろし〔浅黑し〕(形、一)淺黑い。

あさけ〔朝明〕(名) よあけ。あさあけ。(古語)

あさげ〔朝食・朝餉〕(名) 朝の食事。朝飯。

あさけいこ〔朝稽古〕(名) 早朝の稽古。

あさけし・むらさき〔浅滅紫〕(名) 染色の名。紫色を薄くして光澤を消したもの。(古語)

あさけり〔嘲〕(名) あさけること。あざ笑ふこと。

あざける〔嘲る〕(他動・ラ四) そしる。わるくいふ。見さげ笑ふ。

あさ-ごち〔朝東風〕(名) 朝吹く東風。

あさ-ごと〔浅事〕(名) つまらぬことがら。「と。

あさ-ごみ〔朝込〕(名) 遊客が朝早く遊里に入込こ

あさ-ごめ〔朝込〕(名) 朝早く敵軍に攻めかかること。

あさ-ごろも〔麻衣〕(名) あささぬ。多く喪服に用ひる。「讃經又は說教。

あさざ〔朝座〕(名)【佛】法華八講などの時の、朝の

あさざ〔荇・莕菜・鳧葵〕(名)【植】龍胆科の多年生水草。池溝に生ず、根は水底にあり。葉は楕圓形で水面に浮び、長柄を有し、葉底凹入して周緣しく鈍齒を存し稍〻波狀を呈す。表面綠色、裏面は紫色を帶ぶ。夏日、葉腋に數梗を抽き、紫色の花を開く。五裂の花冠の先端尖り、緣邊は絲狀に細裂する。嫩葉は食用に供せられる。はなじゅんさい。

あさざけ〔朝酒〕(名) 朝、飲む酒。

あさざぶらい〔朝侍〕(名) 夜から朝にかけて禁中に伺候すること。

あささむ〔朝寒〕(名) 朝の寒さ。

あささら〔朝さらす〕(名・副・ラ四) 毎朝。(古語)

あささらず〔朝さらす〕(名・副・ラ四) 朝ごとに。(古語)

あささる〔朝さらす〕(自動・ラ四) 朝になる。(古語)

あさし〔浅し〕(形、一) ㊀深くない。底が近い。㊁色が薄い。㊂いやしい。あさはかである。

あさじ〔朝時・朝勤〕(名)【佛】眞宗で毎朝の讀經。おあさじ。**—まいり**〔朝時參〕(名)【佛】眞宗で朝早く寺に參ること。

あさじ〔浅茅〕(名)【地】大阪府三島郡磐手村金龍山麓にあった地。(歌枕)。**—の-なわ**〔浅茅繩〕(名) 祓の時につかふ茅を左よりにした繩。**—はら**〔浅茅原〕(名) ㊀茅のまばらに生えた原。㊁(枕)「つばら」(詳)「ぬ」(小野)「ちぶ」(茅生)の枕詞。**—ふ**〔浅茅生〕(名) 茅のまばらに生えた所。「からねちゃ。深

あさじえ〔浅智慧〕(名) あさはかなちゑ。

あさしお〔朝潮〕(名) 朝さしてくる潮。

あさじぬはら〔浅篠原〕(名) 篠のまばらに生えてゐる野原。(古語)「ゐこと。

あさじみ〔朝凍〕(名) 朝、道路などのこほってゐ

あさ-じめり〔朝湿〕(名) 朝、露や霜の爲にものしめってゐること。

あさ-じも〔朝霜〕(名) 朝の霜。**—の**〔朝霜の〕(枕)「消ゆ」「け」(霜)の枕詞。

あさすおう〔浅蘇芳〕(名) 薄い蘇芳色。

あさすがた〔朝姿〕(名) 朝起きたままの姿。

あさすがきん〔麻頭巾〕(名) 老人の夏かぶる麻布の頭巾。

あさずくひ〔朝附日〕(名・枕) ㊀朝日。(古語)㊁向かふの枕詞。

あさずくよ〔朝月夜〕(名) あけがたにまだ夜が明けないで、月の殘ってゐる頃。(古語)

あさずけ〔浅漬〕(名) なまぼし大根を、麹又は糠と鹽とであっさりと漬けたもの。

あさずぶね〔朝妻船〕(名) 昔、琵琶湖東岸の坂田郡朝妻で遊女の乘ってゐた船。㊁(美)〔英〕蝶の遊ぶた烏帽子・水干の遊女が、舟に棹さす圖。㊂英一蝶作の俗曲。

〔㊁ 船妻朝〕

あさ-せ〔浅瀬〕(名) 水の淺い瀬。**—に仇波**(句) 思慮の淺いのはあわがしいことの譬。

あさ-だ〔浅田〕(名) 泥の深くない田。

あさ-だち〔朝立〕(名) 朝のたびだち。

あさ-つき〔朝葱・絲葱〕(名)【植】百合科の多年生草本。葱の類。葉は筒狀。地下の鱗莖は外皮紅紫色。朝夏花莖を抽いて、淡紫色の樹形花を攀發する。葉と鱗莖とは食用となる。せんぶき。「ち。

あさっぱら〔朝後日〕(名)明日の次の日。みやうごに

あさつゆ〔朝露〕(名) 朝おく露。㊁(朝露の)(枕)「命」「おく」の枕詞。

あさて〔明後日〕(名) あさって。

あさて〔浅手〕(名) 淺い負傷。輕いきず。

あさて〔麻手〕(名) 麻で織った布。(古語)**—と**

ぶすま〔麻手小衾〕(名) あさぶすま。(古語)

あけ〔朝戸開〕(名) 朝起きてあける戸。(古語)

—かぜ〔朝戸風〕(名) 朝、戸をあけた時に吹きこむ風。(古語)**—で**〔朝戸出〕(名) 朝早く戸をあけて外に出ること。(古語)**—やり**〔朝戸遣〕(名) 朝、戸をあけること。(古語)

あさ-どり〔朝鳥〕(名) 朝、まだ起きぬ頃の寢床。

あさ-どこ〔朝床〕(名) 朝、ねぐらを離れる鳥。朝の頃鳴く鳥。**—の**〔朝鳥の〕(枕)「通ふ」「鳴く」の枕詞。

あさな〔朝菜〕(名) 朝食ふ食物。(古語)

あさな〔字〕(名) ㊀支那で、貧名の外に親しんで呼ぶ時の名。㊁我が國で、學者・文人の貧名以外の名。㊂町村内の一小區劃の名。あさ。㊃あだな(渾名)。

あさなあさな〔朝な朝な〕(名・副)毎朝。(古語)

あさなぎ〔朝和・朝凪〕(名) 朝、海上に風や波のないこと。

あさなけに〔朝なけに〕(副)朝毎に。(古語)

あさなゆうな〔朝な夕な〕(名・副)朝に夕に。あさばん。あけくれ。

あさならい〔朝ならひ〕(名) 朝の東北風。

あさなわ〔麻繩〕(名) 麻糸によって造った繩。

あさなわる〔麻なわる〕(自動・ラ四) まとはる。糸などがからみあふ。(古語)

あさにけに〔朝にけに〕(副) 朝毎に。(古語)

あさにじ〔朝虹〕(名) 朝、西の方に立つ虹。大雨の前兆といふ。

あさ・ぬ〔ぬ〕〔朝寝〕(名)朝の空の晴れること。

あさ・ぬ〔ぬ〕〔紗ぬ〕(他動・ナ下二)(あさのう)。(古語)

あさ・ぬさ〔麻幣〕麻糸で つくった ぬさ。祓に用ひる。

あさ・ぬの〔麻布〕(名)麻糸で織った布。

あさ・ね〔朝寝〕(名)朝遅くまで寝ること。朝風。晨起。あさい。**—がみ**〔朝寝髪〕(名)朝起きたまま の乱れ髪。れくたれがみ。**—ぼう**〔朝寝坊〕(名)朝寝をすること。又、その人。

あさねぼう・むらく……は〔朝寝坊夢楽〕(名)【人】落語家。名は桂夢楽。本名は里見哲兵衛。天保二年に二四九一)没。年五十五。

あさ・の〔浅野〕(名)草のまばらに生えた野。

あさ・の〔浅の〕(名)【人】播州赤穂の城主。内匠頭。元禄十四年(一三七一)三月十四日、殿中で吉良義央を傷つけた爲に、即日切腹を命ぜられ、領地を没収せられた。年三十五。

あさ・の・は〔麻葉〕(名)麻の葉の形をとり合はせた模様。

—かえで〔麻葉楓〕(名)【植】楓樹(ふう)科の落葉喬木。葉は掌狀に五乃至七裂し、雌雄異株。四月頃、黄色総狀の花を開く。山地に自生す。

あさ・の・み〔麻實〕(名)【植】めあさの實。色黒く形は圓い。嚙みつぶせば、一種の芳香がある。藥用又は食用とする。**—あぶら**〔麻實油〕(名)麻の種子から採取した油。なのみ油。**—むし**〔麻實蟲〕(名)【動】鞘翅類の甲蟲。麻の害蟲。全體楕圓形、光澤ある暗綠色を呈する。

あさ・の・よ〔朝の夜〕(名)朝の暗い時。

あさ・はか〔浅はか〕(名)考のあさい、こと。浅薄。

あさ・はと・り〔浅羽鳥〕(名)【動】「ほととぎす」の異名。(古語)

あさ・ば・ら〔朝腹〕(名)朝食前のすき腹。

あさ・ば・れ〔朝晴〕(名)朝の空の晴れること。

あさ・ば・ん〔朝飯〕(名)朝晩(名)朝めし。

あさ・ひ〔朝日〕(名)朝昇る太陽。**—がい**〔朝日貝〕(名)【動】鰓類(斧足類)の二枚貝。殼は薄く鬱があり、色は赤い。**—がくれ**〔朝日隱〕(名)朝日の照らさぬ處。(古語)**—かげ**〔朝日影〕(名)朝日の光。朝日の色。**—がに**〔朝日蟹・旭蟹〕(名)【動】節足動物十脚目に屬する蟹。甲長約八糎。甲赤く背廣く後方狹く、棘が多い。太平洋岸の海産。**—かまぼこ**〔朝日蒲鉾〕(名)上面を紅で彩ったかまぼこ。**—ぐし**〔朝日櫛〕(名)鹿の角を蘇芳に染めて造った櫛。**—こ**〔朝日子〕(名)朝日。(古語)**—こうがい**〔朝日笄〕(名)鹿の角を蘇芳に染めた笄。宮女の頭に朝日柳と共に挿した。**—さし**〔朝日指〕(枕)「まさらはし」(紗はしりそがひ)(背向の枕詞。**—なす**〔朝日なす〕(枕)「まぐはし」(目細しの枕詞。**—の**〔朝日の〕(枕)笑み栄えての枕詞。**—はた**〔朝日の御旗〕(名)【神伊勢の内宮。**—まんじゅう**〔朝日饅頭〕(名)紅色の饅頭。**—やき**〔朝日焼〕(名)京都府久世郡宇治町から出る小瓶。遠州發明の陶器。**—やま**〔朝日山〕(名)【地】京都府宇治郡宇治村大鳳寺の地にある山。(歌枕)

あさひかわ・し……は〔旭川市〕(名)【地】北海道上川盆地にある都市。第七師團司令部があり、両館本線の終點。宗谷線の起點。

あさひしょうぐん……〔朝日將軍〕(名)【人】木曾義仲の異名。

あさひなじゅんとうき……〔朝夷巡島記〕(名)【文】淵澤馬琴の著。朝比奈三郎義秀の事柄を記した讀本。

あさひなよしひで〔朝比奈義秀〕(名)【人】和田義盛の子。名は三郎。安房國朝夷で成長した。大力無雙。曲亭馬琴の著に「椿八讀本」の主人公。「朝夷巡島記」があり、歌舞伎に「草摺引」の所作事がある。

あさ・ぶ〔浅ぶ〕(自動・バ四)浅くなる。

あさ・ぶ〔浅ぶ〕(他動・バ四)あさむ。あなどる。(古語)

あさ・ぶさ〔麻房〕(名)麻の實。

あさ・ぶすま〔麻衾〕(名)麻布で造った夜具。

あさ・ぶね〔朝船〕(名)朝臥(名)朝寝。

あさ・ぶろ〔朝風呂〕(名)朝、風呂に入ること。朝、風呂を沸かすこと。**—丹前長火鉢**(句)朝、湯に入り、丹前を着て、長火鉢の前にすわること。即ち氣樂な生活にいふ。

あさ・ぼ・ら〔朝星〕(名)あけがたの星。

あさ・ぼ・らけ〔朝朗〕(名)よあけ。あけぼの。

あさ・ま〔朝間〕(名・副)朝のうち。朝のあひだ。

あさ・ま〔浅間〕(名・副)**一**あさは。簡單。組略。「すすろこと。**二**あはれは。あさましいさま。

あさ・まし・り〔朝參〕(名)社寺に朝早くお參かである。人情が薄い。**二**意外の事で驚く。驚く程すほらしい。呆しい。きたない。**—い**〔浅ましい〕(形・イ二)**一**あさはに甚だしい。**二**あきれる程である。興ざめる。**三**みすほらしい。呆しい。きたない。**—がる**〔浅ましがる〕(自動・ラ四)あさましく思ふ。**—げ**〔浅ましげ〕(名)あさましいこと。又、その程度。

あさ・まだき〔朝未來〕(副)夜のあけきらぬ頃。早朝。黎明。味爽。

あさ・まつげ〔朝熊黄楊〕(名)【植】主として伊勢朝熊山に産する黄楊(つげ)科の常綠小喬木。材堅く印材とする。かちつげ。なはりつげ。「と。

あさ・まつりごと〔朝政〕(名)朝廷のまつりごと。

あさ・まや・ま〔浅間山〕(名)【地】長野縣・群馬縣に跨る活火山。海拔二五四二一米。(歌枕)

あさ・まや・ま〔朝熊山〕(名)【地】宇治山田市の東にある山。海拔五三四米。山上からは五十鈴川下流地方・二見・鳥羽を瞰下し得る。

あさ・み〔浅み〕(名)**一**浅い處。あさくまやま。**二**浅い度合。**三**芝居で、俳優の扮裝に用ひる髭。

あさみ〔麻〕(名)【植】菊科の草本。葉に刺多く、花は小頭花で、紅・紫色。種類が多い。**—ぐわ**〔麻花〕(名)【植】葉の形が麻に似た桑の變種。

あさみ・おう……〔浅み合ふ〕(自動・ハ四)互にあきれる。驚きあふ。ののしりあふ。(古語)

あざみ・ぐさ〔朝見草〕(名)【植】松の異名。(古語)

あざみ・げ〔朝御食〕(名)神前又は天皇に捧げる朝の膳部。(古語)

あさみ・けいさい〔浅見絅齋〕(名)【人】江戸時代の儒者。名は安正。近江の人。山崎闇齋に學び、勤王說を唱へた。正德元年(一三七一)歿。年六十。その著に「靖獨遺言」等がある。

あさみ・ゃく〔朝脈〕(名)朝、醫者が病人の脈を見ること。

あさ・む〔浅む〕(自動・マ四)あきれる。

あさ・む〔浅む〕(他動・マ四)あなどる。かろんじる。(古語)

あさ・む〔嘲む〕(他動・マ四)あざけりかろしめる。(古語)

あさ・む〔諫む〕(他動・マ四)あざけりかろしめる。(古語)

あさ・む〔嘆む〕(他動・マ四)あなどる。「しめる。(古語)

あさむき・おもう……〔欺き思ふ〕(他動・ハ四)たのみ少く思ふ。(古語)

あさむく・ん〔欺く・ん〕(他動・カ四)**一**いつはる。だます。惑はして陷れる。**二**あざける。そしる。あなどる。(古語)**三**うそぶく。(古語)

あさむ・つ〔朝六つ〕(名)あけむつ。午前六時。

あさむ・らさき〔浅紫〕(名)うすい紫色。

あさむ・め〔朝目〕(名)朝の眺。(古語)

あさめし〔朝飯〕(名)朝の食事。**—まえ**〔朝飯前〕(名)朝飯前の仕事の略で、容易になし遂げられる仕事。

あさも〔麻裳〕(名)麻布でつくった裳。

あさもよ〔麻裳吉〕(枕)「き」(着)の枕詞。「(古語)

あさもよい〔朝催〕(名)朝食の準備。(古語)

あさやか〔鮮〕(名・副)あきらか。はっきり。

あさやぐ〔ぐ下二〕〔鮮やぐ〕〔自動、ガ四〕あざやかに見える。はっきりする。(古語)

あさやぐ〔ぐ下二〕〔鮮やぐ〕〔他動、ガ下二〕はっきりさせる。(古語)

あさやぐ〔ぐ下二〕〔鮮やぐ〕〔他動、ガ下二〕「見えること。」

あさやけ〔朝焼〕(名) 朝日の出る前、東天の赤くなること。

あさゆ〔朝湯〕(名) ㊀朝、入浴する湯。㊁朝の粥。

あさゆ〔朝ゆ〕(名) 朝まで。

あさゆう〔朝夕〕(名・副) あさばんてうせき。

あさゆく・つき〔朝行く月〕(名) 朝まで殘ってゐる月。(古語)

あさよい〔朝宵〕(名) あさゆふ。

あさらか〔鮮〕(名・副) あざやか。(古語)

あさらか・に〔浅らかに〕(副) 浅はかに。(古語)

あさらけ・し〔あさらけし〕〔鮮らけし〕(形、ク) あざやかである。あたらしい。(古語)

あさらし〔海豹〕(名)〔動〕 哺乳類海豹科の海産食肉獸。北海道千島等の近海に棲む。體長一—二米。頭は圓く、耳殼を缺き、四肢は短く鰭狀、全身は黑色で光澤がある。皮は服飾、敷物等に用ひられ、脂肪からは油を製する。

〔しらさあ〕

あさり〔蛤仔・淺蜊〕(名)〔動〕 瓣鰓類蛤科の貝。貝殼は二枚で、表は淡黃色の斑紋があり、肉は美味である。淺海の泥砂中に棲む。

あさり〔漁〕(名) ㊀あさること。すなどり。いさり。㊁求めること。探ること。

あさり〔阿闍梨〕(名)〔佛〕 ㊀ あじやり。 ㊁④師となるべき僧。㊂僧職の官名。(古語)

あさる〔漁る〕(他動、ラ四) ㊀採り集める。㊁魚介類をとる。㊂餌をさがしてあるく。

あざる〔鯊る〕(自動、ラ下二) 魚肉などが腐る。(古語)

あざる〔戯れる〕(自動、ラ下二) たはむれる。

あざる〔彷徨る〕(自動、ラ四) ㊀身も心も落ちつかない。㊁さまよひあるく。(古語)

あされがまし〔戯れがまし〕〔戯れがまし〕(形、シク) 戯れがましい。みだりがましい。(古語)

あされば・む〔戯れば・む〕〔戯れば・む〕(自動、マ四) 戯れがましく見える。(古語)

あざ・わらい〔嘲笑〕(名) あざわらふこと。

あざ・わらう〔嘲笑ふ〕(他動、ハ四) あざけり笑ふ。

あざ・わろう〔嘲笑ふ〕(他動、ハ四) あざけり笑ふ。あざけり笑ふ。

あさんかちっそ〔亞酸化窒素〕(名)〔化〕 無色甘味の氣體で、よく燃焼する。少しく吸へば笑ふ。麻酔藥に用ひる。

あさんかどう〔亞酸化銅〕(名)〔化〕 酸化銅の一種。

あし〔足・脚〕(名) ㊀動物の下肢。立ち又は歩行の用をなすもの。㊁歩行。あゆみ。㊂物の下にあって支へる用をなすもの。㊃族の名所。長旅の末の風に蹤き耀く所。㊄山のふもと。山のすそ。㊅船の水に沒する部分。㊆太刀の帶取をつける金具。㊇錢。㊈餅のねばりけ。㊉〔敷〕蕃線と一直線の出あふ點。㊊身刺。㊋息。

—が出る(句) 逃亡者の行方がわかる。

—が附く(句) 隙だことがあらはれる。

—が棒になる(句) 長く歩行し又は直立した結果疲れ果てて、足がこはばる。

—が向く(句) 知らず識らずその方へ行く。

—に任す(句) 足の力の續くままに進む。

—をあげて待つ(句) 漢書高祖紀の句。速かに物事の來るのを待つ。

—を洗ふ(句) 賤しい動を止めて堅氣になる。(句) 入り込む。

—を重ねて立ち目をそばだてて視る(句) 漢書汲黯傳の句。危み怖れる。

—を食ふ(句) わらじで足の皮がむける。

—を空にする(句) 奔走する。

—を空に擂粉木にする(句) 奔走する。

あし〔葦・蘆・葭〕(名)〔植〕 禾本科の多年生草本。水邊に自生し、春、芽を出す。高さ二米位。全形すべて大なるに似、秋、多數の細かい帶紫色の花を、莖の頂に圓錐狀につける。葉は葉を作るに用ひる。よし。

—の角(句) 莖の芽。あしかび。

—の矢(句) 葦で矢の形に造ったもの。追儺(ついな)の式に用ひる。

—の宿(句) 葦で茸いた家。

—を啣む雁(句) 雁が遠く海を渡る時、海上で翼を休める爲に、葦を口にくはへること。

あし〔悪し〕(形、シク) ㊀わるい。よくない。㊁面白くない。㊂下手だ。㊃みにくい。㊄正しくない。いやしい。

あじ〔阿字〕(名)〔佛〕 宇宙一切の本來不生不滅の玄理の象徴。

—かん〔阿字觀〕(名)〔佛〕 眞言宗で、阿字の玄理を觀ずる法。

—ほんふしょう〔阿字本不生〕(名)〔佛〕 眞言宗の說で、一切の萬法は、空であることの玄理を阿字が象徴して覺って煩惱を解脫させる力を利刀に譬へていふ語。

あじ〔味〕(名) ㊀食物の舌に觸れた時の感覺。㊁おもしろさ。趣味。㊂怪しむべきこと。おつ。へん。

—うり〔味瓜〕(名)〔植〕 まくわうり。(甜瓜。「ともしがも」の異稱。

—ざけ〔味酒〕(名) うまい酒。

—つけ〔味附〕(名) 味をつけること。

—つけのり〔味附海苔〕(名) 味をつけてあぶって乾かした海苔。

—まめ〔味豆〕(名)〔植〕 ふじまめ。(藤豆)。(古語)

—み〔味見〕(名) 味の加減を見ること。

—もの〔味物〕(名) うまいもの。

—を占む(句) 一度鄙蹴して興味を覺える。

—をやる(句) 巧みに物事を處理し、又は利益を占める。

あじ〔鰺〕(名)〔動〕 棘鰭類の海産硬骨魚。まあじ・むろあじ・めあじ等の種類があり、體は側扁した紡錘形で、後部の兩側に一縱列の菱形鱗(ぜいこ)がある。背部は蒼色で稍赤みを帶び、腹部は白色に紅色を帶びてゐる。

アジ〔Agi.〕(名) アジテーション(Agitation)の略語で、勞働運動又は社會運動の用語。

—る〔る下一〕(他動、ラ四) 煽動する。あふる。

あしあげダンス〔足揚—〕(名) ㊀オペラ。歌劇。㊁劣情挑發的な、足を高くあげるダンス劇。

あしあし〔足足〕(名) 足なみの歩ぶこと。各自別別なること。

—に〔足足に〕(副) 各自の足のままに。各自別別に。

あしあと〔足跡〕(名) 歩いたあとに殘る足うらの形。

あしあぶり〔足炙〕(名) 足をあぶる器。(あんか)。

あしあらい〔足洗〕(名) ㊀足で物を洗ふこと。㊁足盥。㊂卑しい身分。

あしうち〔足打〕(名) ㊀足をつけた道具。あしつき。㊁刀劍の柄縁や下緒を組み纏ること。

あしうら〔足占〕(名) あうらう。足の底。

あしうら〔蹠〕(名) あうらう。足の底。

あしお〔足緒〕(名) 狩の時に鷹の足につける。

あしおう〔足追ふ〕(他動、ハ四) ㊀食物の味をためす。㊁物事の意味又は趣味を深く考へる。玩味する。

あしおう〔味はふ〕(他動、ハ下二) 前條に同じ。

あしおけ〔足桶〕(名) 冬、川の中で仕事をする時凍えぬ爲に足を入れる桶。「勝負する遊戯。

あしおし〔足押〕(名) すれとすれとをおしあうて

あしおと〔足音〕(名) 歩み行く足の音。

あしおどりざん〔足尾銅山〕(名)〔地〕 栃木縣上都賀郡足尾町にある銅山。慶長十四年の發見。現在は古河鑛業會社の經營。

あしおどり〔足踊〕(名) 足に衣裳をつけ、髮をかぶりて、人形のやうに踊りする見せ物。

あしか〔葦鹿・海驢〕(名)〔動〕 哺乳類海驢科の食肉海獸。身長約一米。頭は小形の耳殼を有し、頸は長く、胴は圓く長い。四肢は稍長く鰭狀。全身褐色で白い斑點がある。海中・岩上に群居する。毛皮は種種の用具にする。オーストラリヤ等、南太平洋諸島の近海に産する。

あしか〔籠〕(名) 土を運ぶに用ひる具。竹・葦などで造り、形は「ざる」に似てゐる。

あしがい〔葦貝〕(名)〔動〕 「はまぐり」の變種。葦の如き斑ある淺褐色の貝。

あしかががっこう……[足利學校](名)【歴】栃木縣足利市にあった學校。鎌倉・室町時代に學事の衰へた頃、歴學に貢献した。鎌倉時代の初め學問所として建てられたのち、室町時代の中頃、上杉憲實が再興し、書籍を外國に求めて、文庫に藏めた。今、史蹟として保存せられてゐる。

あしかがし[足利市](名)【地】栃木縣の都市。縣の南西部に位し、絹織物の産地。市内に足利學校の遺跡がある。

あしかがしげうじ……[足利成氏](名)【人】持氏の第四子。下總國古河に居て古河公方と稱せられ、堀越公方政知と相對した。明應六年(一四九七)卒。年六十四。

あしかがじだい[足利時代](名)【歴】足利將軍が天下の政權を握つてゐた時代。室町時代。

あしかがしょうぐん……[足利將軍](名)【歴】室町幕府の將軍。尊氏・義詮・義満・義持・義量・義教・義勝・義政・義尚・義稙・義澄・義晴・義輝・義栄・義昭の十五代。

あしかがたかうじ……[足利尊氏](名)【人】足利第一代の將軍。初めの名高氏。後醍醐天皇の偏諱を賜はつて尊氏と稱した。元弘の亂に功があつた。後、叛いて征夷大將軍となり、幕府を室町に建てた。正平十三年(一三一八)没。年五十四。

あしかがただよし[足利直義](名)【人】尊氏の弟。延元元年兄と共に叛したが、後、尊氏と不和を生じた。正平七年(一三一二)没。年四十七。

あしかがぶんこ[足利文庫](名)【歴】足利學校の文庫。

あしかがまさとも[足利政知](名)【人】義教の第三子。伊豆北條の堀越に居て堀越公方と稱したが、延徳三年(一四一五一)その子茶茶丸に弑せられた。年五十七。

あしかがもちうじ……[足利持氏](名)【人】滿兼の子。關東管領。後、叛して永享十一年(一四九九)自殺。年四十二。

あしかがもとうじ……[足利基氏](名)【人】尊氏の第四子。鎌倉管領の初代。正平二十二年(一三〇二七)没。年二十八。

あしかがよしあき[足利義昭](名)【人】足利第十五代の將軍。義晴の子。織田信長と不和を生じ、諸國を流浪して慶長二年(一二五七)大阪に没。年六十一。

あしかがよしまさ[足利義政](名)【人】足利第八代の將軍。義教の第二子。初め嗣子なく弟の義視を入れて後嗣問題を起し、遂に應仁の亂となつた。又、奢侈を好み、銀閣寺を建てた。延徳二年(一二五〇)没。年五十六。

あしかがよしみつ[足利義滿](名)【人】足利第三代將軍。正平二十二年父義詮没し、征夷大將軍となる。元中九年、大内義弘等を奔走せしめ、南北兩朝を合一した。應永三年金閣寺を造營。同十五年(一三〇六八)没。年五十一。

あしかがり[足掛](名)❶高處へのぼるに用ひる足のふみかけ。あしば。❷事に著手するいとぐち。

あしかき[葦垣](名)葦でつくつた垣。**—の**[葦垣の](枕)「ふる」(舊)「まだら」「まちかし」(間近し)の枕詞。

あしかけ[足掛](名)❶足を蹈みかけるもの。❷精算せずして年月・年齢等をまたがらせておほよそに數へる稱。❸めかけ。てかけ。**—あがり**[足掛上](名)器械體操の鐵棒運動の一。

あしかし[足枷](名)あしかせ。

あしかせ[足枷](名)往古、罪人の足にはめて、自由を束縛した刑具。

〔せかしあ〕

あしがた[足形](名)

あしがため[足固](名)❶足を健かにする爲に、歩行にならすこと。あしならし。❷床下で、柱間にとりつける横木。

あしがちる[葦が散る](枕)「なには」(難波)の枕詞。

あしがなえ……[足鼎](名)足の三つある鼎。

あしかなもの[足金物](名)大刀の帶取を連ねて止める金物。

あしかに[葦蟹](名)【動】葦のある水邊に棲む蟹。

あしかび[葦芽](名)葦の芽。(古語)**—の**[葦芽の](枕)「苗」の枕詞。

あしがま[足釜](名)足のついた釜。

あしがも[葦鴨](名)【動】❶鴨。葦の多く生えた所にゐるかもふ。❷游禽類の鳥。嘴と脚とは黒く、頭は灰色で赤みがある。胸は露色で腹は灰色、背は鳩羽鼠色で、翅には青羽がある。川・沼・池に棲む。**—の**[葦鴨の](枕)「うちむれ」(打群)の枕詞。

あしがら[足搦](名)あしがらみ。

あしがらのせき[足柄關](名)【地】昔、神奈川縣足柄上郡北足柄村大字矢倉澤字明神にあつた關。足柄山の東麓に位す。東國制御の爲に設けたもの。

あしがらみ[足搦](名)❶柔道で相撲で足を相手の足にからみつけて倒すこと。❷(動)おおじがふぐり(螺貝)。

あしがらやま[足柄山](名)【地】神奈川縣足柄上郡に位し、南東は箱根山に連る。標高七五九米。往古關があつて、東西交通の要路であつた。又、新羅三郎義光の物語があり、山麓の「竹の下」は脇屋義助敗軍の所として名高い。

あしかり[葦刈](名)葦を刈ること。又、その人。**—おぶね**……を[葦刈小舟](名)刈つた葦を積む小舟。

あしかる[足輕](名)❶平常は雜役に服し、戰時には歩卒となるもの。かちだちしん。歩卒。❷江戸時代に大名の物頭の下にゐた弓鉄卒。**—こ**[足輕子](名)船賊で、船子の役を勤めた足輕。**—しゅう**[足輕衆](名)室町時代に將軍の奥の先に走つた役。さきばしり。**—だいしょう**……[足輕大將](名)足輕の部隊の長。

あしかわ[足革](名)「足革」(名)佩靴の足につける革。

あじかわ[安治川](名)【地】淀川の分流。大阪市中之島の西から西南流して海に入る。真享年間河村瑞軒が直通した。河口に天保山がある。

アしきしゅうきゅう……[ア式蹴球](名)アッソシェーション・フットボール(Association football)の略。敵味方各十一人組で、球を蹴つて敵のゴールへ一定時間に度數多く入れた方が勝となる競技。ゴールキーパーの外は胸や手の使用を禁ぜられる。

あしきなし[悪しきなし](形一)❶つらい。情ない。❷しかたがない。無益だ。❸面白くない。ものうい。

あしぎぬ[絁](名)太い糸で織つた粗製の絹布。

あじきりぼうちょう……[鯵切庖丁](名)小さい出刃庖丁。

あしきる[荆る](名)(他動、ラ四)❶足を切る。❷支那の五刑の一で、足の膕部骨を切去る。

あしくせ[足癖](名)❶足の形や歩き方の癖。❷相撲でわが足を相手の足にかけて倒すこと。

あしくせ[阿閦婆](名)【佛】梵Akṣobhya)の訳。無動・無怒・無悪の義。東方に善界といふ淨土を建てて說法する佛。光明皇后が千人の垢を洗はうと發願された時、癩病患者に化して、皇后の信念を試みられた佛。あしくばつつ。あしくばつつ。

〔ばくしあ〕

あしくびつつ[足首](名)足の踝の上の處。

あしくらべ[足競](名)かけくらべ(競競)。

あしげ[足蹴](名)馬の毛色の一。白い毛に黒色などのさし毛あるもの。**—ひばり**[葦毛雲雀](名)馬の毛色の一。黄と白とのまじつた葦毛。**—ぶち**[葦毛駁](名)馬の毛色の一。斑ある葦毛。

あしげい[足藝](名)仰臥して足で種種の技を演ずる曲藝。

あしけし[悪しけし](形一)わるいさ

あしけ-びと〔悪人〕(名) あくにん。わるもの。

あし-こ〔彼處〕(代) あそこ。かしこ。【古語】

あし-ざい〔葦五位〕(名)【動】(よしごい)。

あし-さ〔悪しさ〕(名) あしきこと。わるい程度。

あじさい〔紫陽花・八仙花〕(名)【植】虎耳草(ゆきのした)科の落葉灌木。高さ一米半位。葉は廣楕圓形で、緑は鋸歯をなす。六七月の交、碧色の四瓣花を聚繖花序に擬る。

あじ-さおう〔枕〕「むれ(群)」「より」(夜)の鳥。鷸に似て形小さく白色で、頭上及び後頭は黑色、翼に黑色部がある。嘴は細く末端湾曲し、尾は分岐してゐる。

あし-さま〔悪様〕(名) わるいやう。わるさう。わるいさま。—**に**〔悪様に〕(副) わるいやうに。わるさうに。わるいさまに。「御前にさへぞ、—に咎する。」

あし-さわり〔足障〕(名) あるく時の妨となるもの。

あし-さわり〔足觸〕(名) 足の裏に物のさはること。

あし-しろ〔足代〕(名) ㊀足場。足掛。高い所(登る爲に材木を組立てて造つたもの。㊁したごしらへの準備。

あし-じろ〔足白〕(名) 太刀の帶取を通すところを爲に材木を組立てて造つたもの。

あし-ずい〔足道〕(名) 足の動かしかた。【古語】

あし-ずかい〔足道〕(名) 足の動かしかた。あしとり。あしつき。

あし-ずから〔足づから〕(副) 自分の足で。

あし-だれ〔蔦籠〕(名) 葦で編んだすだれ。御大典の時などに用ひ給ふ。

あし-ずつ〔葦筒〕(名) 葦の莖の内側にあるあま皮。(古語)

あし-ずの〔葦角〕(名) 葦の新芽。あしかび。

あし-ずもう〔足相撲〕(名) むかひあつて坐り、足をはねて相手を倒さうとする遊戯。

あし-ずり〔足摩・足摺〕(名) ㊀身をもがいて、足を地上などに摩ること。㊁あがくこと。蹉跎。

あし-する〔足摩る〕(自動・ラ四) 身をもがいて足を地上などに摩る。もがく。

あし-ぞろえ〔足揃〕(名) 人馬の足並を揃へて列を正しくすること。せいぞろへ。

あした〔朝〕(名) あさ。

あした〔草葉などにたまる露。消え易くはかない譬。—**に紅顔ありてタに白骨となる**(句)(眞宗の御文章及び御文に出づ)無常の世にあつては、生死の測られぬにいふ。—**にタを謀らず**(句)(左傳昭公元年の句)事情の切迫してゐること。

あした〔明日〕(名) あす。

あし-だ〔足駄〕(名) 二枚齒の下駄。たかげた。—**お**〔足駄緒〕(名) 足駄のはなを。—**ずくり**〔足駄造〕(名) 足駄を造る職人。**金のーづくり**〔し〕。

探す(句) 求めても得られぬ譬。

あした-か(名)【動】㊀(あめんぼう)。㊁(みずすまし)。

あした-だか〔足高〕(名) 足の高いもの。—**ぐも**〔足高蜘蛛〕(名)【動】蜘蛛の一種。背は黄褐、腹は黄白。脚極めて長く、網を張つて昆蟲を捕へる。

あした-かやま〔愛鷹山〕(名)【地】靜岡縣駿東・富士の兩郡に跨る休火山。富士山の東南に當る。海拔一五〇五米。

あした-ぐさ〔鹹草〕(名)【植】藜形科の多年生草本。我が國の西南の海濱に生じ、葉はうどに似て光澤あり、夏、藜狀形に白花を著ける。葉と莖を食用とする。あしたば。はちやうさう。

あし-だけ〔足丈・脚丈〕(名) 脚の丈。脚の高さ。

あし-だち〔葦田鶴〕(名)【動】鷸の異稱。多く葦のある水邊にゐるのでかくいふ。—**の**〔葦田鶴の〕(枕)「れになく」(音に鳴くの)の枕詞。

あした-どころ〔朝所〕(名) 昔、太政官にあつた參議以上の食事の場所。あいたどころ。あいたんどころ。(古語)

あしたば〔鹹草〕(名)【植】あしたぐさ。

あし-たま〔足玉〕(名) 昔、脚結(あしゆひ)の飾とした玉。

あし-たまり〔足溜〕(名) ㊀暫く足をとどめる所。㊁足をふみ立てるやうにこしらへた所。

あし-だらい〔足盥〕(名) 足を洗ふに用ひる盥。

あし-ついで〔足序〕(名) あるきついで。道ついで。

あし-つお〔足津緒〕(名) 琴の絃の端を結びかがった部分。

あし-つき〔葦附〕(名) 水草・水松(ゐ)の類。(古語)

あし-つき〔足附〕(名) ㊀足のある器物。㊁足の形。㊂足の動かしかた。

あし-づき〔足繼〕(名) ふみつき。

あし-で〔葦手〕(名) ちらしがきの一種で、色紙などに紙を著く時、文字の形と行とをくづして、葦の生えてゐるやうに書くこと。—**がた**〔葦手形〕(名) 葦手のかきぶり。—**もじ**〔葦手文字〕(名) 葦手形の文字。

アジテーション〔Agitation〕(名)(社會運動・勞働運動用語) 煽動。擾乱。政治運動。アジ。

アジテーター〔Agitator〕(名) 煽動家。群衆の感情を捕へておだて騷がせる者。

あして-かぎり〔足手限〕(名) 足と手との力の續いた所。

あして-かげ〔足手陰〕(名) 足や手の陰で見えない所。「手纏」。

あして-がらみ〔足手搦〕(名)(あしてまとい)足りついて身の自由にならぬもの。妻子。ほだし。

あして-まとい〔足手纏〕(名) 手足にまつはりついて身の自由にならぬもの。妻子。ほだし。

アジト〔Agiti.〕(名) アジテーティング・ポイント(Agitating point)の略語で、左翼勞働組合の移動本部。秘密本部。

あし-どめ〔足留〕(名) ㊀人の外出をとめること。㊁染色のむらを防ぐこと。又、そのもの。—**きん**〔足留金〕(名) 職工などの外出を禁ずる爲に與へる金。—**ぐすり**〔足留藥〕(名) 染色のむらを防ぐ藥。硫酸曹達等。

あし-とり〔足取〕(名) 足をとらへること。

あし-とり〔足取〕(名) ㊀あしつき。足のはこび。㊁犯罪者の行動の形跡。㊂取引所で行ふ賣買の相場の動き。㊃相撲の手の一。相手の膝を兩手で抱へ、その兩股を我が肩にかけて仰向けに反りかへらせること。—**ひょう**〔足取表〕(名)【經】定期相場の高低をあらはした表。

あじ-ない〔味無い〕(形)(あじなし)の口語。

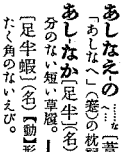
あし-なえ〔跛・蹇〕(名) びつこ。ねざり。

あし-なえ-ぐ〔蹇ぐ・跛ぐ〕(自動・ガ四)(あしのう)。(古語)

あし-なえ-の〔葦苗の〕(枕)「あしなへ」(蹇)の枕詞。

あし-なか〔足半〕(名) 踵の部分のない短い草履。—**えび**〔足半蝦〕(名)【動】形圓く平たく角のないえび。

あし-なが〔足長〕(名) 足の非常に長いといふ想像上の人物。—**ぐも**〔足長蜘蛛〕(名)【動】あしだかぐも。—**だこ**〔足長蛸〕(名)【動】足長く吸盤の大きい蛸。鹽漬にして食用とし、又、釣魚の餌にする。—**ばち**〔足長蜂〕(名)【動】蜂の一種。普通の蜂よりも大きく黑色で、胸部の背面に赤褐色の線がある。


〔かなしあ〕

あじ-なし〔味無し〕(形・ク)うまくない。

あしなずちの-みこと〔足名椎命〕(名)【神】大山祇(おほやまつみ)神の子。奇稻田媛の父で、手名椎命と共に出雲國簸川上に住んだ。「葦道」とする。

あし-なべ〔足鍋〕(名) 足のついた鍋。三足あるもの。

あし-なみ〔足並〕(名) 歩行の調子。歩調。—**に**〔足並に〕(副) 足毎に。

あし-ゆ〔足ゆ〕(名)〔足ゆ〕(ゆ)〔足ゆ〕(ゆ)〔足ゆ〕(ゆ

八下二)足の作用が不十分になる。足がきかなくなる。(古語)

あしの-け[脚気](名)【醫】(かっけ)。(古語)

あしの-こ[蘆湖](名)【地】箱根火山にある火口原湖。東西二粁、南北六・六粁、周圍二〇粁。水面は海抜七二六米。最大深度四六米。風光絶佳。

あしの-こう[足甲](名)足のくるぶしから下の部分の表面。

あしの-ね[葦の根の]〔枕〕「れもころ」(慣)「わく」(別)「みじかし」(短)の枕詞。

あしのはがれい[葦葉鰈](名)【動】この「ばがれい」。

あしのはぶえ[葦葉笛](名)葦の葉をまいて結び合わせた笛。

あしのほわた[葦穂綿](名)衣服に葦の穂を入れて綿に代用したもの。

あしのまろや[葦丸屋](名)❶葦で葺いた丸屋根の小屋。❷松永貞徳が、今の京都市下京區烏羽に造った庵。

あしのゆ[蘆湯](名)【地】箱根七湯の一。神奈川縣足柄下郡湯河村にある温泉。海抜八七九米の高處にある。硫黄泉で、皮膚病に特効がある。

あし-ば[足場](名)あしがかり。あしどころ。足のおき場所。**—いくぎ**[足場釘](名)昇降の足がかりとする爲に電柱に打ちつけた釘。**—まるた**[足場丸太](名)足場に組むに用ひる丸太。

あしはなげ[葦花毛](名)馬の毛色。黄を帶び少し赤ばんだ葦花毛。

あしはやげ[葦花赤毛](名)「た葦毛。

あし-ぶや[足早](名)はやあし。歩みの早い。こと。**—おぶね**[足早小舟](名)ふなあしの早い船。

あしはら[葦原](名)葦の生えてゐる原。**—の-くに**[葦原國](名)日本國の別稱。**—の-なか-つくに**[葦原中津國](名)前條に同じ。**—の-みずほの-くに**[葦原瑞穂國](名)前條に同じ。**—がに**[葦原蟹](名)【動】蟹の一種。はさみに毛が密生し、脚に毛なきもの。

あしはらい[足拂](名)柔道で、我が足で、相手の足をはらって倒すこと。

あしび[馬酔木なす]〔枕〕「榮ゆ」の枕詞。

あしび[葦火](名)葦を焚く火。

あしびき-の[足引の]〔枕〕「岩」「こ」(木)の枕詞。

あしびょうし[足拍子](名)足ぶみをしてとる拍子。

アジ-びら(名)「アジテーションびら」の略。左翼運動者の煽動の宮傳びら。

アジ-ロ[アジテーションとプロパガンダ(Agitation Propaganda)の略語。煽動と宣傳。

あし-べ[葦邊・蘆邊](名)葦の生えた水邊。**—おどり**[蘆邊踊](名)大阪市南地五郎で藝妓の演ずる一種の踊。毎年四月一日頃行はれる。

あし-へん[足偏](名)漢字の偏の名。跡・踊などの「足」の字が漢字の左にある時の稱。

あし-ぼそ[莠竹](名)【植】不本科の一年生草本。路傍に生ずる。葦の高さ一米位。葦は細長で稍〻弱く、地に臥す傾向あり、節節から根を出す。葉は線形。穂は稍に出て、通常三三岐する。

あし-ぼね[足骨](名)❶足の骨。❷足の力。

あし-ま[葦間](名)生い茂つてゐる葦のあひだ。

あし-ま[足間](名)❶人の足と足との間。❷刀の足と足との間。

あし-まいり[足參](名)貴人の足をもちさすること。足の按摩。(古語)

あし-まいりせ[足任](名)足の進むに任せてあること。足のつづく限り歩くこと。

あし-まくら[葦枕](名)葦のほとりの旅寢。

あじ-まさ[蓼櫛](名)【植】(びんろう)。(古語)

あし-まとい[足纏](名)(あしてまとい)(足手纏)。「ないで、輕く指していふ語。

あじ-まる[阿字丸](名)子供の名を明らかにはいはないで、輕く指していふ語。

あし-み[惡しみ](名)わるい所。(古語)「こと。

あし-もつれ[足縺](名)歩みのはかばかしくない。

あし-もと[足下](名)❶あたのあたり。❷足のやつて。❸目前の有様。❹弱點。❺ちか。

あしら[足下瓦](名)鬼瓦の左右につけた装飾用の瓦。**—ぬき**[足下貫](名)打ちつけた多くの貫の中の最も下の貫。**—がり**(名)足どりが早い。**—から鳥が立つ**(句)俄かの事でまごつく。**—の明るい中**(句)おくれにならぬ中。**—へも寄りつけぬ**(句)相手が優れてゐる爲に近づけぬ。**—を見る**(句)弱身につけこむ。

あし-や[啞者](名)發音機能の缺けた人。おし。

あし-や[葦屋・蘆屋](名)❶葦で葺いた家。❷【地】兵庫縣神戸市附近打出濱海岸。住宅別荘地。昔の月と蘆との名所(枕)。

あし-やま[蘆屋釜](名)筑前國遠賀郡蘆屋村から鑄出した茶の湯用の釜。土佐光信・雪舟などの下繪の松竹梅の模様があり、茶家に珍重される。

アジヤ[Asia][亞細亞](名)【地】(アジャしゅう)(亞細亞洲)。**—しゅう**[Asia][亞細亞洲](名)【地】六大洲の一。東半球の東北部を占め、面積は約四千四百萬方粁。世界陸地の約三分の一。日本・中華民國・シャム・ペルシャ・ヘッヂアズ・アフガニスタン・ネパール・ブータン・滿洲國等の獨立國があり、其の他は歐米諸國に分領されてゐる。**—じんしゅう**[亞細亞人種](名)アジヤの大部分及び土耳古・ハンガリー・フインランド等に住む人種の總稱。頭髪黑く、皮膚は黄色で、髯は少い。

あじゃすめ[足休](名)疲れた足を休めること。

あじゃせたいし[阿闍世太子](名)【人】中印度摩揭陀國の王頻婆沙羅の子。釋迦の法敵提婆達多に歸依し、その勸によって、父王を弑し母后を幽して王位に卽いたが、後、釋迦の感化によって懺悔し、佛教に歸依して功を建てた。

あじゃら(名)かりそめなこと。おどけたこと。たはむれ。ちちもないこと。**—こう**[あじゃら講](名)あじゃらをする講。無禮講。

あじゃり[阿闍梨](名)【佛】(梵 Acarya 軌範師。正行の意)❶師たる僧。❷天台・眞言・律宗の僧職。

あしゅら[阿須羅](名)(あそかおう)(阿育王)。

あしゅらか[阿修羅](名)【佛】(梵 Asura)❶印度の鬼神。惡鬼の世界。❷六道の一。業因の拙いものが生を受ける世界。惡鬼の世界で、常に闘爭が絶えない。**—おう**[阿修羅王](名)【佛】阿修羅の長。梵天・帝釋と戰ひ、正法を亡ぼさうとするもの。**—どう**[阿修羅道](名)【佛】六道の一。阿修羅の住する世界。

あしょう[亞相](名)(丞相卽ち大臣に亞ぐ意)「大納言の異稱。

あしょう[亞將](名)(大將に亞ぐ意)近衛中・少將の異名。

あしょかおう[阿輸迦王](名)【人】(あそかおう)(阿育王)。

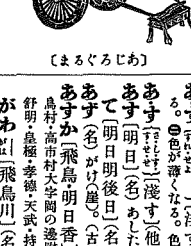
あしょうさん[亞硝酸](名)【化】(Nitrous acid)無機酸の一。水に溶解し易い淡黄色の結晶性物質。亞硝酸カリウムの稀薄水溶液を冷却して硝酸を加へると生ずる。**—アンモニウム**[亞硝酸アンモニウム](名)【化】(Ammonium nitrite)溶解し易い結晶狀の固體。窒素の製造に用ひられる。**—カリウム**[亞硝酸加個母](名)【化】(Potassium Intrite)水に溶解し易い淡黄色の結晶で、人工色素を製するに用ひられる。**—ソーダ**[亞硝酸曹達](名)【化】(Sodium intrite)水に溶解し易い淡黄色の結晶體で、アゾ染料製造原料に用ひる。

あし-よわ[足弱](名)❶歩行力の弱いこと。❷老人・嬰人・子供などの稱。**—ぐるま**[足弱車](名)進みのにぶい車。

あしらい[あしらい](名)❶もてなし。應答。愛應。❷とり扱ひ。

あしらう[あしらう][他動]ハ四)(あしろうの)

あじろ〔網代〕(名)❶冬、川の瀬に竹や木を編んだものを網のかはりに立てて、魚を捕るに用ひるもだ。❷檜の へぎ又は竹を薄くしたものを針に編んだもの。❸あじろぐるま(網代車)の略。**—あみ**〔網代網〕(名)網代を編むこと。網代形に編んだもの。又、それを編む人。**—うちう**〔網代打〕(名)網代を川に組むこと。**—うちわ**〔網代団扇〕(名)竹を網代に編んで紙を貼り、黒漆を塗った團扇。**—おり**〔網代織〕(名)網代の模様の織物。**—がき**〔網代垣〕(名)網代形に造った垣。**—かご**〔網代駕籠〕(名)網代で張った駕籠。**—ざさ**〔網代笹〕(名)網代で造った笹。**—がた**〔網代形〕(名)網代の目の形のもの。**—がま**〔網代釜〕(名)竹を網代に編んで釜の形を造り、その表裏に白灰・砂・苦汁(にがり)を煉ったものを塗り、鹽を煮つめるに用ひたもの。**—ぎ**〔網代木〕(名)魚を捕る網代に用ひる木。**—ぐみ**〔網代組〕(名)あじろあみ。**—ぐるま**〔網代車〕(名)扇形を竹又は檜の網代で張った牛車。花鳥の檜模様をつける。**—ごし**〔網代輿〕(名)竹の網代で張り、黒塗の押縁をつけた輿。**—す**〔網代簀〕(名)魚をとる網代のやうに造った簀。**—てんじょう**(じやう)〔網代天井〕(名)網代張の天井。**—はじめ**〔網代始〕(名)攝政・關白になって始めて網代車に乗ること。**—びさし**〔網代庇〕(名)網代で張ったもの。**—びさしのくるま**〔網代庇車〕(名)唐禅風(ぜんふう)造で庇をつけた網代車。**—びと**〔網代人〕(名)あじろもり。**—びょうぶ**(やう)〔網代屏風〕(名)網代編みの屏風。**—ほ**〔網代帆〕(名)竹を編んで造った帆。さほ。**—もり**〔網代守〕(名)川の網代の番人。


〔まるぐろじあ〕

あしろう(ろふ)〔網代(ろふ)〕(他動、ハ四)❶挨拶する。應答する。❷程よくとりあつかふ。斟酌する。❸とりあはせる。配合する。「味」うまみ。❹趣味。おもむき。**あじわい**(あじはひ)〔味はひ〕(名)❶あちはふこと。❷じおう)の口語。**あじわう**(あじはふ)〔味はふ〕(他動、ハ四)(あじおう)の口語。**あしわか**〔葦若〕(名)葦の若芽。あしかび。(古語)**あしわけ**〔足分・足別〕(名)足のとりはづしの出來るやうに造った語物。**あしわけ**〔葦分〕(名)❶葦の繁った中をおしわけて進むこと。(古語)❷きしつかへのあること。さはりあること。(古語)**—おぶね**(ふね)〔葦分小舟〕(名)あしわけぶね。**—ぶね**(ふね)〔葦分船〕(名)繁った葦の中を漕ぎわける船。**あしわざ**〔足業〕(名)❶足でするわざを。足藝。❷柔道で、足の働で人を投倒すわざ。「見えるもの。**あしわた**〔葦綿・葦架〕(名)葦の穂の綿のやうに**あす**(あすせ)〔淺す〕(自動、サ下一)❶淺くなる。❷色が薄くなる。色がさめる。❸わるくなる。**あす**(あすせ)〔淺す〕(他動、サ四)淺くする。(古語)**あす**(あすせ)〔明日〕(名)あした。みやうにち。**—あさって**〔明日明後日〕(名・副)あすかあさってか。數日中。**あすが**〔飛鳥・明日香〕(名・古語)**あすか**〔飛鳥・明日香〕(名)【地】奈良縣高市郡飛鳥村・高市村大字岡の邊附近の稱。允恭・顯宗・推古・舒明・皇極・孝德・天武・持統諸天皇の皇居の地。**—いがわ**(がは)〔飛鳥川〕(名)❶【地】奈良縣天香具山と畝傍山の間を北流して郡山町を流れ、大和川に注ぐ川。流程三二粁。測測定めなきを以て聞え、古來和歌に詠ぜられた。❷【文】能の曲名。❸【文】柳亭種彦の江戸風俗の雜筆。**—がわのちゃれん**(がは)〔飛鳥川茶入〕(名)壺形で口づくり、捻り返し薄手に、変化きゃしゃに細工した茶入。**—じだい**〔飛鳥時代〕(名)【歴】推古天皇から文武天皇まで百餘年間は、多く奈良縣高市郡飛鳥地方に都を置かれたからかくいふ。我が國美術史上重要な時代。**—やま**〔飛鳥山〕(名)【地】東京市滝野川區にある丘。今公園となってゐる。古來、櫻の名所として名高い。

あすかいりゅう(あすかい)〔飛鳥井流〕(名)❶飛鳥井雅親を祖とする書法の一流派。❷飛鳥井雅經を祖とする蹴鞠の流派。**あずかり**(あずかり)〔預〕(名)❶人や金品を預ること。保管。❷預り人。擔任者。❸預った文書。❹あつかひ。❺勝負を決定せぬこと。❻留守番。❼院の御厨子所・畫所・武者所等を決定せぬこと。❽あずかり〔預〕(名)預って保管する金子。**—きん**〔預金〕(名)預って保管する金子。**—しょうけん**〔預證券〕(名)【經】金品又は物品等を預った證として渡す有價證券。預證書。約束手形。**—しょうもん**〔預證文〕(名)【經】人や金品を預ったしるしに渡す文書。**—だて**〔預立〕(名)預ること。**—てがた**〔預手形〕【經】(あずかりがた)けんん。**—どころ**〔預所〕(名)莊園を預ってそこを管理する役所。又、その人。❷江戸時代に諸藩が預った幕府の領地。**—ぬし**〔預人〕(名)預ってゐる人。保管者。**—にん**〔預人・預主〕(名)前條に同じ。**—まい**〔預米〕(名)納稅の擬當として人民から預った米。**まえ**(まへ)〔前〕(名)銘銘の預った分。**—もの**〔預物〕(名)預ってゐる品物。**—物は半分の主**(ぬし)(名)物を預かれば半分は我が物である。

あずかる(あづかる)〔預る〕(他動、ラ四)❶頼まれて保管する。❷勝負をきめずにおく。❸あつかふ。

あずかる(あづかる)〔預る〕(他動、ラ四)❶關白(かんぱく)(他動、サ四)政治にあづかって意見を言上する。(古語)❷くみする。❸仲間になる。

あずかる(あづかる)〔與る〕(自動、ラ四)❶關係する。

あずき(あづき)〔小豆・赤小豆〕(名)【植】豆科の一年生草本。高さ約七〇糎。葉は奇數羽狀複葉。夏、黄色蝶形の花を開き、花後、莢を結ぶ。實は大豆より小さく、色は赤・白など種類が多い。**—アイス**(名)小豆色(名)赤黒い色。**—いろ**〔小豆・小豆色〕(名)赤黒いなまなし皮。**—がゆ**(がゆ)〔小豆粥〕(名)小豆をまぜて煮た粥。**—がわ**(がは)〔小豆革〕(名)小豆色に染めたなめし皮。**—じま**〔小豆縞〕(名)赤色と藍色とで染めた格子縞。**—なし**〔小豆梨〕(名)【植】薔薇科の落葉喬木。高さ約八米。樹皮は黒褐色で、灰白色の小斑がある。葉は卵圓形で鋸齒を有し、初夏、白色の小花を繖房花序に著け、秋、紅色の小果實を生ずる。やまなし。**—ねず**〔小豆鼠〕(名)鼠色がかった小豆色。**—むし**〔小豆蟲〕(名)【動】小豆の害蟲。黄色に褐色の斑紋あるこ甲蟲。**—めし**〔小豆飯〕(名)小豆を まぜて炊いた飯。**—もち**〔小豆餅〕(名)小豆餡をつけた餅。

アスキス〔Sir Herbert Henry Asquith〕(名)【人】イギリスの政治家。伯爵。內務大臣・大藏大臣・グラスゴー大學總長・內閣總理大臣・自由黨總裁となった。(一八五二—一九二八)

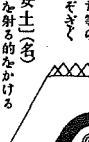
あずく(あづく)〔預く〕(他動、カ下二)預って貰ふ。保管を賴む。預ける。

あずけ(あづけ)〔預〕(名)❶預ける こと。❷武家時代に罪人を親族・家主などに預けて監督させたこと。**—きん**〔預金〕(名)預けた金。よきん。**—ち**〔預地〕(名)預けた土地。**—ぬし**〔預主〕(名)預けた本人。**—もの**〔預物〕(名)預けてある物。**—もの**〔預者〕(名)預の刑を受けた囚人。

あずさ(あづさ)〔梓〕(名)❶【植】(×)あかめがしわ(×赤芽柯)。❷きさきけ。❸版木。❹神鏡を呼寄せるに用ひる梓弓。**—みこ**〔梓巫女〕(名)梓弓を引いて神おろしをして神の數を請よみこ。**—ゆみ**〔梓弓〕(名)・枕。❶梓の木で造った丸木の弓。❷「引く」「射る」「本」「末」「弦」「寄る」「音」「反る」の枕詞。

アスター〔Aster〕(名)【植】えぞぎく・しをん・よめな等の屬をいふ。普通にはえぞぎくを指す。

あずち(あづち)〔埁・堋・安土〕(名)土を山形に築いて、弓を射る的をかける所。いくはどころ。**—まくら**〔埁枕〕(名)底廣い埁形の枕。**—もん**(ゆん)〔埁門〕(名)あげつちもん(上土門)。**—や**〔埁屋〕(名)埁の上をおほふ假屋。


〔埁〕

あすち あづち〔安土〕(名)【地】滋賀縣蒲生郡にある村。琵琶湖の東岸、東海道線の一驛。天正四年(一五七六)織田信長が、ここに城を築いた。今は丘上に礎があり、總見寺はその麓にある。**―ほうろん** ―は〔安土法論〕(名)【佛】天正七年(一五七九)安土で行つた淨土・日蓮兩宗の法論。**―ももやま** ―は〔安土桃山時代〕(名)【歴】安土は織田信長の居城、桃山は豐臣秀吉の居城であつたから、安土桃山時代は、信長・秀吉の政權を握つてゐた時代である。美術工藝史上の一時代をなす。

アストラカン [Astrakhan] (名) 帽子・外套等に用ひる天鵞絨織の一種。ロシヤのアストラカン地方に產する動物の毛皮に似せて織つたもの。

アストン ❶[Francis William Aston] (名)【人】イギリスの科學者。質量分光器を案出し、ノーベル化學賞を授けられた。「同位元素」の著がある。(一八七七―一九四五) ❷[William George Aston] (名)【人】アイルランドの言語學者・外交官。駐日英國公使館書記官・一等書記官。日本文化の研究に盡瘁し、「日本神道論」「日本文學史」「日本古代史」「日本神話」「日本口語文法」「日本文語文法」等の著がある。(一八四一―一九一四)

あすない あづない(名)二人を一所に辯ること。(古語)

あすなろう あすなろう〔翌檜・羅漢柏〕(名)【植】檜科の常綠喬木。葉は約三〇米。葉は檜に似て大。交互に對生す。雌雄同株。六月頃、單性花を開く。果實は毬形。材は建築材・船材・枕木・マッチの箱材、樹皮は火纏又は繩となる。ひば。

アスパラガス [Asparagus] (名)〔石刀柏〕(名)【植】食用又は觀賞用の植物。食用には、「まつばうど」「西洋うど」「てんもんどう」「おらんだきじかくし」など呼ばれる種類や「てんもんどう」「みどりば」「きじかくし」「たまばうき」「みどりば」「きじ」「やなぎばうき」「たちばうき」「しのぶばうき」「すぎのはかづら」「くさなぎかづら」などがある。百合科の多年生草本で、葉は退化して鱗狀となり、細枝が葉の代理をなす。雌雄異株。初夏、淡黃色の小花を開き、赤色の漿果を結ぶ。食用に供する種類は、嫩莖を軟白して用ひ、赤これを鹽詰にして貯藏する。

アスピリン [Aspirin] (名)【藥】サリチル酸と無水醋酸と又は鹽化アセチルでアセチル化した白色無臭の粉末。解熱及び鎮痛劑として、神經痛・頭痛・感冒熱・筋肉リウマチス・肋膜炎に效果がある。

アスファルト [Asphalt] (名)〔土瀝青〕(名)【鑛】石油の產地から天然に出る樹脂狀光澤を有する漆黑塊狀の鑛物で、道路の鋪裝材料・洋風建築の床や電線の被覆用等に用ひられる。西印度諸島のトリニダットは世界第一の產地。**―コンクリート** [Asphalt Concrete] (名) アスファルトを泥狀にとかし、砂利・碎石等を混合して鋪道などに用ひるもの。**―フェルト** [Asphalt Felt] (名) 液になつたアスファルトを麻・アンペラ・紙に吸はせ、コンクリート工事の防濕目に使ふもの。**―ペーヴメント** [Asphalt Pavement] (名) アスファルト鋪道。アスファルト・コンクリートで鋪裝した道路。

アスペクト [Aspect] (名) ❶ 景觀。飛行機から瞰下した景。❷飛行中の飛行機を更にその上空から寫した寫眞。

アスベスト [Asbestos] (名)【鑛】いしわた(石綿)。

あずま あづま〔吾妻・吾嬬〕(名) わが妻。(古語)

あずま あづま〔東〕(名) 東國、吾嬬・陸奥・出羽・常陸・上野・下野・武藏・相模・伊豆・甲斐・信濃・越後・佐渡・上總・下總・安房

—ずくり[—づ—][四阿造](名)【建】屋根の形による建築名稱。(よせむねすくり)(寄棟造)。

あずまわらわ[あづまわらは][東孺・東豎子](名)司の女官。一腹三子(さ)の小童を用ひる。「語」内侍

あずもうど[あづまうど][東人](名)(あずまうど)。(古語)

あすら[阿修羅](名)【佛】(あしゅら)。(古語)

アスリート[Athlete](名)運動家。戰技者。

アスレティックス[Athletics](名)運動戰技。戰技。闘技。

あすわ・ひのき……[翌檜](名)【植】あすなろう。

あせ[汗](名)❶生人及び動物の皮膚から分泌する廢物の液。臭氣と鹹味とを有する。❷船舶内の積荷に生ずる鹽滴。**—を反す**(句)(漢書の劉向傳に出づ)一旦發した命令を取消して行はぬにいふ。又、約束に背くにいふ。**—を握る**(句)恐れあやぶむ場合に掌に思はず汗の出ることにいふ。(古語)

あせ[吾兄](代)あなた。男子を親しんで呼ぶ語。

あせ・畦・畔(名)❶田と田との間に土を盛り上げた細道。❷鴨居や敷居の溝の中間にあるしきり。

あぜ(副)なぜ。なにゆゑに。(古語)

あぜ[綜](名)機のたて絲をすべる用具。

[綜桙](名)あぜの中でまとめる經(たて)絲。

[綜竹](名)機の經絲の中に入れて絲の亂れを防ぐ竹。

あせ・あぶら[汗膏](名)汗と脂。苦心を重ねること。

あせい[亞聖](名)聖人につぐ賢人。「こと。

あせい[阿世](名)世間の人におもねりへつらふ

アセイズム[Atheism](名)無神論。無神教。

あぜおり[畦織](名)畦地に高低を現はした織物。

あせかき[汗掻](名)汗のむやみに出る人。

あせがや[畦茅](名)【植】木本科の一年生草本。田畔に生ずる。高さ一米以下。葉は細長く、花は黑褐色で、圓錐形の穗をなして、夏咲く。

あせがやつり[畦莎草](名)【植】莎草(かやつり)科淡黃色。ほそばがやつり。

あせぐ・む[—ぐ・む][汗含む](自動・マ四)汗ばむ。

あぜくら[校倉](名)【建】古代建築の一。三角形の木の稜角を外にあらはして井桁に組みあげたる倉。甲蔵。又倉。あぜり。正倉院はこれに屬する。

あせ・しずく[—しづく][汗雫](名)汗の雫のやうに流れること。

あせじみ[汗染](名)❶あせじむこと。❷汗のしみあと。

あせじ・む[—ぢ・む][汗染む](自動・マ四)汗がしむ。

あせじゅばん[汗襦袢](名)汗を取る爲に、ちかに肌につける襦袢。あせとり。

あせしらず[汗不知](名)汗を吸收し皮膚を爽かにする美容劑の一種。天瓜粉・シッカロールの類。

あせちろ[按察使](名)古代、國司の治績や諸國の風俗・習慣を巡察した官職。後、陸奥守・鎮守府將軍の兼職となった。

アセチレン[Acetylene](名)【化】一種の炭化水素。無色で、不快の臭氣あり有毒のガス。カーバイドに水を加へると生ずる。強い光を放って燃え、燈火用又は熱源として用ひる。

あせてぬぐい[—ぬぐひ][汗手拭](名)汗をふくに用ひる手拭。

アセトアニリド[Acetanilide](名)【藥】アンチフェブリン。

あぜ・とうがらし……[畦唐辛](名)【植】玄參(ごまの)科の一年生草本。莖の下部は横臥する癖があり、葉は長楕圓形、夏秋の頃、葉腋から花梗を抽き、淡紅紫色・唇形の花を開き、唐辛に似た小さい實を結ぶ。「なる御殿。

あせ・どの[汗殿](名)齋院が月經時におこもりにぐ爲に着るじゅばん。❶❷汗が上着にとほるのを防

あせ・とり[汗取](名)❶汗が上着にとほるのを防ぐ爲に着るじゅばん。❷(おおかたびら)(大帷子)。

アセトン[Acetone](名)【化】林檎の香氣ある無色の液體。エーテルに類する。木材又は醋酸鹽を乾溜する時「メチールアルコール」と共に生ずる。糖尿病・熱性病及び饑餓時の尿中には屢、含まれる。

あぜ・な[畦菜](名)【植】玄參(ごまの)科の草本。莖は方形で直立し、高さ約三—四糎。葉は卵圓形全緣で對生する。夏秋の頃、葉腋から花梗が出て、淡紅紫色で脣形の花を開く。「兜の面頬(めん)の下にあげた穴。

あせなが・し[汗流](名)❶汗を洗ひ去ること。❷

あせば・む[—ば・む][汗ばむ](自動・マ四)肌が汗にぬれる。あせぐむ。

あせび[馬酔木](名)❶【植】躑躅科の常綠灌木。高さ三米位。葉は細長く小鋸齒がある。春、壺形の小白花を枝端に擬総する。葉に毒素があって牛馬が食べて中毒を起こす。葉の煎汁は蟲蟲劑のあしび。❷【文】根岸派の伊藤左千夫の系統で、故島木赤彦・齋藤茂吉等の創刊した短歌雜誌の名。

あぜ・びき[畦挽](名)鋸屑・鴨居などの溝を挽くに用ひる鋸。

あぜ・ふき[汗拭](名)(あせてぬぐい)。

あせ・ぼ[汗疣](名)【醫】あせも。

あせ・みず[—ぢ][汗水](名)汗が水のやうに流れ出ること。**—を流す**(句)勞苦を厭はず働く。

あせみ・ち[畦道](名)田の間に通ずる道。

あせみ・どろ[汗みどろ](名)汗にまみれたさま。

あせも[汗疣・熱沸瘡](名)【醫】夏、汗の爲に皮膚にできる赤色の發疹。

あせら・か・す[—す][他動・サ四]おだてる。

あせる[焦る](自動・ラ四)せきたてる。いらだつ。せいて氣をむ。

あせん[啞然](副)あきれて言葉の出ぬさま。

アゼンス[Athens](名)【地】アテネ。

あせんやく[阿仙藥](名)【藥】褐色の膽塊で、印度産の茜草科に屬するウンカリ・ガンビールの葉と、稚樹の印度産の茜科に屬するアカシヤ・カテクー及び アカシヤ・スーマの木心から採った乾燥エキス。味は苦くして甘味を帶びる。收斂劑・止血劑として用ひられる。

あそ[朝臣・阿曾](名)あそみ(朝臣)。(古語)

アゾ[Azo](名)アメリカ合衆國イーストマン會社から製造・販賣する瓦斯ライト寫眞印畫紙の名稱。アゾA・アゾAA・アゾB・アゾC等十一種ある。**—しきそ**[—色素](名)【化】有機色素化合物の一。メチルオレンジ・クリソイジン・コンゴー赤等の總稱。

あそう[あそう][浅ふ][浅ふ](自動・ハ下二)あさはかになる。(古語)

あぞう[あぞう][糾ふ](他動・ハ下二)

あそうぎ[阿僧祇](名)【佛】(梵Asamkhya無數と譯す)無限の長時間。

アソカ・おう……[阿育王・阿輸迦王](名)【人】(Asoka)西暦前三世紀の頃、印度マガダ國に君臨して五大天竺を統一し、大いに佛教を保護宣傳し、第三回の佛典結集を行ったた。あしゅか王。あいく王。

あそ・こ[彼處](代)❶かしこ。あのところ。❷あそこ。

あそこさん[阿蘇山](名)【地】熊本縣阿蘇郡にある二重式火山。外輪山の規模は世界一。海拔一五九二米。溫泉多く登山する者も夥しい。「づかに。(古語)

あそこに[淺淺に](副)うすうす。ほのかに。わ

あそはす[—す][遊ばす](他動・サ四)❶遊ばせる。❷(なす)の敬語。なさる。

あそはせ・ことば[遊ばせ言葉](名)「かうあそばせ、あああそばせ」などの敬語をつけていふ、鄙重ないひかた。

あそび[遊](名)❶あそぶこと。なぐさみ。❷獵や管絃のなぐさみ。❸賭博をすること。❹遊女。**—あいて**[—ぢ・あいて][遊相手](名)あそびとだち。**—おや**[遊親](名)あそび友達。**—がた**[遊敵](名)あそび友達。使用せず、融通せずして、徒らにしまって置くもの。**—がね**[遊金](名)おくれげ。**—ぐさ**[遊種](名)【植】柳の異名。**—げ**[遊毛](名)おくれげ。**—ごころ**[遊心](名)遊戯・管絃を好む心。**—しごと**[遊仕事](名)遊半分

にする仕事。**—すき**〔遊好〕(名) 遊ぶ事ばかりを好くこと。**—でら**〔遊寺〕(名) 浮世の俗事を離れぬ寺。世間寺。**—どうぐ**〔遊道具〕(名) おもちゃ。**—とき**〔遊伽〕(名) 遊相手となること。**—とり**〔遊鳥〕(名) 下級の遊女。はしたちょうち(端女郎)。**—にん**〔遊人〕(名) ぶらぶらと暮してゐる人。**—め**〔遊女〕(名) 娼妓。うかれめ。**—もの**〔遊物〕(名) ㊀おもちゃ。なぐさみもの。㊁遊女。あそびめ。**—わ**〔遊輪〕(名) 手綱を通す轡の輪。

あそびあかす〔遊明す〕〔遊び明かす〕(他動、サ四) 遊んで夜をあかす。

あそびあるく〔遊歩く〕〔遊び歩く〕(自動、カ四) 遊んであるきまはる。

あそびくらす〔遊暮す〕〔遊び暮す〕(自動、サ四)

あそびなぐ〔遊和ぐ〕〔遊び和ぐ〕(自動、ガ上二) 遊んで心をやはらげる。(古語)

あそびののしる〔遊騒る〕〔遊び騒る〕(自動、ラ四) 遊びさわぐ。(古語)

あそびひろぐ〔遊広ぐ〕〔遊び廣ぐ〕(他動、ガ下二) 遊ぶ爲に廣い場所をよくする。(古語)

あそびまさる〔遊増る〕〔遊び増さる〕(自動、ラ四) ますます盛んに遊ぶ。

あそ・ぶ〔遊ぶ〕(自動、バ四) ㊀好きなことをして慰める。㊁音樂を奏する。(古語) ㊂物見遊山をする。㊃酒色に耽ける。㊄ばくちをなする。㊅方方を旅行する。㊆ぶらつく。㊇他郷にいって學ぶ。㊈仕事をせずにゐる。**—いと**〔遊絲〕(名)(いとゆう)〔絲遊〕。

アゾフかい〔—海〕(名)【地】黑海の一部で、ケルチ海峽で黑海に通じてゐる海。面積約三萬七千方粁。一七三九年にロマーノフ家はロシヤの發展の爲にトルコからこの海の沿岸を奪取した。一八五五年に英佛聯合軍の砲撃した所。

あそみ〔朝臣〕(名) ㊀天武天皇の十三年に定められた八色の姓(やくさのかばね)の第二位(八色の姓の第一位は眞人)。朝臣・宿禰・忌寸・道師・臣・連・稻置㊁四位の臣語の名の下につける敬稱。「親房—」。

あそん〔朝臣〕(名) ㊀「あそみ」の音便。㊁他人を親しんで呼ぶ稱。あを。(古語)

あた〔仇〕(名) ㊀われに害をなすもの。恨あるもの。反對黨。かたき。てき。㊁うらみ。怨恨。㊂賊徒。㊃しかへし。復讐。(古語)

あた〔寇〕(名) 侵入する敵兵。

あた〔尺・咫〕(名) 尺度の名。大指と中指とを擴げた長さ。今の約一二糎。

あた〔徒〕(接頭) いまいましい。憎らしい。いやに。

あた〔徒・空〕(名・副) ㊀はかないこと。かりそめ。㊁むだ。いたづら。實なきこと。

あた〔仇・寇〕(名) あだ(仇)の轉訛。

うち〔仇討〕(名) 君父を殺した者を討ちとること。かたきうち。**—かたき**〔仇敵〕(名) あだ。讎敵。**—ける**〔仇ける〕〔仇る〕〔自動、カ下一〕あだれる。わざと亂墓する。あくたれる。**—は**〔仇情〕(名) 仇と思ったことが却って幸福となること。

あだ〔婀娜・阿娜〕(名) なまめかしいさま。あでやかなさま。うつくしいさま。

あたあた〔熱熱〕(感) 熱くて苦しい時に發する聲。

あだあだし〔徒徒し〕(形、シク) ㊀實がない。㊁淨氣である。(古語)

あたい〔私〕(代) わたしの音便。(東京の婦人・兒童の語)

あたい〔價・値・直・估〕(名) ㊀「總」れだん。代價。賣買の相場。㊁價に相當する金高・料金。㊂賃錢。㊃品位。㊄うちち。㊅「數」運算して得た數。㊆「價」はれだん。㊇「値」「直」はその物の有する眞のねうち。㊈「估」は物品の代金。**—す**〔あたひ—する〕〔價す〕(自動、サ變) 適當する。相當する。

あだ・らうる・さい〔徒五月繩い〕(形)(いやになる。

あたあた〔直〕(名) 上古の姓(かばね)の一。臣(おみ)・連(むらじ)・直(あたへ)・首(おびと)・史(ふびと)。

あたえ〔與〕(名) 與へること。

あたえる〔與へる〕(他動、ハ下一)(あたへる)の口語。

あだ・おろそか〔徒疎・仇疎〕(名・副) なみたい

あたか〔安宅〕(名) ㊀【地】古關址。石川縣能美郡安宅にあった關所。小松町の西。今は陷沒して海となった。源義經が、兄賴朝に嫉まれ、主從十二人、山伏になって陸奥に下ろうとして此の關を通し、關守に見咎められたのを辨慶の苦計によって、虎口を脱したことによって名高い。㊁あたかのせき。**—の—せき**〔安宅關〕(名) ㊀あたか。㊁【文】能の曲名。歌舞伎では「勸進帳」といふ。

あたかも〔恰・宛〕(副) そっくり。まことによく。

あだぎたない〔徒穢し〕(形) いやにきたない。うすきたない。

あだく〔徒くる〕〔婀娜く〕(自動、カ下二) なまめく。いろめく。(古語)

あだ・ぐち〔徒口〕(名) むだぐち。實意のない言葉。

—ねんぶつ〔徒口念佛〕(名) 口先だけの念佛。

あだくね〔徒雲〕(名) うちとけぬこと。不和。(古語)

あだぐも〔徒雲〕(名) やがて消えるはかない雲。浮雲。

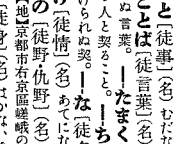
あだ・くらべ〔阿娜競〕(名) うはきのくらべあひ。互になまめいた風情を競爭すること。(古語)

あだぐるま〔徒車〕(名) 乘って通ったが、效のなかった車。

あだけ〔阿娜氣〕(名) 色氣。うは氣な心。**—びくに**〔阿娜氣比丘尼〕(名) 賣春を業とした比丘尼。

あだけ〔徒げ〕(名) はかないさま。(古語)

あだけまる〔阿武丸・安宅丸〕(名) 寛永十二年、德川家光の建造した船。龍頭鷁首、銅で包んだ三重樓。櫓の數二百挺。長さ約五五米。


〔ろまけたあ〕

あだ・ける〔徒ける〕〔阿娜ける〕(自動、カ下一)「あだくる」の口語。

あたごだけ〔愛宕苦・地柏〕(名)【植】卷柏(ひかげかづら)科の多年生草本。深山の陰地に生ずる。莖は蔓狀で地を這ひ、葉は檜に似、冬には樺色となる。えいさんこけ。くらまごけ。

あだ・ごころ〔徒心〕(名) 浮氣な心。あだしごころ。

あだ・ごころ〔愛宕山〕(名)【地】京都市右京區上嵯峨の北部にある山。海拔九二四米。山頂に愛宕神社があって、雷神を祭り、防火の守護神とさる。京都から登山には電車及ケーブルカーの便がある。

あたごちまき〔愛宕粽〕(名) 京都の愛宕山の邊でくらちまき。

あだ・ごと〔徒事〕(名) はかないことがら。

あだ・ごと〔愛宕鳥〕(名)【動】鷽の異名。

あたご・はくさん〔愛宕白山〕(名) 京都市の愛宕權現と石川縣の白山の神名とを呼びかけて、決心の堅固なことをあらはすに用ひる誓の詞。あたごびゃくさん。

あたご・やま〔愛宕山〕(名)【地】東京市芝區芝公園の北隣にある丘陵。東京中央放送局放送所所在地。

あだ・さくら〔徒櫻〕(名) 散り易い櫻花。

あだし〔私〕(代) わたし。(婦人・子供の語)

あだし〔徒〕(接頭) ㊀はかない。うつりやすい。㊁無益である。**—おんなこ**〔徒女〕(名) うはきな女。**—がはら**〔徒原・仇原・化原〕(名) あだしの(徒野)。**—けむり**〔徒煙〕(名) 火葬場の煙。ふだこころ。**—ごころ**〔徒心〕(名) うはき心。うつりやすい心。ふだこころ。**—ごと**〔徒事〕(名) むだなこと。不必要なこと。**—ごと**〔徒言葉〕(名) 實のない言葉。あてにならぬ言葉。**—たまくら**〔徒手枕〕(名) 夫以外の人と契ること。**—ちぎり**〔徒契〕(名) 末の遂げられぬ契。**—な**〔徒名〕(名) うき名。**—なさけ**〔徒情〕(名) あてにならぬ情。變り易い情。**—の**〔徒野・仇野〕(名) ㊀死者を葬る野。墓場。㊁【地】京都市右京區嵯峨の奥にあった埋葬地。**—み**〔徒身〕(名) はかない身。**—よ**〔徒世〕(名) はかない世。

アダジオ〔伊 Adagio〕(名)【音】ゆるやかな速度で演奏せよとの意。ゆるやかな速度で奏でる樂曲名。

—アッサイ〔伊 Adagio assai〕(名)【音】十分ゆるやかにおそい速度で演奏せよとの意。

あだしぐさ〔仇草〕(名) 仇となるもと。

あだしない〔……ない〕(形) けちである。しぶい。

アダジッシモ〔伊 Adagissimo〕(名)【音】アダジオの最大緩のもの。

あだじょうるり〔……じょうるり〕〔徒浄瑠璃〕(名) 口からでまかせの浄瑠璃。

あだす〔……す〕〔仇す〕(他動、サ四) 強く打つ。(古語) ❶はむかふ。

あだすせ〔……せ〕〔仇す〕(自動、サ変) 敵對する。

あだぜ〔……ぜ〕〔徒夫〕(名) 夫以外の男。「ふ金。

あだぜに〔徒銭〕(名) むだぜに。いたづらにつかう。

あだたか〔暖・温〕(名) ❶暑くもなく寒くもない温度。❷金銭の豐かなこと。❸愛情の深いこと。❹おだやか。❺人をみくびったさま。

あだたか・い〔……い〕〔暖い・温い〕(形)「あたたかし」の口語。

あだたかし〔……かし〕〔暖し・温し〕(形、一)❶心持のよい程の温度である。あたたかい。❷赤・黄などの色の感じ。「あたたかい。(古語)

あだたけ・し〔……けし〕〔暖けし・温けし〕(形、一)

あだたまり〔……まり〕〔暖まる〕(自動、ラ四)❶「あたたかになる。❷あたたまること。あたたかみ。❸金銭が豐かになる。

あだたまる〔……まる〕〔暖まる〕(自動、ラ四)❶

あだたむ〔……む〕〔暖む・煖む・温む〕(他動、マ下二)あたたかにする。

あだたむら〔仇叢〕(名) 仇の集まる所。敵營。〈古語〉

あだためる〔……める〕(他動、マ下一)「あたたむ」の口語。

あだちがはら〔安達原〕(名) ❶【地】福島縣安達郡太平村にある安達ケ原の黒塚。鬼が館ったと傳へられた處。❷【文】❸能の曲名。黒塚ともいふ。◎(おうしゅうあだちがはら)〈奥州安達原〉。近松半二・竹本三郎共作の浄瑠璃。

あだて〔當〕(名) あて。めめて。

あだな〔徒名・仇名〕(名) 色好みの名。うはきの名。**—ぐさ**〔徒名草・仇名草〕(名)【植】櫻の異名。(古語)「よって、實名の外に、他人のつけた名。

あだなみ〔渾名・綽名〕(名) 人の容貌・性質・擧動に

あだなや〔徒波・仇波〕(名) ❶徒らに立廻ぐ波。❷變り易い人心。❸海岸に攻寄せる敵兵。

あだね〔徒寝〕(名) (句) あどけないことだ。「ぶし。

あだのう〔……のう〕〔仇なふ〕(自動、ハ四)あだなする。(古語)

あだばな〔徒花〕(名) 實を結ばぬ花。

あだはら〔疝〕(名) せんき。(古語)

あだびき〔徒髭〕(名) 琴・三味線などを正しい音律によらず、なぐさみにひくこと。

あだびと〔徒人〕(名) ❶心のかはり易い人。うはきもの。❷別の人。他人。

あだびん〔徒臥〕(名) ❶一人で淋しく寢ること。ひとりね。あだね。❷はかない添臥(そえ)。かりそめ

あだぶし〔徒臥〕(名) ❶一人で淋しく寢ること。ひとりね。あだね。❷はかない添臥(そえ)。かりそめ「するさま。❸澤山。仰山。

あだ・ふた(名・副) ❶あわてるさま。心の驚き動揺

アダプタビリティー〔Adaptability〕(名) 適應性。順應性。

アダプト〔Adapt〕(英、動) 適應させる。飼案する。

あだぼれ〔徒惚〕(名) 戀してもかひのないこと。かりそめの戀想。

あたま〔頭〕(名) ❶かしらのてっぺん。(天窗)。❷首から上。❸物事の始め。❹物事の上。❺髪。❻考。思慮。❼長。首領。❽人數。**—がくし**〔頭隠〕(名) 一種の頭巾。元祿の頃、比丘尼・老女などの用ひたもの。**—かず**〔頭數〕(名) ひとかず。人數。**—がち**〔頭勝〕(名) ❶並ではづれて頭の大きいこと。始めは大きく終りの小さいこと。❷頭の高いこと。傲慢。わがまま。**—かぶ**〔頭株〕(名) 首領。**—から**〔頭から〕(副) はじめから。まるで。**—くだし**〔頭くだし〕(名) あたまこなし。**—ごなし**〔頭ごなし〕(名) あたまからおしつけて叱りつけること。**—じらみ**〔頭蝨〕(名)【動】蝨の一種。人類共の他、猿等の頭髮中に寄生。腹部は卵形、各關節の周圍は褐色を帶ぶ。卵を毛髮中に生み、普通の蝨よりも大きな爪を有する。**—つき**〔頭附〕(名) 頭髮の形。かみかたち。**—で**〔頭で〕(副) ❶でっかち。❷並の頭より大なるもの。**—なみ**〔頭並〕(名) 平等にわりつけること。**—のはち**〔頭鉢〕(名)【生】(すがいこつ)〈頭蓋骨〕。**—はり**〔頭張〕(名) 頭を打つこと。**—わり**〔頭割〕(名) 人數に割りあてること。**—童し**(句) 頭痛がするにいふ。又、頭の抑へられる感じ。**—が上がられない**(句) 感歴されて、屈伏する。**—隠して尻隠さず**(句) 一部の缺點を隠しても、他の大部分を隠し得ぬことにいふ。**—から水を浴びせた様**(句) 意外の事にひやりとすること。**—剃る**(句) 意外の事にひやりとすること。**—より心を剃れ**(句) 外貌を飾るよりも精神を修養せよ。**—の上の蠅も逐はれぬ**(句) 菅葉のいのびはじめ。**—のかかり**(句) 菅葉一人の始末さへ出來ぬ。**—の**(句) 目をかすめて主人の財物をれらふ傭人。**—を擡げる**(句) 世にあらはれる。勢力を得る。**—を抑へる**(句) 我意を張るのを制する。**—を抱へて逃げる**(句) 閉口して逃げる。**—を掻く**(句) 失敗して恥入る。**—を惱ます**(句) 考へなやむ。**—を撥ねる**(句) うはまへをはねる。**—を撲ねる**(句) 頭部をなぐる。**—を割らす**(句) 心を砕いて思案する。

あだまくら〔徒枕〕(名) はかない假寝。あだぶし。

アタマン〔露 Atuman〕(名) ロシヤの南東地方になるコサックの頭領。

あたみ〔熱海〕(名)【地】靜岡縣田方郡の溫泉地。避暑・避寒に適し、風光に富む。溫泉は鹽類泉で、痛風・皮膚病・神經痛に效があるといふ。東京市との間に直通列車がある。

あたむ〔……む〕〔仇む〕(他動、マ四) かたきとする。(古語)「る。敵視する。

アダム〔Adam〕(名)【神】(ヘブライ語より出づ)「舊約聖書にある神の創造した最初の人類で、「エデンの園から追出された男の名。女性のイヴに對する。

アダムス〔William Adams〕(名)【人】日本幕府から相模國三浦郡逸見の地を賜はり、三浦按針(あんじん)と名のつた。元和六年平戸に病歿した。(一五七五〜一六二〇)

アダム・スミス〔Adam Smith〕(名)【人】イギリスの經濟學者。正統派經濟學の始祖。「富國論」を著はして貿易の原理を明らかにした。(一七二三〜一七九〇)

あだめく〔……めく〕〔阿娜めく〕(自動、カ四)❶浮氣に見える。❷情に溺れ易く見える。❸つやっぽく見える。

あだもの〔徒物〕(名) つまらぬもの。はかないもの。

あだもの〔阿娜者・仇者〕(名) 美人。美しく垢ぬ

あだや〔徒矢〕(名) 的にあたらぬ矢。「けした女。

あたゆまい〔……ゆ〕〔仇忌〕(名) 他人を仇敵のやうに忌むこと。(古語)

あだゆめ〔徒夢〕(名) かひのない夢。

あたら〔可惜〕(名) ❶をしむべきこと。をしいこと。(古語) **—みみ**〔可惜身〕(名) をしむべき身。(古語) **—もの**〔可惜物〕(名) をしむべきもの。❷をしむべき夜。(古語)

あたらし〔……らし〕〔可惜し〕(形、二)❶をしいことであるべき。(古語) **—がる**〔……がる〕〔可惜しがる〕(他動、ラ四) 流行をおび新しいことをほこる。**—き・むら**〔新しき村〕(名) 武者小路實篤が、大正七年人道主義の見地から

宮崎縣兒湯郡木城村石河内に建てた共產的な村。

あたらしぶ〔惜しぶ〕〔可惜しぶ〕(他動、バ四) なしむ。(古語)

あたらしむ〔惜しむ〕〔可惜しむ〕(他動、マ四) ㊀あたること。㊁思ふやうになつたこと。その事にであふこと。㊂てがかり。めあて。「—が附く」。㊃利益を得たこと。㊄あつかひ。しむけ。㊅返報。意趣返し。—こと。—あい〔惜合〕(名)(ありあい×有合)。—おう〔惜合ふ〕(自動、ハ四) たたかふ。わたりあふ。—きょうげん〔當狂言〕(名) 評判よく入りの多い芝居狂言。—ぐるし〔當苦しい〕(形、二)立並ぶものがない。(古語)—さわり〔當障〕(名) さしさはり。影響。—ずみ〔當墨〕(名) 墨縄で材木につける線。—ちらす〔當散らす〕(自動、サ四) 心中に面白くないことがあるので、わけもなくあたりの者に怒りちらす。—どし〔當年〕(名) 收穫や利益の多い年。物事の思ふやうにうまく行く年。—ばこ〔當箱〕(名) 硯箱。(東京の商家の忌詞)—ばち〔當鉢〕(名) 摺鉢。(東京の商家の忌詞)—ぶるまい〔當振舞〕(名) ㊀事の成功した祝に人を饗應すること。㊁芝居狂言で、入りの時にする饗應。

どし〔前〕(名) 當然。さうあるべきこと。—もの〔當物〕(名) ㊀思ふとほりになつたもの。人氣に投じた物。與行の出し物。㊁食つて中毒を起こしたもの。—や〔當屋〕(名) ㊀思ふ通りになつて利益を占めた人。㊁人氣に投じた店。

あたり〔邊〕(名) ㊀ほとり。附近。近傍。㊁頃。程。こちら。—きんじょ〔邊近所〕(名) そこに近い處。あたり。あたりきんぺん。—きんぺん〔邊近邊〕(名) あたりきんじょ。—を拂ふ〔(句)〕威勢のすぐれてゐることにいふ。

アダリン〔獨 Adalin〕(名)【藥】臭素及び尿素を含む白色の結晶で、催眠・鎮靜劑。

あたる〔(あたれば)〕〔當る〕(自動、ラ四) ㊀さはる。㊁ぶつかる。㊂であふ。㊃まとに達する。はづれない。㊄任する。ひきうける。㊅光がさす。㊆成就する。㊇中毒する。㊈さしむかふ。㊉敵する。はりあふ。㊊火にあたたまる。㊋比する。かなふ。㊌其の方角にある。㊍きまる。㊎試みる。㊏つらい仕向けをする。㊐果實がいたむ。㊑毛をそる。

當らずと雖も遠からず〔(句)〕(大學に出づ)道を得るには至らないが、大きな過はない。—も八卦〔當らぬも八卦〕(句) うらなひは必ず當ると云ふわけではない。—を幸〔(句)〕手に當るを幸として。手あたり次第に。㊁大體よい。

アダルト・エデュケーション〔Adult education〕(名)【教】成人教育。「ア教」接する。(古語)

あたわす〔(あたはせ)〕〔礒す〕(自動、サ四) 男女

あたん〔亞炭〕(名)【鑛】泥炭よりは上等で、褐色

あだん〔阿檀〕(名)【植】紫蘇

〔んだあ〕

科の常綠喬木。幹の下部からは氣根が垂れる。葉は細長くして尖り、パナマ帽子をつくるに用ひられる。琉球・臺灣に產する。

あち〔彼方〕(代) かなた。あっち。—こち〔彼方此方〕(代) ㊀あちこちこちら。㊁あっこっこ。

あちき〔阿直岐〕(名)【人】應神天皇の十五年(九四四)百濟王の貢使として來朝した百濟人の學者。皇子菟道稚郎子に經典を講じ、始めて我が國に漢學を傳

アチック〔Attic〕(名)【建】屋根裏の部屋。

あちのおみ〔阿知使主〕(名)【人】後漢の靈帝の曾孫。應神天皇の二十年(九四九)に歸化した人。後、吳に使し織縫の工女を連れ歸つて仁德天皇に奉つた。その子孫を漢直(あやのあたひ)といふ。

あちゃらすけ〔阿茶羅漬〕(名) 漬物の名。莖根・大根・牛蒡・すいき等をこまかくきざんで、酢・酒・醬油などに漬けたもの。「アチャラ」は元ペルシャ語で南洋を經て、江戸時代初期に渡來した語。

あちら〔彼方〕(代) 兩者の中間にはひつて手段の施す方法のない場合にいふ。

あつ〔(あつて)〕〔當つ充つ〕(他動、タ下二) ㊀うちつける。㊁あてはめる。㊂思ひのままに好結果を得る。㊃まとに達せさせる。㊄正しく判斷する。㊅わりあてる。㊆任ずる。㊇さしむける。㊈あはせる。㊉中毒させる。㊊火にあたらせる。㊋困らせる。

あつ〔厚〕(接頭) 厚い意をあらはす語。「一板」「一灰」。

あつ〔熱〕(接頭) 熱い意をあらはす語。「一灰」。

あつ〔感〕(感) ひどく驚き、又、感心した時に發する聲。「ついさま。

あつあつ〔熱熱〕(名・副) 情人を愛することのあ

あつい〔(あつけれ)〕〔熱い・暑い・厚い・篤い〕(形) 「あつし」の口語。

あついた〔厚板〕(名) ㊀分の厚い板。㊁能樂の裝束で、鬼・天狗・武士などの着るもの。㊂厚地織物の名。生絲を緯(よこ)として地紋を織出した絹織物。多く帶地とする。厚板織。㊃【植】羊齒(しだ)類の一。根莖は横走し、葉は長披針形で革質、長さ一〇—三〇糎。本邦西南の暖地に生ずる。

あついんきかい〔壓印機械〕(名)【機】圓形の金屬に極印を押壓して、金銀貨を製出する機械。

あつうす〔厚臼・碾磑〕(名) 穀物をひきうす。

あつうん〔遏雲〕(名)〔列子・湯問篇に「秦青善歌、能使聲振林木響遏行雲」とあるに基づく〕空行く雲をとどめる程、歌の聲の美しいこと。

あつえびと〔篤癩人〕(名) ㊀熱病の人。危篤の病氣の人。㊁癩疾の人。

あつか〔惡化〕(名) わるくなること。

あつか〔惡貨〕(名) 地金の價格が、法定價格より劣つてゐる貨幣。わるい貨幣。

あつか〔扱〕(名) ㊀わるい果報。㊁あつかふこと。㊂あつかひ人。㊃仲なほり。和談。—ぐさ〔扱草〕(名) ㊀扱ふ材料。(古語)㊁【植】菊の異名。—だて〔扱立〕(名) あつかひをすること。氣に入らぬあつかひ。—にん〔扱人〕(名) 取計らふ人。仲裁者。

あつかい〔厚貝〕(名)【動】鐵鯉類の貝。殼は長卵形で、外面は暗綠色、內面に眞珠質があるので裝飾品とする。琉球・小笠原島に產する。

あつかう〔(あつかは)〕〔扱ふ〕(他動、ハ四)(あつかう)の口語。

アッカウンタント〔Accountant〕(名) 勘定。

アッカウント〔Account〕(名) 勘定。

あっかく〔壓覺〕(名) 壓力又は重さを感する感覺。

あつかましら〔厚顏〕(名) 厚顏の人。

あつかましい〔(あつかましく)〕〔厚かましい〕(形、二)つらのかはがあつい。恥を恥とも思はぬ。—い〔(あつけれ)〕〔厚かましい〕(形)(あつかまし)の口語。

あつかみ〔厚紙〕(名) ㊀厚く漉いた紙。厚くはりあはせた紙。帳面などの表紙の紙。㊁(あつようし)(厚葉紙)。

あつがり〔暑がり・熱がり〕(名) 暑さや湯の熱いのを苦以上に感ずること。又、その人。

あつかわ〔厚皮〕(名) ㊀厚い皮。㊁恥を恥とも感ぜぬこと。—ずら〔厚皮面〕(名) あつかましい顏つき。

あつかわし〔(あつかはしく)〕〔扱はし〕(形、二) あつくるしい。(古語)

あつかわし〔(あつかはしく)〕〔扱はし〕(形、二) わづらはしい。扱ひにくい。(古語)

あつかんあく〔惡感〕(名) 不快な感じ。

あつかんあく〔惡漢〕(名) 惡事をする男。わるもの。ごろつき。

あつかんぐん〔歷卷〕(名) 全卷の書物の中で最もすぐれた部分。

あつかんだん〔熱燗〕(名) 酒の燗のあついこと。又、その酒。

あつかんじょう〔惡感情〕(名) 人に對して不快に感ずること。

あっき〔惡氣〕(名) わざはひなる氣。

あっき〔惡鬼〕(名) たたりをする鬼。なんりょう(怨靈)。—かい〔惡鬼貝〕(名)【動】骨

貝科の螺貝。外殼は長卵形で、螺層隆起し、殼口は卵形をなし、細長の殼管を有し、多くの棘を具ふ。神奈川縣三崎・和歌山縣・高知縣・鹿兒島縣等の海に產す。

あつぎ[厚着](名)着物を厚く重ねて着ること。

あつぎぬ[厚絹](名)あついもの。

アッキュミュレーター[Accumulator](名)【理】蓄電池。蓄電器。

あっきん[悪金](名)❶惡質の黃金。❷惡質の貨幣。にせがね。❸不正行爲によって得た金錢。

あっく[悪口](名)【佛】十惡の一。(あっこう)(惡口)。

あっくるし[熱苦し・暑苦し](形、一)苦しい程あつい。—いい[熱苦しい](形)「あつくるし」の口語。

あっけ[暑氣](名)❶炎天の氣。あついほてり。❷意外の事に出會って、驚きあきれること。—ない[呆氣ない](形)「あっけなし」の口語。—なし[呆氣なし](形、一)あまり單純で興がない。滿足ができない。張合ひがない。—にとられる(句)あきれて茫然たるにいふ。

あっけし[熱けし・暑けし](形、一)あつい。

あっけし[厚化粧](名)こってりと白粉をつけた化粧。

あっけらかん(名)ぼんやりとみとれるさま。きょとんとしてあっけにとられるさま。

あっこ[悪虎](名)人を害する虎。

あっこう[悪行](名)(あくぎょう)(惡行)。

あっこう[悪口](名)❶人をあしざまにいふことば。わるくち。❷【佛】十惡の一。人に惡言を加へて惱ましめること。(あっく)。—ぞうどん[悪口雜言](名)さまざまに惡口すること。

あっこう[扱・扱](他動、ハ四)❶せわをやく。❷面倒を見る。とりさばく。❸處置に苦しむ。當惑する。❹仲裁をする。❺使用する。つかふ。❻もてなす。

あっこう[熱・暑](形、一)❶熱度が高い。❷熱心である。ひどく思ひ込む。

あつし[熱し・暑し](形、一)溫度が高い。暑氣が

アッコーディオン[Accordion](名)【音】手風琴。

あっ・ごおり[厚氷](名)厚い氷。

あっ・ごゆ[厚肥ゆ](自動、ヤ下二)厚くふくらむ。厚くなる。(古語)

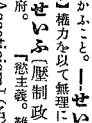
アッコンパニメント[Accompaniment](名)❶隨伴物。❷【音】伴奏。❸伴奏者。

あっ・さ[暑さ](名)暑中(名)❶暑い程度。❷夏の氣候。—になること。—しの**ぎ**[暑凌](名)あつさよけ。

あっ・さ[厚さ](名)厚い程度。厚み。

あっ・さく[厚搾](名)おしつけてくだくこと。

あっ・さく[厚搾](名)おしつぶすこと。おしちぢめること。—き[厚搾機](名)【機】螺旋仕掛や水壓力を應用して物體をおしつぶすに用ひる機械。—くうき[厚搾空氣](名)【理】壓搾裝置でおしちぢめ、その膨脹力を利用して色色の仕事をさせる空氣。—くうき・ポンプ[厚搾空氣喞筒](名)【理】壓搾空氣をつくるに用ひるポンプ。厚搾ポンプ。



〔㊀しつあ〕

あっ・し[厚し](形、一)❶表と裏とのさしわたしが多い。うすくない。❷ゆたかである。こまやかである。❸まことが多い。情深い。❹重重しい。❺甚だしい。強い。

あっ・し[篤し](形、一)❶病が重い。❷人情にあつい。❸正直・親切である。

あっ・し[歷死](名)おしつけられて死ぬこと。

あっ・し[遏止](名)とどめること。

アッシスタント[Assistant](名)助手。輔佐役。

アッシュ[Ash](名)【植】とねりこ。

あっ・しゅく[厚縮](名)おしちぢめること。

あっ・しゅつ[厚出](名)おし出すこと。—じんつう[厚出陣痛](名)【生】胎兒が陰門におし出される時の痛み。

あっ・じょう[厚條](名)とりさく取木)。

アッシリヤ[Assyria](名)【歷】アジヤの古代王國。チグリス河の上流から興り、西部アジヤから北部アフリカに亙る廣大な領地を有したが、西曆紀元前六〇六年、メデイヤ・バビロニヤの爲に滅ぼされた。

あっ・しる[篤しる](自動・ラ下二)病が重い。衰弱がはなはだしい。(古語)

あっ・す[厚す](他動・サ變)❶おさへつける。❷服從させる。❸活動のできぬやうにする。

あっ・ずくり[厚作](名)刺身などの肉を厚く切ったもの。

あっ・せい[歷制](名)❶むりやりにおしつけること。下に立つ者をむこうあっかふこと。—せいじ[歷制政治](名)【政】權力を以て無理に人民をおさへつける政治。—せいふ[歷制政府](名)【政】歷制政治をやる政府。

アッセティシズム[Asceticism](名)【倫】禁慾主義。難行苦行。

あっせん[斡旋](名)❶めぐらすこと。❷とりもち。世話。周旋。「組合せ・機械又は建築材など。

アッセンブリー[Assembly](名)集會。會合。

アッソシエーション[Association](名)❶協會。❷組合。❸聯盟。—フットボール[Association football](名)ア式蹴球。

アッソシエーテッド・プレス[Associated press](名)聯合通信社。略號 A. P.

アッソシエート[Associate](英・動)聯合する。

アッターニー[Attorney](名)辯護士。代理人。

あった・く[あつかひ](自動・カ四)あわてふためく。(古語)

あった・じんぐう[熱田神宮](名)【神】名古屋市南區熱田新宮坂町にある官幣大社。天照大神・素盞嗚尊・日本武尊・宮簀姬・建稻種命を合祀し、草薙劍の神體とする。例祭は六月二十一日。「毋。

あったたちばな[厚橘](名)【植】くれんぼ(九年

アッタック[Attack](英・名・動)攻擊。攻める。

アッタッチメント[Attachment](名)❶愛著。❷(法)差押。❸物に引ける。❹物にとりつけてある部分。❺【理】寫眞レンズに附けて焦點距離を變化せしめるレンズ。❻補助レンズ。❼附帶物・接合させる物。

あったら[可惜](副)「あたら」(可惜)の音便。—もの[可惜物](名)あたらもの。

あっち[彼方](名)❶歐米諸國。❷あの世。冥途。

あっち[彼方國](名)❶外國。❷死後行くべき國。あの世。—もの[彼方者](名)❶敵方の者。❷外國人。主としてオランダ人。❸死と定まったもの。

アッチラ[Attila](名)【人】フン族の王。西暦四三三年、フン族の首長となり、スキチャ族・ゲルマン族から成る一大王國を建設したが、四五三年、パンノニヤに死し、霸業は空しくなった。

あっつ(名・副)炎なること。(西鶴)(「うすつの對)

あっつ・で[厚手](名)紙・織物・陶器などの厚いもの。

アッティング・マシーン[Adding machine](名)【機】正確・迅速に加算を行ふ機械。加算を行ふ人。

あって[歷點](名)【生】歷點によって鎖物に起こる電氣。石英・黃玉石・方解石等にあらはれ

る現象。

アッテンダント [Attendant] (名) ㊀従者。㊁附添人。㊂劇・旅館等の案内者。

あっと (副)「あっ」と驚立てて。**—ばかりに** (句)「あっ」と驚立てるゐに。

あっと [壓度] (名) 面積の平方單位の受ける壓力。

あっとう [壓倒] (名) ㊀おしたふすこと。㊁權力で人を凌ぐこと。㊂すぐれて他にまさること。

アット・サイト [At sight] (名)【經】覽拂。

アット・バット [At bat] (名) 野球用語。打者として出場すること。

アットラクション [Attraction] (名) ㊀【理】引力。吸收力。㊁魅力。人目をひくこと。

アットラクティヴ [Attractive] (英・形) ㊀人を引きつける力がある。㊁人目に立つ。愛嬌がある。魅力がある。

アットラクト [Attract] (英・動) 引く。誘引する。

アットリビュート [Attribute] (名) ㊀特質。性質。㊁【哲】屬性。

あつに (名)【植】(アイヌ語 Atni) 楡(にれ)科の落葉喬木。高さ三〇米内外。小枝に毛を有し、葉は倒卵形で三裂し、尖頂で重鋸齒があり、裏面には毛がある。初夏、淡黄綠色の小花をつける。花後、翅ある果實を結ぶ。材は器具用・薪炭用とし、アイヌは樹皮の纖維を用ひて「あつし」を製する。おひょう。

〔につあ〕

アッパー・カット [Upper cut] (名) 拳闘用語。相手の胸・鳩尾・頤等を下から突き上げる方法。

あっぱい [熱灰] (名) 火のけのさめぬ灰。

あっぱく [壓迫] (名) はげしくおさへつけること。威壓すること。**—かいきゅう** [壓迫階級] (名)【社】生産手段を獨占して、經濟的搾取をなし、被支配階級を支配する階級。搾取階級。

あっぱっぱ (名) 褌のひらいた簡單服。夏季に婦人の常用するもの。

あっぱれ [天晴・適] (名・副・感) ほめたたへる時に云ふ語。

あつ・び [壓尾] (名) 最後。結末。

あつ・び [熱火] (名) あつい火。盛んな火。**—子に拂ふ** (句)「十善戒經」にある句)火焔の襲來した時、これを最愛の我が子の方に拂ひやって我が身の安全をはかることで、利己主義なことをいふ。

アッピール [Appeal] (英・名・動) ㊀控訴する。哀訴する。訴へる(世論・干戈・力などに)。㊁控訴。上告。哀訴。訴へること(世論・干戈・力などに)。

あつ・びたい [厚額] (名) 額きはを厚く遊った冠で、十六歳以上の男子が用ひる。

〔額　厚〕

あつ・びん [厚鬢] (名) 頭の中央から額へかけて狹く剃り落し、兩方の鬢髮をふさふさと厚く結った髮の型。

あっ・ぷく [壓伏] (名) 威壓して從はせること。

あっ・ぷさ [厚總] (名) ふさを飾りに多くつけたもの。多く馬具に用ひる。大總。

アップ・スタート [Upstart] (名) 成金。なりもの。

アップ・ツー・デート [Up-to-date] (英・形) 最新の。當世風の。現代的の。

アップ・ツー・ミニット [Up-to-minute] (名)【經】商業文・廣告文等に用ひる語で、卽刻・刻下等の意を表はす語。

アップ・トレーン [Up-train] (名) 上り列車。

アップライト・ピアノ [Upright piano] (名)【音】竪形ピアノ。家庭用で箪笥形のもの。

アッペタイト [Appetite] (名) ㊀食慾。㊁肉慾。

アッペンディクス [Appendix] (名) ㊀附錄。㊁追加。㊂增補。

アッポイントメント [Appointment] (名) 任命。指定。敍任。辭令。

あつまり [集] (名) ㊀あつまること。又、その數。集食。むれ。㊁基督教信者の集會。**—ぜい** [集勢] (名) 諸方から集まって規律のない軍勢。烏合の衆。

あつまる [集まる] (自動・ラ四) ㊀寄りあふ。むらがる。㊁㊃集は散ってゐるものがあつまる。㊄「聚」は自ら進んであつまる。㊅「萃」は少數のものがあつまる。㊆「聚」は水の上にあつまる。㊇「聾」は車のやのやうに方方から一所にあつまる。「し。

あつみ・しんのう [敦實親王] (名)【人】宇多天皇の第八の皇子。宇多源氏の祖。六條宮又は仁和寺宮と稱せられた。康保四年(一六二七)薨。御年七十五。

あつ・みつ [遏密] (名) ㊀(書經堯典の語)最重喪。「とめること。㊁諒闇の時の鳴物停止。

あつみはんとう [渥美半島] (名)【地】太平洋と三河灣との間に、知多半島と相對して突出した半島。

あつ・む [集む・聚む] (他動・マ下二) ㊀せる。よってこさせる。㊁㊃集は散ってゐるものをあつめる。㊄「聚」は人や物をあつまらせる。㊅「萃」は少數のものをあつめる。㊆「蒐」はしらべあつめる。㊇「輯」は一まとめにする。書物の材料をあつめる。㊈「纂」は絲を組む意から文章などをあつめる。「うどん。(ひやむぎの類)

あつ・むぎ [熱麥] (名) 熱くして食ふさうめん又はうどん。(ひやむぎの類)

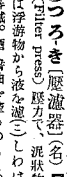
あつめ・じる [集汁] (名) 大根・牛蒡・芋・豆腐などを入れた汁。

あつめる [集める] (他動・マ下一)「あつむ」の口語。

あつ・もの [羹] (名) 菜・肉などを温かに煮た吸物。

—に懲りて膾を吹く (句) 一度失敗したために懲りて無益な用心をすることの譬。

あつ・もりそう [敦盛草] (名)【植】鬱科の多年生草本。莖の高さ三〇糎位。葉は長卵形で莖を抱いて互生し、五六月頃毋衣(ほう)形で紅色の大きな花を開く。


〔草　盛　敦〕

あつ・ゆ [篤ゆ] (自動・ヤ下二)病が重くなる。(古語)

あつよう [厚様] (名) 厚い鳥子紙。厚薄(あつうす)。

あつよく [壓抑] (名) おさへつけること。押壓。

あつらえ [誂] (名) あつらへること。又、そのもの。**—むき** [誂向] (名) あつらへたもの。註文品。

あつらえる [誂へる] (他動・ハ下一)(あつろう)の口語。

あつ・りょく [壓力] (名)【理】おさへつける力。一つの面に於いて或物體を壓迫する力。**—けい** [壓力計] (名)【理】液體又は氣體の壓力を測る裝置。普通一氣壓より高い壓力を測定するに用ひるものを指し、液柱壓力計が最も廣く行はれる。**—せん** [壓力線] (名)【理】土木などで、壓力の方向と量とをあらはす線。**—へんしつ** [壓力變質] (名)【地】地殼變動の際に、岩石が地殼の壓力の爲に、其の質を變ずること。

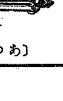
あつる [熱る] (自動・ラ下二)あつまる。(古語)

あつる [厚る] (自動・ラ下二)厚くなる。(古語)

あつれき [軋轢] (名) 車のきしること。㊁不和註文する。頗んでつくらせる。

あつろう [誂ふ] (他動・ハ下二)

あつろき [壓濾器] (名)【機】(Filter press) 壓力で、泥狀物又は浮游物から液を濾さ)しわける器械。酒・醬油を搾るのもこの種のもの。


〔きろつあ〕

あて [當] ㊀あてること。㊁みこみ。めあて。目的。㊂たより。たのみ。㊃物を打ち、切り、削りなどする時下におくもの。㊄はらあて(腹當)。

外づれる (句) 見込がはづれる。

あて [宛・充] (名) ㊀わりあてること。㊁名さし。名あて。㊂(法)抵當。**—あて** [宛宛・充充] (名・副) それぞれにわりあてること。(古語)

あて [貴] (名) ㊀身分の貴いこと。(古語)㊁ひんのよいこと。(古語)**—あて・し** [貴貴し] (形・シク)

(形二) 上品である。(古語)

あて(名) ㊀謹賀の材木。㊁醜い女。

あてあてし[あてあてしけれ][当當し](形二)あてつけがましい。あてこするやうにする。(古語)

あてい(名)弟を親しんで呼ぶ稱。【金石。

あていし[当石](名)黄金の真贋をためす石。試

アディソン[Joseph Addison](名)【人】イギリスの文學者・政治家。十八世紀のエッセーの開祖。國務卿に任ぜられた。その著に「サーロージャー・デ・カヴァリー」等がある。(一六七二—一七一九)

アディソンしびょう……びやう……[一氏病](名)【醫】イギリスの醫師トマス・アディソンが一八五五年に發見した病。副腎又は小腺の結核で、皮膚や粘膜が暗黒色に變化し、體力の衰弱することが特徴。未だ特效ある治療法は發見されてゐない。

あてうま[当馬](名)牝馬の發情を檢査する爲に牡馬を近づけて試みること。又、その牡馬。

あてえ……え[当繪](名)見る者に、それとさとらせるやうに畫がいた繪。

あておこないごう……ごう[充行狀](名)あ

あておこのう……おこのう[充行人](他動、ワ四)あてがふこと。(古語)

あてがい[宛行・充行](名)あてがふこと。

—ぶち[充行扶持](名)㊀見はからって渡す扶持米。㊁他の要求によらずこちらの心まかせに他に與へること。又、その物。

あてがふ[あてがふ][宛行ふ・充行ふ](他動、ハ四)(あてがうの)の口語。

あてかおし[枕](名)地名のうちかの(値嘉)の枕詞。

あてぎわ[当際](名)定期。期限。

あてくち[当口](名)あてこする言葉。

あてごう[あてがふ][宛行ふ・充行ふ](他動、ハ四)㊀わりあてて與へる。わりつける。㊁心まかせにわたす。㊂あてはめておく。㊃まにあはせにあてる。

あてこすり[当擦](名)あてこすること。又、その言葉。

あてこする[あてこする][当擦る](自動、ラ四)人の面前で他の事にかこつけて遠まはしにその人にあててあしざまにいふ。

あてこと[当言](名)㊀あてこすり。㊁それとなしにとほまはしにいふこと。

あてごと[当事](名)あてにすること。頼みにすること。成功を見込むこと。

あてこみ[当込](名)あてにすること。成功を見込むこと。

あてじ[当字](名)語の意義の如何にかかはらず、香や訓にあてて用ひる漢字。

あてこむ[あてこむ][当込む](他動、マ四)成功を見込む。あてにする。

あてじょう……じょう[充狀](名)披露狀の如く、宛名を一人一人にせず、「各位」「御中」などとしたる手紙。

あてずいりょう……ずいりょう[当推量](名)根據もなしに、自分の考でおしはかること。「事を行ふこと。

あてすっぽう……ぽう[当寸法](名)めあてなしに

あてつけ[あてつけ][当附け](他動、カ下二)㊀あてがふ。あてはめる。㊁あて、こすること。

あてつける[あてつけ][当附ける](他動、カ下一)「あてつく」の口語。

あてど[当所](名)㊀當てる所。㊁めあて。心あてなく矢の射たれた中身廠庫の後に起る。

アテトーゼ[獨 Athetose](名)【醫】手足に起る一種の不隨意運動を主として指及び趾にあらはれ、多

あてな[宛名](名)手紙・願書・誓書などに書く先

アテナ[希 Athena](名)【神】ギリシャ神話で、大神ゼウスの頭から生まれたといはれ、學問・文藝及び智慧・戦爭を司る女神。

あてなし[当無](名)めあてのないこと。

あてに[貴に](副)上品に。あでやかに。

アテネ[Athenai; Athens](名)【地】ギリシャ共和國の首府。古代ギリシャ文明の中心地で、多數の遺蹟に富み、アクロポリス丘上には、パルテノン神殿の舊址がある。

アデノイド[獨 Adenoid](名)【醫】扁桃腺の增殖性肥大症。多く小兒に起こり、發育不完全なり、鼻・雖聽を起こしのち閉塞性鼻聲となり、口塗緊張を缺き、記憶力が減退する。

あてのみ[当飲](名)他人の酒を當てにして飲むこと。

あてはか[貴](名)あでやか。(古語)

あてはかる[あてはかる][当量る](他動、ラ四)おしはかる。「うまくはまる。適合する。

あてはまる[あてはまる][当嵌まる](自動、ラ四)

あてはむ[当嵌む][当嵌まる](自動、ラ四)あてはまるやうにする。

あてはめる[あてはめる][当嵌める](他動、マ下一)「あてはむ」の口語。

あてびと[貴人](名)あでなる人。身分のある人。

あてむ[貴む](自動、マ上二)あでやかに見える。あでやかに見える。(古語)

あてぶ[あてぶ][貴ぶ](自動、バ上二)あでなる人。身分のある人。

あてふみ[宛文・充文](名)㊀鎌倉・室町時代に土地を給與し又は管理を任ぜる時に渡した文書。㊁遺産分配の遺言狀。㊂その人に當てた手紙。

あてふり[当振](名)でたらめにする踊。

あてもう[当身](名)柔道で、拳・肘等を以て相手の急所をついて、一時氣絶せしめること。

あてもうく……もうく[当設く](他動、カ下二)用意する。心がけをする。

あてもの[当物・中物](名)㊀隆したものをいひあてること。なぞの類。㊁或物をいひあてたものに利を與へること。㊂まと的。㊃或所にあてがふ物。

あてやか[貴](名)高貴。上品。みやびやか。(古語)

アデュー[佛 Adieu](名)別れを告げる語。さやうなら。

アデライデ[獨 Adelaide](名)【音】ドイツのベートーヴェン作の名高い聲樂曲。

あてる[あてる][当てる](他動、タ下一)「あつ」(當つ)の口語。

あと[跡・迹・蹟](名)㊀足のあと。㊁昔あった物事の場所。㊂過ぎ去った後にまで殘るしるし。㊃筆跡。㊄先例。手本。㊅後世に及ぼす功績。㊆家督。あとめ。㊇足の方。㊈ゆくへ。行方。㊉往來。ゆきき。

—の—しるし[跡のしるし](名)はか(墓)

—絶ゆ(句)㊀往來が絶える。㊁相續する人がなくなる。**—を追ふ**(句)親しい人の死んだ後にすぐ死ぬ。**—を晦ます**(句)行方をかくす。出奔する。逃亡する。**—を垂る**(句)「佛」佛が衆生濟度の爲にかりに神となってあらはれ給ふ。**—を蹈む**(句)前人の事業・行跡を繼ぐ。

あと[後](名)㊀のち。以後。死後。未來。㊁すゑ。㊂うしろの方。しりへ。㊃過去。以前。㊄子孫。

—の雁が先になる(句)あとから來たものにおひ越される。**—は野となれ山となれ**(句)あとはどうなっても構はぬといふ。**—を引く**(句)㊀いつまでも食る。㊁或事が永く續く。**—を守る**(句)㊀留守番をする。㊁死後をうけつぐ。

あと[阿堵](名)あとぶつ。金錢。

あど(名)能・狂言の仕手(て)の次の役者。わきし。

あど(副)如何に。何と。(古語)

アド[Ad:](名)アドヴァティズメント(Advertisement)の略。廣告。

あとあし[後足・後脚](名)獣のうしろあし。

あとあと[後後](名)のち。のちのちの事柄。

あとあとげつ[後後月](名)せんせんげつ。去去月。

あとう[あとう][與ふ](他動、ハ下二)㊀我が物を他に渡してその人の物とする。おくる。つかはす。やる。くれてやる。㊁受けさせる。

あとう[あとう][能ふ](自動、ハ四)㊀適合する。かなふ。㊁できる。なし得る。

あとう[あとう][鶏ふ](他動、ハ下二)妻めとる。(古語)

あとう[あとう][阿黨](名)なかま。黨類。

アドヴァイザー[Adviser](名)顧問。相談役。

アドヴァタイザー[Advertiser](名)廣告主。

アドヴァティズメント[Advertisement](名)㊀廣告。廣告紙。㊁廣告者。廣告主。㊂通知書。㊃報知書。

アドヴァンス[Advance](名)❶前進。進歩。❷前拠。前貸。前金。❸相場を上げること。❹いひ寄ること。**—ガード**[Advance guard](名)前衛。

アドヴァンテージ[Advantage](名)❶好都合。有利。卓越。❷庭球で、デュースの後にいづれかが一點を得ること。❸役勝。**—アウト**[Advantage out](名)庭球で、デュースの後、レシーヴァー(サーヴを受ける側の人)が一點を得ること。**—イン**[Advantage in](名)庭球で、デュースの後、サーヴァー(球を打つ人)が一點を得ること。

あとうがたり[あとう語](名)❶話す人の心を知って應答すること。❷なぞなぞかたり(謎謎語)。(以上古語)

あどうつ[あどうつ]自動ダ四)相手の心持を理解して調子をあはせる。相槌をうつ。(古語)

あとおい[あとおい][後笠](名)(背に負ふかあと(後)といふ(おい)笈。「する役。しんがり。後備。

あとおさえ[あとおさへ][後押](名)行列の最後を警戒すること。❷後援。後援者。うしろだて。

あとかえり[あとがへり][後覆](名)後向きになってもんどりうつこと。とんぼがへり。

あとかた[跡形](名)あとと殘ったしるし。痕跡。**—なし**[あとかたなし][跡形無し](形、一)❶形跡がない。在ったあとがない。❷わけがわからない。

あとかた[後肩](名)棒の後方をかつぐかつぎ。後棒。「後の始末をすること。

あとかたずけ[あとかたづけ][後形見](名)事の終った後の記念。

あとがたみ[後形見](名)あとの記念。

あとがね[後金](名)契約の金額のうち若干を渡した殘金。あときん。のこりきん。

あとかばね[後姓](名)子孫。後裔。(古語)

あとがま[後釜](名)後任者。あとがはり。

あとがわり[あとがはり][後替](名)候補者。あとがま。

あとぎよめ[後清](名)葬式を出したあとの室内を神官・僧侶を招いて祓ひ清めること。

あときん[後金](名)あとがれ。

あとくち[後口](名)❶殘った部分。❷飲食したあとに口に殘る感じ。❸話のしまひ。

あとげつ[後月](名)先月。

あどけない[あどけない][形「あどけなし」の口語。

あどけなさ[あどけなさ](名)あどけないこと。又、その度合。

あどけなし[あどけなし][形、一)無邪氣である。わるがない。「又、その人。

あとこし[後興](名)奥のあとの方を舁くこと。

あとさき[後先](名)❶あとときき。❷前後。❸全部。みな。**—になる**(句)前後が入れれかはる。**—見ず**(句)前後の考なく事をする。むてっぱう。

あとさく[後作](名)【農】一度收穫した後、再びそこに植ふる作物。うらまき。

あとさん[後産](名)産後に、殘ってゐる胞衣などのおりること。のちざん。

あとじえ[あとじえ][後智慧](名)事のすんだあとに出すきり。しりこみ。❷先代の家督を繼ぐこと。遺産。あとめ。**—そうろう**[あとじえそうらう][跡式爭論](名)家督爭ひ。遺産爭ひ。

あとじさり[後退](名)❶後方へ退くこと。あとずさり。しりごみ。❷動【ありじごく】(蟻地獄)。

あとして[後仕手](名)能・狂言で、一曲の中入(附)。

あとしまつ[後始末](名)(あとかたづけ)後片付。

あとじょうり[あとじやうり][後じゃうり](名)後退。あとじさり。あとぢより。「家督をつがせる。

あとしらす[跡しらす](名)あとをとらせる。

あとしらなみ[跡白浪](名)❶船の通った後に立つ白波。❷行方知れずになること。

あとじり[跡尻](名)吉原の遊郭で、見世と勝手との間を仕切って隙子を立てた所。番頭と遣手のゐる所。

あとずさり[後退](名)あとじさり。

あとすぼまり[後窄](名)あとこの方のすぼまってゐること。あとすぼり。「あとおさへの軍勢。殿軍。

あとぞなえ[あとぞなへ][後備](名)後方に備へる軍勢。

アド・バルーン[Ad. balloon](名)廣告氣球。

あとだのみ[後頼](名)❶後の事を依頼すること。❷今後を頼みにすること。

あとたる[あとたれる][跡垂る](自動、ラ下二)【佛】佛・菩薩が、衆生濟度のために權(かり)に神となって我が國に現はれる。

あとつき[跡附](名)たいこもち(幇間)の異名。

あとつぎ[跡繼](名)❶先代のあとをつぐ人。よつぎ。あとより。❷前人の學問・技藝・官職などをつぐ人。後繼者。

あとつけ[後附](名)客を乘せた馬の後方につけた荷。**—まくら**[後附枕](名)後附の荷を枕とすること。

あとと[後取](名)あとつぎ。跡繼。

すこ[跡取息子](名)あととりになるべきむすこ。嫡男。**—むすめ**[跡取娘](名)あととりとなるべき娘。嫡女。「な。(古語)

あどなし[あどなし](形、一)あどけない。無邪氣

あとなしごと[跡無事](名)あとかたもないこと。いつはり。

あとなしびと[跡無人](名)所定めず流浪する人。宿所なき流浪人。

あとぬし[跡主](名)足あとの主。(古語)

あとのつき[後月](名)前月。去月。あとげつ。

あとのまつり[後祭](名)❶祭のすんだ翌日。❷時機を逸したから無駄であるといふこと。

あとのり[後乘](名)❶行列の後方にある騎馬の士。❷後陣となって城に乘り込むこと。

あとば[後齒](名)❶下駄の後方の齒。❷前部を駒下駄につくり、後部に一枚の齒を入れた婦人用の下駄。

あとはかなし[あとはかなし][跡果無し](形、一)痕「跡がない。(古語)

あとばこ[後箱](名)大名の行列の後にある調度なれた挾箱。

あとばら[後腹](名)❶產後の腹痛。❷事後の苦痛。**—が病める**(句)事の過ぎた後に、出費の多いのに苦しむ。

あとばらい[あとはらい][後拂](名)❶買物の代價を後にはらふこと。❷あとさきめ(後海)。

アド・バルーン[Ad. balloon](名)廣告氣球。

あとび[跡火](名)葬式を出した後に焚く火。おくりび。

あとひき[後引](名)❶酒の座の長くなる癖。❷得るに從ひむやみにはてもなく酒をほしがること。**—じょうご**[あとひきじやうご][後引上戶](名)あとひきの癖のある酒豪。

あとひき[後引](名)酒をつく時、銚子の口をつ「たって滴ること。

あとひさり[後びさり](名)❶あとへひくこと。後退。あとじさり。❷動【ありじごく】(蟻地獄)。

あとぶつ[阿堵物](名)(晉書の王衍傳に「學阿堵物」去、是言錢」とあるに基づく。あれ。あの。このものの義)金錢。あとと阿堵)。

あとふところ[後懷](名)❶人の子を養育すること。❷養父母のてもと。(古語)

あとぶね[後船](名)❶この次に入港する船。❷劇場の後方に設けた幾敷。

あとへ[後方](名)❶足の方。❷しりへ。うしろ。

あとへん[後邊](名)事の濟んだ後。好機會を失ふこと。後の祭。

あとぼう[後棒](名)あとかた(後肩)。(先棒の狂言。❷事の終ったあと。❸次にする仕事。

あとまくら[後枕](名)寢る時の足の方と枕の方と。あとさき。前後。(古語)

アド・マネキン[Ad. manequin](名)アドヴァティズメントマネキン(Advertisement manequin)の略。マネキン。

あとまる[後丸](名)踵の方を丸くした駒下駄。

あとまわし[あとまはし][後廻](名)仕事を次にまはすこと。又その仕事。

アド・マン[Ad. man](名)新聞・雜誌の廣告係。

アトミズム[Atomism](名)【理】げんしろん(原子論)。

アトミラル[Admiral](名)海軍大將。水師提督。

あとめ[後目](名)のち。うしろ。あと。しり。

あとめ[跡目](名)❶家督をつぐこと。あとしき。あとつぎ。❷前任者のあとがま。

あともう[あとまうす(率ふ)](他動・ハ四)ひきゐる。いざなふ。ともなふ。(古語)

アトモスフィヤ[Atmosphere](名)❶大氣。空氣。❷雰圍氣。周圍の氣分。情調。

アトモスフェリック・エレクトリシティー[Atmospheric electricity](名)【理】空中電氣。空電。

あとーもどり[後戻](名)❶來た方へ戻ること。背「逆」。❷物事の退歩すること。

アトモメーター[Atmometer](名)【理】大氣の濕度を測る器械。濕度計。

あとやく[後厄](名)厄年の次の年。(前厄の對)

あとやく[後役](名)前者の役目をうけつぐこと。又、その人。「殿槍。

あとーやり[後槍](名)槍を持ってしんがりする者。

アドラー[Max Adler](名)【人】オーストリヤの社會學者。カント派のマルクス主義者。ウィーン大學教授。「マルクス主義」等の著がある。(一八七三)

アトラス[Atlas](名)❶【神】ギリシヤ神話中の神。天を荒した罪でセウスに罰せられ地球の西端に立って、天を支へるやうに命ぜられた。❷同上の像を地圖本の見返しに描いた所から、地圖をいふ。

アトランティス[Atlantis](名)【傳】古代ギリシヤ人が、大西洋上にあると空想した樂土。

アトランティック・オーシャン[Atlantic Ocean](名)【地】新舊兩大陸の間に挾まれた大洋。大西洋。

アトラント[Atlantes](名)【美】古代ギリシヤの建築に、支柱として用ひられた裝飾用の男性の立像又は跪像。

あとり[獦子鳥・花雞](名)【動】燕雀目雀科の小鳥。「ほほじろ」に似、頭から背にかけて脊黒色を呈し、頭・喘は樺色。ヨーロッパ・アジヤの溫寒帶に產し、秋季、大群をなして我が國に渡る。あつどり。

〔りとあ〕

アトリエ[佛 Atelier](名)【美】畫家や彫刻家の仕事場。畫室。工房。製作所。

アドリヤ・かい[一海](名)【地】(Adriatic Sea)地中海の一支海。卽ちイタリー半島東方の灣入海。

アドレス[Address](名)❶住所。宛名。❷演說。話ぶり。**—ブック**[Address book](名)住所氏名錄。「宛名印刷機。

アドレソグラフ[Addressograph](名)【機】

アドレッセンス[Adolescence](名)男女の若い時代。青春期。青年期。

アトロピン[Atropine](名)【化】茄子科の植物に含まれてゐる苦味ある白色針狀の結晶。制汗劑・散瞳劑・鎮痙劑等に用ひる。アトロピネ。

あと-わ[後輪](名)後方の車輪。しづわ。

あな[穴・孔](名)❶くぼんだ所。うつろになった所。❷祕密。❸窓。❹女の陰部。❺損失。失敗。❻かくれが。はせ。**—あらば入りたし**(句)恥ちいって顏を見られるのがつらくて身を隱したい程に思ふ。**—のあくほど見る**(句)他人の顏をよく見つめるにいふ。**—をあける**(句)つかびこむ。

あな[噫・嗚呼](感)驚歎した時に出す聲。ああ。あら。(古語)**—尊**[ぎ](句)ああ尊い。ああ有難い。

アナ[Ana.](名)❶【社】アナーキストの略語。❷アナーキズムの略語。❸アナウンサーの略稱。「義者。

アナーキスト[Anarchist](名)【社】無政府主

アナーキズム[Anarchism](名)【社】無政府主

あない[案内](名)「あんない」の略。(古語)【義。

あないー[穴一](名)地にあけた穴に錢をうち込み、穴に入ったものを所得とする子供の遊戯。今は錢のかはりに、めんこ・小石などをつかふ。あなうちぜにうち。

あないち[天名地鎭](名)我が國の神代文字の一種と稱せられるもの。我が國漢字の渡來以前に使用したと傳へられる音標文字。幾何學的の直線と點で單音をあらはすもの。

あなう[嗚呼・憂](感)つらいことかな。(古語)

あなうち[穴打](名)あないち(穴一)。

あなうめ[穴埋](名)❶穴をうづめること。❷損失をつぐなふこと。「しうち。(古語)

あなうら[足裏・蹠](名)足のうら。あうら。

アナウンサー[Announcer](名)❶ラヂオ放送局の告知を掌る者。❷ラヂオの放送者。送話者。❸競技會で、戰技種目・記錄などを擴聲機で觀衆に報する人。❹おしゃべり。

アナウンス[Announce](英・動)❶告知する。❷放送する。

あなえぐ[あなえげ・げ]「蹇ぐ」(自動・ガ四)足がいたむ。歩きなやむ。あなやむ。(古語)

あなかがり[穴縢](名)卸[おろし]又は紐を通す爲にあけた孔の緣を絲でかがり縫ふこと。

あなかしこ[穴賢](感)❶あおおそれおほい。あおもったいない。❷慎むべきこと。祕すべきこと。❸手紙の末文に用ひる敬語。(恐惶謹言の意)

あながち[強ち](副)むりに。しひて。(古語)

あなかま[噫喧](名)人を制止する語。ああ、やかましい。だまれ。(古語)**—し**[くくしくしく]「噫喧し」(形・二)やかましい。

あなかんむり[穴冠](名)漢字の冠の一。「究」「空」等の洩字の頭にある穴の字。

あなぐま[穴熊・貉](名)【動】哺乳動物、食肉目鼬科の獸。形はたぬきに似、山中に穴居す。毛色黑く黃ばみ、體は肥大し、四肢と尾とは短く、爪は長く銳く、强大な前肢で地を掘り、裸出した鼻端を差入れて昆蟲・芋等を食ふ。

あなぐも[穴蜘蛛](名)【動】(いとぐも)地蜘蛛。

あなぐら[穴藏・窖](名)地中に穴を掘って倉の如くにして物を貯へる所。**—だいく**[穴藏大工](名)穴藏の內側の石などをつくる大工。あなだ

あなぐり[穴掘](名)あなぐること。穿鑿。「いく。

あなぐる[ぐらぬ・ぐれる]「穿る・索る」(他動・ラ四)穴(ぐら)るの意。さがす。さがし求める。穿鑿する。

アナクレオンテック[Anacreontic](名)【人】古代ギリシヤの抒情詩人。イオニヤのテオンスに生まれ、酒と戀を讃美する詩を作った。八十五歲で歿。(紀元前四五六—七五)

アナクレオンティック[Anacreontic](英、形)酒と女を讃美すること。

アナクロ[Anachro.](名)アナクロニズムの略。

アナクロニズム[Anachronism](名)時代錯誤。時世に合はぬこと。時代とかけはなれた行動や思想。アナクロ。

あなご[穴子・海鰻](名)【動】無足類の海產硬骨魚。體に似てゐるが、下顎は上顎よりも突出せず、脊鰭の附根が前方にあり、體側に銀色の小點が一列をなす。體長三〇—九〇糎。近海の砂底に棲息し、夜間出て小動物を捕食する。種類が多い。

〔ごなあ〕

アナコリズム[Anachorism](名)或國に適當な政策又は法律を、事情を異にする土地にも用ひんとする錯誤。土地錯誤。

あなさがし[穴探](名)人の缺點を探すこと。あらさがし。

あなし(名)西北風。あなせ。(古語)**—け**(名)あなしが吹いて來て、雪・雨などを催すこと。(古語)

あなじ[…穴痔](名)【醫】じろう痔瘻。

あなすえ[…足末](名)❶子孫。❷足のさき。❸子孫。(古語)

あなずらわし[あなづらはしがる・しがれる]「侮はし」(形・二)(古語)

あなずり[あなづり・ぐれる]「侮」(名)あなどり。(古語)**—もの**[の]「侮者」(名)あなどられるもの。(古語)

あなずり[…穴釣](名)魚のひそんでゐる石垣の穴などへ、釣絲の餌を差込んで魚を釣ること。

あなずる[あなづらる・ぐれる]「侮る」(他動・ラ四)あなどる(侮る)。(古語)

あなた[彼方](代)❶あちら。むかふの方。❷以前。まへから。❸おまへさん。貴下。❹あの人。**—おもて**[彼方面](名)❶あちらの方。(古語)**—がた**[彼方方](名)❶あちらの味方。(古語)❷君たち。諸君。**—まかせ**[彼方任](名)【佛】阿彌陀佛の誓願にまかせること。佛の力にすがること。「藏大工。

あだいく[穴大工](名)あなぐらだいく(穴

あなと[穴門](名)【地】❶下關海峽の古稱。❷長

門の古稱。**—の・とよら**[穴門豐浦宮](名)[歴]仲哀天皇の征西の時、長門國豐浦郡豐浦に設けられた行宮。

あなとうと……[穴名賀](名)[言]雅馬樂の呂の曲名。

アナトール・フランス[Jack Anatole France](名)[人]フランスの文豪。高踏派詩人。後、小說を書き、文藝批評家・思想家となり、晩年には共產黨に加盟した。「シルヴェストル・ボナールの罪」「赤い鳥」ジャンヌダルク傳」等の著述がある。一九二一年、ノーベル文藝賞受領。(一八四四—一九二四)

あなどる[侮る](他動、ラ四)みさげる。みくだす。いやしめる。かろしめる。けいべつする。

あなない[穴無い](名)⊖おぎなふこと。たすけ。⊖足かせ。あしこしる。あしぼ。(古語)

あなな し[穴無し](名)膣道が膜でおほはれた不具な女。

アナナス[Ananas][鳳梨](名)[植]熱帶に產する鳳梨科の常綠草本。全形「おもと」に似、長さ一米以上に達するものあり、葉の緣邊には銳い鋸齒がある。又時、叢葉の間から松毬狀に密集した紫色の花を開き、長さ一五糎內外の楕圓形の果實を結ぶ。初冬に至り成熟して帶黃赤色となる。これをパイナップルと稱し、食用に供する。

[スナナナア]

あなに[副]きはめて。あやに。(古語)　[(古語)

あなにえや[妍哉](句)ああ美しいことよ。(古語)

あなにく[生憎](名・副)あやにく。思はずも。(古語)

あなにやし(句)ああ美しいことよ。(古語)

あなのう[扶ぶ](他動、ハ四)おぎなふ。補助する。扶持する。(古語)

あなばち[穴蜂](名)[動]腰細蜂中の大なるもの。橙色黑色。前頭・後胸部に金色毛がある。つちばち(土蜂)。

あなひら[跗](名)足の甲。(古語)

あなふさぎ[穴塞](名)⊖穴をうめること。⊖缺損をうめること。

あなほり[穴掘](名)⊖穴を掘ること。⊖墓の穴を掘る人。⊖あなほりだいく。**—だいく**[穴掘大工](名)木材に穴を掘ること主とする大工。拙い大工。

あなめ(副)あやにく。あなにく。(古語)

あなもり・いなり[穴守稻荷](名)[神]東京市蒲田區羽田(はねだ)町穴守にある俗信の厚い稻荷。明治十八年の創建で、豐受大神を祀つてゐる。境內の鳥居は一萬餘に及ぶ。穴守神社ともいふ。

あなもん[穴門](名)築地・石垣などを切り穿つて造つた門。

あなや[嗟哉](感)驚いた時に出す聲。(古語)

あなや・む[(ごとみむ)][足惱む](自動、マ四)足が痛む。あるきなやむ。(古語)

あなり(句)(ある+り)の略。あり。

アナリシス[Analysis](名)分析。分解。解析。

アナロジー[Analogy](名)⊖類似。相似。⊖[論]類推。比論。⊖[數]等比・比例。

あなんだ[阿難陀](名)[人][梵Ananda]提婆達多の弟。釋迦の十大弟子の一人。又、十六羅漢の一。多聞強記で佛說の經卷は、大抵この人の記憶によつて釋迦の入滅後結集せられた。

あに[兄](名)⊖同じ親から生まれた年長の男。えせ。このかみ。⊖妻の兄。夫の兄。姉の夫。義兄。⊖男子を親しんで呼ぶ稱。せ。**—い**[兄](名)兄の下等語。**—き**[兄貴](名)あに。**—ご**[兄御](名)兄の敬稱。**—ごぜ**[兄御前](名)兄の尊稱。**—じゃひと**[兄者人](名)兄である人。兄。**—すえ**[兄季](名)すゑの兄。**—でし**[兄弟子](名)自分よりさきに同じ師についた人。**—ぶん**[兄分](名)假に兄と定めて尊ぶ人。**—むすこ**[兄息子](名)二人以上ある息子の中の年上のもの。**—よめ**[嫂](名)兄の妻。

あに[豈](副)(普通は下に反語がくる)⊖どうして。いかで。⊖いかさま。おそらくは。**—圖らんや**(句)思ひも寄らぬことにふ。

アニス・ゆ[—油](名)繖形科の栽培植物アニスの種子から採つた油。無色又は黃白色で芳香があり、藥用及び食用に供せられる。

アニマトグラフ[Animatograph](名)活動寫眞。

アニマトライズ[Animalize](英、動)獸的にする。獸性を與へる。

アニマリズム[Animalism](名)獸慾主義。肉慾主義。

アニミズム[Animism](名)[哲]萬有靈動觀。生氣崇拜敎。宇宙の萬物には、悉く神靈が宿つてゐるとなす原始的種族の迷信。

アニリン[Aniline][亞尼林](名)[化]石炭を乾溜する時に出る無色異臭の液體で、染料又は藥・硫黃を溶かすに用ひる。**—えん**[亞尼林鹽](名)[化]アニリンの鹽化物の片狀の結晶體で、木綿纖維の黑色染料に用ひる。**—せんりょう**[亞尼林染料](名)アニリンを原料とした染料の總稱。コールタール染料。

あぬらす[(ごとせす)][足濡す](他動、サ四)足を濡す。(古語)

あね[姉・姉](名)同じ親から生まれた年長の女。⊖妻の姉。夫の姉。兄の妻。⊖女を親しんで呼ぶ稱。**—え**[姉え](名)⊖「あねに」の略。⊖若き女を呼ぶ稱。**—き**[姉貴](名)姉の尊稱。**—ご**[姉御](名)⊖姉の敬稱。姉を親しんでいふ稱。⊖博徒の親分の妻。**—ごぜ**[姉御前](名)姉の敬稱。**—さまごと**[姉樣事](名)女兒が人形を並べて遊ぶこと。女兒が紙雛などを弄ぶこと。**—じゃひと**……[姉者人](名)姉である人。**—じゅうと**……[姉姑](名)夫の姉。**—じょうう**……[姉女郎](名)同一の妓樓で、古參の女郎。**—にょうぼう**……[姉女房](名)夫より年上の妻。**—ぶん**[姉分](名)假に定めた姉。**—むこ**[姉婿](名)姉の夫。**—むすめ**[姉娘](名)二人以上ある娘の中の年長者。

あねがわ……[姉川](名)[地]滋賀縣東淺井郡にある川。流程約五〇粁で、琵琶湖に注ぐ。元龜元年(一五七〇)織田信長が淺井長政を破つた古戰場。

アネクドート[Anecdote](名)逸話。逸史。

あねったい[亞熱帶](名)[地]地球の表面を緯線によつて區分した地帶の一。熱帶と溫帶との中間の地帶。**—りん**[亞熱帶林](名)[植]かし・くすのき・まつ・すぎ等の如き亞熱帶に適合する樹木の繁茂する森林。

あねは・のまつ[姉齒松](名)宮城縣栗原郡澤邊村姉齒にあつた松。古歌に詠まれたので名高い。

アネモネ[拉Anemone](名)[植]毛茛(ごがつばな)科の多年生草本。園藝植物。莖は高さ二〇糎內外。葉は羽狀に分裂し、花には花冠がなく、萼が花冠のやうに見え、多く赤紫色。耐寒性の球根を有する。翁草。

アネロイド・せいうけい[晴雨計](名)[理](アネロイドは無液の意)フランス人ヴィディの考案にかかる無液晴雨計。藥品を用ひず、薄い金屬製の眞空の匣の歪み(ひずみ)を撓で指針に傳へ、これを讀んで氣壓の變化を知る晴雨計で、現在一般に廣く用ひられてゐる。

あの[彼の](代)かの。**—さん**[彼樣](代)あの人。あのお方。**—ぢ**[蛸の時鳥](句)(榎本其角の句)人の性行又は物事の見掛によらぬにいふ。

あのう(あをう)[穴生・賀名生](名)[地]奈良縣吉野郡の村。後村上天皇の行宮のあつた所。苔名穴太。

アノード[Anode](名)[理]電氣の陽極。[(あをう)

あのくたらさんみゃくさんぼだい[阿耨多羅三藐三菩提][梵Anuttara-samyak-sambodhi]無上正遍知・無上等正覺と譯する)⊖佛の最上の智慧。⊖佛の智德をたたへる一名號。

あのくぼだい[阿耨菩提](名)[佛]前條に同じ。

あのつ[安濃津](名)[地]今の三重縣津市の古稱。

あのの・もの(名・副)何のかのといふこと。あれやこれやと文句をいふこと。

アノフェレス[Anophéles](名)[動]蚊の一種。

普通のよりも大きく、翅面に黒斑があり、物にとまる時は後脚と尻をあげて體を斜にする。マラリヤ病・黄熱病の媒介者。はまだらか。

あのよ〔彼世〕(名) 死後の世界。來世。後世。**—千日この世一日**(句)死後千日の樂しみよりも、現世の一日の樂しみの方がよい。

あのりさき〔安乘崎〕(名)【地】三重縣志摩郡の東端にある岬。的矢港の口にあって岩礁多く、岬上に燈臺がある。燈明岬。

あば(感)(「さらば」の訛)さやうなら。(別れの語)

あば〔網端・浮子〕(名) 網の上縁につけて、網を水中に浮かびせるもの。長方形・楕圓形・飾狀・圓筒狀等の種類があって、木・竹・コルク・玻璃球・ゴム環等を用ひる。**—ゆき**〔網端行〕(名) 網端を著ける部分の長さ。

アパート〔Apart〕(名) アパートメント・ハウスの略。

アパートメント〔Apartment〕(名) ❶部屋。座敷。貸間。❷アパートメント・ハウスの略語。

アパートメント・ハウス〔Apartment house〕(名) 一大建築物の内部が多數の住宅にきられたもの。集合住宅。間貸式住宅。蜂窩住宅。

あはき〔槌〕(名)【植】かし(樫)。(古語)

あはぎ・はら〔槌原〕(名)【地】伊非諸尊の貢品から歸りに獻ひなをせられた所。宮崎縣宮崎郡宮崎村鹽路字青木あはぎ)の地だといふ。

あばく〔掘く〕(他動、カ四) ❶土を掘り開いて中から物を出す。❷他人の密事を探り出して發表する。❸朝放つ。

あばずれ〔阿婆擦〕(名) わるく人すれがしてあつかましくなったこと。又、その女。すれっからし。いも。みっちゃ。じゃんこ。**—ずら**〔疱瘡面〕(名) あばたのある顏。**—も醫**〔ぶら〕(句) 愛すればあばたもかはゆく見えること。

アパッシュ〔仏 Apache〕(名) フランスのパリに於ける一種の無賴漢。モンマルトルに巣喰ひ、團體を組んで、夜間市中に出沒する。**—ダンス**〔Apache-dance〕(名) パリの下層社會に行はれる頽廢的なダンス。男女二人で踊り、男性が女性を荒く扱ふを特徴とする。最近は社交ダンスの一種となる。

あはは(名・副) 笑ふ聲。

あはや〔足速〕(名) 足の早いこと。(古語)

あばら〔肋〕(名)【生】あばらぼね(肋骨)の略。**—ほね**〔肋骨〕(名)【生】胸部をおほひ、內臟を保護する骨。ろくこつ。

あばら〔荒〕(名) あれはてたさま。(古語) **—や**〔荒屋〕(名) ❶あれはてた家。破屋。❷旅人の休憩所として設けた四方のかこひのない家。

あばら〔疎〕(名) まばらなさま。物のすきまのあることの。**—だけ**〔疎竹〕(名) まばらに並んだ竹。

あばらぎ〔疎雜〕(名) まばらにゆった垣。

まばき〔疎雜〕(名) まばらにゆった垣。

あばり〔網針〕(名) あみばり。

あばる〔荒る〕(自動、ラ下二)荒れはてる。(古語)

あばる〔暴る〕(自動、ラ下二)❶亂暴する。さわぎまはる。❷酒色にふける。

あばれ〔暴〕(名) あばれること。亂暴。放蕩。**—うま**〔暴馬〕(名) あばれくるふ馬。**—ぐい**〔暴食〕(名) 亂暴にくふこと。むやみに食ふこと。**—ぐみ**〔暴組〕(名) 暴力に訴へて物を掠奪する盜人の群。**—たんぜん**〔暴丹前〕(名) ❶芝居で、亂暴者に扮する俳優の着たんぜん。そのやうな暴者。(名) 亂暴人。あばれ。

あばれる〔暴れる〕(自動、ラ下一)「あばる」の口語。

あび〔阿鼻〕(名)【佛】梵Avīci八大地獄の一。無間の意で、惡行をしたものが、死後に間斷なく苦しみを受ける地獄。あびだいこと。**—かんじごく**〔阿鼻叫喚地獄〕(名)【佛】「あびじごく」。**—きょうかん**〔阿鼻叫喚〕(名)【佛】阿鼻地獄と叫喚地獄。**—じごく**〔阿鼻地獄〕(名)【佛】あび(阿鼻)。

あひさん〔亞砒酸〕(名)【化】三酸化砒素の通稱。猛烈な毒藥。無味・無臭の白色片。飲めば腹痛・嘔吐を起し、心臟が麻痺して死ぬ。少量は強壯劑となる。工業用・醫藥用に用ふ。**—カリえき**〔亞砒酸加里液〕(名)【化】亞砒酸と重炭酸カリウムとを酒精溶液に溶かした液で、透明又はやや濁って赤黃色なる液。醫藥に用ひる。**—どう**〔亞砒酸銅〕(名)【化】銅鹽の溶液に亞砒酸鹽の溶液を加へて得る綠色の沈澱物。毒性がある。壁紙の顏料に用ひられる。

あびす〔油・水などをそそぎかける〕❶弾丸などをそそぎかける。❷刀で切る。❸議論で攻める。

あびせる〔浴びせる〕(他動、サ下二)❶「あびす」(浴びする)の口語。❷油・水などをそそぎかける。❸弾丸などをそそぎかける。❹刀で切る。❺議論で攻める。

アビリティー〔Ability〕(名) 能力。伎倆。

あびる〔鴛・家鴨〕(名)【動】雁鴨科の飼鳥。「まがも」を飼ひ馴らしたもので、鴨に似て大きく、足にみづかきがあり、雄は背首であるが、雌は文様が少い。**—げた**〔鴛下駄〕(名) 表づきで歯の間狹く、高の低い下駄。**—が文庫を背負ふ**(句) 女の尻の大きい譬。**—の火事見舞**(句) 背の低い人が尻をふって急いで行く姿をいふ。**—の脚絆**(句) 物の短きに譬っていふ。

あふ〔阿父〕(名) 父を親しみ敬していふ語。おとうさん。**あふ**〔亞父〕(名) 君主が軍師佐ける人を親しみ尊んでいふ語。

あふ〔阿附〕(名) おもねること。へつらひ從ふこと。

あふ〔虻・逗〕(名)【動】雙翅目の昆蟲。種類が多く、概して蠅よりは大で、多くは頭部が大で複眼を有し、美くしい光澤を有する。雄は人又は牛馬などに附いて血を吸ひ、雌は花に附いて花粉・花蜜を食する。

あふ〔浴ぶ〕(他動、バ上二) ❶湯水を體に注ぎかける。あむ。❷受ける。

あふあふ(名・副) ❶あやふく恐れる感じ。❷水に溺れてもがき苦しむさま。

アフォリズム〔Aphorism〕(名) ❶哲學・科學・處世訓人世觀上の眞理を簡潔にあらはした句。❷金言。格言。

アフガニスタン〔Afghanistan〕(名)【地】アジヤ洲西南部の獨立國。イラン高原の東北部に位し、面積約六九萬平方粁。英國政府の保護を受けてゐる。首府はカアール。

あふく〔泡〕(名) あわ。氣泡。**—ぜに**〔泡錢〕(名)「勞ぜすれば、ぜに」。

あふくまがわ〔阿武隈川〕(名)【地】福島縣西白河郡旭嶽に源を發し、福島盆地を流れて、太平洋に注ぐ川。長さ約一九七粁。

アブサン〔仏 Absinthe〕(名) 五〇—八〇%の酒精を含む強烈な綠色の洋酒。「にがよもぎ」の花や葉で苛烈な香味をつけたもので、飲用によって精神錯亂に陥り易い。

あふす〔洗ふす〕(他動、サ四)あますこと。(古語)

あぶす〔除す〕(他動、サ四)❶湯水をからだに注ぐ。❷強ひて人にかぶせる。轉嫁する。

あぶすぎ〔浴ぶす〕(他動、サ下二)❶「な。

アブストラクト〔Abstract〕(英、形) 抽象的。

あぶすり〔鑑摺〕(名) あぶみ(鑑)の他物とすれること。

アブセンス〔Absence〕(名) 不在。留守。缺席。

アブソルバント〔仏 Absorbante〕(名) ❶吸收劑。收斂劑。❷(美)カンヴァスの一種。油繪で布地上の塗料の油を吸收して繪の光澤を消すやうに作られた白堊質の畫布。吸收畫布。

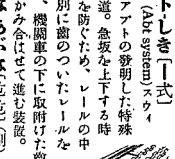
あぶだ〔蛹・浮陀〕(名)【佛】梵Arbuda八寒地獄の一。ここに落ちるものは、寒冷に觸れて、身體に「あぶだ」を生じる。

アフター〔獨 Aphthae〕(名)【醫】口蓋面の傳染によって、幼兒の舌・脣・齒齦などに生ずる白膜狀の潰瘍。鵞口瘡。

アフターヌーン・ティー〔Afternoon tea〕(名) 英米で午後五時頃に喫する個例の茶。わが國の「おやつ」に當る。

あぶつ・に〔阿佛尼〕(名)【人】鎌倉時代の女流文學者。安嘉門院に仕へて四條・右衛門佐といひ、藤原爲家に嫁し、後、剃髮して阿佛尼といふ。その和歌は「續古今集」以下の勅撰集に入る。主著に「十六夜日記」がある。弘安六年(一九四三)没。年七十五。

アブトしき［一式］(名)［Abt system］スウィス人アブトの發明した特殊の鎖道。急坂を上下する時滑動を防ぐため、レールの中間に別に齒のついたレールを敷き、機關車の下に取附けた齒車とかみ合せて進む裝置。


［道鎖式トアブ］

あぶなあぶな［危危］(副) あやふく思ひながら。

あぶない［危い］(形) ❶あぶないさま。❷まう少しのところ。**—橋**(句) 危險な橋。轉じて危險な手段を用ひること。

あぶなげ［危げ］(名) あぶなさう。

あぶなし［危し］(形一) あぶない。あぶなくならぬもの。

あぶなもの［危物］(名) ❶頼みにならぬもの。❷あてにならぬもの。

アブノーマル［Abnormal］(英、形) ❶病的な。❷變態の。異常の。

あぶのめ(名)【種】玄參科の一年生草本。水田に自生し、高さ一五糎位。地下莖を有し、葉は小さい披針形で對生して、莖も葉も液汁に富む。夏、淡紅色の花を葉腋に生ずる。ばちばちぐさ。

あぶはち［虻蜂］(名) ❶虻と蜂。❷つまらぬ者。うざうだかさ。**—取らず**(句) 二つの物を一時に得ようとして一物をも得られないことにいふ。

あぶみ［鐙］(名) 馬具の名。鞍の兩脇にさげ、乘者の足を蹈みかけるもの。**—がしら**［鐙頭］(名) 鐙を鞍につりまきける革帶。**—がわ**［鐙革］(名) 鐙の形の瓦。軒のはづれに葺く。からくさが はらも はながはら。**—ぐわ**［鐙鍬］(名) 鐙の形の鍬。雜草を刈るに用ひる。**—ずり**［鐙膝］(名) ❶馬の脇腹のあぶみでこする部分。❷鐙の鑣當の鈕具に付ける部分。❸擂磨革を用ひてつくった泥除。**—つり**［鐙釣］(名) 鐙を釣るひも。

あぶみいた［足蹈板］(名) 普請場で通路にあてる爲に、足場にかけ渡した板。

あぶら［油］(名)【化】炭化水素の化合物で、常温で水に溶解しない液狀の物質。動・植・鑛物から採り、燃料・燈用・醫藥・機械工業・食用・化粧用等に用ひる。❶生命力がなくなって死ぬ。❷業(ごう)が盡きて煩惱が滅する。**—を賣る**(句) 人の見てゐない所で、仕事の間になまける。**—をかける**(句) 人をおだてる。

あぶら［脂］(名) ❶化動物の體中から出る粘液脂肪。❷動物體から採って燈火や藥品に使ふあぶら。(脂)。❸人の皮膚から分泌するあぶら。(膩)。❹化粧油。**—が乘る**(句) ❶身體に脂肪が增して榮養がよくなる。❷魚鳥の脂肪が增して味がよい。❸仕事に興味を覺えて乘氣になる。**—を絞る**(句) 人を懲らす。

あぶら［脂膏］(名) ❶化動物の體中から出る粘液脂肪。❷人の皮膚から分泌するあぶら。(膩)。❸化粧油。

あぶらあげ［油揚］(名) ❶油で揚げた食品。❷あぶらあしし［膩足］(名) 脂を多く分泌する性質の足。足部多汗症。

あぶらあせ［脂汗］(名) 苦しい時に出る脂のまじった汗。

あぶらい［油飯］(名) 麻の實の油であげた米飯。(古語)

あぶらいし［油石］(名) ❶黑又は黃色のつやのある石。❷白米の中にある黃色の小石。

あぶらいため［油煠］(名) 食品を油でいりつけてやはらかくする。あぶらいり。

あぶらいど［油井戸］(名) 石油を汲取る坑井。

あぶらいり［油煠］(名) あぶらいため。

あぶらいろ［油色］(名) 赤みを帶びた黃色で、菜種油のやうな色。琥珀色。

あぶらえ［油繪］(名)【美】油繪具で畫布・板等に畫いたもの。

あぶらえのぐ［油繪具］(名)【美】亞麻仁油又は罌粟油・テレビン油で溶く油繪の繪具。

あぶらおうぎ［油扇］(名) 油紙で造った扇。

あぶらかけ［油鹿毛］(名) 薩摩政の愛馬。

あぶらかす［油糟］(名) ❶菜種・大豆・綿實・亞麻・落花生等の油をしぼった殘りの糟。窒素を含有するから、肥料とする。❷【文】松永貞德の著。山崎宗鑑の「大筑波集」中の前句を借りて、附句を試みたもの。一卷。寛永二十年版。

あぶらガス［油瓦斯］(名) 重油等を高熱度で分解した瓦斯で、燈用とする。

あぶらかぜ［油風］(名) 二月又は四月に吹く風。

あぶらがみ［油紙］(名) 桐油又は荏油をひたした紙。耐水を目的とする荷作り又は雨具に用ひる。とうゆがみ。**—に火の附いたやう**(句) ❶早く燃えること。❷(ちらちらべること。

あぶらかめ［油瓶］(名) 油を入れる瓶。あぶらつ

あぶらがや［油茅］(名)【植】水邊に自生する莎草(かやつりぐさ)科の多年生草本。高さ一米餘に達し、葉は狹長で薄い緑色の小穗を出す。

あぶらから［脂體］(名) 脂肪の多い身體。

あぶらからだ［油木］(名)【植】あぶらぎり(油桐)。

あぶらぎく［油菊］(名)【植】菊科の多年生草本。高さ一米位。葉は淺緑色で、菊に似て缺刻が多い。秋、黃色の花を頭狀花序に配列する。のぎく。

あぶらぎり［油桐］(名)【植】大戟(とうだい)科の落葉喬木。高さ約一〇米。葉は掌狀に分裂し、五月頃帶黃白色の花を著け、花後、球形の果實を結ぶ。材は器具に用ひ、種子から桐油(とうゆ)を絞る。油木。どくえ。

あぶらぎりっちょ(名)【動】きりぎりすの油色のもの。

あぶらぎる［油口］(名) すらすらとしゃべること。

あぶらぐち(名) 巧みな口上。

あぶらけ［油氣］(名) 油の成分。油のあるやうす。

あぶらげ［油揚］(名) あぶらあげ。

あぶらこ［油子］(名)【動】あゆなめ(鮎蝨)。

あぶらこき［油扱］(名) 染めて油をひいた麻絲。

あぶらこぼさず［油不零］(名) すなほな人。

あぶらごま［油胡麻］(名)【植】胡麻科の一年生草本。胡麻の一種。種口に多量の油を含み、淡黃色なもの。

あぶらさし［油尺］(名) 糟の中などの油の量を計る尺。

あぶらさし［油差］(名) ❶燈油を油皿に注ぐ具。❷機械類の摩擦する部分や車の軸に油を注ぐ具。あぶらつぎ。❸工場などで機械に油をさす人。

あぶらさら［油皿］(名) 燈油を盛って火をともすに用ひる小さい皿。

あぶらじごく［地地獄］(名) ❶罪人などが煮立った油釜の中でいりつけられること。❷【文】(おんなじごくしあぶらじごく)女殺油地獄。

あぶらじむ［油染む］(自動、マ四) 油がしみて汚れる。

あぶらしめぎ［油搾木］(名) 油を搾りとる轆轤製の器械。あぶらしめ。

あぶらじょうじ［油障子］(名) 紙に油をひいた障子。雨を防ぐに用ひる。

あぶらじょうもん［油證文］(名) 江戸時代に、子供が證約しない證據に、頭髮の油を指で柱につけたこと。「の多い肉。

あぶらじり［脂尻］(名) 鳥の尻の部分の脂肪

あぶらずく［脂著く］(自動、カ四) 身體に脂肪が多くたまってつやの出ること。

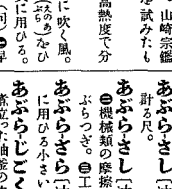
あぶらずけ［油漬］(名) 油で飼餌等の魚肉をゆでて、オリーヴ油を注加して罐詰にしたもの。

あぶらすすき［油薄］(名)【植】禾本科の多年生草本。山地に自生し、高さ約一米半。葉は線形で薄に似る。九月頃大形の花穗が出て、苞は白色、穎は紫色を帶びる。

あぶらすまし［油清汁］(名) 味噌・醬油・胡麻油をまぜた煮汁で、蕎麥などにかけて食ふもの。

あぶらずみ［油墨］(名) 油をまぜた墨汁。

あぶらぜみ［油蟬］(名)【動】有翅(ゆうし)目、蟬科の昆蟲。雄の體長は約四糎。體は黑色、翅は暗褐色、口吻は淺黃色。夏、樹上に鳴く。あさぜみ。


［ぎめしらぶあ］

あぶらだま〔油球・油玉〕(名) 油が玉のやうになって水上に浮かんだもの。「髪のつやのよいもの。

あぶらちゃせん〔油茶筅〕(名) 髪の一種。茶筅

あぶらつかさ〔油司〕(名) 古昔、宮内省に屬し、諸國からの調(ちょう)の油の事務を司どった役所。

あぶらつき〔油坏〕(名) あぶらざら(油皿)。

あぶらつぎ〔油注〕(名) あぶらさし(油差)。

あぶらつち〔油土〕(名) 粘土・オリーヴ油・酸化亞鉛・蠟・硫黄等を混合した粘土で、彫刻の原型をつくるに用ひる。

あぶらつつじ〔油躑躅〕(名)【植】富山に自生する石南科の落葉灌木。枝は多く、水平に出る。葉は枝の先に集まって出て、倒卵形で、裏に毛がある。花は白色で壺狀なし、鐘狀に凋萎する。花後、蒴果を結ぶ。我が國の特産。

あぶらつぼ〔油壺〕(名) ㊀婦人用の髪油を入れる磁器の壺。㊁機械の一定の位置に固著し、要部に滑油を給する小形の壺。オイル・カップ。

あぶらて〔膩手・脂手・脂手〕(名) 脂肪分泌量の多い手。

あぶらてり〔油照〕(名) 空が曇って風なく蒸暑いこと。「させるにつかふ一種の化粧用紙。

あぶらとり〔脂取〕(名) 顔などに浮く脂膩を吸收

あぶらな〔油菜・菜薹〕(名)【植】十字花科の栽培二年生草本。高さ一米余。葉は濃綠色で大きく、莖を包み、春の末、黄色の四瓣花を總狀花序に配列する。その實からは菜種油を搾り、葉は食用となる。

あぶらぬい〔油拭〕(名) 鉄腔内の油を拭ふ具。毛絲を束ね、針金に結びつけたもの。

あぶらび〔油火〕(名) ともし油に燈火を浸してともす火。

あぶらひき〔油引〕(名) ㊀油を塗ること。㊁油を

あぶらひや〔油火箭〕(名) 火藥をしかけた火箭。

あぶらべに〔油紅〕(名) 梳油に紅を練りこんだもの。俳優が舞臺で出血に擬する時に用ひる。

あぶらぼうしゃ〔油棚砂〕(名)【化】青黑色の油氣ある硼砂。

あぶらぼうず〔油坊主〕(名)【動】鞭蹠目の海産魚。頭大きく、暗褐色で背部に逆行の側線がある。深海の岩礁内に棲む。油に富み、食すると下痢を起かに光澤を出す磨き方。

あぶらみ〔脂身〕(名) 肉の脂肪の多い部分。「とす。最後に油をぬりて磨くこと。㊁油をぬいたやうに滑

あぶらみがき〔油磨〕(名) ㊀金具を磨く時に、

あぶらむし〔油蟲・蜚蠊〕(名) ㊀【動】(イ)直翅類の昆蟲。前翅は褐色、後翅は淡褐色で、扇狀にたたむ。歩行早く、觸れれば惡臭を放つ。臺所・船中などに住む。(ロ)あぶらまき(鮪蟲)。(ハ)・がれむし(黄金蟲)。㊁劇場に無料で入って妨害なるもの。㊂遊郭のひやかし客。すけん。㊃人につきまとって害をなすもの。

〔(イ)㊁しむらぶあ〕

あぶらも〔油持〕(名) 公卿の社參などの時、車軸にさす油を持って行く役。あぶら。

あぶらもち〔油守・燈守〕(名) 昔、中務(なかつかさ)省に屬して、宮中の燈火のことを司どった女官。

あぶらわた〔油綿〕(名) 香油を綿に浸したもの。

あぶらワニス〔油假漆〕(名) 亞麻仁油・テレビン油等でといたワニス。建具などの塗料に用ひる。

アブリーヴィエーション〔Abbreviation〕(名) 省略。略字。略語。

アブリオリ〔拉 Apriori〕(形)【哲】經驗に基づかざる。先驗的な。「「語」

アフリカ〔亞弗利加洲〕(名)【地】(Africa)六大洲の一。面積約二九八〇萬方粁。紅海・スエズ運河によってアジヤ大陸に、地中海を隔てヨーロッパ大陸に接する熱帶地。エジプト・アビシヤの二王國とリベリヤ共和國との外は、ヨーロッパ人の占有となったので、「植民地大陸」の名がある。

あぶり-こ〔焙籠〕(名) ㊀炭火の上に置いて着物を乾かし又は温まるに用ひる竹籠。㊁餅など焼く鐵製の網又は棒。

アプリシエート〔Appreciate〕(英・動)鑑賞する。評價する。

アプリシエーション〔Appreciation〕(名) 鑑賞。評價。

あぶりだし〔炙出〕(名) 白紙に明礬や鹽化コバルトの溶液などで紙に文字などを書いて置いて、炭火にあぶってあらはすもの。

あぶりどうふ〔焙豆腐〕(名) やきどうふ(燒豆腐)。

あぶりもの〔炙和布〕(名) 火であぶったわかめ。

あぶりもの〔炙物〕(名) ㊀やいたもの。㊁燒魚。

あぶる〔(れ)れ(ら)ら〕〔焙る・炙る〕(自動、ラ下一)㊀おちぶれる。

あぶる〔(れ)れ(ら)ら〕〔焙る・炙る・焼る・煨る〕(他動、ラ四)火にあてて焼く。あたためる。

あぶる〔(れ)れ(ら)ろ(ろ)る〕〔溢る〕(自動、ラ下二)㊀みちあまる。こぼれる。㊁おちぶれる。

あぶれ〔溢〕(名) ㊀あぶれること。㊁手の中の空しくなること。**—もの**〔溢者〕(名) やくざもの。「「あふる」(溢る)の口語。

あぶれる〔(れ)れ(ら)れる〕〔溢れる〕(自動、ラ下一)

あぶれる〔(れ)れ(ら)れる〕〔溢れる〕(自動、ラ下一)「あふる」(溢る)の口語。

あべい〔(句)「あるべき」の略轉。(古語)

あべかめり〔(句)「あるべくあるめり」の略轉。(古語)

あべかこ〔名〕赤目。べか・こう。事を厭ひこばむ時にすること。

あべ-かわ〔名〕㊀【地】評間縣安倍郡にある川。㊁安倍川餅の略。**—もち**〔安倍川餅〕(名) 安倍川の名物。焼餅を湯にひたして黄粉・砂糖をまぶした物。きなこともちゃ。こがれもち。

あべ-こべ〔名〕うちうへ。反對。

あべし〔(句)「あるべし」の略。「獣慾。食慾。

あべタイト〔Appetite〕(名) ㊀嗜好。欲望。㊁

アペニン-さんみゃく〔—山脈〕(名)【地】(Apennines) イタリー半島の骨骼をなす山脈。北部・中部・南部に分かれ、延長約一三〇〇粁。

あへん〔阿片・鴉片・鴉爿〕(名)【藥】(英 Opium の音譯)未熟な罌粟の實の乳汁を乾かした褐色の粉末。成分は主としてモルヒネで、麻酔性の臭氣と烈しい

あべの-くらはしまろ〔阿倍倉梯麻呂〕(名)【人】初名は內麻呂。孝德天皇の朝の左大臣。大化五年(一三〇九)薨。享年未詳。

あべの-さだとう〔安倍貞任〕(名)【人】平安朝時代の陸奥の豪族。頼時の長子。宗任の兄。朝命に服せず、源義家と戰って、康平五年(一七二二)烏海に敗死した。年四十四。

あべの-せいめい〔安倍晴明〕(名)【人】天文博士。花山・一條天皇の頃の人。播磨守となる。其の著に「金烏玉兎集」「占事略決」等がある。享年未詳。

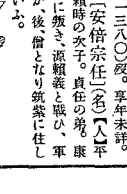
あべの-なかまろ〔阿倍仲麿〕(名)【人】奈良朝時代の學者。元正天皇の靈龜二年(一三七六)吉備眞備に從って唐に留學、名を朝衡と改め、博學宏才を以て玄宗皇帝に寵遇ぜられ、光祿大夫・御史中丞となり、在唐五十餘年、寶龜元年(一四三〇)卒。享年七十。

あべの-のひらふ〔阿倍比羅夫(ひらふ)〕(名)【人】武將。齊明天皇の朝、蝦夷・粛慎(みしはせ)を平げ、天智天皇の朝には百濟を扶けて新羅と戰ひ、養老の初、正三位・大納言となった。養老四年(一三八〇)歿。享年未詳。

あべの-ひろたり〔安倍宗任〕(名)【人】平安朝時代の陸奥の豪族。頼時の次子。貞任の弟。康平中、兄貞任と共に朝命に叛き、源頼義と戰ひ、軍敗れて京都に伴なはれたが、後、僧となり筑紫に住した。松浦黨はその後裔といふ。

あべの-むねとう〔安倍宗任〕(名)【人】平安朝時代の陸奥の豪族。頼時の次子。貞任の弟。康平中、兄貞任と共に朝命に叛き、源頼義と戰ひ、軍敗れて京都に伴なはれたが、後、僧となり筑紫に住した。松浦黨はその後裔といふ。

あべ-まき〔阿部槙〕(名)【植】殼斗科の落葉喬木。高さ約一五米。葉は「くぬぎ」に似て、裏に毛茸がある。雌雄同株。五月頃黄褐色の花を開く。果實は「くぬぎ」より大きい。樹皮はコルクとし、材は薪炭用とする。コルクくぬぎ。


〔きまべあ〕

あへん〔阿片〕(名)【藥】(英 Opium の音譯)未熟な罌粟の實の乳汁を乾かした褐色の粉末。成分は主としてモルヒネで、麻酔性の臭氣と烈しい

苦味とがある。支那人は密かに喫煙料とし、又、醫藥として、鎮痛・鎮靜・鎮痙・催眠藥に用ひる。**—くつ**〔阿片窟〕(名)阿片を吸煙させる祕密の場所。**—たばこ**〔阿片煙草〕(名)阿片を入れて製した煙草。**—ちゅうどく**〔阿片中毒〕(名)【醫】阿片吸飲によって起こる中毒作用。頭痛・眩暈・呼吸不正・皮膚苔白等を生じ、精神に異狀を來たし、昏睡狀態となる。

あへんせんそう……〔阿片戰爭〕(名)【歷】支那清朝の阿片輸入禁止問題から、宣宗の道光年間にイギリスとの間に起こった戰爭。清國は敗れて南京條約を締結し、その結果、イギリスに香港を割譲した。(一八四〇)

あほう……〔阿保〕(名)他人に養はれること。

あほう……〔阿房・阿呆〕(名)おろか。たはけ。ばか。**—かずら**〔阿房鬘〕(名)芝居で阿房になる者の鬘。**—がらす**〔阿房烏〕(名)烏を卑しめていふ語。**—くさい**〔阿房臭い〕(形)ばからしい。**—ぐち**〔阿房口〕(名)ばか口。**—ぐるい**〔阿房狂〕(名)女ぐるひをすること。**—げた**〔阿房桁〕(名)馬鹿の頬骨。**—じから**〔阿房力〕(名)ばか力。大力。**—じに**〔阿房死〕(名)ばかな死にさま。**—ずら**〔阿房面〕(名)ばかな顔つき。**—ばらい**〔阿房拂〕(名)江戸時代の刑罰の一。武士の兩刀をとりあげて追放したこと。**—らし**〔阿房らし〕(形シク)ばからしい。**—らしい**〔阿房らしい〕(形)(あほらしやうしき)馬鹿正直。**—りちぎ**〔阿房律義〕(名)(ばかしの口語。

(句)だらしない壁。**—に附ける藥なし**(句)愚者を改善する方法はない。**—の足下づかひ**(句)愚者は足下にある物を取るに人を使ふこと。**—の三杯汁**(句)愚者は何をしかしかる程行儀作法がないと。**—の鼻毛で蜻蛉をつなぐ**(句)愚人の鼻毛のばすことにいふ。**—の話くび**(句)愚者が聞いたことなすぐ實行しようとすること。

あほう……〔阿房宮〕(名)支那秦の始皇帝が、即位の三十五年、前二一二に造営した一萬人を入れ得る大宮殿。遺跡は陝西省西安府長安縣の西北、渭水の南に當たる。

あほう……〔信天翁・阿房鳥〕(名)【動】海燕科の鳥。翼と尾とは黑いが、頭と頸の背面は黃褐色で、其の他は黃色。體は、あひる」よりも大きく、翼は長い。千島から臺灣までの海上にゐるが、小笠原群島のみ知られてゐる。羽毛は蒲團やクッションのつめ物となる。

〔翁天信〕

あほう……〔他動、ハ四〕庇護する。かばふ。(古語)

あほうきゅう……〔阿房宮〕(名)支那秦の始皇帝が、即位の三十五年、前二一二に造営した一萬人を入れ得る大宮殿。遺跡は陝西省西安府長安縣の西北、渭水の南に當たる。

あほうどり……〔信天翁・阿房鳥〕(名)【動】海燕科の鳥。翼と尾とは黑いが、頭と頸の背面は黃褐色で、其の他は黃色。體は、あひる」よりも大きく、翼は長い。千島から臺灣までの海上にゐるが、小笠原群島のみ知られてゐる。羽毛は蒲團やクッションのつめ物となる。

あほうらせつ……〔阿防羅剎〕(名)【佛】(梵Avorakisas)牛頭・人手で牛蹄ある地獄の獄卒の鬼。多くの罪人を鐵叉で鑊中に入れるもの。

あほしんのう……〔阿保親王〕(名)【人】平城天皇の第三皇子。文武・音樂に達せられた。在原行平・業平の御父。

あほす(名)吸出しの膏藥。アポストロン。

アポストロフィ〔Apostrophe〕(名)㊀省略符號。㊁所有格の」をあらはす符號。(,)。

アポステリオリ〔拉 A posteriori〕(形)後天的な。(哲語)廣出的藥。

あほだらきょう……〔阿呆陀羅經〕(名)經文の調讀をまねて、時事を諷刺した滑稽な俗謠。小さな二つの木魚を打合はせて調子を取って謠ふ。

あほの・おんかみ〔阿蔡御神〕(名)【神】神代に、畝傍山と耳梨山との爭を出雲から仲裁に來られたといふ神。阿蔡大神。

アポロ〔拉 Apollo〕(名)【神】ギリシャ神話の主神。オリンポス十二神の一。セウスとレトとの子。日の神で男性美の表象。又、醫藥・音樂・武勇・競技・秩序等の神。**—がた**〔一型〕(名)ニーチェの用語で、夢幻的・想像的・繪畫的・意識的の藝術家をいふ。

あま〔蜑・海人〕(名)海で魚介を捕ることを業とする者。漁夫。**—おとめ**……〔蜑少女〕(名)漁夫の少女。**—おぶね**……〔蜑小船〕(名)魚を捕へるに用ひる小舟。**—ごろも**〔蜑衣〕(名)蜑の着る着物。**—びと**〔蜑人〕(名)あま。漁夫。(古語)

あま〔天〕(名)あめ(天)。そら。(古語)**—ぶね**〔蜑船〕(名)漁夫の乘る船。いさり船。

あま〔天衣〕(名)天人の着る衣。羽衣。(古語)**—のいのち**〔天命〕(名)てんめい(天命)。(古語)

あま〔海〕(名)(梵Anna)㊀【佛】頭髮を剃き、又は頭髮を剃って佛門に入った女。びくに。㊁出家した貴婦人の敬稱。**—ぎみ**〔尼君〕(名)尼の敬稱。あまぜ。**—ごろも**〔尼衣〕(名)尼の着る着物。**—ぜ**〔尼御前〕(名)尼の敬稱。**—ぎさ**〔尼鷺〕(名)【動】鷺の一種。體形白鷺に似、背に赤茶色の斑點がある。臺灣に產する。しやうじやうさぎ。**—しょうぐん**……〔尼將軍〕(名)【人】源頼朝の北の方政子の稱。**—ぜ**〔尼前〕(名)尼の敬稱。あまこぜ。**—そぎ**〔尼削〕(名)㊀昔、女の兒の髮を肩の所で切りそろへたこと。㊁尼になる人が、肩まりに髮を切って切った額。尼刺の額。尼の額。**—ほうし**〔尼法師〕(名)尼。**—みだいどころ**〔尼御臺所〕(名)尼大將・將軍夫の中室の尼になった人。**—やき**〔尼燒〕(名)長次郎宗慶の妻真林尼の燒いた樂燒。

あま〔亞麻〕(名)【植】(拉 Amamia)亞麻科の栽培草本。莖の高さ一米位。葉は狹披針形。夏、紫碧色の花を聚繖花序に配列し、花後、蒴果を結ぶ。莖の纖維からシネルや寒冷紗を織り、種子から亞麻仁油を搾る。帆布・リンネルなどの原料となる。

〔亞麻〕

あま〔案摩・安摩〕(名)【音壹越調の舞樂曲。舞人は二人又は一人で、笑ったさま又は麗れた狀の假面を著ける。**—きりふ**……〔案摩切斑〕(名)案摩の舞人の面にある合のやうな斑のある矣。**—おもて**〔案摩面〕(名)舞樂の案摩の舞に用ひる假面。紙で作り、山形に鱗の狀を畫いたもの。**—おもてば**〔案摩面羽〕(名)舞樂の安摩の舞の假面の如き三角形の斑ある矢の羽。**—のまい**……〔案摩舞〕(名)舞樂の一。舞人は一人又は二人。笑ってゐる狀又は麗れた形狀の假面を著ける。

—のめ〔案摩目〕(名)あまおめて。

あま〔雨〕(接頭)或語に冠して雨の意をあらはす語。「—上」「—龍」。

あま〔甘〕(接頭)或語に冠して甘い意をあらはす語。「—酒」。

あまあい……〔雨間〕(名)雨のふりやんだ時。あまあま。

あまあがり〔雨上〕(名)雨のはれたあと。

あまあし〔雨脚〕(名)(漢語「雨脚」の直譯)雨の滴の長くつづいたさま。雨のあし。

あまいう……〔甘い〕(形)「あまし」の口語。

あまうけばな〔雨承鼻〕(名)上を向いた鼻。しべばな(獅子鼻)。

あまうち〔雨打〕(名)軒端の雨の落ちる所。あまうちぎし(雨打際)。**—ぎわ**……〔雨打際〕(名)あまうち(雨打)。

あまうり〔甘瓜〕(名)【植】(まくわうり)(真桑瓜)。

あまえ・いたいたし〔甘いたし〕(形シク)㊀甚しくあまえる。(古語)㊁親しみ過ぎてさまあなりさっぱる。(古語)

あまえ・たる……〔嬌・垂る〕(自動、ラ下二)馴れ親しんで媚びる。

あまえる〔甘える・嬌える〕(自動、ヤ下一)「あまゆ」の口語。

あまおおい……〔雨覆〕(名)㊀雨を防ぐおほひ物。㊁大刀の鞘の峰の方なおほひ金具。

あまおさえ……〔雨押〕(名)建物の雨漏を防ぐ爲に、つぎめの上に設けた横板。

あまおち〔雨落〕(名)軒のあまだれの落ちる所。

—いし〔雨落石〕(名) あまおちに据ゑておいて地の凹むのを防ぐ爲の石。**—ぴようし**〔雨落拍子〕(名) 一定の時間をおいてうつ拍子。

あまがえる〔天女蛙〕(名) 天つ乙女。

あまがえる〔雨蛙樹蛤〕(名) ❶〔動〕蛙の一種。形小さく、色は綠色又は暗灰色、腹部は淡黃又は白色。四肢の各趾端に吸盤を有し、樹上にのぼり降雨の前に鳴く。あまごひむし。❷江戸時代に京都四條にあつた染芝居の座。ここには板屋根があつて雨を厭ひぬ所からかういつた。**—の家**〔句〕遊戯に死んだ蛙や小兒が殺した蛙を用ふ爲に子供のつくつた小さい家。轉じて小さい家。

あまがお〔尼顏〕(名) 化粧せぬ顏。すがほ。「とり。(古語)

あまがくれ〔雨隱〕(名) 雨を避けること。あまやどり。(古語)

あまがける〔雨翔ける〕(自動、ラ四) ❶天を飛び翔ける。❷人の死後、靈魂が大空を翔ける。(古語)「用ひる傘。❷〔動〕蜈蚣の毒蛇の一種。

あまがさ〔雨傘〕(名) ❶日傘に對して雨天の時に用ひる笠。

あまがさ〔雨笠〕(名) 雨天に用ひる笠。

あまがさきし〔尼崎市〕(名)【地】兵庫縣東南端の港市。綿絲・板ガラスの工場が多い。鐵道は東海道線・福知山線・阪神急行電鐵等の各線を有し、水陸運輸上便利の地。古の大物浦。

あまかしーのおか〔甘檮岡〕(名)【地】奈良縣高市郡飛鳥村豐浦にある岡。允恭天皇が姓氏の混亂を正す爲に探湯の事を行ひ給うた地。

あまかす〔甘糟〕(名) 酒のかすの甘いもの。

あまかすけん〔甘柏事件〕(名) 大正十二年九月十六日、憲兵大尉甘柏正彦・憲兵曹長森慶次郎等が、關東大震災の混亂に乘じて無政府主義者大杉榮・伊藤野枝等を殺害した事件。

あまかぜ〔雨風〕(名) 雨の降らうとする前の風。雨氣を含んだ風。(古語)

あまがつ〔天兒・天倪〕(名) 蔵に、子供の守りとしてそれに置き、諸の凶事をうつし負はするに用ひた木偶人形。(古語)

あまガッパ〔雨合羽〕(名) 雨天の時に着る合羽。

あまからせんべい〔甘辛煎餅〕(名) 砂糖醬油を塗つた煎餅。

あまかわ〔甘皮〕(名) 樹木や果實の內側にある。

あまかわ〔阿媽港〕(名)【地】支那廣東省沿岸の港。香港の西方海路一五粁。今の澳門で、葡萄牙の屬領。**—さんごじゅ**〔阿媽港珊瑚珠〕(名) 阿媽港から渡來した珊瑚の上等のもの。

あまがわ〔雨皮〕(名) 生絹や油紙でつくつた輿・車などの雨覆。昔、毛皮を用ひたのでこの名がある。(古語)**—もち**〔雨皮持〕(名) 昔、行列又は公卿の外出の時、雨皮を携へて從つた役。(古語)

あまかんむり〔雨冠〕(名) 漢字の冠の一。雨の字が漢字の上に來る時の形。

あまき〔甘木〕(名)【植】〈かんぞう〉〈甘草〉。

あまき〔雨着〕(名) 外套などのやうに衣服の上にはおつて雨を凌ぐに用ひる衣。

あまぎさん〔天城山〕(名)【地】伊豆半島中央部の休火山。海拔一四〇五米。山中に杉・檜が多く、その大部は御料林となつてゐる。附近に溫泉が多い。

あまきらす〔雨霧らす〕(自動、サ四) 雲・霞・霧などの爲に空がくもる。あまざらふ。あまざる。(古語)

あまきぬ〔雨衣〕(名) あまぎ(雨着)。(古語)

あまぎり〔雨霧〕(名) 雨の降るやうに見える濃い霧。霧・霞などの爲に空がくもる。あまざらふ。あまざる。(古語)

あまぎりす〔雨霧り〕(名)〈天霧る〉(自動、ラ四) あまざらす。(古語)

あまぎろう〔雨霧ふ〕(自動、ハ四)〈天霧ふ〉(自動、ハ四) あまざらす。(古語)

あまぐ〔雨具〕(名) 雨天の時に用ひる外套・傘・高せぎ。〈天草陶石〉。

あまくさ〔甘草〕(名)【植】〈かんぞう〉〈甘草〉。

あまくさいし〔天草石〕(名)【鑛】〈あまくさとうせき〉〈天草陶石〉。

あまくさじま〔天草島〕(名)【地】熊本縣天草郡に屬し、宇土半島の西南にある島。上島・下島を主島とする。天草の亂で有名。

あまくさど〔天草砥〕(名) 熊本縣天草島に產する熊本縣天草島に產する良質の陶石。天草石。

あまくさとうせき〔天草陶石〕(名)【鑛】

あまくさなだ〔天草灘〕(名)【地】熊本縣西方の海。この灘に天草群島がある。賴山陽の詩「雲耶山耶吳耶越……」の詩によつて名高い。

あまくさのらん〔天草の亂〕(名)【歷】寛永十四年、小西行長の遺臣等が天草時貞を擁して、切支丹宗復興を企圖して天草島に亂を起こした事變。翌年鎭定した。島原の亂。

あまくさやき〔天草燒〕(名) 天草島に產する陶器。多くは茶器・花瓶等とする。みづのたひらやき。

あまくだす〔天降す〕(他動、サ四) 天降る。(古語)

あまくだり〔天降〕(名) ❶天上から國土に降ること。❷權勢ある人から推擧せられた人。❸上役の强制的な命令。

あまくだる〔天降る〕(自動、ラ四) ❶天から國土に降る。❷人物の推擧などに權勢ある人から强制的に命令が下る。

あまくち〔甘口〕(名) ❶甘味を好むこと。下戶。❷酒などの甘味あるもの。❸人の心にかなふやうなうまい口つき。巧言。❹重重しい口まへ。愚人。

—ねずみ〔甘口鼠〕(名)〔動〕はつかねずみ(甘日鼠)。

あまくに〔天國〕(名)【人】我が國刀劍師の祖。天和國宇陀郡の人。平城天皇の頃の人で、平家の傳寶小烏丸はこの人の作だといふ。

あまぐも〔雨雲〕(名) 雨氣を含んだ雲。雨模樣の雲。

あまぐも〔天雲〕(名) 天にただよふ雲。**—の**〔天雲の〕〔枕〕〔たゆたふ〕〔行く〕〔良〕〔よそ〕〔たどき〕も知らず」の枕詞。

あまぐもり〔雨曇〕(名) 雨模樣で空の曇ること。

あまぐもり〔甘栗〕(名) ❶かちぐり(搗栗)。❷大の大粒に朝廷から賜はつた栗の實。❸熱砂で蒸燒にした栗の實。多く支那栗を用ふ。**—の—つかい**〔甘栗使〕(名) 大臣の大饗の時、大臣に栗を賜ふ爲に、使に立つ六位の藏人。

あまくろ〔尼講〕(名)【佛】寺に婦人の信者の集てゐること。

あまごもり〔雨籠〕(名・枕) ❶雨の爲に家に籠つてゐること。❷「笠」の枕詞。

あまごろも〔雨衣〕(名) あまぎ(雨着)。(古語)

あまさ〔甘さ〕(名) あまいこと。又、その度合。

あまさえ〔剩〕(副) (あまさうさえ)。(古語)

あまさかさま〔名・副〕不合理。逆なこと。(古語)

あまさかる〔天離る〕(枕)「ひな」(鄙)「むか」(向)の枕詞。

あまさぎ〔甘鷺・尼鷺〕(名)〔動〕鷺の一種。形は中形で全身白色、生殖時には橙黃色の飾羽が生ずる。南支那等に分布してゐる。

あまさけ〔甘酒・醴〕(名) もちごめの粥に麴をまぜて醸した飲料で、味は甘い。ひとよざけ。こざけ。

あまさらし〔雨曝・雨晒〕(名) 覆ふ物がなく、雨のふりがかるままにまかせて置くこと。

あまざわり〔雨障〕(名) 雨に妨げられて外出せぬこと。

あまさんし〔甘し〕(形、一) ❶砂糖のやうな味である。❷鹽氣が少い。❸愚かである。❹情にもろい。❺ゆるい。(古語)

あまじ……〔天路〕(名) 大空。くもち。天の路。

あまくろつばめ〔雨黑燕〕(名)〔動〕あまつばめ(雨燕)。

あまけ〔甘氣〕(名) あまみ。あまさ。「め(雨燕)。

あまけ〔雨氣〕(名)(あめもよう)〔雨模樣〕。

ずく〔雨氣附く〕(自動、カ四) 雨が降らうとする氣色になる。「(あまもよう)〈雨模樣〉。

あまけしき〔雨景色〕(名) ❶雨中のながめ。❷

あまご〔甘子〕(名)〔動〕さめの山女。

あまごい〔雨乞・祈雨〕(名) ひでりの時、降雨を神佛に祈ること。**—こまち**〔雨乞小町〕(名) 雨乞に小野小町が歌を詠んだこと。**—のつかい**〔雨乞使〕(名) 昔、神泉苑で雨乞の祭を行はれた時、朝廷から遣はされた六位の藏人。

—まつり〔雨乞祭〕(名) 雨乞の爲に行はれた祭。**—むし**〔雨乞蟲〕(名)〔動〕(あまがえる)(雨蛙)。「まること。

あまこう〔尼講〕(名)【佛】寺に婦人の信者の集

あまごろも〔雨衣〕(名) あまぎ(雨着)。(古語)

あまさ〔甘さ〕(名) あまいこと。又、その度合。

あまさえ〔剩〕(副) (あまさうさえ)。(古語)

あまさかさま〔名・副〕不合理。逆なこと。(古語)

あまさかる〔天離る〕(枕)「ひな」(鄙)「むか」(向)の枕詞。

あまさぎ〔甘鷺・尼鷺〕(名)〔動〕鷺の一種。形は中形で全身白色、生殖時には橙黃色の飾羽が生ずる。南支那等に分布してゐる。

あまさけ〔甘酒・醴〕(名) もちごめの粥に麴をまぜて醸した飲料で、味は甘い。ひとよざけ。こざけ。

あまざらし〔雨曝・雨晒〕(名) 覆ふ物がなく、雨のふりがかるままにまかせて置くこと。

あまざわり〔雨障〕(名) 雨に妨げられて外出せぬこと。

あまさんし〔甘し〕(形、一) ❶砂糖のやうな味である。❷鹽氣が少い。❸愚かである。❹情にもろい。❺ゆるい。(古語)

あまじ……〔天路〕(名) 大空。くもち。天の路。

あまじお……【甘鹽】(名) 鹽けのうすいこと。うす鹽につけること。

あまじし【除肉】(名) いぼ(疣)・こぶ(瘤)などのやうな不必要な餘分の肉。(古語)

あまじたく【雨支度】(名) 雨にぬれぬ用意。あまさうぞく。あまよそひ。(雨裝)。

あまじたり【雨滴】(名) あまだれ(雨滴)。(古語)

あまじめり【雨染】(名) 雨で汚れた斑。「こと。

あまじめり【雨濕】(名) 雨の爲に濕氣を帶びること。

あまし—もの【除物】(名) ㊀もてあましたる品物。㊁もてあましにせられた人。

あましようじ【雨障子】(名)(あぶらしょうじ)(油障子)。

あましようぞく【雨裝束】(名)(あまそうぞく)(雨支度)。

あます【除す】(他動・サ四) ㊀のこす。あまるやうにする。㊁もてあます。

あまず【甘酢】(名) 甘みの多い三杯酢。

あまずつみ【雨隱】(名) 雨の爲に家にこもること。(古語)

あまずとう……【天傳ふ】(自動、ハ四・枕) ㊀空を渡る。(古語) ㊁日の枕詞。

あまずら【甘葛】(名) ㊀【植】虎耳草(ゆきのした)科の蔓性落葉灌木。他の樹にからみつく。葉は卵形鋸頭で對生し、鋸齒を有す。夏日、白花を開き、漿纖花序に配列す。蔓の煎汁は甘い。いはがらみ。㊁甘葛を煎じた汁で、昔、砂糖の代用にしたもの。

あまそう【除さふ】(他動、ハ四)(あます)の延。のこす。(古語)

あまそうぞく【雨支度】(名)(古語)

あまそうぞく【雨裝束】(名) あまじたく。(古語)

あまそそぎ【雨注】(名) 雨だれ。雨のしづく。「高くそびえる。(古語)

あまそそる【天聳る】(自動、ラ四) 空

アマゾン—がわ【一河】(名)【地】(Amazon R.) 南米ブラジルの大河。源を西方アンデス山脈に發し、東流して大西洋に注ぐ。流域廣大、降水量豐富で、鬱蒼たる森林が流域の大部を蔽うてゐる。流程約六五〇〇粁。

あまた【許多・數多】(副) 多く。たんと。たくさん。**—え**—【許多重】(副) 幾重にも重なるさま。(古語) **—たび**【許多度】(副) たびたび。しばしば。

あまだい【甘鯛・方頭魚】(名)【動】甘鯛科の海產硬骨魚。體色黃赤色で、紫色の斑點がある。頭部は稍・鈍角形、尾鰭に橫線がある。肉白く味は美である。

あまだおし……【亞麻倒】(名)【植】旋花(ひるがほ)科の一年生草本。莖は絲の如く、葉はない。亞麻に寄生して麻びつき、遂に之を斃す。有害雜草。

あまたむ【天飛】(名) あまとぶ。(古語)

あまたらす【天足らす】(自動、サ四)「滿ちる足る」の敬語。(古語)

あまたり【雨滴】(名)【鶏】・はくの號。

あまたる【天玉】(名)(古語)

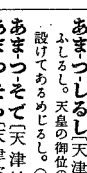
あまたる【雨滴受】(名) 雨滴を受けるとひ。

あまたる—い【甘たるい】(形)「あまたるし」の口語。「甘い。

あまたる—し……【甘たるし】(形、シク) 大層

あまたれ【雨滴雷】(名) 軒から落ちる雨水。あまだれの落ちる所。あまおちも。(讃岐國風土記傳に「泰山之霤穿石」とあるに基づく。微力も度度すれば成功する意。

あまちゃ【甘茶・土常山】(名)【植】虎耳草(ゆきのした)科の落葉灌木。高さ一米位。葉は卵形にして對生、鋸齒がある。六月頃花を聚繖花序に綴ること「あちさゐ」に似、周邊に鋸齒の裝飾花を着け、初め青色で、後、紅變する。此の莖葉を煎じた汁を、甘茶といって、四月八日の灌佛會に用ひる。きあまちゃ。**—ずる**—【甘茶蔓絞


〔茶甘〕

股藍】(名)【植】葫蘆(ひさご)科の多年生草本。地下莖を引き、葉は卷鬚を有する。雌雄異株。葉は互生して五小葉の鳥跡狀なし、小葉は披針形で鋸齒がある。秋、小穗狀黃綠色の花を開く。果實は小圓、熟すれば黑綠色ん呈する。つるあまちゃ。

アマチュア【Amateur】(名) 非職業的の藝術家・音樂家・運動家。好事家。

あまつ—えだ【天津枝】(名)(天皇の御運枝の意)「皇子。親王。(古語)

あまつ—おとめ【天津少女】(名) ㊀天上に住むといふ少女。天女。天人。㊁五節の舞姫。(以上古語)

あまつかぜ【天津風】(名) 空吹く風。(古語)

あまつ—かみ【天津神】(名) 天にまします神。天の神。(國つ神の對)(古語)

あまつ—くに【天津國】(名) 天上にありといふ國。日の神のまします處。高天原。(古語)

あまつくもい【天津雲居】(名) ㊀そら。おほぞら。㊁禁中。(以上古語)

あまつくらい【天津位】(名) 天皇の御位。(古語)

あまつ—こえ……【天津聲】(名) 天から くだる聲。神の聲。(古語)

あまつ—さえ【剩】(副) あるがうへに。その上ふしたうへに。天皇の御位のしるし。(古語) ㊁天上に設けてあるめじるし。(古語)「に。

あまつ—しるし【天津璽】(名) ㊀天上のものといふしるし。天皇の御位のしるし。(古語) ㊁天上に

あまつ—そて【天津袖】(名) 天人の衣の袖。羽中。㊁心の落ちつかぬこと。うはのそち。(以上古語)

あまつ—そら【天津空】(名) ㊀そら。㊁宮中。禁

あまつ—つみ【天津罪】(名) 天上で犯した罪。素盞嗚尊が犯された畔放(あぜはなち)・溝埋(みぞうめ)・樋放(ひはなち)・「【古語】

あまつ—と【天津戶】(名) 天上の宮殿の戶。そら。

あまつ—ばめ【雨燕・胡燕子】(名)【動】佛法僧目雨燕科の鳥。形は燕より大きく、背面黑褐色、腰は白色で、尾は分岐しない。あまとり。あまくろつばめ。

あまつ—ひ【天日】(名) 太陽。日輪。(古語)

あまつ—ひつぎ【天津日嗣】(名) 天照大神の御系統を繼承し給ふこと。天皇の御位。(古語)

あまつ—ひれ【天津領巾】(名) 天女の頸から肩にかけた布帛。(古語)

あまつ—ぶり・かざ—つ—ふき【雨つ降り風つ吹き】(句) 雨が降り風が吹くことを勢みつけていった奴言葉。「天照大神。(古語)

あまつ—みおや【天津御祖】(名) 天皇の御祖先。

あまつ—みかど【天朝】(名) 朝廷。皇居。(古語)

あまつ—みけ【天津御食】(名) 食物の美稱。(古語)「子。(古語)

あまつ—みこ【天津御子】(名) 天つ神の御子。天

あまつ—みこと【天津尊】(名) 天照大神。日の神。(古語)

あまつ—みず……【天津水】(名) 雨。天上の水。

あまつ—みずかげ……【天津水影】(名) 空が(仰ぎ待つ)の枕詞。「ら見える水影。(古語)

あまつ—みずかげ……【天津水影】(名) 空が

あまつ—みはかり【天津御量】(名) 天つ神の御はからひ。(古語)「語)

あまつ—みや【天津宮】(名) 天つ神の宮殿。(古

あまつ—やしろ【天津社】(名) 天つ神を祭ったやしろ。(國つ社の對)(古語)

あまつら【尼寺】(名)【佛】尼のゐる寺。**—ござん**【尼寺五山】(名)【佛】京都の景愛寺・楠林寺・護念寺・惠林寺・通玄寺、鎌倉の太平寺・東慶寺・圓覺寺・護法寺・禪明寺の稱。

あまてらす【天照らす】(自動、サ四)(天照る)の敬語。天に照り渡り給ふ。㊁天が下を しろしめす。(以上古語)

あまてらすおおみかみ……【天照大神】天照大御神】(名)【神】伊弉諾尊の御女で、我が皇室の御祖神。大日靈貴尊と申す。伊勢皇大神宮內宮に奉祀せられ、國民崇敬の大中心におはす。

あまてる【天照る】(自動、ラ四) 空に照る。空に光る。(古語) **—かみ**【天照神】(名)【神】あまてらすおおみかみ)(天照大神)。

あまてる—や【天照るや】(枕)「日」の枕詞。

あまど〔雨戸〕(名)家の外まはりの戸で、風雨を防ぎ夜を戒める爲のもの。

あまとと〔甘蔗〕(名)酒よりは甘いものの方を好む人。

あまどうふく〔雨胴服〕(名)あまはおり(雨羽織)。

あまどころ〔甘草・薺・薯蕷・玉女菱〕(名)【植】百合科の多年生草本。三〇糎餘の莖を斜に地上に抽き、楕圓形の葉を互生する。初夏、葉腋から花梗を抽き、綠白色の筒狀花を垂れ、その形、風鈴に似る。花後、圓い果實を結び、熟すれば暗綠色となる。地下莖は食用又は藥用とする。

あまとぶ〔枕詞〕〔天飛ぶ〕(自動、バ四)大空を飛ぶ。あまたも。(古語)—**や**〔天飛ぶや〕(枕)「かり」(雁)の枕詞。

あまとり〔雨鳥〕(名)【動】あまつばめ(雨燕)。

あまな〔甘菜〕(名)味のあまい蔬菜。「なづな」などの類。(から菜の對)

あまな〔山慈姑・老鴉瓣〕(名)【植】百合科の多年生草本。春、宿根から水仙に似た二枚の葉を生じ、葉間から花梗を出し、六瓣白色、外面に暗紫條ある花を開く。山野に自生し、鱗莖は食用となる。

あまなずな〔甘薺〕(名)【植】十字花科の一年生草本。高さ六〇糎位。葉は披針形。花は黃色で總狀花序を綴り、花後、倒卵形の角を結ぶ。たまなづな。

あまなっとこ〔甘納豆〕(名)あづき又はさまげをゆで、砂糖で煮つめ、砂糖にまぶした菓子。

あまなわみょうじん〔甘繩明神〕(名)【神】神奈川縣鎌倉町長谷大佛の東方、御輿嶽の山腹にある神社で、祭神は源義家の守護神だといふ。

あまに〔亞麻仁油〕(名)亞麻の種子から搾った油。黃色又は褐色の乾性油。塗料・印刷インキ・印肉・リノリウム・人造レザー・ゴム代用品等を製するに用ひる。あまにんゆ。

あまにゅうどう〔尼入道〕(名)【佛】在家のまま髮を剃って佛道にはいった尼。尼女房。

あまにんゆ〔亞麻仁油〕(名)あまに。

あまねし〔遍し〕(形、一)〔普し洽し遍し〕(形、一)廣くゆきわたる。いたらぬくまもない。

あまねわす〔遍わす〕(他動、サ四)遍く及ぼす。殘る所なくする。(古語)

あまのいわと〔天岩戸〕(名)❶天にあるといふ岩屋の戸口。又、堅固な家。❷天照大神が、素盞嗚尊の亂暴をお怒りになってお隱れになったと傳へられる所。

あまのう〔天宇・和・海・海宇〕(他動、ハ四)❶甘んじて受ける。うべなふ。承知する。(古語)❷和睦させる。(古語)

あまのうきはし〔天浮橋〕(名)神代に、天と地との間にかかってゐたといふ橋。

あまのかぐやま〔天香具山・天香山〕(名)(歌枕)❶日本神話中の山の名。❷【地】奈良縣磯城郡香具山村にある山。耳成・畝傍山と共に大和三山といふ。麓に埴安池の跡がある。

あまのがわ〔天河・銀河・天漢〕(名)【天】夏秋の夜の晴夜、乳白色の微光を放ち、河のやうに見える無數の恒星の集合體。さんか。銀河系。—**せ**〔天河瀬〕(名)天河の瀬。(古語)—**ず**〔天河津〕(名)天河の道筋。(古語)—**と**〔天河門〕(名)天河の河口。(古語)—**ら**〔天河原〕(名)天河の河原。(古語)

あまのがは〔天川〕(名)❶【地】大阪府北河內郡牧野村の中の地名。又、同名の川があり、北流して淀川に合する。古來多く歌に詠まれた。❷岡山縣吉野郡金峯山の名。印南郡倉敷村で海に入る。❸奈良縣にある川の名。印南郡倉敷村で海に入る。

あまのぐち〔天野口〕(名)【地】天野は大阪府南河內郡の地名。天野口は高野山西の大門から天野神社に至る道。

あまのさかて〔天逆手〕(名)❶昔、退く時に打った手。❷人を呪ふ時にうたがしはで。(古語)

あまのさかほこ〔天逆鉾〕(名)霧島山山頂にあるあまのぬほこ。(天瓊矛)。

あまのさけ〔天野酒〕(名)大阪府南河內郡天野から產出した酒。

あまのさこ〔天邪鬼〕(名)❶わざと人の言に逆って片意地な邊もの。つむじまがり。❷【佛】仁王のふまへた惡鬼。あまのじゃく。

あまのじゃく〔天邪鬼〕(名)❶あまのざこ。❷【動】黃金蟲の幼蟲。地蟲。根切蟲。

あまのじゃこ〔天邪鬼〕(名)あまのざこ。

あまのすいがい〔天透垣〕(名)宮中にある透垣。

あまのたりよ〔天足夜〕(名)よもすがら。終夜。(古語)

あまのだる〔天野樽〕(名)二つの柄を高く大きく造り、朱塗にした樽で、祝儀の時につかふ。もとは大阪府南河內郡天野に產する天野酒を入れたもの。「上古語」

あまのと〔天戸〕(名)❶天の岩戸。❷天の門。(以わ)〔天河〕。(古語)

あまのとがわ〔天戸河〕(名)(あまのがわ)〔天河〕。(古語)

あまのとりぶね〔天鳥舟〕(名)神代にあったと傳へられる船。鳥船。(古語)

あまのなかがわ〔天中川〕(名)【地】天龍川の異稱。

あまのぬぼこ〔天瓊矛〕(名)伊弉諾・伊弉册の二尊が、淤溟をお探りになったといふ玉で飾った鉾。

あまのはえきり〔天蠅斫・天羽羽斬〕(名)素盞嗚尊が、八岐大蛇を斬り給ったといふ名劍。

あまのはぐるま〔天羽車〕(名)神の邊宮・渡鳥の羽の衣。❶昔、天皇が、祭事に沐浴し給ふ時に召されたる御衣。

あまのはしだて〔天橋立〕(名)【地】京都府與謝郡宮津灣中の名勝。日本三景の一。延長約三粁の松林で、成相山・傘松からの縱一文字と、樽崎からの橫一文字の俯瞰の景色とが、殊に絕妙である。

あまのはそで〔天羽袖〕(名)❶天人の羽衣の袖。❷五節の舞裝の袖。(古語)

あまのはら〔天原〕(名)❶おほぞら。❷高天原。

あまのはら〔天原〕(枕)「富士」「ふりさけ」に冠する枕詞。

あまのやりへえ〔天野屋利兵衛〕(名)〔人〕元祿時代の大阪の俠商。名は直之。赤穗義士の爲に兵器を調へ、後自首したが、死を許されて追放せられた。享保十二年(一三八七)歿。「假名手本忠臣藏」には天川屋義兵衛といふ。

あまのり〔甘海苔・紫菜〕(名)【植】紅藻類の海藻。小柄な具へ、岩上・小殼上に生ずる。體は廣披針形又は楕圓狀の紙樓をなし、黑紫色又は綠紫色を呈する。種類多く、「あさくさのり」「つくしあまのり」等が名高い。❷「海苔」。あまとうふく。

あまはおり〔雨羽織〕(名)雨を防ぐ爲に着る羽織。あまはかま〔雨袴〕(名)雨を防ぐ爲に着る油を引いた袴。

あまはき〔雨吐〕(名)雨水を流しやる樋。

あまはけ〔雨疏〕(名)雨水をつまらぬやうに流してやること。「のやうになってゐる所。まびさし。

あまはしり〔雨走〕(名)兜の目庇(まびさし)の上で、庇ぜ行く使者。(古語)

あまはせずかい〔天馳使〕(名)天上を馳

あまはだ〔甘肌〕(名)❶あまかわ(甘皮)。❷檜などの薄皮。水の漏れるのを防ぐに用ひるもの。

あまはたいし〔雨畑石〕(名)【鑛】山梨縣南巨摩郡硯島村雨畑から出る蒼黑色の粘板岩。硯につくる。

あまはたずり〔雨霽・雨晴〕(名)雨のはれること。「語」

あまはれ〔雨霽・雨晴〕(名)雨のはれること。「語」

あまひき〔雨引・雩〕(名)(あまこい〈雨乞〉)。(古語)

あまひこ〔天彦〕(名)❶音聲の空に響くこと。❷天人。(古語)—**の**〔天彦の〕(枕)「おと〈音〉の」枕詞。

あまびこ〔雨彦〕(名)【動】やまびこ(馬陸)。(古語)

あまびし〔天人・名〕てんにん(天人)。天女。(古語)

あまびしの・くるま〔雨庇車〕(名)昔、貴人の用ひた唐庇車の略式のもの。「語」

あまびれ〔天領巾〕(名)葬式の時、棺のまはりに立てる旗。又、そのめぐりを圍ふ幕。(古語)

あまぶた〔雨蓋〕(名)雨を防ぐ爲につけたもの。**—がわら**〔雨蓋瓦〕(名)隅棟の端、雨方の庇の瓦のであふ所をおほふ裝飾瓦。

あまべ〔餘戸〕(名)大寶令では五十戸を里としたが、それに滿たない民戸。あまるべ。(古語)

あまほうし〔尼法師〕(名)【佛】ある。比丘

あまほし〔甘干し〕(名)皮をむいた柿や魚のなまぼし。

あまもり〔雨間〕(名)雨のやんだ時。あまあひ。

あままゆ〔雨眉〕(名)あまびさし。

あままゆ〔甘味〕(名)甘い味。

あままゆ〔雨庇〕(名)【のくるま】(雨庇車)。

あままゆ〔甘水〕(名)あまちゃ(甘茶)。

あままゆ〔雨水〕(名)雨の降ってたまった水。

あままゆ〔天滿つ〕(自動・タ四)光が天に滿ちる。

あまも〔大葉藻〕(名)【植】眼子菜(ひるむ)科の海草。個匏せる長い肉質の根莖を有し、葉は綠色で、長線狀をなす。五月頃、長莖を抽き、黃色の小花を水面に開く。葉は肥料や蒲團の芯とし、又は草履を製するに用ひる。うみやなぎ。あぢも。もしほぐさ。【樣。

あまもよい〔雨催〕(名)(あまもよう)〔雨模

あまもよう〔雨模樣〕(名)雨の降りさうな空のけしき。あめもやう。

あまもり〔雨漏〕(名)屋根から雨の漏ること。

あまやかす〔甘やかす〕(他動・サ四)甘えさせる。

あまやどり〔雨宿〕(名)雨のはれるまで軒下・樹かげなどにとどまること。

あまゆ〔雨止〕(名)雨のやむこと。又その間。

あまゆ〔甘ゆ〕(自動・ヤ下二)甘く思はれる。馴れ親しんで我儘になる。あまったれる。恥つかしくて工合がわるい。てれる。

あまよ〔雨夜〕(名)雨の降る夜。**—のしなさだめ**〔雨夜品定〕(名)【文】源氏物語帚木の卷の中の、男達が、婦人の性行・性格を批評する箇所。**—の月**(句)想像するばかりで、現實とならぬに

あまよけ〔雨避〕(名)(あまおおい)。

あまよそい〔雨裝〕(名)雨を防ぐよそほひ。あまじたく。

あまより〔甘捻〕(名)よりのゆるやかな絲。

あまよろこび〔雨喜〕(名)ひでりつづきに雨の降ったのを喜んで祝をすること。

あまり〔餘〕(名)あまること。あまったもの。のこり。⊖度を過ぎたこと。甚だしいこと。法外。**—べ**〔餘戸〕(名)あまべ。**—もの**〔餘物〕(名)のこりもの。のこったもの。不用のもの。**—や**〔餘矢〕(名)勢餘って飛ぶ矢。**—物には禰がある**(句)人の取殘したものに、思はぬ利益がある。

あまり〔餘〕(副)法外に。過度に。**—に**〔餘に〕(副)法外に。はなはだしく。あまり。あんまり。

あまり〔餘〕(接尾)數詞の下に添へてまた餘分のあることをいひあらはす語。「十日ー二日。」(古語)

あまりさえ〔剩さえ〕(名)(あまっさえ)〔剩〕。

あまりて〔餘りて〕(副)あまりに。あまりに。あんまり。

あまりょう〔雨龍・螭龍〕(名)龍の一種。とかげに似て大きく、角なく、尾長く細く、苔黃色をなすといはれる想像上の動物。

あまる〔餘る〕(自動・ラ四)殘る。最を過ごして殘る。程度を超す。

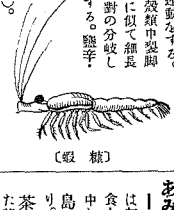
アマルガム〔Amalgam〕〔汞和金〕(名)【化】水銀と他の金屬との合金。**—ほうはい**〔汞和金法〕(名)【化】アマルガムから水銀を蒸溜して去り、金(稀に銀)を採取する冶金法。

アマルフイ〔Amalfi〕(名)【地】イタリーの港市。ナポリの南東三七粁。サレルノ灣に臨み、風景絕佳。中世は強大な海軍力を有し、又、地中海貿易の中心地

あまるべ〔餘部・餘戸〕(名)あまべ。「であった。分だとする。滿足する。

あまんず〔甘んず〕(自動・サ變)十

あみ〔網〕(名)⊖魚鳥又は獄類を捕へる具で、絲を斜めにあんで結んで作ったもの。⊖絲や針金を網の目に結んで造ったもの。⊖金網。



〔蝦 蛄〕

あみ〔糠蝦〕(名)【動】甲殼類中蹠脚類の海產動物。形は小蝦に似て細長く、體は透明。胸部に八對の分岐した肢があって浮游生活をする。鹽辛、佃煮などにする。あみえび。あみざ。

—ざこ〔糠蝦・雜魚〕(名)【動】あみ(糠蝦)。

アミ〔佛 Ami〕(名)友達。愛人。

あみ・おおさ〔網・石蓑〕(名)【植】綠色藻類「あなさ」の一種。葉狀體に網狀の小孔あるを特徴とする。琉球近海に產する。

あみあげぐつ〔編上靴〕(名)甲の前面の紐を編みあげてはく靴。

あみあし〔網足〕(名)⊖網の下の方。⊖網目を圍む絲。

あみあんどん〔網行燈〕(名)金網をはった方形の行燈。

あみいし〔網石〕(名)⊖網のおもりの石。いは。

あみいた〔編板・網輿〕(名)⊖地古生代の石炭紀層に多い苔蟲の類。昔、罪人などを乘せた輿で、竹又は木などを編んで造った目粗のない粗雜なもの。(古語)

あみいと〔網絲〕(名)亞麻・麻・綿・棕櫚などを原料とした絲で、網を編むに用ひるもの。

アミーバ〔Amoeba〕(名)【動】池沼などに棲息する微細な單細胞の原生動物で、種種形を變じ、突起(僞足)を出して食物を吸收し、又、之を以てあるくもの。

あみうち〔網打〕(名)【漁】投網(あみ)で魚を捕ること。「と。又、その人。

あみえび〔網蝦〕(名)【動】あみ(糠蝦)。

あみえり〔網魚〕(名)えり(鳳)。

あみおろし〔網卸〕(名)新調の網を始めて使用すること。

あみがい〔網貝〕(名)【動】蓙蟲類の貝。殼は樹狀をなし、群體をなして生活し、骨骼は白色又は暗紅色の直立體で多くの孔を開き、其の狀網の目のやうである。

あみかけ〔編掛〕(名)東髮の周圍に網網をかぶせ

あみがさ〔編笠〕(名)菅又は藺・蒻で編んだ笠。

—がい〔編笠貝〕(名)【動】腹足類の貝。殼は灰黃色で、斑紋があり、形は編笠に似る。海藻を食して棲息する。**—ごし**〔編笠越〕(名)編笠の中から物を見、又、ものをいふこと。**—じま**〔編笠島〕(名)【地】大阪市上福島、梅田橋北詰東のあたり。下等な遊女屋があった。**—じゃや**〔編笠茶屋〕(名)江戸時代に吉原のあたりで編笠を貸し物をのもちふ僅かの錢。**—ぜに**〔編笠錢〕(名)編笠をかぶった。**—そう**〔編笠草〕(名)【植】大蕨(ぜんまい)科の一年生草本。高さ約四〇糎。葉は複に似、夏の末、長い花梗を抽き、編笠形の苞のある淡褐色の雌雄花を著ける。えのさくも。**—**

たけ〔編笠茸〕(名)【植】子嚢菌類。濕地に生ずる頭部は褐色の圓錐形又は橢圓形で、網狀の窩孔がある。食用に供せられる。**—もち**〔編笠餅〕(名)しんこを薄く圓く延ばし、中に餡を入れて二つに折って編笠の形にした餅。あみがさだんご。**—ゆり**〔編笠百合〕(名)【植】百合科の多年生草本。葉は狹長で先端を卷く。三四月頃花梗に、淡黃綠色で內面に紫斑網狀ある花をつける。根を藍乾にして煎用すれば、萩痰・鎭痰に效ありといふ。觀賞用。はいも。

アミカブル・アレンジメント〔Amicable arrangement〕(名)示談。

アミカブル・ソリューション〔Amicable solution〕(名)平和的解決。

あみ・ぐら〔網倉〕(名)漁業用の網を藏する倉。床を高く、壁を二重にし湿氣と鼠害を防ぐ裝置をなす。

あみこ〔網子〕(名)地引網を曳く漁夫。

あみ・さいく〔編細工〕(名) 絲を編んで、靴・下・手袋・ショール等をつくる細工。又、その細工物。

あみ・しき〔網刺〕(名) あみすきと同じ。

あみ・しだ〔網歯朶〕(名)【植】水龍骨(ゆとり)科の多年生草本。葉には毛茸が生じ、葉は三角形で羽狀なるし、葉脈は分岐して、網狀をなす。四國・九州・臺灣に産する。

あみ・じま〔網島〕(名)【地】大阪市東區にある地で、大和川と淀川と合する所の三角洲。近松門左衛門作(心中天網島)で名高い。

あみ・じゃくし〔網杓子〕(名) 金網で造った杓子。

あみ・シャツ〔網襯衣〕(名) レースなどで網目に造ったシャツ。夏の肌着に用ふ。

あみ・じゅばん〔網襦袢〕(名) レースなどで網目につくった夏向の襦袢。

あみ・す〔あみす〕(他動・サ下二)〔俗〕水・湯などを體に注ぎかける。あびす。あぶす。

あみ・すき〔網抄〕(名) 網をむすび造ること。又、その人。あみさし。**—ばり**〔網抄針〕(名) 網をすく針で、竹又は鯨鬚などで造る。あみばりゥ。あばり。

あみ・すて・かご〔編捨籠〕(名) 中央を編んで、周圍は編みかけのままなる竹籠。魚の形などをくづさずに煮るに用ひる。

あみ・すな〔網綱〕(名) 網につけた綱。あみなは。

あみ・そ〔網麻〕(名) 網をすくに用ひる麻絲。あぞ。

あみだ〔阿彌陀〕(名)【佛】(梵Amitābha)又はAmitābha)の略。(無量壽・無量光明と譯する)❶西方淨土に住する佛の名號。一切の人を救ふ誓願を立つ。之なぶれば、死後直ちに極樂淨土に生まれることができるといふ。淨土宗・眞宗の本尊。彌陀・阿彌陀佛・阿彌陀如來・無量壽如來・無量光佛・無碍光佛・盡十方無碍光如來等の異稱がある。❷あみだかぶり。❸あみだくじ。❹輪金をはめた車輪の周圍の木。**—がさ**〔阿彌陀笠〕(名) あみだかぶりにかぶった笠。**—かぶり**〔阿彌陀被〕(名) 阿彌陀佛の後光をおうたやうに冒げなる後頭部に傾けてかぶること。**—きょう**〔阿彌陀經〕(名)【佛】阿彌陀の功德と極樂のことを述べた經文。眞宗・淨土宗等で用ひる。**—くじ**〔阿彌陀籤〕(名) 出金すべき金額を記した籤を引いて物を賀び、平等に分配すること。**—ごう**〔阿彌陀號〕(名) 人の名の下に阿彌陀佛・阿彌などとつけたこと。「妙本阿彌陀佛」「本阿彌」。**—ごま**〔阿彌陀護摩〕(名)【佛】阿彌陀とその左右に附添ふ觀音・勢至の二菩薩。**—じのみ**〔阿彌陀寺陵〕(名) 下關市阿彌陀寺町の安德天皇の御陵。**—どう**〔阿彌陀堂〕(名)❶【佛】阿彌陀如來を安置した堂。❷あみだどうが千利休が有馬温泉の阿彌陀堂の庭で點茶して、豐臣秀吉に獻じた時用ひた茶釜の形。**—にょらい**〔阿彌陀如來〕(名)【佛】あみだ。**—のひかり**〔阿彌陀光〕(名) 阿彌陀籤の一種で、仲間の中に金を出さないで分配を受けるものがあること。**—ぶ**〔阿彌陀佛〕(名)【佛】あみだ。**—ぶつ**〔阿彌陀佛〕(名)【佛】あみだ。**—ほう**〔阿彌陀法〕(名)【佛】眞言宗などで阿彌陀を祈念する法。**—まんだら**〔阿彌陀曼荼羅〕(名)【佛】阿彌陀如來を中央に置き、觀音・文殊・彌勒・維摩などを配して畫いた曼荼羅。**—わり**〔阿彌陀割〕(名) 町の道路の割り方で中央から大道を諸方に放射するもの。**—の光も金次第**(句) 阿彌陀佛でも金錢を多く奉るものに利益を多く與へる。一切のことは金次第である。

〔だみあ〕

あみ・だいく〔網大工〕(名) 網を造る人。あみすき。

あみ・だが・みね〔阿彌陀峯〕(名)【地】京都市東山の一峯。慶長三年建設の豐太閤の廟がある。もと山麓と山麓に阿彌陀堂があるから名づけた。

あみ・ど〔編戸〕(名) 竹又は木の一へぎで編んだ戸。

あみ・ど〔網戸〕(名) 土蔵などの金網を張った戸。

アミド〔Amido-Amide〕(名)【化】アムモニヤの水素原子一箇の代りに、脂肪酸の水酸基を除いた殘りの基と結合した形の物質の總稱。

あみ・どり〔網捕〕(名) 網で魚鳥などを捕へること。

あみ・どり〔網鳥〕(名)【動】「ほととぎす」の異名。

あみ・なわ〔網繩〕(名)(あみすな)網綱。

あみ・の・き(名)【植】せんだん(棟)。

アミノ・さん〔一酸〕(名)【化】蛋白質の構成する窒素を含んだ物質で、蛋白質の榮養價は、その組成成分のアミノ酸の種類と分量とで定まる。

あみ・の・め〔網目〕(名) 網の絲と絲とのすきま。

あみ・の・め〔雀舌草〕(名)【植】石竹科の越年生草本。莖は細かく分岐し、葉は細かく卵形又は楕圓形。春夏の候、白色の小五瓣花を開く。のみのつづり。すずめのあみ。

〔草舌雀〕

あみ・の・りもの〔網乘物〕(名)「の護送に用ひた網をかけた乘物。

あみ・ばり〔網針〕(名) あみすきばり(網抄針)。

あみ・ば・も〔網葉藻〕(名)【植】絲狀類の海草。葉は單狀で短く、網狀部は卵圓形、その基部は心臟形で二回羽狀をなす。

あみ・はん〔網版〕(名) あみめばん(網目版)。「。

あみ・ひき〔網引〕(名) 魚を捕る爲に網をひくこ

あみ・ひと〔網人〕(名) あみこ(網子)。

あみ・ぶね〔網船〕(名) 網を曳く船。又、網をのせて運ぶ船。

あみ・ぼう〔編棒〕(名) 編物をするに用ひる棒で、金屬・角・竹で作り、一端の鈎狀になってゐるものと、まっすぐなものとがある。

あみ・みどろ(名)【植】淡水に生ずる微細な綠藻類で、四桂狀の細胞が多數結合して網目狀を呈し、金體は壺狀をなすもの。あみも。

あみ・め〔網目〕(名) 網の目。**—ばん**〔網目版〕(名) 感光藥を塗布した銅板に、スクリーン(微細な網目を刻んだガラス板)を通して寫眞陰畫を感光させ、現像後不要部分を酸で腐蝕させて製した印刷用版。名古屋銅版。網版。

あみ・め〔網目〕(名) 絲と絲とを編みあはせた目。

あみ・もの〔編物〕(名) 毛絲や其の他の絲で衣服・シャツ・靴下・手袋等を編みつくること。又、その物。**—いと**〔編物絲〕(名) 毛絲・レース絲・絹絲・刺繍絲・メリーヤン等のやうな編物に用ひる絲。

アミル・アルコール〔Amyl alcohol〕(名)【化】糖分の醗酵する時、酒精に伴なって發生する無色の油狀液で、臭氣と毒性とがある。

アミン〔Amines〕(名)【化】アンモニヤ中の水素原子をアルキル基におきかへて得た化合物の總稱。

あむ〔虻・蝨〕(名)【動】あぶ(虻)。「ぶ)。

あむ〔浴〕(他動・ヤ上二) あぶ(浴

あむ〔編む〕(他動・マ四)❶絲・竹・籐などを組合せてつくる。❷苦物をかきつづる。

あむ・むしろ〔編席〕(名) あじろ(網代)。

アムステルダム〔Amsterdam〕(名)【地】オランダの首府。アムステル河口、ゾイデル海に臨む同國第一の都市で、北海運河によって北海に通じてゐる。ネーデルランドの藝術の大倉庫と稱せられる。**—インターナショナル**〔Amsterdam-International〕(名)【社】本部をアムステルダムに置く國際勞働組合聯合會。

あむ・す〔浴す〕(他動・サ四) あびす。あぶす(浴す)。(古語)「同じ。

あむ・す〔あむす〕(他動・サ下二)前條に

あむ・て〔天〕(名)❶高く青空とひろがり、廣く大地を覆ひ、日月・星辰の存在する所。そら。こくう(虛空)。❷日の神・造化の神の居給ふ所。

あめ〔雨〕(名) 雲の水分子が冷氣の爲に凝固して地上に落ちるもの。**—車軸の如し**(句) 大雨・暴雨などの句の譬。**—塊**(くれ)**を破らず**(句)(王充の論衡の句) 雨が霽かで世の太平なことをいふ。**—に**(かぶ)**ひ風に櫛**(くし)**る**(句)(莊子天下篇の句) 風雨を厭はずに苦勞する。**—霰れて笠を忘る**

(句) 受難の時が去って、その時に受けた恩を忘れることの譬。**—降って地固まる**(句) 事變を經て却ってよく治まる。**—や霰と**(句) 彈丸などの烈しく飛來る譬。

あめ[飴](名) ㊀澱粉又は澱粉含有原料(糯米・糯粟・粳米・玉蜀黍等)を麹菌で糖化した甘味ある粘質の食品。淡黄色で透明であるが、下等なものは黒褐色で、ぬめぬめとはすこと。**—を喰はす**(句) 勝負事にわざわざ負ける。甘言を以て人をだます。**—を含み孫を弄ぶ**(句)(後漢馬皇后紀の句) 祖父母などが、飴を含みながら、孫を遊ばせる。

あめ[鯢](名)【動】鮲科の魚。長さ一五糎位、背部は暗蒼色で黒斑と小朱點がある。關東でやまめ、關西でアメのうなといふ。溪流に住み、味は美味。あめうを。あみのうを。あめます。

あめあがり[雨上](名) あまあがり[雨上]。

あめあし[雨脚](名) あまあし(雨脚)。

あめあと[雨跡](名) ㊀地上に殘る雨のしづくの跡。㊁雨面に存する雨の爲の凹み。

あめあられ[雨霰](名) 雨霰と霰と。㊂彈丸などの烈しく降下ること。あめやあられ。

あ・めい[蛙鳴](名) ㊀蛙の鳴くこと。㊁やかましいこと。**—せんそう**[蛙鳴蟬噪](名) ㊀蛙や蟬のやかましく鳴くこと。㊁がやがやしゃべるばかりで效果のないこと。

あめいし[飴石](名) 水飴色の半透明な石。

あめいろ[飴色](名) 透きとほった黄色。水飴のやうな色。

あめうお[鯢](名)【動】あめ(鯢)。

あめうし[飴牛・黄牛](名) 飴色の牛。

あめうり[飴賣](名) 笛を吹いて呼びあるき、道のほとりに桑を立てて荷をおろし、飴を賣りあるもの。又、千供の與力ひく爲、樂器を鳴らし、唄で囃しながら、飴を賣りあるくもの。

アメーバ[Amoeba](名)【動】アミーバ。【子。

あめがし[飴菓子](名) 飴を原料とした菓

あめがしした[天下](名) あめのした(天下)。

あめかす[飴滓](名) 飴を搾ったあとのかす。牛・豚などの飼料とする。

あめかぜ[雨風](名) ㊀雨と風と。㊁風が加はって雨の降ること。㊂酒好でありながら、菓子などを好むこと。

あめかち[雨勝](名) 雨天の日の多いこと。

あめかんむり[雨冠](名) あまかんむり(雨冠)。

あめきんごく[雨禁獄](名) 白河天皇が、雨の爲に法勝寺行幸の中止になったのを怒りになって、雨を器に盛って獄に下されたこと。「めく。(古語)

あめく[飴細工](名) ㊀飴で、人・鳥・獄・花・卉などの形をこしらへたもの。㊁外觀ばかり美しくて内容のつまらぬもの。

あめしずく[雨雫](名) ㊀雨のしたたり。㊁涙。㊂女のしなを流して泣くさま。

あめしらす[天知らす](自動、サ四) ㊀天上を治められる。崩御。(古語)

あめつちまき[飴粽](名) 飴をぬったちまき。

あめつち[天地](名) 天と地と。てんち。**—の**[天地の]枕(ひ)(名) いやとほながく(彌遠長く)の枕詞。**—のふくろ**[天地袋](名) 年頭に多くの幸福を取入れる心持で、天地を縫合はせた祝の袋。**—の道**(句) 自然の大道。**—のむた**(句) 天地と共に。(古語)

あめ・なる[天なる](枕「ひ」(日)「さす」(笹)の**あめ・の**[天の]接頭) 高天原にあた人又はあった物の名に冠せていふ語。

あめ・の・うおぶね[鯢](名)【動】あめ(鯢)。

あめ・の・うおはし[天浮橋](名) 神代に、神たちが天地の間をお通ひになったといふ道にかかってあった橋。諸一冊に「一齊が此の橋に立って蒼海を探って、磯馭盧島を得給うたと傳へられる。(古語)

あめ・の・おきて[天掟](名) 天つ神の定められた規則。(古語)

あめ・の・かたりごとうた[天語言歌](名) 天上の故事を語り傳へた歌。(古語)

あめ・の・こやねの・みこと[天兒屋根命](名)【神】中臣氏・藤原氏の祖先。神皇產靈神の御子。五部神の一で、その子孫は祭祀を掌った。

あめ・の・した[天下](名) ㊀天におほはれたところ。㊁國土。㊂世界。日本國。**—しろしめす**(句) 天下を お治めになる。(古語)**—申す**(句) 天下の政治を行ふ。(古語)**—を逆さまにする**(句) 現實にはあり得ないことの譬。

あめ・の・たじからお・の・みこと[天手力男命](名)【神】天の岩戸の變の時、岩戸から大神をお出し申した大力の神。

あめ・の・たねこ・の・みこと[天種子命](名)【神】天兒屋根命の孫。神武天皇の朝、祭祀を掌った。

あめ・の・とこたち・のかみ[天常立神](名)【神】天地開闢の時、始めてあらはれ給うた神。(日本書紀)

あめ・の・とみ・の・みこと[天富命](名)【神】天太玉命の孫。神武天皇の朝、神事・造營を掌り、齋部を率ゐて斧・鋤・鍬・櫛・楯・矛・戈を造られた。

あめ・の・ぬぼこ[天瓊矛](名) 諸一冊二神が、天浮橋の上からかき探りたといふ矛。その矛先から滴った潮が磯馭盧島となったといふ。

あめ・の・ひぼこ[天日槍](名)【人】新羅の王子で、垂仁天皇の朝歸化して、但馬國出石に住んだと傳へられる。

あめ・の・ほひ・の・みこと[天穂日命](名)【神】出雲國造の祖。大國主神祭祀の祭主となる。千家氏はその子孫。

あめ・の・ますひと[天益人](名)人民。(古語)

あめ・の・みかげ[天御蔭](名) 天皇の御宮殿。(古語)

あめ・の・みかど[天御門](名) みかど(御門)。(古語)

あめ・の・みくまり・のかみ[天水分神](名)【神】速秋津彦神の御子。天地の水を施しくばり給ふ神。

あめ・の・みなかぬし・のかみ[天御中主神](名)【神】天地開闢の初め、高天原に出生ぜられ、宇宙を主宰ぜられた神。(古事記) 「い柱。(古語)

あめ・の・みはしら[天御柱](名) 宮殿などの高

あめ・の・みまご[天御孫](名) 天照大神の御子孫。天皇。(古語)

あめ・の・むらくも・のつるぎ[天叢雲劍](名) 三種神器の一。素盞嗚尊が出雲國簸川上で八岐の大蛇を退治して得給うた劍。之を天照大神に奉られた。草薙劍。

あめ・の・もち[飴餅](名) 昔、佐夜の中山で賣った

あめ・の・もり・ほうしゅう[天森芳洲](名)【人】江戸時代の儒者。名は後段。通稱東五郎。京都の人。木下順庵の門人。對馬侯宗氏に仕へた。寶暦五年(一七五一)歿。年八十八。「橘窓茶話」等の著がある。

あめ・の・やすかわ[天安河](名) 神代に諸神の會合せられた所で、天上にあったといふ河。あめのやすのかは。(古語)

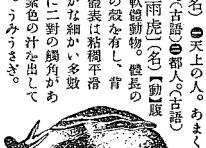
あめばち[飴蜂](名)【動】蜜蜂科の蜂の一種。體長一七粍内外。全身飴色、複眼黒くして大、翅は灰色で暗黄色の脈がある。夜間燈火に集り、夜盜蟲に寄生する。

あめ・ひと[天人](名) ㊀天上の人。あまくだった人。てんにん(天人)。(古語) ㊁都人。(古語)

あめ・ふらし[雨降・雨虎](名)【動】腹足類に屬する淺産の軟體動物。體長の五分の一位の黄褐色の殼を有し、背面に外套膜を被る。體表は粘稠平滑な暗紫色の地に、鮮かな細かい多數の斑紋があり、頭部に二對の觸角がある。物に觸れれば濃紫色の汁を出して身を隱す。うみしか。うみうさぎ。

あめふり[雨降](名) ㊀雨の降ること。㊁雨の降る日。**—かざまに**[雨降風間に](副) 雨の降

〔鯢〕



〔しらふめあ〕

るにつけ風の吹くにつけ。―ぐさ[雨降草](名)【植】ひるがお(畫顔)。

あめ・ほうびき[飴・引](名)江戸時代に、飴屋が鼓打ませて、あたった人に飴をやって人氣をとって飴を賣ったこと。

あめ・ます[鮠・鱒](名)【動】あめ(鮠)。

あめ・だら[飴・斑・斑黄牛](名)斑のある飴牛。

あめ・もよい[雨・催](名)(あまもよう)(雨模様)。

あめ・もよう[雨・模様](名)(あまもよう)(雨模様)。

あめ・もよに[雨もよに](副)雨の降る時に。【古語】

あめ・やま[天・山](名)天や山のやうに高いこと。

あめ・やき[阿米屋・焼](名)明の歸化人宗慶の鴨た樂焼。宗慶が始め名を阿米夜といったから名づく。

あめり[有めり](句)「有るめり」の約。あるやうだ。

アメリカ・インディヤン[American Indian](名)アメリカいんどじん(亞米利加印度人)。

アメリカ・いんどじん[亞米利加印度人](名)北部アメリカを中心に分布してゐる米國の原住民族。皮膚は銅色で黒髪を有し、總數約三〇萬を數へる。アメリカインディヤン。

アメリカ・がっしゅうこく[亞米利加合衆國](名)【地】(The United States of America)北アメリカ洲の中央にある一大共和國。首府はワシントン。本國面積七七〇萬平方粁。現在鐵道の延長四〇萬粁、自動車數二千〇〇萬臺、商船一二〇〇萬噸、國富は世界に冠絶し、債務國は二〇餘國に達してゐる。もと英國の屬領であったが、一七八三年獨立を承認せられた。

アメリカ・ごけ[亞米利加後家](名)米國出稼人を夫とする妻の、我が國で留守をしてゐる者。

アメリカ・しゅう[亞米利加洲](名)【地】(America)北亞米利加洲と南亞米利加洲との總稱。コロンブスより少し後れて渡航し、探檢に從事したイスパニヤ人アメリゴ(Amerigo Vespucci)の名に因んで命名された。

アメリカ・そう[亞米利加草](名)【植】ま石竹科の多年生栽培草本。ヨーロッパの原產。莖の高さ六〇糎位、葉は卵狀披針形で對生。初夏、石竹に似た小花を開き、繖形狀をなす。觀賞用として培養される。

アメリカニズム[Americanism](名)㊀米國風。米國流。米人氣質。自由で輕い風。㊁親米主義。

アメリカニゼーション[Americanization](名)アメリカ化すること。アメリカ化すること。

アメリカ・ほうふう[亞米利加防風](名)【植】繖形科の栽培草本。形狀「にんじん」に似、葉は羽狀複葉。夏、黃色の花を複繖形に著く。根は白色で甘味に富む。葉は食用に供せられる。

アメリカ・まつ[亞米利加松](名)【植】一名オレゴン・パインといひ、又、普通に米松(べいまつ)といふ。近時北米から輸入して建築材に用ひる松科の巨木。產出量多く、安價である。

アメンドウ[葡 Amendoa](名)【植】薔薇科の落葉喬木。高さ六米ばかり、莖は披針形で鋸齒がある。春、淡紅色の花を開く。果實は桃に似て肉厚く、熟すれば裂開する。種子は藥用となる。扁桃。はたんきやう(巴旦杏)。

あめん・ぼう[飴坊](名)【動】鼓豆蟲(えびまめ)科の小甲蟲。體長一二粍內外、背面は黑色、腹面には銀白色の微毛を密生し、中脚及後脚は著しく長く、水上を疾走する。飴に似たる臭氣がある。かはくれ。みづすまし。

あめんぼう[飴棒](名)棒形にした飴菓子。

あも[餅](名)もち。(京阪の方言)

あも[母](名)はは。(古語)

アモイ[Amoy][厦門](名)【他】支那福建省の開港場。厦門島及び鼓浪嶼上にある。臺灣の高雄・基隆との間にも便船の往復がある。

あもう[甘ふ](名)(あまふ)(自動、ハ下二)㊀甘える。㊁恩になれる。㊂あやまる。(古語)

あも・とじ(名)ははとじ(母刀自)。(古語)

あも・ふ・もと[足下・蹈・下](名)身もと。素性。身分。家柄。「る(天降る)。(古語)

あもる[天降る](自動、ラ四)あまくだる。

あや[文](名)(あやまり)㊀さまざまの色合や模様。㊁修辭。趣味。㊂すぢめ。けぢめ。

あや[綾](名)㊀種種の模様を織り出した絹。㊁斜

あや[咄・嗟](感)あな。あなや。

あやいがさ……る[綾・蘭笠](名)蘭を綾に編んで造った笠。あやがさ。

あやいと[綾・絲](名)㊀子供の遊戯の綾取に用ひる絲。㊁あぜの中で、はたの經絲をまとめる絲。―おり[綾絲織](名)(あやがおり)(市樂織)。

あやうす・がる[危がる](他動、ラ四)危いと思ふ。あぶながる。

あやうげ[危げ]あやふさうさう。あやふいさま。

あやうし[危し](形、一)㊀あぶない。危害が來ようとする。㊁むつかしい。心配である。

あやおり[綾織](名)㊀綾織物。㊁綾を織る人。

―もの[綾織物](名)綾織の織物。

あやかき[綾垣](名)往古鎧(よろひ)で造った幕で、殿內・室內の隅にたし、又は遊猟などの時に地上に張ったもの。

あやがさ[綾笠](名)(あやいがさ)(綾蘭笠)。

あやかし(名)船の難破しようとする前に出るといはれる海上の怪物。㊁怪しいもの。怪しいこと。

あやかりもの[肖者](名)㊀よく似た者。㊁學徳のすぐれた人に似て幸を得たもの。ありがたもの。果報者。㊂能樂の假面の名。船弁慶で、知盛の著けるもの。

あやかる[肖る](自動、ラ四)㊀感じて似る。㊁幸な得た人に似て自分も福を得る。

あやぎぬ[綾絹](名)綾織の絹。

あやぎり[文桐](名)【植】(あおぎり)(青桐)。

あやぎる[間切る](他動、ラ下二)はぎれよくものをいふ。

あやぐす[綾葛](名)綾織の葛布。

あやぐろ[綾・呉・紹](名)綾織にした羊毛・麻などの織物。綾織の呉絽服連。

あやし[怪し](形、シク)㊀不思議である。疑はしい。㊁めづらしい。ちがってゐる。㊂賤しい。みぐるしい。―い[怪しい](形)「あやし」の口語。―がる[怪しがる](他動、ラ四)怪しいと思ふ。―げ[怪しげ](名)あやしいさま。

あやじ……[綾・地](名)綾織の地。を含む。

あやしぼむ[怪しばむ](自動、マ四)怪しく見える。【古語】

あやしび[怪しび](名)あやしむこと。ふしぎ。

あやしび[怪・火](名)㊀火もとのわからぬ火事。㊁妖怪の出る火。燐火。

あやしむ[怪しむ](他動、マ下二)【古語】

あやしぶ[怪しぶ](他動、バ四)怪しむ。(古語)

あやしみ[怪しみ](名)怪しむこと。ふしぎ。

あやしむ[怪しむ](他動、マ四)怪しいと思ふ。ふしぎだと思ふ。いぶかる。

あやしむ[怪しむ](他動、マ下二)【前條に同じ。】

あやす[賜やす](他動、サ四)㊀赤坊を巧みに慰める。

あやすぎ[文杉](名)㊀【植】さはら(椹)杉の一種。枝細く葉短く、尖端は曲って硬い。㊁杉の薄板を胴代に編んだもの。垣などに用ひる。㊂「人」の字の形を連れたもので、三味線の胴裏・紗綾・繻子の綾・刀の地肌等の模樣に用ひられる。

あやすげ[綾・菅笠](名)綾に編んだ菅笠。

あやだけ[綾・竹](名)㊀機(はた)の經絲に插んでその亂れを防ぐ竹。あぜたけ。㊁昔、盆踊などに女が持って踊った竹で、色紙を卷いて、總(ふさ)を端につけたもの。㊂引窓の引縄を掛ける竹。

あやつ[彼奴](代)あいつ。かやつ。

あやつ[綾・槻](名)槻のもくめのうつくしい。

あやつり[操](名)㊀あやつること。㊁操人形。―

さ操座(名) 操芝居の劇場。**—しばい**(操芝居)(名) 浄瑠璃・音曲にあはせて、操人形をつかつてする芝居。**—にんぎょう**(操人形)(名) 細い絲を物陰からあやつつて、音曲・浄瑠璃に合させて踊らせる人形。

〔居芝りつやあ〕

あやつる(操る)(他動、ラ四) ㊀絲を附けて物陰から引いて物を動かす。㊁裏面に居つて事を巧みに働かせる。㊂うまくとりあつかふ。

あやとり(綾取)(名) ㊀輪にした絲を左右の手首にかけて、さまざまに組合はせてやりとりする女兒の遊戯。㊁攫出の附屬具で、綾絲の上下に通した棒。

あやど(文)(名) 音樂で、足を斜にうちちがへるやうに習ること。

あやどる(操る)(他動、ラ四) あやつる。

あやなし(文無し)(形、一) わけがわからぬ。不分明である。

あやぬ(綾布)(名)(しす×倭文)。

あやのあたえ(漢直)(名) 漢の歸化人の子孫。阿知使主の子孫を倭漢直といひ、魯の白龍王の後裔を河內漢直といふ。

あやのし(綾師・文師)(名) 昔、綾部司に屬し、錦・綾などを織ることを司つた織工。

あやはがさ(文羽笠)(名) 檜の網代笠で、山伏のかぶるもの。

あやはとり(漢織)(名) 昔、支那の漢國から來た知使主の傳へた綾織を織つた織工。

あやひがき(綾檜垣)(名) 檜のへぎで編んだ垣。

あやひと(綾人)(名) 大和に居つた新羅の織工。㊁阿知使主の傳へた綾織を織つた支那人。

あやぶむ(危ぶむ)(他動、マ四) あぶなからうと氣づかふ。

あやふむ(危ぶむ)(他動、マ下二) 「あやふくする。

あやふや(文やふや)(形、一) あいまい。

—にんぎょう(あやふや人形)(名) 氣儘頭巾をつけた美醜何れともつかぬ普通の容貌の人形。

あや・ふり(綾振)(名) 敷箇のお手玉を投げあげて、片手又は兩手で受けることを繰返して行ふ女兒の遊戯。

あやほかと(副) あぶないが。(東國の方言)〈古語〉

あやまき(綾卷)(名) 砧(きぬた)で布を打つ時、その布を卷きつける棒。

あやまち(過)(名) ㊀あやまつこと。おちど。しそこなひ。まちがひ。けが。㊁青年男女の間に不義の關係の結ばれること。㊂「誤」は心得違。**—の功名**(句)しそこなひが却つて手柄になること。**—を文る**(句)〈論語子張篇の句〉小人は過を改めずに、その過をよいやうに見せかけようとする。**—を觀てここに仁を知る**(句)〈論語里仁篇の句〉過の性質によつて、仁者か不仁者かがわかる。

あやまつ(過つ)(他動、タ四) ㊀しそこなふ。まちがひをする。㊁氣づかずに罪を犯す。**—つて改めざるこれを過といふ**(句)〈論語衛靈公篇の句〉改めれば過にならぬが、改めぬから過になる。**—つては改むるに憚ることなかれ**(句)〈論語、學而篇の句〉過を犯し、改めよ。君子の道だから、過は速く改めよ。

あやまり(誤)(名) まちがひ。しそこなひ。あやまち。「謬」は筋道にちがつてゐること。

あやまり(謝)(名) 過失や罪をわびること。あやまること。謝罪。**—じょうもん**(謝證文)(名) 過失や罪をわびる爲の文書。わびじやう。謝罪文。

あやまる(誤る)(他動、ラ四) ㊀まちがふ。しそこなふ。㊁己の不注意から人にあやまちをさせる。㊂心が狂ふ。

あやまる(謝る)(他動、ラ四) 過失や罪を「あやまる。謝罪する。

あやむ(危む)(他動、マ下二) ㊀あやふくする。㊁傷害を加へる。

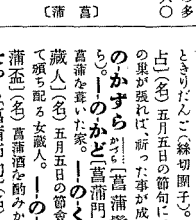
あやむ(怪む)(他動、マ下二) あやしむ。いぶかる。〈古語〉

あやむしろ(綾席)(名) 綾を織り出したむしろ。

あやめ(綾女・文女・漢女)(名) 裁縫に巧みな女。

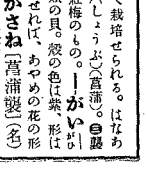
あやめ(文目)(名) ㊀色どり。模樣。㊁差別。すぢみち。〈古語〉**—どり**(文目鳥)(名) 【動】ほととぎす。〈古語〉

あやめ(菖蒲・溪蓀)(名) ㊀【植】蕗尾(ばしを)科の多年生草本。根莖は地下を這ひ、毎年、長さ五〇—六〇糎の劍狀の細長い葉を直出し、葉間から三〇—六〇糎の花梗を出し、五六月の頃、頂端に紫碧色又は白色の花を開く。觀賞用として栽培せられる。はなあやめ。㊁【植】あやめぐさ。(しょうぶ)(菖蒲)。㊂【醫】(かぶ)の色目。表は青、裏は紅梅のもの。**—がい**(貝)(名) 【動】蝌鰓類の貝。殼の色は紫、形は蛤に似る。この貝を三つ寄せれば、あやめの花の形になるから名づけた。**—がさね**(菖蒲襲)(名) 昔、五月五日の祝儀に用ひた襲(かさね)。萌黃色の朝服。**—かずら**(菖蒲鬘)(名) 【植】菖蒲で作つた鬘で、五月五日の節會(せちえ)・端午に冠につけたもの。**—がたな**(菖蒲刀)(名) 昔、五月五日の男兒の初節句に飾つた木刀。しやうぶがたな。**—かぶと**(菖蒲兜)(名) しやうぶ(菖蒲)でこしらへた兜。端午の節句に男兒の祝ひとして用ひる。**—ぐさ**(菖蒲草)(名) 【植】天南星(てんなんしょう)科の多年生草本。池沼に自生する。葉は「あやめ」に似て長く、初夏、長い花梗に淡黃色の小花を開く。五月五日にこの葉を軒端に插んで邪氣を拂ふといふ。しやうぶ。**—ざけ**(菖蒲酒)(名) しやうぶの根をこまかに切つて酒に漬けたもの。五月五日の祝に用ひる。邪氣を拂ふといふ。**—だんご**(菖蒲團子)(名) ㊀さきを四つ又に裂いた竹の枝毎に團子を四つづつさしたもの。㊁いときりだんご(絲切團子)。**—の・うら**(菖蒲占)(名) 五月五日の節句に、軒の「しやうぶ」に蜘蛛の巣が張れば、祈つた事が成就するといふこと。**—の・かずら**(菖蒲鬘)(名) (あやめかずら)。**—の・かど**(菖蒲門)(名) 五月五日、屋根に菖蒲を葺いた家。**—のくろうど**(菖蒲藏人)(名) 五月五日の節會に「しやうぶ」を取つて頒ち配る女藏人。**—のさかずき**(菖蒲酒)(名) 菖蒲酒を酌みかはして祝ふ盃。**—の・せっく**(菖蒲節句)(名) 五月五日の節句。端午。



〔菖蒲〕

〔草めやあ〕



〔なたがめやあ〕

—の・まくら〔菖蒲枕〕端午の節句に、枕の下に一しやうぶを敷いて寝たこと。**—の・ゆ**〔菖蒲湯〕(名)しやうぶの根と葉とをみえた湯で、端午に浴すれば益ありといふ。**—ぶき**〔菖蒲葺〕(名)(句)五月四日の夜、軒にしやうぶをさすこと。**六日の—**(句)五月五日の節句を過ぎて不用になったあやめの意で、時期に後れて不用となったものをいふ。

あやめる〔あやめる〕(他動、マ下一)〔あやめる〕〔危める〕(他動、マ下一)「あやむしの日句。

あやラシャ〔綾羅紗〕(名)綾織の羅紗。

あゆ〔阿諛〕(名)へつらふこと。おべっか。

あゆ(名)東風。あゆのかぜ。(古語)

あゆ〔鮎・香魚・年魚〕(名)【動】鮭科の硬骨魚。體長一六〇糎に達し、背部は帶黄橄榄色、腹部は黄白色、口吻は淡黄色、鱗は細かくて圓滑、一種の芳香がある。四五月頃川に溯り、急瀬に游泳する。性敏捷。味淡泊。**—かけばり**〔鮎掛鉤〕(名)鉤を鍼の如き形に結び絲につけて流し、鮎をひっかけるもの。**—ずし**〔鮎鮓〕(名)鮎の腹に飯をつめた鮨。**—つりばり**〔鮎釣鉤〕(名)かばり(蚊鉤)。

あゆ〔あゆ〕(自動、ヤ下二)あやまる。似る。(古語)

あゆ〔あゆ〕〔あゆ〕(自動、ヤ下二)血や汗がしたたる。

あゆ〔あゆ〕〔あゆ〕(自動、ヤ下二)果物が熟して落ちる。(古語)

あゆ〔あゆ〕〔足結〕(名)昔、足にゆひ纏ったもので、はばき(脛布)の類。飾に鈴や玉をつけた。(古語)

あゆ〔あゆ〕〔脚結抄〕(名)【文】富士谷成章の助詞・助動詞に就いての研究書。「かさし抄」と相並ぶもの。安永七年版。

あゆ〔あゆ〕〔足結〕(名)(古語)

あゆ〔あゆ〕〔足結〕(自動、ハ四)あゆび(足結)をはく。(古語)

あゆがす〔あゆがす〕〔揺がす〕(他動、サ四)動かす。(古語)

あゆぐ〔あゆぐ〕〔揺ぐ〕(自動、ガ四)動く。ゆるぐ。(古語)

あゆび〔あゆび〕(自動、ガ四)歩む。(古語)

あゆなめ〔鮎並・鱗身魚〕(名)【動】鮭鱒目鮎並科の海産硬骨魚。長さ二五糎位。絲褐色で濃黒の斑がある。體は多くは微黄色。あぶらめ。あぶらこ。

あゆ・ぶ〔あゆぶ〕〔歩ぶ〕(自動、バ四)あゆむ。(古語)

あゆまい〔あゆまい〕〔歩〕(名)あゆみ。

あゆみ〔歩〕(名)①あゆむこと。足のはこび。歩行。②足蹠。歩む調子。③渡る爲に水上に渡す板。あゆみいた。④水夫が艪を押す所。⑤縦斷面にあらはれた螺旋の突起と突起との間。相並べる數箇のものの間の距離。**—あい**〔歩合〕(名)互に譲歩して折れあふこと。**—いた**〔歩板〕(名)あゆみ③。**—つ・る**〔あゆみる〕〔歩み連る〕(自動、ラ下二)連立つてあるく。**—ぶり**〔歩振〕(名)あるきぶり。**—よ・る**〔あゆみる〕〔歩み寄る〕(自動、ラ四)①歩み寄る。②互に譲歩しあふ。**—わたる**〔あゆみわたる〕〔歩み渡る〕(自動、ラ四)歩んで渡る。

〔めなゆあ〕

あゆむ〔あゆむ〕〔歩む〕(自動、マ四)あるく。足運。**あよう**〔あよう〕〔陰居中段の日。家作・婚礼・種蒔・酒造には吉。登山・渡海には凶。あやふにちの危日〕。

あよぶ〔あよぶ〕〔歩ぶ〕(自動、バ四)あゆむ。(古語)

あら〔あら〕〔新〕(接頭)あたらしい。又、そのもの。【語】

あら〔あら〕〔粗〕(名)①こまやかでないこと。②天然のまま。人工を加へないこと。③料理したあとに殘った魚の肉や骨。④人の缺點。**—さがし**〔粗探〕(名)人の缺點を探してかれこれいふこと。あなさがし。

あら〔阿羅・蛾・鱇魚〕(名)【動】羽太鱚科の海産硬骨魚。深海の岩礁の間に棲む。體長約四〇糎、頭大きく下顎突出し、細鱗、體は背部灰褐色、腹部は銀白色。

あら〔粗〕(接頭)或語に冠して、こまやかならぬ、又はまばらな、若しくは人工を加へぬの意をあらはす語。

「又、勢のあらい意をあらはす語。酸末・滑石末などを混和したもの。

あら〔感〕あな。ああ。

アラー〔Allah〕(名)【神】マホメット教徒の信仰す「る絶對唯一の神。

あらあら〔粗粗〕(副)さっと。おほよそ。大略。**—かしこ**(句)婦人の手紙の末尾に用ひる語。

あらあらし〔荒荒〕(副)荒荒しいさま。ようしゃなく。なさけなく。

あらあらし〔感〕驚き歎く意。ああ。

あらあらし〔あらあらしい〕〔粗粗し〕(形、二)大層粗末である。

あらあらしい〔あらあらしい〕〔荒荒し〕(形、二)大層亂暴である。甚だ手荒い。**—い**〔あらいい〕〔荒荒しい・粗粗しい〕(形)「あらあらし」の日語。

あらい〔あらい〕〔洗〕(名)①洗ふこと。せんたく。②魚肉の生身を冷水に浸して洗ひ縮ませた食品。

あらい〔あらい〕〔荒い・粗い〕(形)「あらし」の日語。

あらいあぐ〔あらいあげる〕〔洗上ぐ〕(他動、ガ下二)①洗ひ終る。②十分に洗ふ。

あらいあげる〔あらいあげる〕〔洗上げる〕(他動、ガ下一)〔あらいあぐ〕の日語。

あらいいと〔あらいいと〕〔洗絲・絨〕(名)薄紅に染めた絲。

あらいおだし〔あらいおだし〕〔洗桃〕(名)①染色の名で薄い柿色。②檜垣を編んだ形のあらい模樣。

あらいかた〔あらいかた〕〔洗方〕(名)①物を洗ふ方法。洗濯の方法。②無實の罪の結解なすこと。③料理屋などで皿などを洗ふことに從ふ勞働者。

あらいがみ〔あらいがみ〕〔洗髪〕(名)女の髪を洗って解きほぐしたままのもの。

あらいがわ〔あらいがわ〕〔洗革〕(名)薄紅色に染めた揉革。**—おどし**〔あらいがわおどし〕〔洗革縅〕(名)洗革で縅した鎧。

あらいぎぬ〔あらいぎぬ〕〔洗衣〕(名・枕)①洗った衣。②「とりかひ」に取替の枕詞。

あらいくすり〔あらいくすり〕〔洗藥〕(名)眼や傷口を洗ふ藥。「繋いだりする時にかける鞦。

あらいこ〔あらいこ〕〔洗粉〕(名)化粧品の一。顔や皮膚を洗ふ粉。饅餡粉・澱粉質・小豆粉などへ石鹸末・硼酸末・滑石末などを混和したもの。

あらいぐつわ〔あらいぐつわ〕〔洗轡〕(名)馬を洗ったり廐に繋いだりする時にかける轡。

あらいさらし〔あらいさらし〕〔洗晒〕(名)幾度も洗って染に、金絲などで鯉に波の模樣を織出した織物。**—じま**〔荒磯島〕(名)荒浪の打寄せる島。**—なみ**〔荒磯波〕(名)荒磯の近くにある路。

あらいだし〔あらいだし〕〔洗出〕(名)①煉瓦壁の表面を漆喰で塗り隠さないで、素地をあらはしておくこと。②壁や三和土の表面が乾かないうちに、その表面を水洗して、細石を浮き出させたもの。

あらいたつ〔あらいたつ〕〔洗立つ〕(他動、タ下二)①十分に洗ふ。②他人の探って暴露すること。

あらいだて〔あらいだて〕〔洗立〕(名)實情や惡事の眞相

あらいだてる〔あらいだてる〕〔洗立てる〕(他動、タ下一)〔あらいたつ〕の日語。

あらいつち〔あらいつち〕〔洗土〕(名)【地】硅酸鹽物が分解して生じた白色又は灰色の土。

あらいどい〔あらいどい〕〔洗鯉〕(名)「あらひ」(洗)にした鯉。

あらいとす〔あらいとす〕〔洗越す〕(他動、サ四)洗ひ流す。(古語)。「ぐ皿。

あらいさら〔あらいさら〕〔洗皿〕(名)盃などを洗ひそぐ器。

あらいさらい〔あらいさらい〕〔洗浚〕(名)何かから何まで。殘らず。すっかり。「色のさめること。又、そのもの。

あらいじょう〔あらじょう〕〔荒石〕(名)相模國三浦郡三崎町字小網代にあった三浦氏代の居城。後、北條氏の有となり、その滅亡後廢城となった。

あらいすすぎ〔あらいすすぎ〕〔洗濯〕(名)せんたく(洗濯)。

あらいすぎ〔あらいすぎ〕〔洗鱸〕(名)「あらひ」(洗)にした鱸。

あらいせき〔あらいせき〕〔洗堰〕(名)上流の水位を高める爲に、川幅いっぱいに水流を横ざってつくる堰。

あらいそ〔あらいそ〕〔荒磯〕(名)荒浪の打寄せる磯。ありそ。

—いわ〔あらいわ〕〔荒磯岩〕(名)荒磯にある岩。

ぎれ〔あらいぎれ〕〔荒磯切〕(名)名物の一。濃いはなだ色に、金絲などで鯉に波の模樣を織出した織物。

あらいたち〔あらいたち〕〔洗立〕(名)①洗ふこと。②他人の探って暴露すること。

あらいだて〔あらいだて〕〔洗立〕(名)實情や惡事の眞相

あらいだてる〔あらいだてる〕〔洗立てる〕(他動、タ下一)〔あらいたつ〕の日語。

あらいつち〔あらいつち〕〔洗土〕(名)【地】硅酸鹽物が分解して生じた白色又は灰色の土。

あらいのり〔洗海苔〕(名)【植】甘海苔に似た岩海苔の一種で、出雲に産する。

あらいはくせき〔新井白石〕(名)【人】江戸時代の學者。名は君美。家宣將軍の時、幕府の儒官となり、又、大政に參與して前代の弊政を改めた。享保十年(一三八五)卒。年六十九。「古史通」「采覽異言」「諸史餘論」「藩翰譜」「東雅」「折りたく柴の記」「同文通考」等の外、歴史・國語學・故實に關する著多い。

あらいはり〔洗張〕(名)衣服のきれを洗濯して板に張りつけてほすこと。**—や**〔洗張屋〕(名)洗張を職業とする家。

あらいばん〔洗盤〕(名)物を洗ふに用ひる瓦斯又は沈澱物を洗ふに用ひる器。

あらいみ〔荒忌・散齋〕(名)神事にあづかる人が、まいみ(眞忌)の前後に行ふ齋戒。(眞忌の對)

あらいもの〔洗物〕(名)洗ふもの。洗ふこと。

あらいや〔洗矢〕(名)銃腔を拭ふに用ひる鐵製の棒。先端に布を卷き、銃腔に挿入し、前後に引いて使用するもの。

あらいよね〔洗米〕(名)神佛に供へる爲に、清く洗つた白米。ぜんまい。かしよね。

あらう〔荒鵜〕(名)つかひなれぬ鵜。(うの口語。

あらうし〔荒牛〕(名)荒れ狂ふ牛。あばれ牛。

あらうま〔荒馬〕(名)あばれ馬。荒れ狂ふ馬。

あらうま〔新馬〕(名)新たに牧場から引出した馬。一歳の馬。

あらうみ〔荒海〕(名)海の荒れる海。**—の—そうじ**〔荒海障子〕(名)清涼殿の弘廂の北にあつた布障子。手長・足長が海獣にゐる畫があり、裏には宇治の網代の墨繪があつた。

〔荒海障子〕

あらえびす〔荒夷〕(名)あらあらしく、王化に服さぬ夷。

あらえみし〔荒蝦夷〕(名)あらえびす(荒夷)。

あらおこし〔粗起〕(名)【農】大きな塊のままで土を掘り起すこと。

あらか〔殿〕(名)(在處の轉)宮殿。御殿。おほとの。(古語)

あらがい〔爭〕(名)あらそひ(爭)。

あらがき〔疎垣〕(名)まばらに造つた垣。**—の**〔疎垣の〕(枕)「よそ」(餘所)の枕詞。

あらかじめ〔豫・預〕(副)前かたから。かねて。まへもつて。かねがね。

あらかせぎ〔荒稼〕(名)❶あら仕事。力わざの仕事。❷强盜や殺人をすること。

あらかた〔粗方〕(名・副)おほよそ。おほかた。大概。

あらがね〔粗金・鑛〕(名)❶掘出したままで精煉せぬ金屬。鑛石。❷鐵。**—の**〔粗金の〕(枕)「をぢぬね」(土)の枕詞。

あらかべ〔粗壁〕(名)粗塗のままの壁。まだ中塗。

あらがみ〔現神〕(名)天皇の尊稱。あきつかみ。うつつびとかみ。(古語)

あらがみ〔荒神〕(名)荒荒しい神鑑。靈驗のあらたかつつ選んで註文する料理。一品料理。

アラカルト〔佛 A la carte〕(名)

あらかわ〔粗皮〕(名)❶樹木の表皮。❷なめされぬ獸の皮。毛皮。❸穀粒の外皮。もみがら。

あらかわ〔荒川〕(名)【地】關東平野を流れる川。三國山に發し、埼玉縣秩父盆地を流れて關東平野に出て、埼玉縣の中部を貫き、東京市に入り、下流は隅田川・荒川放水路となつて東京灣に注ぐ。

あらかん〔阿羅漢〕(名)【佛】(梵 Arhan)小乘佛教の最高の聖で功德の具つた覺者の位。又、その位の人。**—か**〔阿羅漢果〕(名)【佛】阿羅漢の悟の地位。

あらき〔荒城・殯〕(名)昔、貴人の本葬をなする前に、假に荒殯を納めた所。かりもがり。(古語)**—に**〔荒殯を納めた所〕

の・みや〔殯宮〕(名)あらき。(古語)

あらき〔新墾〕(名)新たに開墾したこと。又、その地。(古語)**—だ**〔新墾田〕(名)新たに開墾した田。(古語)**—はり**〔新墾治〕(名)新たに田を開墾すること。(古語)

あらき〔粗木・荒木〕(名)伐りだしたばかりで皮をとらぬ木材。

あらき〔新木〕(名)新しい材木。

あらき〔荒氣〕(名)荒荒しい氣質。

アラキ〔阿剌吉〕(名)(蘭 Arak)昔、和蘭から來た酒。埃及・印度・爪哇に常用せられる。アラック。

あらぎ〔荒議〕(名)あさはかな試。「なこと。

あらぎ〔荒儀〕(名)あらあらしいふるまひ。疎忽

あらぎだつち〔荒木田土〕(名)もと、東京府荒川沿岸の荒木田原から産した赤土。粘著力あり、壁及び瓦葺下に用ひる。

あらぎだひさおゆ〔荒木田久老〕(名)【人】萬葉學者。度會(わたらい)氏。通稱主殿。名は正蔭。伊勢外宮の神官。五十槻園(いのき)と號す。賀茂眞淵の門人。文化元年(一四六四)歿。年五十九。「萬葉考槻落葉」「日本紀歌解」「校正出雲風土記」「祝詞考」等の著がある。

あらきだもりたけ〔荒木田守武〕(名)【人】室町時代の連歌師。伊勢內宮の神官。連歌より俳諧を創始し、山崎宗鑑と共に世に知られる。天文十八年(一二〇九)歿。年七十七。「守武獨吟千句」の著がある。

あらきだれい〔荒木田麗〕(名)【人】江戸時代の女流文學者。字は紫山。慶德三郎太夫の妻。博覽強記。文化三年(一四六六)歿。年七十五。「池の藻屑」「月のゆく人」等の著がある。

あらきまたえもん〔荒木又右衛門〕(名)【人】劍客。柳生十兵衛に劍法を極め、郡山藩主の師範となつた。寛永十一年、妻の弟渡邊數馬を助けて、河合又五郎を伊賀上野に討つた。寛永二十年(一三二〇)歿。年四十六。

あらきも〔荒肝〕(名)きも。きもだま。度胸。

あらぎょう〔荒行〕(名)【佛】修驗者が苦しみを耐へてする修行。**—じゃ**〔荒行者〕(名)荒行をなする修行者。

あらく〔荒く・散く〕(自動・カ下二)はなれる。ちりぢりになる。

あらく〔荒く〕(自動・カ下二)荒れる。騷ぎ立つる。

あらくさ〔荒草〕(名)❶荒地に生ずる草。❷刈取つたままの草。(古語)

あらぐし〔荒櫛〕(名)齒のあらい櫛。ときぐし。

あらくまし〔荒熊〕(名)たけき熊。あらあらしい熊。

あらくまし〔荒くまし〕(形・二)あらい。あらあらしい。粗暴である。(古語)

あらくる〔荒くる〕(自動・ラ下二)あばあらしくなる。亂暴になる。

あらくれ〔荒くれ・荒れ武士〕(名)氣の荒い武士。無骨な武士。情を知らぬ武士。**—もの**〔荒くれ者〕(名)亂暴者。

あらくれる〔荒くれる・荒れ武士〕(名)荒荒しくなること。無骨なこと。

あらけずり〔荒削〕(名)さつとけずること。

あらけなし〔荒氣なし〕(形・二)あらあらしい。大層荒。

あらこ〔粗籠〕(名)編み目のあらい籠。(古語)

あらこ〔粗粉〕(名)あらいみぢんこ。菓子を製する材料に用ひる。**—らくがん**〔粗粉落雁〕粗粉でつくつた落雁。

あらごう〔爭ふ〕(他動・ハ四)あらそふ。

あらごと〔荒事〕(名)芝居で誠する勇猛なしぐさ。**—し**〔荒事師〕(名)あらごとを主とする役者。

あらごなし〔粗鹿〕(名)❶細密な仕事の前に、粗雜な準備をなすこと。❷物事の始めにあらかたの始末をすること。

あらごも〔粗薦〕(名)あらく編んだ薦。

あらし〔嵐〕(名)❶あれ風。暴風。❷あれ狂ふ風雨。(古語)**—がさね**(句)嵐の騷ぐこと。暴風雨。

—の跡(句)嵐の止んだ後。又、そのあとかた。騷ぎのすんだ後。**—の奥**(句)嵐の起るも

との方。**―の鐘**〔句〕嵐の音にまじって聞える鐘の音。**―の先**〔句〕嵐の吹かぬ前。**―の末**〔句〕嵐の吹いて進む前方。**―の床**〔句〕嵐の吹きこんで寂床。**―の枕**〔句〕嵐の音の爲に睡られぬこと。**―の窗**〔句〕嵐に吹き動かされる窗。

あらし〔荒し〕〔形・一〕乱暴である。烈しい。「いと。たけだけしい。

あらし〔粗し〕〔形・一〕❶こまかでない。さっである。❷なめらかでない。❸まばらである。

あらしお〔荒潮〕〔名〕荒海のうしほ。

あらしお〔粗鹽〕〔名〕結晶したあらい鹽。

あらしお〔荒男〕〔名〕武男ある男。ますらを。あらちを。〔古語〕

あらしおだい〔荒鹽臺〕〔名〕脚のついた膳のやうな臺。魚を人に贈る時に用ひる。

あらしがくさ〔名〕〔植〕虎耳草（ゆきのした）科の多年生草本。高山植物。高さ二〇―五〇糎位。全體に毛茸がある。葉は掌狀で五裂又は七裂、夏、梢上に黄綠色五瓣の小花を聚繖花序に配列す。

あらしし〔粗扱〕〔名〕❶あちく個ること。❷あらけづりに用ひる鉋。

あらしし〔荒足〕〔名〕❶農家に奉公する勞働者。❷あらしごとをする賤しい男。❸雜兵。せこ。

あらしごと〔荒仕事〕〔名〕❶力仕事。❷亂暴なしわざ。❸強盜・殺人などの仕業。

あらしさんえもん〔嵐三右衛門〕〔名〕〔人〕大阪の歌舞伎役者。初代三右衛門は六方の名人。元祿三年（一六九〇）歿、年五十八。

あらしま〔荒島〕〔名〕荒海の中の島。**―かぜ**〔荒島風〕〔名〕荒島から吹いて來る風。暴風。

あらしやま〔嵐山〕〔名〕❶〔地〕京都市右京區嵯峨町にある山で、櫻・紅葉の名所。前は大堰川に臨み、亀山・小倉山に對する。❷〔文〕謠曲の一。勅使が嵐山で神の奇特にあふめでたいもので、春の祝言能に用ひられる。

あらしょうりょう〔新精靈〕〔名〕〔佛〕盆に始めて祭る死者の魂。新佛。

あらじょくたい〔新世帶〕〔名〕始めて持った世帶。しんじょくたい。

あらす〔荒す〕〔他動・サ四〕❶あれさせる。繕はずにおく。そこなふ。こはす。❷荒れるまにまにする。❸おびやかす。さわがす。

あらず〔不有〕〔句〕いなる。さうではない。〔古語〕

あらすいぎょう〔荒水行〕〔名〕〔佛〕修行者が寒中に水を浴びてする苦しい修行。

アラスカ〔Alaska〕〔名〕〔地〕北アメリカ大陸の西北部の半島。面積一五五萬方粁。一八六七年、アメリカ合衆國がロシヤから買收した。砂金や鹿脂を產す。

あらすくり〔粗造〕〔名〕仕上げをせぬこと。したこしらへ。こしらへ所に手をかけぬこと。

あらすさ〔粗苏〕〔名〕器をあらくさんさんで壁土のつなぎにするもの。

あらすじ〔粗筋〕〔名〕❶概略。あらましの筋道。❷書物の內容のあらかたの筋道。概略。

あらずみ〔荒炭〕〔名〕かたすみ。〔古語〕

あらずもり〔粗積〕〔名〕おほかたに見積ること。おほよその見當。

あらせいいとう〔紫雜欄花〕〔名〕〔植〕十字花科の一年生草本。歐洲原產の觀賞植物。高さ八〇糎位。下部は灌木狀をなす。葉は長橢圓狀披針形全緣。五月頃紫赤色大形の花を開き、總狀をなす。

あらそ〔粗苧〕〔名〕粗製の麻苧。

あらそい〔爭〕〔名〕❶あらそふこと。いさかひ。鬪爭。衝突。❷〔法〕權利・義務の關係から二人以上のものが各眞なる意見を固持しての衝突。❸〔評〕は爭ひ訴へること。**―果てててのちぎり木**〔句〕爭ひが終ってから棒ちぎりを持って來ること。時機におくれて役に立たぬこと。

あらそう〔爭ふ〕〔他動・ハ四〕いさかひをする。衝突する。さからふ。はりあふ。競爭する。鬪爭する。「れること。又、その人。

あらそだち〔荒育〕〔名〕荒い教育にそだてあげら

あらぞめ〔粗染・桃花染〕〔名〕❶あらく一しほ染めること。❷薄紅の染色。〔古語〕**―ごろも**〔桃花染衣〕〔名〕あらぎの衣。〔古語〕**―の**〔桃花染の〕〔枕〕「あさ」（淺）の枕詞。

あらた〔新〕〔名〕新らしいこと。

あらた〔灼〕〔名〕あらたか。

あらた〔新田〕〔名〕新たに開墾した田。

あらた〔荒田〕〔名〕荒れた田。耕作せぬ田。

あらたえ〔荒妙・粗栲〕〔名〕織目のあらい麻布。〔古語〕**―の**〔荒妙の〕〔枕〕「ぬの」（布）「こころも」（衣）「ふち」（膠）の枕詞。

あらたか〔灼〕〔名〕神佛の靈驗のいちじるしいこと。

あらたか〔荒鷹〕〔名〕まだ馴れてない鷹。若鷹。

あらたし〔新し〕〔形・二〕あたらしい。「荒くなる。立腹する。〔古語〕

あらだつ〔荒立つ〕〔自動・タ四〕心が荒くさせる。激發する。怒らせる。

あらだてる〔荒立てる〕〔他動・タ下一〕「あらだつ」の口語。

あらたに〔新に〕〔副〕新しく。**―沐する者は必ず冠を彈く**〔句〕〔楚辭の漁父辭の句〕髮を洗った人は、ほこりのかかるのを嫌れて、今かぶらうとする冠の塵をはじきおとす。卽ち己を清くしようとするものは、外の物に汚されることを慣れる。

あらたま〔粗玉・璞〕〔名〕掘りだしたままで、人工を加へぬ玉。**―の**〔粗玉の・新間の〕〔枕〕「とし」（年）「つき」（月）「ひ」（日）「つきひ」（月日）「よ」（夜）「はる」（春）の枕詞。

あらたまる〔改まる〕〔自動・ラ四〕❶あらたになる。かはる。よくなる。❷答儀を正す。篤になる。病が重くなる。

あらたむ〔改む〕〔他動・マ下二〕❶あらたにする。なほす。よくする。變更する。「すること。❷さんみ。檢査。しらべる。

あらため〔改め〕〔名〕❶あらためること。あたらしく

あらためる〔改める〕〔他動・マ下一〕「あらたむ」の口語。

あらたよ〔新世〕〔名〕新天皇の御代。新しい世。

あらち〔新血〕〔名〕❶新らしく生ぜしい血。❷出產の時に出る血。「い男。あらしな。〔古語〕

あらちお〔荒男〕〔名〕まちらを。あらあらし

あらちのせき〔愛發關〕〔名〕奈良時代三關の一。昔、越前國敦賀郡愛發村山中の愛發山にあった關所。延曆八年撤廢された。「い。❷粗雜である。

あらっぽい〔荒っぽい〕〔形〕❶荒荒しい。❷まだ戰はぬ元氣のよい兵士。

あらて〔新手〕〔名〕❶新たに仲間に加はった人。❷新しい取組。

あらて〔荒手〕〔名〕仕事の粗雜なこと。まばらなさま。**―つがい**〔荒手結〕〔名〕中古、毎年五月三日に左近衛府の舍人、同四日に右近衛府の舍人が、賭弓又は騎射の勝負の獲物をしたこと。〔眞手結の對〕

あらと〔砥〕〔名〕あらときに用ひる質の悪いあらい砥。粢雜物を含む砥。

あらどう〔荒銅・粗銅〕〔名〕〔鑛〕十分に精製せぬ銅。

あらとぎ〔荒研〕〔名〕始めて研ぐこと。さっと研ぐこと。荒砥で研ぐこと。

あらどこ〔荒床〕〔名〕❶やはらかでない床。❷死體を假におく床。

あらどこ〔新床〕〔名〕新しい臺床。

あらなくに〔副〕ないのに。〔古語〕

あらなみ〔荒波〕〔名〕荒い波。激浪。

あらなわ〔荒縄〕〔名〕太い藁縄。

あらに〔名〕〔粗鬼・魚類のあらを寄つけたもの。

あらぬ〔荒野〕〔名〕荒れはてた野。あらの。〔古語〕

あらぬ〔不有〕〔句〕よくない。意外な。〔古語〕

あらぬおもい〔不有思〕〔句〕あってはならぬ。寄りあひ。「しぬ心配。

あらぬか〔粗糠〕〔名〕もみぬか（籾糠）。しぬ心配。

あらぬかた〔不有方〕〔句〕思ひも寄らぬ方。外の方。〔古語〕

あらぬこと〔不有事〕〔句〕❶思ひも寄らぬこと。❷無實。〔古語〕

あらぬよ〔不有世〕〔句〕前の世。ちがった世界。〔古語〕

あら-ぬり[粗塗](名)最初にあらくぬること。した塗り。【枕詞。

あらぬ-よし[在根よし](枕)「つしま(対馬)の

あらの[荒野・曠野](名)開墾せぬ野。あれの。—!

ら[荒野等](名)あらの。(古語)

あらは[新刀・荒刃](名)新刀の刃。

あら-ばこ[荒筥](名)神事・供御などのものを入れる筥。(古語)

あらはしやらだ(句)悉曇の四十二字の始め

あらはた[荒畑](名)草の茂った畑。

あらはだ[新膚](名)處女の膚。處女。

あらはだ[荒膚](名)きめのあらい膚。

あらはだ[荒働](名)あらしごと。あらかた。

あら-ひじり[荒聖](名)荒行をする僧。

あらひと-がみ[現人神](名)現世に於いて人の形をしているっしゃる神。即ち天皇。あらかみ。あきつかみ(現つ神)。(古語)

アラビヤ[Arabia][亞剌比亞](名)【地】アジヤ大陸の西南隅にある世界最大の半島で、紅海を隔ててアフリカに對してゐる。面積三百萬方粁。住民はアラブ種族で回教を奉ずる。—**うま**[—馬](名)【動】アラビヤ原産の馬。東洋種の馬の代表で、怜悧・強健・輕捷、乘用馬として古來有名である。毛色には栗毛が多い。—**ゴム**[—護謨](名)アラビヤ・エジプト・アフリカ等に產するアカシヤ屬の植物の幹枝から採った半透明・黃色の樹脂樹。藥品・ゴム糊等の製造に用ひる。—**すうじ**[—數字](名)【數】算用數字0123…等の數字。アラビヤ人がヨーロッパに傳へたから、この名がある。—**そうしょく**……[—裝飾](名)【美】アラベスク(Arabesque)。

アラビヤン・ナイト[Arabian Nights' Entertainments](名)【文】有名なアラビヤ・エジプト・小亞細亞・ギリシヤ・ペルシヤ・支那・印度等の物語集。「アラビヤ夜話」ともいふ。寓話・童話・傳說・小說・諧稽談を集めたもので、著者不明。邦譯には、杉谷代水・日夏耿之介・森田草平三氏のものがある。

アラビヤ[荒びる](自動・バ上一)❶アラビヤの住民。❷【動】アラビヤ馬。❸不良少年。

アラブ[Arab](名)❶アラビヤの住民。❷【動】アラブ馬。❸不良少年。

あら-ぶ[荒ぶる](自動・バ上二)❶あばれる。❷荒れてゐる。未開である。❸破れてわるくなる。❹うとくなる。

あらぶき[粗拭](名)始めにざっと拭くこと。

あらぶき[荒吹](名)【鑛】第一回目の銅鑛精煉法で、羊として銅鉱を製する目的とする。すぶき。

アラベスク[Arabesque](名)【美】アラビヤ人の創意になる壁面裝飾用の模樣。動植物等を唐草模樣にしたもの。アラビヤ裝飾。「倚。

あら-ほうし……[荒法師](名)あらあらしい

あら-ほとけ[新佛](名)(あらたしょうりょう)〈新精

あら-ほね[骸](名)朽ちはてた骨。枯骨。【墓。

あら-ほねおり……[荒骨折](名)荒仕事。あらしごと。

あらぼり[粗彫](名)ざっとあらく彫りつけること。

あらまき[荒卷・苞苴](名)❶莖・竹の皮・藁などで魚類を卷くこと。又、その物。つと。すまき。❷甘鹽の鮭を藁縄で卷いたもの。又、甘鹽の鮭で藁縄で卷かぬものを「新(あら)卷」といふ。北海道の產。

あらまき[荒蒔](名)耕さずに種を蒔くこと。

あらまさめ[疎柾目](名)あらいまさめ。

あらまし[荒増](副)おほよそ。あらかた。

あらまし[(あらましくもと)][有らまし](形・二)さうありたい。(古語)

あらまし[(あらましくもと)][荒まし](形・二)あらあらしい。(古語)

あらまし[豫](名)心づもり。心だけのみ。豫期。豫算。(古語)—**ごと**[豫事](名)豫期。

あらまし[(あらましけれ)](他動・サ四)前から心あてにする。豫期する。(古語)

あらまほし[(あらまほしけれ)](形・二)かうありたいとかうあってほしい。(古語)

あらみ[新身・新刀](名)新たに鍛へた刀。—!

だめし[新刀試](名)新刀の切味をためすこと。

あらみかげ[荒御陰](名)【神】男女の間柄を裂く神。あらみさき。(古語)

あらみがわの-はらえ……[荒見川祓](名)大嘗會の前に、係官が京都の紙屋川でした祓。(古語)

あらみさき[荒御前](名)あらみかげ(荒御陰)御魂の對)

あらみたま[荒御魂](名)荒く猛き神の靈。(和御魂の對)

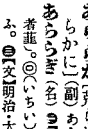
あらみち[荒道](名)荒い道。けはしい道。

あらむぎ[荒麥](名)【植】からすむぎ(燕麥)。

あらむしゃ[荒武者](名)❶粗暴な武士。❷亂暴なふるまひ。がむしゃら。

あらむしろ[粗筵](名)編目のあらい筵。

あらめ[荒布・黑菜・滑藻][植]褐藻類の海藻。莖の長さ九〇糎位。莖から扁平な主葉を出し、それから幾多の副葉を生じ、枝の如き觀を呈し、全長一米半に達する。表面は滑かで縱に皺があり、黑褐色を呈する。食用及び肥料・衣度の原料となる。—**こんぶ**[荒布昆布](名)【植】全體が綿んだ一種の昆布。北海道に產する。ちぢみこんぶ(綿昆布)。—**の-ふくめ**[荒布のふくめ](名)荒布をゆでて、鰹節の煮出汁・砂糖・醬油などで煮た食品。



〔布荒〕

あらめ[荒目・粗目](名)❶編目のあらいこと。又、そのもの。❷目のあらい網。あらめあみ。—**おどし**[荒目縅](名)目があらく三色にをどした鎧。

アラモード[佛 À la mode](佛・形)最新流行。最尖端。

あらもと[新物](名)搗く時に碎けた米。ここめ。(古語)

あらもの[荒物](名)粗大な家具。笊・箒・塵取などの類。(小間物の對)

あらもの[荒者](名)性質の荒い人。あばれもの。

あらもの[新家・新屋](名)❶新築した家。新宅。新居。❷ぶんけ。

あらや[阿賴耶](名)【佛】(梵 Alaya)八識の一。藏の意で、人間心識の根本。內に一切萬有の種子を藏し、萬法緣起の本となるもの。阿賴耶識。

あらやすり[粗鑢](名)目の粗いやすり。

あらやま[荒山](名)❶けはしい山。❷神佛のたたりのある山。—**なか**[荒山中](名)深山。—**みち**[荒山路](名)けはしい山路。

あらゆ[荒湯](名)煮え返る熱い溫泉。「の湯。

あらゆ[新湯](名)沸かして入れた人の入らぬ風呂

あらゆる[所有](形・修)ありたけ。すべて。

あらら(感)驚きあきれる時發する聲。

あらら-か[荒らか](名)あらいさま。—**に**[荒らかに](副)あらあらしく。亂暴に。

あらら-ぎ(名)❶(植)(メ)ぎょうじゃにんにく(行者蒜)。❷(いちい〈一位〉)。❸齋宮の忌詞で「塔」をいふ。❹【文】明治・大正・昭和の萬葉派歌人の團體。創始者は左千夫・赤彥・茂吉。また、その機關雜誌をいふ。

あらら-せんにん[阿羅邏仙人](名)【人】【梵 Arada-kalama)印度の數論派の哲學者。其の主義は戒律によって生死を解脫するにあった。釋迦も一時之に師事したことがある。のち釋迦の弟子となった。

あらら-まつばら[荒荒松原](名)樹のまばら

あらら-やうじ[荒療治](名)❶外科醫の手荒い療治。❷人をむごたらしく殺すこと。

アラル・かい[—海][Sea of Aral](名)【地】露領中央アジヤのコーカサスにある大鹹湖。面積六萬四千方粁、岸線二千三百粁。海拔五〇米の沙漠中にある。

あられ[霰](名)❶雪・雨が氷粒となって降るもの。圓塊又は圓錐體をなす。❷栄の目に切った餅。あられもち。❸あられぼし(霰星)の略。—**いし**[霰石](名)【鑛】炭酸石灰より成り、針方晶系に屬

し、硝子のやうな光澤を有する石。方解石。**—うつ**【霰打つ】(枕)あられ(霰)の枕詞。**—がい**【霰貝】(名)【動】餘瓜類科の海產蟹貝。螺塔は圓錐形で表面に多數の顆粒狀突起を有す。本邦の海岸に分布する。**—がま**【霰釜】(名)霰の形を鑄出した茶の湯の釜。**—がゆ**【霰粥】(名)鯛の肉など細かくして入れて煮た粥。すまし汁をかけて食する。**—かん**【霰羹】(名)霰形のやまのいも入羹で造った羊羹。**—ともん**【霰小紋】(名)こまかい霰形の紋を一面に染め出した模樣。**—ざけ**【霰酒】(名)霰の形のもちごめを入れた味醂酒。奈良の名產。**—じ**【霰地】(名)霰紋を織出した織物。**—しょうが**【霰生薑】(名)生薑を角に小さく切って酢につけたもので、肴などの上にかけるもの。**—そば**【霰蕎麥】(名)ゆでた蕎麥に貝の柱肉と炙った淺草海苔を入れて醬油で煮込んだ食品。**—どうふ**【霰豆腐】(名)栄の目に切った豆腐。**—ふり**【霰降】(枕)「かしま(鹿島)「きしみ(軋)」おと(音)の枕詞。**—ぼし**【霰星】兜・茶釜・鐵瓶などの外面に霰形の小突起。**まつばら**【霰松原】(名)❶あられまつばら(荒荒松原)。❷地)大阪市住吉區安立町の濱の名。**—もち**【霰餅】(名)栄の目に切った餅。あられ。

あられぶし【霰地走踏歌】(名)上古、宮中に行はれた踊歌。歌曲の終りにこの語があるから名づけた。たうが。(古語)

あられ—もない【霰—無い】(形)「あられもなしの口語。

あられ—もなし【霰—無し】(形、一)ありうべくもなく。むさだし。ひどへ。

あらわ【現・露】(名)おもてむき。隱さぬこと。むきだし。

あらい【洗い】洗ふこと。あらひ。

あらわす【現す・顯す・表す・著す】(他動、サ四)❶隱さずに示す。隱れたものを出す。(現)❷明らかに世に出す。(顯)❸表面に出して示す。(表)❹むきだしにする。(露)❺目だつやうにする。

あらわに【顯に】(副)おもてむきに。隱さず。

あらわ—ごと【顯露事】(名)現世の出來事。人間界の出來事。(古語)

あらわる【現る・顯る】(自動、ラ下二)❶はっきりする。(現)おもてむきになる。(顯)❷しれる。發覺する。(露)❸いちじるしくなる。きはだつ。(著)

あらわ—れる【現れる・顯れる】(自動、ラ下一)(あらわるの口語)

あらんにゃ【阿蘭若】(名)【佛】(梵Aranya)(閑寂な所の意)等。

あり【蟻】(名)❶【動】膜翅類の昆蟲。體色は黑又は赤褐。胸腹間に甚だしいくびれがあり、觸角は棍棒狀、翅は薄い膜質で脈が少い。地中又は朽木の中に巢をつくる。雌は女王で、その他、雄と中性の職蟻があり、多數集合して秩序ある社會生活をなす。又、刺針には毒腺を有す。❷建築上、鳩尾形に出した突起。❸板をそちさぬ爲に溝を掘って細い木をはめること。**—の穴から堤も崩れる**(句)(韓非子喩老篇に「千丈之堤以螻蟻之穴潰」とあるに基づく)細事を油斷すると大事が起こるの意。**—の思ひも天に屆く**(句)つまらぬものも念力が强ければ望を達することができる。**—の門渡**(句)蟻が細長い列をつくってつらなり行くこと。**—の這ひ出る穴**(句)少しのすきま。

(㊀ 蟻)

あり【有】(名)あること。存在。現存。實在。**—のくだり**【有件】(名)前にあったこと。(古語)**—のことごと**(句)すべてあるかぎり。(古語)**—のすきび**(句)あるに任せて。いつも同じきまりにあることがないと思ふこと。(古語)**—の儘**(句)あったとほり。

あり【有り】(助動)せうる。したまふ。となりたまふ。ふ。ご。御物語しめやかにーて。

ありう【有得】(自動、ア下二)世にあることを得る。可能である。

アリウス【Arius】(名)【人】エジプトの人。アレクサンドリヤのバウカリス教會の長老。神は唯一であるから、キリストは神以外の人格で、神によって創造されたものと主張し、キリストを神から生まれたとするアタナシュース派との爭論の中心となった。(三五六)【宗】(Arianism)アリウスが創めた基督教の一派。

ありうち【有中】(名)世の中によくあること。ありがち。

ありお【荒丘】(名)荒れた岡。(古語)

ありおう【在合ふ】(自動、ハ四)❶折よくその場にあはせ。丁度その場にある。❷行きあふ。

ありおうう【有王】(名)【人】俊寛の忠僕。俊寛が鬼界ヶ島に流された時、そこに行って仕へ、死んでから骨を持って京に歸り、高野山に入り、吉野川に入水して殺した。

ありおうやま【有王山】(名)【地】京都府綴喜郡井手・多賀兩村の間にある丘陵。後醍醐天皇が元弘元年に賊兵に捕へられ給うた所。高岡山。

ありおとし【蟻落】(名)木材の端な端尾形に造り、他の木の上から嵌め込んで仕組むこと。(以上古語)

ありか【有・在】(名)❶蒸物のにほひ。❷くさみ。臭氣。❸

ありか【在處】(名)物の在る處。所在。住所。

ありがお【有顏】(名)❶まことらしく見せる顏つき。❷無いものあるやうに見せる顏つき。

ありかけ【蟻掛】(名)ありおとし(蟻落)。

ありかず【有數】(名)そこにあるだけの數。

ありかず【在數】(名)此の世に生きながらへる命。よはひ。(古語)

ありがたい【有難い】(形)「ありがたし」の口語。

ありがたげ【有難げ】(名)ありがたいさま。ありがたさ。

ありがたし【有難し】(形)「ありがたし」の口語。

ありがたさ【有難さ】(名)ありがたいこと。

ありがたし【有難し】(形、一)❶たぐ

ひが少い。めづらしい。❷かたじけない。もったいない。恐れ多い。

ありがたち[有形](名)ありさま。ありやう。

ありがたなみだ[有難涙](名)尊く奈く感じて出る涙。喜びの涙。「うで貫は迷惑なこと。

ありがためいわく[有難迷惑](名)有難いや

ありがたや[有難屋](名)❶神佛を妄信する人。❷橋威ある人の訛むもりみに崇拝する人。

ありがち[有勝](名)世の中によくあること。

ありがね[有金](名)手許に所持する金錢。

ありがほし[有欲し](形二)この世に生きてゐたい。(古語)

ありがよう……[有通ふ](自動、ハ四)常に通ふ。馴れて通ふ。

ありき[歩](名)あること。(古語)—**ぞめ**[歩初](名)小兒の歩行始の時の儀式。

ありきたり[在來](名)もとからあること。もとよりのままの。從來のならはし。

ありぎぬ[鮮衣](名)美しい衣。(古語)—**の**[鮮衣の](枕)「みへ」(三重)「さねるさね」「けり。

ありきり[有限](名・副)あらんかぎり。ありたけ。

ありく[あるく](自動、カ四)「あるく」の古語。

ありくい……[食蟻獸](名)【動・哺乳類の獸。體長約一米半。體は暗色。口は長吻で尖る。よく舌を出して蟻を食ふ。尾長く、前肢の爪は大きく、よく穴を掘る。おほありくひ。

ありぐも[蟻蜘蛛](名)【動】蜘蛛の一種。體長約六粍、形は赤蟻に似、赤褐色。網を造らず。よく蟻を捕へて食する。ありもどきぐも。

ありぐるし[在苦し]形二)此の世になることが苦しい。世にながらへにくい。(古語)

ありごと[有事](名)事實。

ありさかなりあき[有阪成章](名)【人】陸軍中將。男爵。山口縣岩國の人。有坂式速射砲の發明家。大正四年(一五七五)薨。年六十四。

ありさかほう[有阪砲](名)【軍】明治三十一年、有坂成章の發明した速射砲。山砲と野砲とがある。

ありさき[蟻先](名)袍や直衣の裾の襴の兩側へ「垂れた所。

ありさし[蟻差](名)ありの蟻(三)。

ありさま[有樣](名)やうす。狀況。狀態。

ありさま(代)お前さま。あなた。

アリザリン[Alizarin](名)【化】人造媒染染料の一。茜草の根中に存在する一種の配糖體グリコシードの分解物。赤色の稜柱狀結晶で、又、アリトセンを醗化して合成的に製造せられ、アルカリに溶解して赤紫色となり、媒剤とは赤色、酸化クロームとは褐色、水酸化第二鐵とは暗紫色の反應を呈し、顏料に供せられる。

ありさん[阿里山](名)【地】臺灣臺南州から臺南州に跨がる山で、海拔二五二米。全山、扁柏・紅檜・樟・松・亞杉等の大森林で、東隣に新高山がある。

ありじごく[蟻地獄](名)【動】うすばかげろふの幼蟲。體長一糎未滿、體色淡紅色、細軟を生じ、泥柱を蓄ず。乾いた砂の中に擂鉢狀の穴を掘り、すべり込む蟻を捕へて食ふ。あとびさり。

〔獄地蟻〕

ありしまたけお……[有島武郎](名)【人】明治・大正の小說家。東京市の人。札幌農學校卒業。人道主義的文學者。晩年には懷疑的傾向があった。大正十二年(一九二三)自殺。年四十六。その著に「宣言」「死」とその前後」等がある。

ありし[在世](名)❶生存して居った時。❷過去の時。

ありしよくぶつ[蟻植物](名)【植】蟻と共存共榮の關係を有すると謂はれる植物。蟻は植物に害蟲の侵入するを防ぎ、植物は蟻に蜜を供給する。卽ち「さくらん」「ありアカシヤ」「ありすぎ」の類。

ありすぎ[在巢](名)鳥の巢。(古語)

ありすい……[蟻吸](名)【動】啄木鳥(きつつき)科の鳥。啄木鳥に似て小さく、背は黑茶色で黑斑がある。好んで蟻を捕食する。

ありずか……[蟻塚・垤](名)蟻の巢で、土や落葉を塚のやうに積みあげたもの。表面には多くの穴がある。蟻の塔。

ありずがのやま[有栖河山](名)【地】大阪新清水寺のある高地の古名。往時有栖寺のあった所で、大阪灣を望む勝地として名高い。

ありずがわのみや……[有栖川宮](名)後陽成天皇の皇子好仁親王が、高松宮を相續して有栖川宮と稱せられた。宮號は紫野有栖川に宮の別莊があったのに因んで名づけられた。—**たけひとしんのう**……[有栖川威仁親王](名)【人】幟仁(たかひと)親王の第二子。幟仁親王の嗣。海軍大將。大勳位、功三級。大正二年(一五七三)薨御。御年五十二。—**たるひとしんのう**……[有栖川宮熾仁親王](名)【人】維新の元勳。幟仁(たかひと)親王の長男。維新の際、總裁となり、參謀總長に任ぜられ、陸軍大將、大勳位、功二級。明治二十八年(一八九五)薨御。御年六十一。國葬を以て豐島が岡に葬る。

ありしが……[有栖川威仁親王](名)【人】後陽成天皇の皇子好仁親王が高松宮と稱せられたが、後、後西天皇の皇子幸仁親王が、高松宮を相續して有栖川宮と稱せられた。宮號は紫野有栖川に宮の別莊があったのに因んで名づけられた。

ありすぎ[蟻塚](名)❶貴族階級。❷貴族風。

アリストクラシー[Aristocracy](名)❶貴族政治。❷貴族階級。

アリストテレス[Aristoteles](名)【人】古代ギリシヤの偉大な哲學者。トラキヤのスタゲイラに生まるる。プラトンの門人。アレキサンダー大王の師傅。論理學・形而上學・物理學・生物學・倫理學・美學等に關する著書が多い。英語ではアリストートルといふ。(紀元前三八四—三二二)

アリストファネス[Aristophanes](名)【人】ギリシヤ國アテネの喜劇詩人。古代喜劇の祖と稱せられる。その作に「雲」「蛙」「鳥」等がある。(紀元前四五六—三八五)

アリスメティック[Arithmetic](名)算術。

ありそ[荒磯](名)あらいそ。(古語)—**うみ**[有磯海](名)あらいそのある海。(古語)—**なみ**[荒磯波](名・枕)❶あらいそなみ。(古語)❷「ありそ」(名・枕)の枕詞。—**まつ**[荒磯松](名・枕)❶荒磯に生えた松。(古語)❷「まつ」(待つ)の枕詞。—**み**[荒磯海](名)荒磯の海。(古語)—**わ**[荒磯回](名)荒磯のほとり。(古語)

ありそのうみ[荒磯海](名)【地】富山縣射水郡及び氷見郡の海岸の古稱。奇岩があって、風光明媚。又、富山灣の別稱。(歌枕)

ありた[有田](名)【地】佐賀縣西松浦郡にある町。有田燒の產地。

ありたき[有度](名・副)自分のしたい產する磁器。慶長三年(一二五八)朝鮮人李參平の製作に始まる。伊萬里・有田町に集中して栽培して食料とする菌。尖端棒頭狀をなすもの。アラジルに產する。

ありたき[有度](名・副)あるかぎり。すべて。

ありたけ[有丈](名・副)「ありたき」の古語。

ありたそう……[蟻茸](名)【植】高等菌類の一。蟻が巢中に栽培して食料とする菌。尖端棒頭狀をなすもの。アラジルに產する。

ありたそう……[土荆芥](名)【植】唇形科の一年生草本。高さ八〇糎位。葉に線狀がある。葉は披針形で微鋸齒があり、互生。夏、枝上に淡紅色の穗狀花を開く。葉は乾かして驅蟲劑・健胃劑・解熱劑・鎭痙劑に用ひる。けいがい。

ありたつ[立つ](自動、タ四)常に「立てゐる。(古語)

ありたもとおる[在廻る](自動、ラ四)此の世にながらへ、めぐる。ありめぐる。(古語)

ありつかわし……[在廻し](形二)似つかしい。(古語)

ありつき[有附在附](名)ありつくこと。住みつくこと。落ちつくこと。落ちつく所を得ること。

ありつき[蟻機](名)蟻差の方法で木材をつぐこと。

ありつく[有阪成章](名)【人】陸軍中將。男爵。山口縣岩國の人。有坂式速射砲の發明家。大正四年(一五七五)薨。年六十四。

ありつく[有附](自動、カ四)❶住所が

定まる。ゐつく。住みつく。おちつく。(古語)㊁たよる所ができる。㊂似ふふ。(古語)

ありつ・く〔有付く〕(他動、カ下二)㊀ありつかせる。㊁或物にとりつく。よりどころを得る。

ありてい〔有體〕(名)ありのまま。いつはりのない。いこと。ありやう。

ありどおし〔蟻通虎刺〕(名)【植】茜草科の常緑小灌木。高さ六〇糎位。葉は對生して、卵圓形で尖り、葉腋に長い刺がある。初夏、白色漏斗形の花を開き、花後、核果を結び赤熟する。

ありどおし〔蟻通〕(名)【文藝】謡曲の一。紀貫之が雨中に蟻通明神を通してその神怒に觸れ、歌を詠んで神慮を鎮め奉ったことを作ったもの。

〔通蟻〕

ありどおしみょうじん〔蟻通明神〕(名)【神】大阪府泉南郡長瀧村にある神社。枕草子・古事談等にこの神のことが見えてゐる。

ありとめ〔蟻留〕(名)ありつぎ。蟻蟻。

ありなし〔有無〕(名)㊀あるのとないのと。存在するのとしないのと。㊁あるかないか。極めて微かで目に立たぬこと。㊂あってもなくてもよいこと。(古語)**―ぐも**〔有無雲〕(名)有るやうにも見え、無いやうにも思はれる雲。(古語)**―ごえ**〔有無聲〕(名)あるかないかのかすかな聲。(古語)**―の・び**〔有無日〕(名)中古、陰暦五月廿五日の穢。この日は村上天皇崩御の日で、怠事件の外は政治を行はれなかったからいふ。(古語)**―もの**〔有無者〕(名)有ってもの無いと同じく、甲斐のないもの。

ありなみ〔有否〕(名)いなむこと。いなといふこと。(古語)

ありなむ〔有否む〕(他動、マ四)いなむ。こばむ。(古語)

ありならい〔有習〕(名)ならはし。なれ。習慣。(古語)〔ならはしになる。ありならふ。(古語)

ありなる〔有成る〕(自動、ラ下二)〔有馴る〕(自動、ラ下二)

ありなれがわ〔阿利那禮河〕(名)【地】〔お

ありなる・ふ〔有馴る〕(自動、ラ下二)〔ありなる〕の口語。

ありなれる〔有馴れる〕(自動、ラ下一)〔ありふる〕の口語。

ありべかりに(副)㊀あるべきとほりに。平常のとほりに。おさなりに。もんきりがたに。㊁手當り次第に。やたらに。

ありべしゅう(副)尤もらしく。

ありま〔有馬〕(名)【地】兵庫縣有馬郡にある有名な温泉地。六甲山脈の北麓に當る。風光明媚。泉質は含鐵食鹽泉。神經痛・消化器病によい。**―そう**〔有馬草〕(名)【植】鬼百合科の多年生草本。葉は無柄で廣披針形。基部は莖を包む。五月頃、黄色の花を開く。有馬地方に多い。きんらん。**―の・ゆ**〔有馬湯〕(名)有馬温泉。**―ふで**〔有馬筆〕(名)有馬から産する筆で、穂先を軸から出入するやうに作り、赤・青・白等の絹糸で軸を飾る。又、軸端から人形が出るやうにしたものもある。**―やま**〔有馬山〕(名)【地】兵庫縣有馬郡の山山の總稱。(歌枕)**―りゅう**〔有馬流〕(名)室町時代末期の人有馬乾信の創めた劍道の流派。

ありまい〔在米〕(名)現にある米。

ありまい〔蟻卷蚜・蚜蟲〕(名)【動】有吻類の昆蟲。草木の嫩芽・葉絲等の液汁を吸收して之を寄する。棲む植物によって種類が多いが、體は小さくて圓く、頭尖り、兩鬚、六脚を有する。蟻は此の蟲の尾端から出る甘い汁を嘗める。あぶらむし。

〔ありまい〕

ありまさ〔在方〕(名)占者の異名。後小松天皇の應永の頃の占の名人加茂在方の名から出た。

ありまつ・し〔有松絞〕(名)愛知縣知多郡有松町から出る木綿のしぼり染。浴衣・手拭地等にする。なるみしぼり。

ありまの・おうじ〔有間皇子〕(名)【人】歌人・詩人。孝德天皇の皇子。其の歌は萬葉集に、詩は「懷風藻」にある。齊明天皇の朝に不軌を圖り、事露はれて死を賜はった。

ありめ・ぐく〔在廻る〕(自動、ラ四)此の世にながらへて經めぐる。ありたしとほる。(古語)

ありもどき〔擬蟻〕(名)【動】鞘翅類の甲蟲。體長約一〇粍。體色赤く、黑又は暗青の點刻があり、黑い翅鞘に赤・黄・白等の斑紋がある。松の害蟲を捕食する。

ありもど・く〔在捨く〕(自動、カ四)〔ありめぐく〕の口語。

アリモニー・ハンター〔Alimony hunter〕(名)次から次へと男と關係を結んで手切金をせびる。

ありゃ(感)あれ。驚く時に發する聲。〔なまって女。

アリヤン・ご〔一語〕(名)〔Aryan language〕アリヤン人種の用ひる言語。その特色は、言語の屈折によって、文法上種種の關係を生ずる。梵・希・拉・英・獨・蘭・佛・西・葡・伊・露・印等の諸國語。

アリヤン・じんしゅ〔一人種〕(名)〔Aryan〕歐洲の大部分・小亞細亞・波斯・印度・アフガニスタン地方に住する人種。アリヤン語を用ひる人種。

ありゅう〔亞流〕(名)㊀第二位の人。㊁その流派を繼ぐ人。

ありゅうさん〔亞硫酸〕(名)【化】一酸化硫黄を水に溶解する時に生ずる酸で、漂白用・消毒用とする。**―ガス**〔亞硫酸瓦斯〕(名)【化】硫黄を空氣中で燃燒する時に生ずる刺戟性の臭氣ある氣體で、無水亞硫酸又は二酸化硫黄といふ。毛・絹・麥稈の漂白用・硫酸製造用・消毒用・殺菌用とする。

アリュー・シャン・れっとう〔一列島〕(名)【地】〔Aleutians〕アラスカ半島と露領コマンドル諸島の間に横たはる米領の群島。

ありよう〔有樣〕(名)㊀ありさま。やうす。㊁まことの。いつはり又は飾りのないさま。ありてい。㊂あるべきはずの。あるべき理由。

アリル〔Allyl〕(名)【化】一種の炭水化合物で、劇臭を有するもの。蕈油・芥子油等の刺戟臭は、硫化アリル・アリル芥子油を含有するからである。

ありわずろ・ふ〔有煩ふ〕(自動、ハ四)ながらへることを厭ふ。(古語)

ありわた・る〔有渡る〕(自動、ラ四)ながらへて年月を經る。ながらへる。(古語)

ありわ・ぶ〔有侘ぶ〕(自動、バ上二)住みにくい。ながらへにくい。(古語)

ありわらのなりひら〔在原業平〕(名)【人】平安朝の歌人。平城天皇の皇子阿保親王の第六一

五子。在原姓を賜ふ。右近衛權中將となつた。世に在五中將といふ。藤原氏の專横を憤り、惟喬親王を立てようとしてならなかつた。又、『伊勢物語』はその作だといふ。元慶四年(一五四〇)薨。年五十四。

ありわらの・ゆきひら……はら……【在原行平】(名)【人】平安朝の歌人。業平の兄。弊學院を建てて子弟を教育した。太宰權帥・陸奥出羽の按察使・民部卿となる。寛平五年(一五五三)薨。年七十六。

ありんさん【亞燐酸】(名)【化】無水亞燐酸が水と反應して生ずる無色の結晶體。

ある【或】(形、修)確定しない物事の上に冠する語。

ある【生る】(自動、ラ下二)うまれる。(古語)

ある【荒る】(自動、ラ下二)①烈しくなる。荒くなる。②興醒める。興ざめする。③おとろへすたれる。④遠ざかる。⑤皮膚のきめがあらくなる。⑥やぶれくづれる。⑦興醒める。興醒める。

あるいは【或は】(接續・副)①又は。若しくは。①何とかすると。ひょっとすると。

あるがうえに【有限に】(名・副)尚その上に。

あるがかぎり【有限】(名・副)ありたけの。こぞりて。

あるがなかに(副)多くある中に。

アルカリ【Alkali】(名)【化】水に溶ける鹽基の總稱。その水溶液はアルカリ性反應を呈し、赤いリトマス試驗紙を青色に變ずる。苛性加里・苛性ソーダ・水酸化アンモニウム・消石灰などは、その普通のものである。**—きんぞく**【—金屬】(名)【化】リチウム・ナトリウム・カリウム・ルビジウム・セシウム等の白色の輕い金屬で、化學作用強く、單體のままでは存在し得ないもの。**—せいはんのう**……はん……【—性反應】(名)【化】赤色リトマス溶液やリトマス試驗紙を青色に變ずる化學反應。**—せん**【—泉】(名)アルカリを含む溫泉。宮城縣岩城溫泉・和歌山縣椿溫泉・鹿兒島縣山之湯溫泉・山形縣銀山溫泉・關東縣熊笹溫泉等で、消化器病・痔疾・婦人病等に特效がある。**—どるいきんぞく**……るい……【—土類金屬】(名)【化】白色の輕金屬。其の水酸化物はアルカリ性反應を呈す。カルシウム・ストロンチウム・バリウムの總稱。

アルカロイド【Alkaloid】(名)【化】植物中に存する窒素を含む鹽基性化合物で、激烈な生理作用を起さしめ、又、毒性を有し、藥用に供する。ニコチン・モルフィン・コカイン・キニーン・カフェインの類。**—いんりょう**……りょう……【—飲料】(名)茶・コーヒー・ココア等の類。

あるき【歩】(名)①あるくこと。あゆみ。歩行。②小使。使。③男が女の許に通ふこと。**—あるき**【歩歩】(副)あるきながら。**—ぞめ**【歩初】(名)あるきそめ。**—ぶり**【歩振】(名)あるくやうす。

アルキメデス【Archimedes】(名)【人】ギリシャの數學者で、純幾何學を應用して機械學を發達せしめ、挺子の原理・アルキメデスの原理を發見した。

アルキル【Alkyl】(名)【化】炭素と水素とからなるアルコール基の總稱。メチル・エチルの類。**—の原理**(句)【理】氣體及び液體流體中にある物體は、その排除した流體の重さだけ重量を減少するといふ理論。

アルケイド【Alkyl】(名)【化】

あるく【歩く】(自動、カ四)ありく。あゆむ。

アルゲマインハイト【獨 Allgemeinheit】(名)無遺性。全體。一般。

アルコーヴ【Alcove】(名)【建】凹室。西洋建築で、壁の一部分を引込ませた恰も日本室の床の間のやうな部分。

アルコール【Alcohol】【酒精】(名)【化】酒類の主成分。纖維が、酵母の作用で、分解して、出來た液體で、燃料又は溶劑として用ひる。**—いんりょう**……りょう……【酒精飲料】(名)アルコールを含有する飲料で、日本酒・麥酒・葡萄酒・シャンペン・ウイスキーの類。**—かんだんけい**【酒精寒暖計】(名)【理】硝子管に着色したアルコールを封じた寒暖計。**—けい**【酒精計】(名)水百分中に含めるアルコールの量を計る浮秤。これをアルコール液中に浮ぜ、その液面管上の目盛を見て檢するもの。**—ちゅうどく**【酒精中毒】(名)【醫】飲酒から來るアルコールの中毒によつて、頭痛・心身の作業力減退・內臓諸器官の病氣等の起こること。**—ニス**【酒精—】(名)シェラックを酒精に溶かしたもの。**—ランプ**【酒精洋燈】(名)アルコールを燃料として物を熱するに用ひられるランプ。

あることないこと【有事無事】(名)うそとまことをかこと入り混ぜて言ふさま。

アルゴン【Argon】(名)【化】液體空氣を分溜して得る、無色・無味・無臭の稀氣體元素で、空氣中に約一%存在する。電球中に封入する。

アルサス【Alsace】(名)【地】フランスの東部で、ライン地溝帶の一部。土地豐饒で、經濟上重要な地域。古來、幾度か佛・伯間の緊爭地となつたが、世界大戰の結果、北方のローレン州と共にフランスの領土となつた。

あるじ【主人】(名)一家の主人。ぬし。ていしゅ。**—がら**【主人柄】(名)あるじのさま。**—がる**【主人がる】(自動、ラ四)主人であることを誇示する。**—かんばく**……くわん……【主人關白】(名)主人が權利を主張してゐること。**—ぶる**【主人振る】(自動、ラ四)あるじらしく氣どる。

あるじ【饗】(名)主人となつて馳走すること。饗應。**—もうけ**……うけ……【饗設】(名)饗應の用意。馳走の支度。(古語)

アルジェブラ【Algebra】(名)【數】代數。

アルジェリヤ【Algeria】(名)【地】アフリカの西北部、地中海に沿ふフランス領。面積約四六萬方粁。住民はアラビヤ人・ベルベル人を主とし、回教を奉ずる。

アルジェンチン【Argentine】【亞爾然丁】(名)【地】西はアンデス山脈の分水嶺から、東はブラジル山地の一端に達する南アメリカ南部の大共和國。面積約二百八十萬方粁。十四州・十地方・一聯邦區から成る。首府ブエノスアイレスは南米第一の都會。アルヘンチナ。

アルス【拉 Ars】(名)藝術。

アルタイ・さんみゃく【阿爾泰山脈】【Altai Mts.】(名)【地】アジヤの中央部、シベリヤ平原と蒙古高原との間に連る山脈。西南は天山山脈に接し、東北はサヤン山脈に連る。最高峯ビエルハは海拔四五四二米。

アルちゅう【—中】(名)【醫】アルコール中毒の略。

アルティメータム【Ultimatum】(名)最後通牒。

アルデハイド【Aldehyde】(名)【化】アルコールの不十分な酸化によつて、生ずる刺激性の臭氣ある液體で揮發し易い性を有するもの。アルデヒド。

アルト【伊 Alto】(名)【音】中音部。音樂上、女子の低い聲。又、その歌手。

あるときしょうぶ【有時勝負】(名)金錢を持つてゐる時に大胆な勝負をすること。

あるときばらい……はら……【有時拂】(名)期限をきめずに金錢のある時に拂ふこと。**—の催促なし**(句)有時拂にして催促をせぬこと。

アルトルイズム【Altruism】(名)【倫】愛他主義。

あるなし【有名】(名)本名。(綽名の對)

あるなし【有無】(副)あつてもなくても氣にかけず。

アルバイト【獨 Arbeit】(名)仕事。勞働。作業。語文。

アルバイン・プラント【Alpine plant】(名)【植】高山植物。

アルパカ【Alpaca】(名)①【動】反芻類の獸。南米ペルーに產する山羊の一種で、體長約一米。首長く、黑く美しい毛を有し、これを刈つて織物とする。羊駝。②アルパカの毛から紡績した毛絲。③アルパカ毛絲で織つた光澤ある彈力性の織物。夏の洋服地・コート地・單衣地・洋服裏地等に用ひられる。

〔©カバルア〕

アルバム【Album】(名)①繪葉書帖。②寫眞帖。

アルビオン【Albion】(名)(白丘の意)イギリス。

アルピニスト【Alpinist】(名)登山家。Lの古稱。

アルファ・アーオメガ【Alpha and Omega】(名)ギリシャ文字の最初(α〈アルファ〉)と最後(ω〈オメガ〉)

の字。轉じて始と終、又、始から終まで。永遠の意味に用ひる。

アルファベット[Alphabet](名) ABC等廿六文字。もとギリシヤ文字の初の二字α(アルファ)とβ(ベタ)とを合はせて呼んだ所から出た名稱。

アルプス[Alps](名)【地】ヨーロッパの西南部に横たはる山脈で、イタリー・フランス・スウィス・オーストリヤ・ドイツの境に連る。長さ七五〇粁、幅は中央で二四〇粁、面積は我が本州位。最高のモンブラン(四八一〇米)を始め、四〇〇〇米以上の高峯雲上に擧え、永劫の雪を積んで、雪原・氷河がある。アルプス横斷の道路は、古くから開かれ、電車・ケーブルカー等で中腹まで登ることが出來、旅舍・案内所の設備が十分で、登山者が群集する。アルプスをフランス語でアルプ、ドイツ語でアルペンといふ。

アルヘイ[有平](名)(ポルトガル語 Alfeloa の訛)豐臣氏時代に傳はつた菓子で、白砂糖と飴とを煮つめてつくつたもの。**—ざいく**[有平細工](名) アルヘイで種種の形に造つた菓子。**—とう**[有平糖](名) アルヘイ。アルヘイ細工。アルヘ。

あるべかかりに(副) ありべかかりに。[—ル。

アルペンシュトック[獨 Alpenstock](名) 登山杖。金剛杖。

アルボース[獨 Arbos](名)【藥】樣腦樣の臭氣を有する消毒劑で、帶黃色の固形體。**—せっけん**[—石鹼](名) アルボースを加へて製した水に溶け易い消毒・化粧用の石鹸。

アルマ[Alma](名) エジプト及び近東方面の舞妓。

アルマナック[Almanac](名) 暦。統計年鑑。

アルマ・メーター[Alma Mater](名) 育ての世。母校。出身校。

アルミ(名) ①[化]アルミニウム」の略。②アルミ銅(Aluminium bronze)の略語。アルミ金ともいふ。銅九、アルミニウムの合金。金に似た美麗な黃金色を有し、容易に錆びないで輕いため、裝飾品製作に用ひる。

アルミニウム[Aluminium][輕銀](名)【化】金屬元素。陶土・粘土中に化合物となつて存在する。銀白色の金屬で、甚だ輕く、比重は鐵の三分の一。展性・延性に富み、常温では酸化しない。食器・藥所・器具をつくるに用ひられる。**—ばん**[—版](名) アルミニウムの板に文字・圖畫を寫し、藥品で腐蝕して製版し、石版に代用するもの。

あるもの[有物]**がお**[顔](名) 無いものを有るやうに見せつける顔つき。ありがほ。

あるわ[荒](名) ①雨や風の荒い、こと。暴風雨。②皮膚のきめのあらくなること。

あれ[生](名) うまれ。生。(古語)

あれ[阿禮](名) 往古、四月の賀茂祭に、種種の彩絹を柳に垂れ飾つて鈴をつけたもの。(古語)

こおとめ[阿禮男](名) 賀茂祭の祭主。(古語) **—おとめ**[阿禮少女](名)(さいりん)〈賽院。四〉身を清くして仕へる。(古語) **—つく**[阿禮附く](自動・カ四) 阿禮を盛る筥。(古語) **—ばこ**[阿禮筺](名) 中古、朝廷の競馬・競射のあつた時立てられたはた。(古語) **—ひき**[阿禮引](名) 賀茂祭の日、參詣人が阿禮の鈴を鳴らす爲に、阿禮につけた綱を引くこと。

あれ[我](代) われ。(古語)

—か人か(句) 自分と人との區別を忘れる。

—か人にもあらず(句) 自分の事を忘れる。

—にも非ず(句) 正氣を失ふ。茫然自失。

あれ[彼](代) ①かれ。②あそこ。③あのもの。

あれ[感] 驚きの意をあらはす聲。

あれ[唖鈴](名)(Dumb-bell の譯語) 體操用具。長さ三〇糎位で、鐵製又は木製。棒の兩端に球形のついた一對一組のもの。**—たいそう**[唖鈴體操](名) 唖鈴を持つてする體操。

アレクサンダー[Alexander][人]近代の路國皇帝。①一世。一八〇一年即位、一八〇五年及び一八一二年、大陸諸國と同盟してナポレオンの大軍を懾ました。(一七七六—一八二五) ②二世。一八五五年即位。農奴を解放し、中央アジアを領有したが、虛無黨の壓迫したので、その黨に殺された。(一八一八—一八八一) ③三世。自由思想を壓迫し、ユダヤ人を迫害した。(一八四五—一八九四)

アレクサンダー・たいおう[大王](名)[人](Alexander the Great) マケドニヤ王フィリップの子。年二十歳で即位し、ギリシヤを征服し、ペルシヤの遠征を企ててペルシヤ王ダリウスの軍を破り、シリヤ・エジプトを占領し、印度に攻入つてパビロンに凱旋、翌年崩、年三十三。王の力によつてギリシヤ文化は遙かに東方に及んだ。(紀元前三三六—紀元前三二三)

アレクサンドライト[Alexandrite][石][寶] 金綠玉の一種。濃綠色を呈するが、燭光に照らす時は赤紫色に見える。

アレクサンドリヤ[Alexandria](名)【地】古來有名なエジプト北部の商港。アレクサンダー大王に建設されたので、この名がつけられた。**—がくは**[—學派](名)【哲】(Alexandrian School) 西暦一・三世紀頃から、アレクサンドリヤに起つた哲學の學派で、ユダヤ哲學とギリシヤ哲學とを調和したもの。ピロン等之に屬する。

アレグレット[伊 Allegretto](名)【音】やや速く演奏せよとの意。又、その速度の樂曲名。

アレグロ[伊 Allegro](名)【音】アレグレットよりも少しく速い、速度で演奏せよとの意。又、その速度の樂曲名。

アレグロ・アッサイ[伊 Allegro assai](名)【音】音樂用語。甚だ急速に演奏せよとの意。

アレゴリー[Allegory](名) 諷喩。寓言。

あれ・これ[彼是](代) あれこれ。いろいろ。

あれ・さま(代) あなたさま。ありさま。

あれ・しき[彼式](名) あれくらぬ。あれほど。

あれた[荒田](名) 荒れてゐる田。耕作しないでゐる田。

あれ・だ・つ[荒立つ](自動・タ四) あらたつ。「あらしくなる。

あれ・つ[阿列](名) 五十音圖の第一段。アカサタナハマヤラワの十音。

あれ・つ・ぐ[生繼ぐ](自動・ガ四) この世に生れ來てうけつぐ。(古語)

あれて い[彼體](名) あれほど。あれくらぬ。

あれの[荒野](名) あれた野。あらぬ。あらの。

あれのみ[暴飲](名) 酒をむやみに飲むこと。

あれば・つ[荒場](名) 荒れてゐる土地。

あれは・つ[荒果つ](自動・タ下二)[荒果つ](自動・タ下二)(古語) 殘らずあれる。

あれは・てる[荒果てる](自動・タ下一)「あれはつ」の口語。

あれぶ[荒ぶ](自動・バ上二)あらぶ。荒ぶる。

あれほど[彼程](名・副) あのやうに。あれまで。あれしき。

あれまくら[荒枕](名) 荒れた家にとまること。

あれまする[生坐す](自動・サ四) おうまれなさる。(古語)

あれまどう[荒惑ふ](自動・ハ四) むやみに荒れる。(古語)

あれや(感) 驚いて發する聲。

あれゆく[荒行く](自動・カ四) だんだんあれる。荒れて年月を經る。

あれわ・たれ・どき[彼者誰時](名) 明方やタ方の薄暗くて、人の姿のはつきりせぬ時。かはたれどき。(古語)

あろうろ(副)(洗ふ)(他動・ハ四) ①水などですすぎ清める。②しらべる。③恥辱をすすぐ。

あろかっせん・ものがたり[鴉鷺合戰物語](名)【文】室町時代の小說の名。一說に一條袋良作といふ。紙の蟲の類と祇園の鴉の合戰記。

あわ[粟](名)【植】禾本科の一年生草本。五穀の一。高さ一米位。葉は長披針形で互生する。九月頃、莖頭の大形の花穗に小花が群がり咲き、穗狀花序をなす。穀粒は小粒で黃色を呈する。米と混じて飯とし、飴・造酒の原料とし、又、餅とする。**—あめ**[粟飴](名) 粟のもやしでつくつた水飴。**—おこし**[粟粗粒](名) 粟を蒸して煎つて、砂糖で固めた菓子。**—がゆ**[粟粥](名) 粟をまぜて炊いた粥。**—がら**[粟幹](名) 粟の穗をとつたあとの茎。

あとの辜。—**ざけ**〔粟酒〕(名) 粟で造った酒。—**しょうろ**〔粟松露〕(名)【植】黄色の松露。—**ずけ**〔粟漬〕(名) 酢につけた魚を粟の實と唐辛でつけたもの。—**だい**〔粟鯛〕(名) 鯛の身に粟をつけて蒸したもの。—**だんご**〔粟團子〕(名) 粟の粉でつくった團子。—**つぶ**〔粟粒〕(名) 粟の實のつぶ。—**ぬか**〔粟糠〕(名) 粟の實から取ったぬか。—**ばた**〔粟畑・粟島〕(名) 粟の作ってあるはたけ。—**ふ**〔粟生〕(名)(あわぼた)。(古語)—**ぶ**〔粟麩〕(名) 黄に染めた麩。—**ぶた**〔粟生田〕(名)(あわふだ)(古語)—**ぼ**〔粟穂〕(名) 粟の穂。—**みどり**〔粟綠〕(名) 砂糖を黄色に染め、みそに混ぜ、桧で押しつけた干菓子。—**めし**〔粟飯〕(名)(あわいい)。—**めん**〔粟麺〕(名) 粟粉でつくったうどん。—**もち**〔粟餅〕(名) もちあはを蒸してつくった餅。—**やき**〔粟燒〕(名) 粟餅に餡を包んで焼いた菓子。(名)(あわおこし)。

あわ〔沫・泡〕(名) ⊖液體が空氣を含んで圓くふくれたもの。液體中の氣泡。⊖硝子中の氣泡。⊖口のあたりに噴く唾の玉。⊖(あわお)(泡緒)の略。—**を**〔句〕驚きあわてる。—**を吹かす**〔句〕人の臍をびしいて驚かせる。

あわあわし〔泡泡し・淡淡し〕(形シク) ⊖面白みがない。⊖おもしやりがない。⊖かるがるし。輕率である。—**い**〔泡泡い・淡淡しい〕(形)(あわあわし)の口語。

あわい〔間〕(名) ⊖物と物との間。あひだ(間)。⊖間柄。交際。(古語)

あわい〔淡い〕(形)(あわし)の口語。

あわうみ〔淡海〕(名)(あわうみ)(湖)。

あわお〔泡緒〕(名) 紐の結び方。(あわむすび)の類。

あわきり〔泡切〕(名) 茶の過の泡を滑す用なすび)の類。

あわくう〔自動・カ下二〕⊖はがれ落ちる。くづれ落ちる。⊖あれすまむ。しまりがない。⊖油斷する。(以上古語)

あわく〔喘く〕(自動・カ四)〔喘く・喘く〕(自動・カ四) あへぐ(喘ぐ)。呼吸が烈しい。馬が勞れる。(古語)

あわごけ〔粟苔〕(名)【植】水馬齒(ミズハコベ)科の一年生草本。陰濕の地に生ず。高さ約六糎。莖細く絲に似る。葉は倒卵形で小さくて對生し、葉腋に淡綠白色の小花を著す。

あわさ〔淡さ〕(名) あはきこと。又、あはき名。⊖昔、大阪にあった人形芝居の興行場。—**がらす**〔阿波座烏〕(名)⊖大阪の郭、新町遊の名。⊖新町の阿波座にしばしば行く金のないひやかしの客。⊖人形芝居の阿波座で顔馴染となり、無料で出入した連中の渾名。

あわさく〔泡さく〕(自動・カ四) 泡が吹きでる。あわだつ。(古語)

あわし〔淡し〕(形ク) ⊖あっさりしてゐる。しつこくない。⊖薄情である。⊖趣が少い。⊖うすい。

あわしお〔泡鹽〕(名) 食鹽。(古語)

あわしがき〔酥柿〕(名) 澁をぬいた柿。さはしがき(酥柿)。

あわじはいて〔淡路廢帝〕(名) 淳仁天皇の名。

あわじばんし〔淡路半紙〕(名) 淡路から出る薬紙の半紙。

あわしまの〔粟島の〕(枕)「あは」の枕詞。

あわしまのかみ〔淡島神〕(名)【神】和歌山縣名草郡加太神社の祭神、少彦名神。婦人病に靈驗があると信ぜられてゐる。あはしまみやうどん。

あわじむすび〔淡路結〕(名) ⊖中央に一つ、左右に二つのわなを並べた紐の結び方。あはびむすび。⊖女の髪のゆひ方。あはちむすびの形にしたもの。專ら寡婦の髪とする。

あわじやき〔淡路燒〕(名) 淡路國三原郡伊賀野附近から產出する黄色で模樣ある陶器。酒器・井・皿等が多い。

あわす〔合はす・他動・サ下二〕⊖あはせる。⊖あれとこれとを一つにする。同じくする。⊖あつめる。宜れる。⊖夫婦にする。めあはす。⊖藥を調合する。⊖音律を調べる。合奏する。⊖番はせる。⊖對照する。⊖對ぶる。敵せしめる。⊖比べる。「を抜く。⊖著ける。結ぶる。⊖適合させる。

あわずがはら〔粟津ケ原・粟津ヶ原〕(名)【地】近江八景の一。大津市の東南、滋賀縣粟太郡瀬田から膳所(ぜ)に至る街道の松原。壽永三年(一八四四)木曾義仲が戰死した處。

あわせ〔袷・合羽〕(名) 裏をつけた衣服。裏つきの着物。—**ぎぬ**〔袷衣〕(名)(あわせ)。—**ガッパ**〔袷合羽〕(名) 裏つきの合羽。—**こそで**〔袷袖〕(名) 裏つきの小袖。—**じゅばん**〔袷襦袢〕(名) 裏つきの襦袢。—**ばおり**〔袷羽織〕(名) 裏のついた羽織。

あわせ〔合〕(名) ⊖物と物とをくっつけること。⊖おかず。副食物。(古語)—**いと**〔合絲〕(名) 數種の撚具を混合したもの。—**えのぐ**〔合繪具〕(名) 數種の撚具を混合したもの。赭黄・草色の類。—**おうど**〔合黄土〕(名) 黄土に似た色。—**かがみ**〔合鏡〕(名) 前の鏡の外に、後からも鏡でうつして後姿を見ること。—**ぎす**〔合鱚〕(名) 鱚のいろいろの藥を調合して作った藥。—**ざより**〔合鱚〕(名)「さより」の肉をおさやきにした食品。—**じょうゆ**〔合醬油〕(名) 鰹節の煮出汁を加へたもの。—**ずめ**〔合酢〕(名) 酢に酒と鹽を加へたもの。—**ずめ**〔合爪〕(名) 右の拇指と中指とで琴の二絃をなでること。—**たきもの**〔合薫物〕(名) 種種の香を練りあはせたもの。れいかう。—**つち**〔合土〕(名) 石灰と黄土と小石とをまぜてたたきかためたもの。—**ど**〔合砥〕(名)【刺刀】などを研ぐ時、しあげに用ひる砥石。質緻密で硬く色は卵色。⊖刺刀砥を平滑にし、脂をとる爲に用ひる粘板岩の小片。—**どう**〔合銅〕(名) 鉛を入れて熔かしわけた銅。—**はぎ**〔合矧〕(名) 二種の羽を合はせてつくった矢。まぜはぎ(交矧)。—**ばんこう**〔合版行〕(名) 色枠の種種の色を出す一つ一つの版木。—**びん**〔合鬢〕(名) 男の髪のゆひ方。鬢を髻の下に送り、こんで、太い元結でくくったもの。多く老人が結った。—**ぶき**〔合吹〕(名) 金銀を含んだ銅から金銀をとる爲に、その粗銅に鉛をまぜて熔かし分つこと。—**め**〔合目〕(名) 物を合はせたつまり。—**もの**〔合物〕(名) ⊖あれとこれとを合はせた物。⊖同種の物を持寄って相劣を判する遊戯。⊖合奏。物合・菊合の類。⊖あはせもりの料理。—**もり**〔合盛〕(名) 數種の料理を一つの器に盛ったもの。—**やき**〔合燒〕(名) 魚を三枚におろして、皮めと皮めとをあはせて鹽燒にしたもの。

あわせがき〔酥柿〕(名) 澁をぬいた柿。さはしがき。

あわせる〔淡せる・淡せる・淡せる・

さや強しさの爲に、皮膚に小粒ができる。身の毛がよだつ。(古語)

あわだつ(あはだつ)〔泡立つ〕(自動・タ四)泡が泡をこしらへる。

あわたて-き〔泡立器〕(名)卵をかきまぜて泡立たせるに用ひる道具。細い針金をまげて造つたもの。

あわたどの(あはたどの)〔粟田殿〕(名)【人】ふじわらのみちかね×藤原道兼の異名。

あわだまひと(あはだまひと)〔粟田眞人〕(名)【人】律令の撰定に與り、大寶元年遣唐使となり、和銅の初、太安帥・正三位に進み、養老三年、一三七九、薨。

あわたやき(あはたやき)〔粟田燒〕(名)京都市の粟田口から産出する陶器。色は卵色、表面にひびがあり、多くは上繪附である。もと、京燒の祖仁清が、朝鮮南蠻に倣つて製出したものといふ。

あわちじみ(あはちじみ)〔阿波縮〕(名)阿波から出る木綿織。【結縮】。

あわつ(あはつ)〔周章つ・慌つ〕(自動・タ下二)驚きさわぐ。うろたへさわぐ。

あわつかに(あはつかに)〔淡つかに〕(副)情の薄いさま。輕輕しいさま。あはをかに。(古語)

あわつけし(あはつけし)〔淡つけし〕(形、一)⊖薄情である。冷淡である。⊖輕率である。⊖無遠慮である。(古語)

あわて-ふためく(あわてふためく)(自動、カ四)うろたへ、おちつかれぬ人。騒ぎ立ち騒ぐ人。

あわてる(あわてる)〔周章てる・慌てる〕(自動、タ下一)〔あわつ〕の口語。

あわのぜん(あはのぜん)〔粟野膳〕(名)茨城縣粟野から産出する膳。黄色に塗り、鉋目をあらはしたもの。

あわび(あはび)〔鮑・蝮・石決明〕(名)【動】腹足類中前鰓類の貝。分殼は平形で厚く、外面には波狀の凹凸の成長線があつて褐色又は蒼紫色、内面は寄々の光る眞珠色をしてゐる。大きさ一〇—二〇糎。雌雄異體。介殼は鉢や螺鈿にし、肉は料理につかふ。—**しらたま**〔鮑・白玉〕(名)鮑の中から出る眞珠。

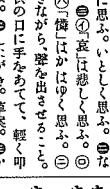
—**たま**〔鮑珠〕(名)前條に同じ。—**の し**〔鮑熨斗〕(名)鮑の乾肉をのばしてつくつた熨斗。多くの祝儀に用ひられる。のしあはび。—**むすび**(句)鮑の殼の一方はかりすべる淡路結。—**の片思**(句)鮑の殼の一方はかりであることから、自分が他を思ふのみで、相手が自分を思はぬにいふ。

あわ-ぶき〔泡吹〕(名)【植】清風藤(あをが)科の落葉喬木。高さ一〇米位。葉は長楕圓形で細毛がある。夏、黄白色の細かい花を圓錐花序に開く。枝の所所から泡を出すので此の名がある。あわぶくたちし。あわたちし。てんがんぼう。

あわ-ぼり(あはぼり)〔阿波彫〕(名)昔、阿波から出した刀劍の柴飾具の金屬彫刻。野村正時の法を傳へたもの。濃厚な金色を用ひる。

あわむ(あはむ)〔淡む〕(他動、マ下二)⊖冷淡にする。うとむ。⊖にくむ。(以上古語)

あわ-もり(あはもり)〔泡盛〕(名)琉球に產する蒸溜酒で、燒酎の一種。元來は粟を原料として麹製し、醱酵せしめて後蒸溜したが、近來は普通の白米を使用する。其の中に煎つた粟を入れた袋を入れておくと、粟の色素と脂油が出て泡が出るから此の名がある。—**しょうそう**(あはもりそう)〔泡盛草〕(名)【植】虎耳草(ゆきのした)科の多年生草本。高さ五〇糎位。葉は三出羽狀複葉で、硬くして光澤がある。夏、白花を圓錐花序に穀る。—**だい**(あはだい)〔泡盛鯛〕(名)泡立たせた雞卵の白身を鯛の盛に塗つて蒸した食品。


〔草盛泡〕

あわや(あはや)〔嗟哉〕(感)驚いて發する聲。あれ。—**ざはや**。

あわゆき(あはゆき)〔淡雪〕(名)泡のやうに輕くて解け易い雪。⊖【植】梨の一種。⊖泡のやうに輕くて薄い雪。

あわれ(あはれ)〔哀・感〕(名)ふびん。⊖ああ。あつぱれ。「へる。こと。あはれなこと。⊖いたはしいこと。あはれがる。(句)あはれに思ふ。悲しく思ふ。面白く思ふ。愛する。

あわれげ(あはれげ)〔哀げ〕(名)あはれなさま。あはれ。

あわれさ(あはれさ)〔哀さ〕(名)あはれなさま。「さう。

あわれし(あはれし)〔哀し〕(形、二)いたはしい。あはれである。(古語)

あわれしらず(あはれしらず)〔哀不知〕(名)人情を知らぬこと。情を知らぬこと。又、その人。

あわれび(あはれび)〔憐〕(名)(あはれみ)の轉。(古語)

あわれぶ(あはれぶ)〔憐ぶ〕(他動・バ四)(あわれむ)の轉じむ。(古語)

あわれむ(あはれむ)〔哀む・憐む・憫む・愍む〕(他動・マ四)⊖ふびんに思ふ。いとしく思ふ。⊖なさけをかける。愛する。⊖〔哀〕は悲しく思ふ。⊖〔愍〕はふびんに思ふ。⊖〔憐〕はかはゆく思ふ。⊖〔憫〕は情をかける。「きたなから、聖を出させること。

あわわ(あはわ)開いた子供の口に手をあてて、輕く叩んがへ。推量。—**に落つ**(句)思つた通りになる。—**に違ふ**(句)思つてゐたやうに。推量の通りに。—**の如く**(句)思つてゐたやうになること。—**を驚げて眉に齊しく す**(句)(後漢書の梁鴻の妻の故事)食膳を眉の高さに捧げることで、妻が夫を尊ぶこと。

あん〔庵・菴〕(名)⊖いほり。いほ。草庵。⊖文人

加へた羊羹。—**そば**〔泡雪蕎麥〕(名)蕎麥麵油を中火で煮上げ、卵をかきまぜて泡をてたものを入れ、熱くした蕎麥に注ぎかけたもの。—**どうふ**〔泡雪豆腐〕(名)泡雪のやうに輕くて柔かい豆腐。—**の**〔泡雪の〕(枕)「消え」「げ」の枕詞。

あわれ(あはれ)〔哀(名・感)〕(名)ふびん。⊖ああ。あつぱれ。「へる。こと。あはれなこと。⊖いたはしいこと。あはれがる。(句)あはれに思ふ。悲しく思ふ。面白く思ふ。愛する。

あわれげ(あはれげ)〔哀げ〕(名)あはれなさま。あはれ。

あわれさ(あはれさ)〔哀さ〕(名)あはれなさま。「さう。

あわれし(あはれし)〔哀し〕(形、二)いたはしい。あはれである。(古語)

あわれしらず(あはれしらず)〔哀不知〕(名)人情を知らぬこと。情を知らぬこと。又、その人。

あわれび(あはれび)〔憐〕(名)(あはれみ)の轉。(古語)

あわれぶ(あはれぶ)〔憐ぶ〕(他動・バ四)(あわれむ)の轉じむ。(古語)

あわれむ(あはれむ)〔哀む・憐む・憫む・愍む〕(他動・マ四)⊖ふびんに思ふ。いとしく思ふ。⊖なさけをかける。愛する。⊖〔哀〕は悲しく思ふ。⊖〔愍〕はふびんに思ふ。⊖〔憐〕はかはゆく思ふ。⊖〔憫〕は情をかける。「きたなから、聖を出させること。

あわわ(あはわ)開いた子供の口に手をあてて、輕く叩んがへ。推量。—**に違ふ**(句)思つてゐたやうに。推量の通りに。—**の如く**(句)思つてゐたやうになること。—**を驚げて眉に齊しく す**(句)(後漢書の梁鴻の妻の故事)食膳を眉の高さに捧げることで、妻が夫を尊ぶこと。

あん〔庵・菴〕(名)⊖いほり。いほ。草庵。⊖文人

又は料理店などの家の名に添へる語。

あん〔餡〕(名)(字の唐音)⊖煮た小豆を搾りつぶし、砂糖を混ぜて更に煮たもの。菓子・餅などの中に包み又は塗り、汁粉などにも製するもの。⊖片栗粉か葛粉を溶いたものを味醂・砂糖・醬油をまぜた清汁の沸騰したものの中に加へたもの。くずだまり。

あん〔鞍〕(名)⊖くら(鞍)。⊖〔地〕(イ)地層の背斜層の頂部。(ロ)山頂と山頂との間にある低い部分。

あん〔何〕(代)なん(何)の轉。

あんあい〔庵靄〕(名)もやなどが立つて薄暗いこと。

あんあん〔暗暗闇闇黯黯〕(名・副)くらいあり様。—**り**〔暗暗闇〕(名)人の知らない中に。「秘密に。

あんい〔安意〕(名)あんしん。

あんい〔安慰〕(名)心を安んじ慰めること。

アンイージー〔Uneasy〕(英・形)不安な。困難な。安心出來ぬ。

あんいつ〔安逸・安佚〕(名)⊖安んじ樂しむこと。⊖仕事をしないで暮すこと。【鈴鹿操の一種。

アンヴィル・コーラス〔Anvil-chorus〕(名)唖

あんえい〔晏嬰〕(名)【人】あんし(晏子)。

アンエンプロイメント〔Unemployment〕(名)失業。

あんおん(あんをん)〔安穩〕(名)(あんのん)×(安穩)。

あんか〔案下〕(名)⊖机の下。机のそば。⊖手紙の脇附に用ひる語。

あんか〔安價〕(名)値段の安いこと。廉價。—**せいかつ**(あんかせいかつ)〔安價生活〕(名)究費を省いて費用をかけずにしかも有效な生活をすること。

あんか(あんくわ)〔行火〕(名)(「あん」は「行」の唐音)火を入れて手足を温める用具。あしあぶり。

あんが〔晏駕〕(名)(天子が朝お出ましにならないのは、晏をむて御車にお乘りになるのだと、崩御を信じない人達が、行列を奉る民衆の赤誠より出た語)崩御。

あんが(あんが)〔安臥〕(名)ねくらに寢ること。

アンカー〔Anchor〕(名)⊖錨。⊖電車の架空線を適當に張る爲、電柱にしばりつけた針金。⊖アン

カー・エスケープメント(Anchor escapement)の略で、懐中時計の中で、錨形をした二本の爪が、齒車の齒にかみ合って、その廻轉を制御する裝置。アンクル。

あんかい[暗晦](名) ㊀くらがり。㊁かくれること。

あんがい[案外](名・副) 思ひの外。意外。存外。—**もの**[案外者](名) ふとどきもの。

あんかけ[餡掛](名) 食品にくずだまりをかけたもの。—**うどん**[餡掛饂飩](名) くずだまりをかけたうどん。—**そば**[餡掛蕎麥](名) くずだまりをかけたそば。—**どうふ**[餡掛豆腐](名) くずだまりをかけた豆腐。

アンカット[Uncut](名) ㊀書物などの小口の切つてないこと。㊁檢閲前の印刷物。㊂映畫で、檢閲官に未だ鋏を入れられないフイルム。

あんかもんいん[安嘉門院](名) 【人】御名は邦子。高倉天皇の第二女。後堀河天皇の准母。弘安六年(一九四三)薨。御年七十五。

あんかもんいんのしじょう[安嘉門院四條](名) 【人】阿佛尼の稱。

あんかん[安閑](名) ㊀心身を安らかにしづかに暮すこと。氣樂なこと。㊁なす事もなく暮すこと。

アンカン[暗槓](名) 麻雀用語。場にさらさない槓子(ツモ)。

あんかんてんのう[安閑天皇](名) 第二十七代の天皇。欽明天皇第一の皇子。皇紀一一九四年卽位。都を大和高市郡勾金橋宮(ナガラ)に遷し、在位二年にして崩御。(一一九六)

あんき[安氣](名) 心の安らかなこと。心配のない。

あんき[安危](名) 安穩と危急と。やすいことと危いこと。

あんき[晏起](名) 朝おそく起きること。朝寢。

あんき[諳記・暗記](名) そらおぼえ。そらんじおぼえること。記憶。

あんき[暗鬼](名) ㊀暗中に見える鬼。㊁疑心。

あんき[行脚](名)(漢字の唐音) ㊀【佛】④僧の諸國をめぐつて修行すること。㊁あんぎょう。うんすゐ(雲水)。㊂徒歩で諸國を遊歷すること。—**そう**[行脚僧](名)【佛】諸國をめぐつて修行する僧。

あんきょ[安居](名) やすらかに暮すこと。

あんきょ[暗渠](名)(一)㊀おほひをした水路の構造物で、道路・運河・鐵道・軌道の下を通路とするもの。石造面暗渠・鐵筋コンクリート暗渠、陶管暗渠・木造暗渠・拱形暗渠等の種類がある。㊁排水等の爲に地下に設けた溝。

あんきょ[闇虚](名)(二)【天】日光によつて月が空中に投ずる全部の影。地球がこの中に入れば皆既日蝕となる。

あんぐ[暗愚](名) 智に暗く才能の鈍いこと。愚なる。

あんぐう[行宮](名)(あん)は「行」の唐音。行幸の時の假の御殿。かりみや。あんざい。

あんぐり(名・副) ぼんやりして愛えず口を開くさま。

アングリカン・きょうかい[一敎會](名)(宗)(Anglican Church) イギリスの國敎敎會で、君主を其の主領とし、國會を最高立法部とするもの。

アンクル[Anchor](名) アンカー。

アングル[Angle](名) ㊀角度。㊁撮影機の角度。

アンクル[Uncle Sam](名) 北米合衆國民又はその政府の俗稱。

アングロ・アメリカン[Anglo-American](英、形)英米の。

アングロ・サクソン[Anglo-Saxon](名) ドイツ海岸地方から英國に渡つて、五世紀頃王國を建てたチュートン民族卽ち英國民の主なる血統の祖先。

アングロ・ジャパニーズ[Anglo-Japanese](英、形)英和。日英の。「イギリスぎらひ。恐英病。

アングロ・フォービヤ[Anglophobia](名)

あんくん[暗君](名) 愚かな君主。

あんけつどう[暗穴道](名)【佛】重罪人の行くべき果難(ゴク)國への途中の暗い道。

あんけら(名) ぼんやり。あんけらかん。

あんげり(名) 口あんぐり。あきれた樣子。

あんけん[按檢](名) しらべ。きんみ。

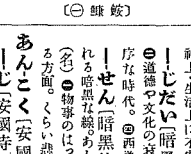
あんけん[案驗](名) しらべ。きんみ。

あんけんさつ[暗劍殺](名) 九星方位中最も凶な方位で、これを犯せば生命を失ふといふ。

あんご[安居](名)【佛】印度の僧が、夏の雨期に外出しないで、一室に籠つて修行すること。我が國では、陰暦四月十六日から陰暦七月十五日の間に行ふ。雨安居。夏(ゲ)安居。—**の・とう**[安居頭](名) 男山八幡宮の神事。八幡宮は宮寺であつたから、安居を營んだ。「頭」はその神事を營む主役。

あんこう[安庶](名) 安らかなこと。安穩。

あんこう[鮟鱇](名) ㊀【動】鮟鱇科の海產硬骨魚。長さ一米半位。體扁平で頭大きく、口廣く、尾は細長い。體色は背面は黑褐色、腹部は白色。性鈍で游泳は拙。㊁軒樋と竪樋とをなつなぐ角形の樋。よびどい。㊂たちんぼう。



(一)鮟鱇

—がた[鮟鱇形](名) 竹製花器の一種。あくびがた。—**むしゃ**[鮟鱇武者](名) 表面は強そうだが、內心の卑怯な武士。

あんこう[暗香](名) 目には見えないが、それと感ぜられる花などの香。

あんこう[鞍工](名) ㊀鞍をつくる職工。㊁馬具製造者。㊂【軍】馬具の製造・修理の陸軍の工兵。—長(名)【軍】鞍工の下士官。

ちょう[鞍工長]

あんこう[暗紅](名) 黑みを帶びた赤色。

あんこう[暗藻](名) あんきょ(暗渠)。

アンコウ[暗刻](名) 麻雀用語。場にさらさない刻子(コウ)。

あんごう[暗號](名) ふてふ(符牒)。あひことば。(會話)。かくしことば。符牒できめたあひことば。—**でんぽう**[暗號電報](名) 隱語や符牒で記した電報。

あんごう[庵號](名) ㊀庵室の名。㊁雅號の名。

あんごう[暗合・闇合](名) 期せずして物事の一致すること。自然に合ふこと。

あんこうてんのう[安康天皇](名) 第二十代の天皇。允恭天皇の第二皇子。穴穗皇子と申す。皇紀一一一四年卽位、都を大和の石上(イソノカミ)に遷し、「穴穗宮」と稱せられた。在位三年、木草香皇子の子、眉輪(マユワ)王に弒せられ給ふ。(一一〇六)

アンコール[佛 Encore](名) 「再び」の意から、音樂會などで、出演者が退場した後に拍手などによつて、再び出演を望むこと。

あんこく[暗黑・闇黑](名) ㊀くらい。㊁精神上・生活上に不安や悲慘なことがらの存すること。

—じだい[暗黑時代](名) ㊀戰亂の續く時代。㊁道德や文化の衰へた時代。㊂世態の混亂して無秩序な時代。㊃西洋では五世紀から十一世紀まで。

—せん[暗黑線](名)【理】スペクトル中に現はれる暗黑な線。あんぐん(暗線)。

—めん[暗黑面](名) ㊀物事のはつきりしない方面。㊁罪惡の存在せざる方面。

あんこく[安國](名) 國家を安穩にすること。

—じ[安國寺](名)【佛】足利直義が建立した寺。「安國論」(名)【佛】立正(ショウ)安國論(日蓮の著)。

あんこつ[鞍骨](名) ㊀鞍の芯。㊁鉄を構成する材。くらぼね。

アンゴラ[Angora](名)【地】小アジヤ半島の中部にあるトルコ共和國政府の首府。—**うさぎ**[一兎](名)【動】家兎の一變種。普通白色の長く柔かい毛で包まれ、眼は淡紅色、性質は溫和の。毛は貴重な織物原料となる。原產地はアンゴラ。—**せいふ**[一政府](名) 一九二三年十月、ケマル・パシヤが苦土耳古のコンスタンティノープル(今のイスタンブル)に反對して樹立した政府。

あんごり(名・副) あんぐり。

あんころ[餡轉](名) 餡で包んだ餅。あん・ころもち。

あんころ[暗慮](名) 心に慎を抱くこと。

アンコンシャスネス[Unconsciousness](名) 無意識。人事不省。

アン・コンスティテューショナリティー[Unconstitutionality](名)【政】非立憲。

あんざ[安坐](名)❶おちついて坐ること。❷あぐらを組むこと。

アンサー[Answer](名)答。返事。應答。

あんさい[安齋](名)【人】いせていじょう(伊勢貞丈)の號。**—ずいひつ**[安齋隨筆](名)【文】伊勢貞丈の有職故實に關する隨筆。三〇卷。

あんさい[闇齋](名)【人】やまざきあんさい(山崎闇齋)。**—がくは**[闇齋學派](名)【哲】闇齋の學說を奉する學派。その學說は朱子學の眞理を實踐躬行して居敬窮理・敬內義外說を主張し、佐藤直方・浅見絅齋・佐藤直方・三宅尚齋がある。山崎闇齋の起した漢文の訓點。漢代の儒者の古註に對して、朱熹の新註によって訓點を施したもの。道春點・後藤點に似る。

あんざい[行在](名)(あんは「行」の唐音)あんぐう(行宮)。**—しょ**[行在所](名)あんぐう(行宮)。

あんさく[暗索](名)あんちゅうもさく(暗中摸索)。

あんさつ[暗殺](名)人に知れないやうにして不意に殺すこと。やみうち。だましうち。

あんさつ[按察](名)しらべること。

あんさつし[按察使](名)❶あぜち(按察使)。❷地方の政治を監督し又は裁判事務を掌る官の支那の官名。

あんさん[鞍山](名)【地】滿洲國、遼陽の南方の都邑。南滿鐵道の一驛で、滿鐵經營の大規模な製鐵所がある。

あんざん[暗算](名)罪惡や算盤を用ひないで、頭の中で計算すること。めのこざん。むなざん。

あんざん[安產](名)やすらかに出產すること。**—じゅ**[安產樹](名)【植】十字花科の一年生草本。高さ約一五糎。葉は倒卵形・細小・白色の花を開く。熱帶の緯地に產し、產婦が此の草の乾いたのを水に浸してその枝が針開すれば安產すると傳へらる。

あんざん・がん[安山岩](名)【鑛】(Andesite)火山岩の一種。火山噴發の時噴出した熔岩が凝結したもの。斜長石・角閃石・雲母・輝石等の結晶を有し、板狀・柱狀等の節理がある。南米のアンデス山から發見せられたから「安山岩」の名がある。又、富士山系で得られたので富士岩ともいふ。

あんざんし[案山子](名)かかし。

アンサンブル[佛 Ensemble](名)【音】合奏・合奏曲又は合奏の團體。「をなすこと。

あんし[安肆](名)心を安らかにして自由な行動

あんし[晏子](名)【人】支那春秋時代の功利主義の實行者。名相。名は嬰、字は平仲。齊の靈公・莊公・景公に事へて相となり、巻倫力行を以て重んぜられた。**—しゅんじゅう**[晏子春秋](名)【文】齊の晏嬰の言行錄。內篇六篇、外篇二篇。著者不明。**—の御**(名)晏嬰の御者が、常にその地位に甘んじて驕ってゐたのを、妻が愧らで離縁を求めたので、御者は態度を改めた。これを晏嬰が聞いて大夫に上したこと。

あんじ[暗示](名)(Suggestion)❶或人の心にそれとなく、或觀念を與へる測敎。示唆。❷【心】意志の媒介を經ないで、直接に精神的・身體的の動作を起させる觀念作用。❸催眠術で、或言行によって相手の心中に或信念や衝動を與へる作用。

あんじ[案](名)心配。考。**—ごと**[案事](名)心配。考へごと。

あんしちゃ[庵室](名)あんしつ(庵室)。(古語)

あんしつ[庵室](名)❶世をのがれた人の住家。❷いほり。

あんしつ[暗室](名)❶密閉して光線の入らぬやうに設備した室。主に理科・醫學の實驗用、又は寫眞現像用。❷刑務所內で囚人を監禁する所。**—ランプ**[暗室洋燈](名)暗室內で寫眞の乾板を處理する時に用ひるもので、赤色ガラス又は赤色と黃色との二枚ガラスを用ひたランプ。

あんしのーらん[安史の亂](名)【歷】唐の玄宗・代宗の時の安祿山・史思明の前後九年に亘る叛亂。

あんしゃ[暗射](名)(射は、この場合、「せき」と讀むのが正しい)❶見えぬ敵兵や陣地を推測して射撃すること。❷寶物を見ずにいひあてること。**—ちず**[暗射地圖](名)地名を記入せぬ學習用の地圖。「推進器。らせんすりまんさ。

あんしゃ[暗車](名)水面下に裝置された船舶の

あんしゃ[安車](名)安坐するやうにつくった支那の車。

あんしゃ[行者](名)【佛】(あんは「行」の唐音)碑宗で、右襲の儘等に止まって修行するものをいふ。無氣力であること。

あんじゃく[暗弱](名)心愚かで身體弱く、無氣「色。

あんじゃしょく[暗赭色](名)【植】石竹科の多年生草本。高さ約六〇糎。葉は線狀で、淡綠色。夏日、重瓣花で淡紅色又は白色に紅色の絣ある美花を枝頂に開く。觀賞植物。オランダせきちく。カーネーション。

アンジャベしょく[暗赭色](名)愚かな君主。

あんしゅ[暗主](名)庵室の主人。

あんしゅ[庵主](名)あんしゅ。

あんしゅ[暗誦・諳誦](名)あんしょう(暗誦)。

あんじゅ[暗誦・諳誦](名)❶中古、院司・家司(令)に屬した御廚別當の下役。❷檢非違使廳・都司の書類を司った役人。❸鎌倉時代に政所(まんどころ)で文案や記錄を掌った役人。

あんじゅう[庵住](名)庵に閑居すること。又、その人。「こと。おちついて住むこと。

あんじゅう[安住](名)安心してとどまること。

あんじゅう・れい[按手禮](名)【基】(Ordination)基督教で、牧師に任命する前に、長老がその手を牧師候補者の頭上に按じて聖別を行ふ儀式。

あんじょ[安如](名・副)やすらかなさま。

あんじょ[暗女](名)淫賣婦。くらもの。なんな(暗女物)。あんぶつ(暗物)。

あんじょう[諳誦・暗誦](名)そらおぼえに覺え「て讀むこと。

あんじょう[鞍傷](名)牛馬などが、鞍の摩擦によって受ける傷。

あんじょう[暗礁](名)海中にかくれて見えぬ岩。

あんじょう[安詳・安祥](名)【佛】安らかに卽かに歩むこと。

あんじょう[案上](名)机の上。

あんじょう[鞍上](名)鞍の上。**—人なく鞍下馬なし**(句)乘者と乘馬との上の一體になって、目に見えぬ程の早さで乘りまはすこと。

あんじょう[味善う](副)(味よくの音便)都合よく。(京阪地方の方言)

あんじょう[安祥寺](名)【佛】京都市東山區山科町殺ノ下にある眞言宗の寺。もと京都市東山知意嶽堤谷にあったが、慶長年間に移轉した。

あんじょく[晏食](名)日昇れて から食事すること。

あんしん[安心](名)❶心配のないこと。❷心をおちつかせること。**—りつめい**[安心立命](名)天命を知って心を安んじ、疑惑や煩悶をせぬこと。心が定まって利益の爲に心を動かさぬこと。

あんじん[安心](名)【佛】彌陀に歸依して念佛專一とし、西方淨土に至ることを信ずること。信仰によって心の歸趨を定め心を動かさぬこと。**—けつじょう**[安心決定](名)【佛】確かに安心を得て心を動かさぬこと。

あんじん[按針](名)❶【人】三浦按針。❷按針手。**—しゅ**[按針手](名)(Pilot)磁石によって船の航路を定める人。**—ずか**[按針塚](名)神奈川縣橫須賀市逸見(へみ)町にある三浦按針(英人ウイリャムアダムスの墓。

あんす[案主](名)あんじゅ(案主)。

あんず[杏子・杏](名)【植】(あんずは「杏子」の唐音)薔薇科の落葉喬木。幹の高さ三米位。葉は卵圓形で鋸齒がある。早春、白色又は淡紅色の花を開く。果實は梅に似て大、種子はなれよく、少しく甘い。種子は藥用とする。**—うめ**[杏子梅](名)【植】梅の變種。花は單瓣・淡紅色・實は酸味が少い。

あんず[按司](名)琉球國の地方官。

あんず[案寸](他動・サ變)❶考へる。工夫する。❷心配する。**—るより產むが易い**

(句) 始めに心配したことも、いざとなればたやすいことにいふ。

あんず[やすんずる] [按ず] (他動サ変) ①おさめること。安らかに定めること。

あんせい[安靖] (名) 安らかなこと。安らかに治めること。

あんせい[安政] (名) 孝明天皇御宇の年號。將軍德川家定ノ家茂の時代。元年に大地震があり、五年に米國との假條約に調印した。(一五一—九)

あんせい[暗星] (名) [天] 光を發せぬ恒星。

あんせいのかりじょうやく[……じょうやく] [安政假條約] (名) [歴] 江戸幕府の大老井伊直弼が、勅許を俟たないで、安政五年(一八五一八)六月米國と、次いで露・英・蘭・佛の四箇國との間に、假に結んだ通商條約。あんせいてうやく。

あんせいのたいごく[安政大獄] (名) [歴] 大老井伊直弼が假條約に調印し、且、將軍家茂を迎へたことに反對した公卿・大名を罰し、梅田雲濱・志田松陰・賴三樹三郎・橋本左内等多數の志士を安政五年(一八五一八)に投獄・處刑した事件。あんせいのご。

あんぜん[暗線] (名) [理] あんこくせん(暗線)。

あんぜん[黯然] (名・副) ①暗いさま。②黒いさま。③悲しして心のふさぐさま。

あんぜん[晏然] (名・副) ①やすらかなさま。②おちついてゐるさま。

あんぜん[安全] (名) 危險のないこと。—**かみそり**[安全剃刀] (名) 刃を横にさへつかはなければ、皮膚を切る虞のないやうに安全裝置のある剃刀。—**き**[安全裝置] (名) ①[理] (Cut-out) 規定以上の電流が來た場合、内部に裝置したヒューズが熔けて電路を遮斷し、危險を殘防する裝置。普通引込電線と電灯線の接續する場所に設ける。②銃に彈丸をこめた場合に誤發を防ぐ爲、引金又は打金が動かぬやうに裝置したもの。—**しゅうかん**[……しゅうかん] [安全週間] (名) (Safety-week) 工場・道路・家庭等に於て各自特に注意し、災害・死傷等の起らないやうに、社會の安全につとめる週間。—**たいいち**[安全第一] (名) (Safety-first) 危險のないやうに警戒・注意することが、生活上の第一主義であるといふこと。—**ちたい**[安全地帶] (名) (Safety-zone) 乘客の危險を防ぐ爲に、交通頻繁な場所、例へば電車停留場等に設けた地域で、ここには自動車等を乘入れることができない。—**とう**[安全燈] (名) (Safety-lamp) 礦山や炭坑で用ひる金網や硝子を張つたさげランプ。—**ピン**[安全ピン] (名) 楕圓形に曲げて尖端を隱蔽した留針。—**べん**[安全瓣] (名) [理] (Safety-valve) 汽罐内の蒸氣强力が或程度を越すと、壓力で「かま」が破裂するから、之を防ぐ爲に排出口から蒸氣を適當に出す裝置をしたもの。—**ほしょうじょうやく**[……しょう……] [安全保障條約] (名) [政] 國際約國が、相互に相手國の領土的安全を保障する條約。—**マッチ**[安全燐寸] (名) (Safety-match) 普通のマッチで、軸頭に硫黄・鹽酸加里などの含有物をつけ、箱の横側の薬品にあてて摩擦せざる以上、發火せぬやうにしたもの。—**りつ**[安全率] (名) (Factor of safety) 構造物の安全を保つ程度。

あんそく[安息] (名) やすらかに休むこと。—**こう**[……かう] [安息香] (名) [植] 齊墩果(えんき)科の落葉喬木。樹皮は茶褐色、葉は卵形で鋸頭、冬、葉脈から赤はんだ小朱を纏狀に開く。馬來半島・暹羅に產する。この樹皮から取った脂を固めたものは、芳香を有するから、薬香料・防腐・消毒用とする。—**さん**[……さん] [安息香酸] (名) [化] 安息香其の他の樹脂を除かに熱する時に生ずる白色又は類黄色の小葉狀或は針狀結晶體で、之を熱すれば揮發して咽喉を刺戟して咳を起させる。祛痰劑・工業用染料に用ひる。—**こく**[安息國] (名) [地] 昔、ペルシャ地方にあつた王國で、支那との交通が頻繁であつた。その國名は、首府の(Antioch)から來たといふ。—**じつ**[安息日] (名) [宗] (Sabbath day) ①ユダヤ人の最も大切にした土曜日。神は六日間働いて宇宙間の萬物を作り、第七日に息んだとして此の日を聖日とする。②キリスト教徒が、聖日即ちキリスト復活の日として仕事を休み、宗教的儀式を行ふ日。日曜日。—**び**[安息日] (名) [宗] 前條に同じ。

アンソロジー[Anthology] (名) ①[文] 文集。佳句集。詩集。名曲集。②花の蒐集。

あんだ[鞍輿] (名) (編板の意)板を塞にした籃を竹で編み、竹で吊した輿。あんだ。

あんだ[安打] (名) 野球用語。打者が安全に塁を得られるやうに打つ打球。安全打。ヒット。

〔輿 鞍〕

アンダーグラウンドレールウェイ[Underground railway] (名) 地下鐵道。

アンダーシャツ[Undershirt] (名) ワイシャツ。下襦絆。下肌衣。

アンダースタンディング[Understanding] (名) ①理解。②意思の疏通。親和。

アンダースロー[Under-throw] (名) (Underhand-throw の略)下手投。野球その他の競技で、腕をあげずに球を投げること。

アンダーセル[Undersell] (名) 競爭的に安價に賣出すこと。特價販賣。

アンダーソン[Sherwood Anderson] (名) [人] アメリカの小説家。「貧しき白人勞働者」即の勝利」「一作家の物語」等の著がある。(一八七六)

アンダーライン[Underline] (名) 注意をひく爲に、書中の文句の下に線を引くこと。下線。

アンダーワールド[Under world] (名) ①大都會の魔界・暗黒社會。②下界。冥府。地獄。

あんたい[暗體] (名) ①[理] 自ら光を發せぬ物體。②[文] 漢詩の一體。詠物詩で、題の文字を用ひないで詠じた詩。

あんたい[安泰] (名) やすらかなこと。さはりのないこと。

あんたえ[……] [安陀會] (名) [佛] (梵 Antaravasaka 中宿衣又は下衣の意)五條の袈裟。

あんたくせいろ[安宅正路] (名) (孟子の離婁篇上篇の語)「安居と正道」との意で、「仁義」の稱。

アンタゴニスト[Antagonist] (名) 映畫にあちはれる敵役。反目者。敵對者。

アンタゴニズム[Antagonism] (名) 抵抗。反對論。

あんたべんけい[あんだ辨慶] (名) 抵抗にまけぬ辨慶。あはう辨慶。

あんだらめ(名) 馬鹿者。

アンダルシャン[Andalusian] (名) [動] 鷄スペインのアンダルシヤ原產の產卵鷄。羽毛は普通青灰黑色または黑色である。

あんたん[暗澹] (名) くらくしづかなこと。ものすごいこと。

アンダンテ[伊 Andante] (名) [音] 音樂上、曲の速・緩かに優しく奏せよとの意。又、その緩かな樂曲。

アンダンティーノ[伊 Andantino] (名) [音] アンダンテよりも早く奏せよとの意。又、その速度の樂曲。

アンタント[佛 Entente] (名) ①協商。②協商國。

あんち[安置] (名) ①安らかに据ゑること。②神佛の像をまつる祭ること。

アンチ[Anti] (接頭) 反。反對。—**アジテーション**[Anti-agitation] (名) 排外運動。外人排斥運動。—**ウォアパクト**[Anti-war pact] (名) 不戰條約(昭和三年八月廿七日調印)。—**エーヤクラフトガン**[Anti-aircraft gun] (名) [軍] 高射砲。射空砲。—**エーヤクラフトデフェンス**[Anti-aircraft defence] (名) 防空。—**オリエンタルアジテーション**[Anti-Oriental agitation] (名) 東洋人排斥運動。—**クライマックス**[Anticlimax] (名) ①龍頭蛇尾。②修辭法で、强い口調を次第に弱くすること。—**ジャパニーズ**[Anti-Japa-

nese〔英・形〕排日。**—ジャパニーズ・ボイコット**〔Anti-Japanese boycott〕(名)日貨排斥運動。**—センス**〔Anti thesis〕(名)【哲】対定に反對する立言。反措定。**—ミリタリスト**〔Antimilitarist〕(名)反軍國主義者。**—ミリタリズム**〔Antimilitarism〕(名)反軍國主義。**—モダーン**〔Anti-modern〕(英・形)淺薄な新しがりに反對するさま。

アンチピリン〔Antipyrin〕〔安知必林〕(名)【薬】フェノルヒドラジンにアセト酸エステルを加へて熱したものにヨードメチル及びメチルアルコールを加へて製した白色無臭の苦味ある粉末の解熱劑又は鎮痛劑。

アンチフェブリン〔Antifebrine〕〔安知歇貌林〕(名)【薬】石炭酸精光澤ある白色無臭の菱片狀結晶體で、解熱鎮痛劑。

アンチベリベリン〔Antiberiberin〕(名)【薬】米糠の「エキス」から蛋白質を去つた脚氣の藥劑。ヴィタミンBを主成分とする。

アンチモニー〔Antimony〕〔安質母尼〕(名)【化】帶青銀白色の脆い金屬元素。主として合金として活字や種種の器物の鑄造に用ひる。アンチモン。

アンチモン(名)【化】アンチモニー。**—しゅう**〔一朱〕(名)【化】硫化アンチモンから成る赤色粉末で、ペンキなどの著色料とする。

あんちゃく〔安著〕(名)無事に到着すること。

あんちゅう〔暗中〕(名)やみのうち。**—ひやく**〔暗中飛躍〕(名)世間に知れぬやうに烈しく策動。奔走すること。**—もさく**〔暗中摸索〕(名)❶暗中に手さぐりで求めること。❷てがかりのない捜索。あんちゃうぼさく。

あんちょう〔暗潮〕(名)❶暗夜の潮。❷表だたぬ形勢。

あんちょく〔安直〕(名)安價。やすいれだん。

あんちょきよひめ〔安珍清姫〕(名)【傳】紀伊國牟婁の清姫が、熊野參詣の途次に泊つた鞍馬の僧安珍を戀慕し、戀の遂げられぬ結果蛇となつて追跡し、道成寺の釣鐘を卷いたといふ傳説。「道成寺」の能、「道成寺現在蛇鱗」「日高川入相花王」の戲曲、又、「京鹿子娘道成寺」の舞踊等の材料となつた。本尊とする密教の修法で、安鎮國家法・家鎮などの種類がある。

あんちんほう〔安鎮法〕(名)【佛】不動尊を

あんてい〔安定〕(名)❶安すんじ定めること。おちつくこと。❷【理】重心が物體の底邊の中心にあること。❸【化】化合物の分解の容易ならぬこと。

アンデス・さんみゃく〔一山脈〕(名)【地】(Andes Mts.)南アメリカの西部に聳える山脈。延長一萬一千粁餘。ヒマラヤ山脈に次ぐ高山脈。最高峯アコンカグワは海拔七千四十米。

アンテナ〔Antenna〕(名)❶觸角。❷【理】無線電信やラヂオの電波を受ける空中架線。ラヂオ受發線。ラヂオ空中線。

アンデパンダン〔佛 Indépendant〕(形)獨立の。自立の。**—のサロン**〔佛 Salon des Indépendant〕(名)【美】フランスに於ける思ひ切つて民衆的な無鑑査自由出品の獨立美術展覽會。パリの反アカデミック派によつて組織され、毎年五六月頃セーヌ河畔で開催される。

アンデルセン〔Hans Christian Andersen〕(名)【人】有名な童話作者。詩人。デンマルクのフュネン島に生まれた。小説「即興詩人」、童話「火打箱」「親指姫」「小さい人魚」等の著がある。〔一八〇五—七五〕

アンテレクチュエル〔佛 Intellectuelle〕(名)智者。學者。精神家。

あんてん〔暗轉〕(名)〔Dark change〕演劇で場面がかへる時、暫く下さす暗黑のままで次の場面に移ること。ダークチェーンジ。❶てん〔行宮〕の

あんでん〔行殿〕(名)〔あん〕は「行」の唐音。あ

あんど〔安堵〕(名)❶かき(堵)の中に安んずること。居所に安住すること。❷安心。❸鎌倉・室町時代に、土地の所有權を確認すること。舊知行の地をそのまま賜はること。**—じょう**〔一状〕〔安堵狀〕(名)鎌倉・室町時代、朝廷・幕府・領主などから出した土地の所有權や職を承認した文書。**—ぶぎょう**〔一奉行〕(名)鎌倉・室町幕府で、社寺・御家人などの所有地に關する一切を司つた職名。あんどがた。

あんとう〔暗鬪〕(名)❶暗中の爭。裏面に於ての爭。❷芝居のだんまり。

あんとう〔安東〕(名)【地】(Antung)滿洲國奉天省の開港市で、鴨綠江に面し、朝鮮の新義州と相對してゐる。木材の集散地。

あんどう〔行堂〕(名)【佛】(あん)は「行」の唐音。)あんどう(行者)のゐる堂。

あんどう〔行燈〕(名)あんどん。

あんどう・ためあきら〔安藤爲章〕(名)【人】江戸時代の和學者。通稱は新介。年山と號す。德川光圀に召されて、「大日本史」「禮儀類典」の編纂に從つた。享保元年(一七一六)歿。年五十八。其の著に「紫家七論」「年山紀聞」等がある。

あんどう・にゅうどう〔安東入道〕(名)【人】新田義貞の妻の伯父。

あんどう・のぶまさ〔安藤信正〕(名)【人】磐城國平の藩主信由の子。德川家茂の時の老中。對馬守と稱し外人接待の事を掌り、攘夷論者に憎まれ、文久二年正月坂下門外で傷けられた。明治四年(一八七一)歿。年五十三。

あんどう・ひろしげ〔安藤廣重〕(名)【人】浮世繪の大家。通稱は十右衛門又は德兵衛。一立齋と號す。歌川豐廣の門人。浮世繪山水畫に長じ其の遠景寫法に妙を得た。「東海道五十三驛」「江戸名所百景」等の作がある。安政五年(一八五一八)歿。年六十二。

あんとくてんのう〔安德天皇〕(名)第八十一代の天皇。御名は言仁。高倉天皇の皇子。壽永四年の職に平宗盛に擁ぜられて西國に行幸し、壽永四年四月平家の一族と共に壇ノ浦の海に投じて崩御。在位三年。〔一八〇五—八五〕

あんとくめ〔安德布〕(名)【植】褐色藻類昆布屬の海藻。根は絲狀にして分岐し、莖は扁平中實。葉は厚く革質、披針形又は長楕圓形で、羽狀に分裂し、波狀の鋸齒及び粗なる縱襞がある。食料又は肥料として用ひる。あんとくわかめ。「くめ(安德布)。

あんとくわかめ〔安德若布〕(名)【植】あんとくめ。

アントニウス〔Marcus Antonius〕(名)【人】ローマ三頭政治の一人。法律家。雄辯を以て知られる。アクチウムの海戰に破れて自殺した。〔紀元前三〇〕

アンドラ〔Andorra〕(名)【地】ピレネー山脈中の一小共和國。面積四百五十二方粁。フランスとスペインが共同監督してゐる。

アントラセン〔Anthracene〕(名)【化】コールタール・骸炭タール・水性瓦斯タール等から採取する白色の光澤ある結晶。アリザリンやアントラセン色素の原料である。

アンドラン〔Earned-run〕(名)野球用語。後續の安打によつて得點すること。

アンドレーエフ〔Leonid Nikolaevich Andreev〕(名)【人】ロシヤの小説家。劇作家。寫實主義と象徵主義・神秘主義の中間に立つて活躍したが、革命後フィンランドに亡命した。小説「赤い笑」「饑饉」「七死刑囚物語」「人の一生」、評論に「革命の名の爲に」「ロシヤを救へ」等がある。〔一八七一—一九一九〕

アンドロセントリック・セオリー〔Androcentric theory〕(名)【哲】男性本位説。男性中心説。

アントワープ〔Antwerp〕(名)【地】ベルギーの貿易港で要塞地。麻布・絹布の産出が多い。我が國郵船會社の船も定期に來泊する。アンゲエルス。

あんどん〔行燈〕(名)(今字の唐音)❶木竹又は銅鐵のわく(框)に紙を貼り、中に油皿を据ゑて燈火をともす具。室內に据ゑ置くものと、柱に掛けるものとの二種がある。❷年四十の隱語。

ばかまで〔行燈袴〕(名)まち(襠)のない袴。

べや〔行燈部屋〕(名)❶行燈をしまつて置く室。

〔㊀あんどんあ〕

㊀遊郭で、揚代の拂はれぬ客をおとしめて置く室。

あんとん[鈍](名)おろかでにぶいこと。

あんな[彼様](形)あのやうな。

あんない[案内](名)㊀文案の内容。㊁内情。物事の内容。㊂みちびき。てびき。㊃通知。㊄取次。㊅招待。㊆發送者から註文者に送る通知。㊇取次。

—しはらい・めいれい……はら[案内仕拂命令](名)【法】仕拂命令官が、受取人に仕拂命令を交附する時、現めその旨を金庫に通知する文書。

—じょう……じょう[案内者](名)みちびきなをする人。案内人。**—じょう**……じょう[案内狀](名)㊀招待狀。㊁通知書。

あんなか[足半](名)あしなか。

アンナ・カレニーナ[Anna Karenina](名)【文】ロシヤのトルストイの小說。一八七五年の作。ロシヤの貴族社會の明暗二面を描寫したもの。

アンナン[安南][Annam](名)【地】佛領印度支那の東部の國。もと、王國。一八八三年(明治十六年)フランスの保護國となる。面積約十萬方粁。

あんに[暗に](副)㊀豫期しないのに。㊁それとなく。㊂ないないに。

アンニュイ[仏 Ennui](名)㊀退屈。倦怠。㊁「不安。憂慮。

あんにょう……[安養](名)【佛】(あんよう)〈安養〉。

「すく(杏子)のたね。昔は食用とした。

あんにん[杏仁](名)(あんは、杏の唐音)あんず。

あんねい[安寧](名)事變のないこと。安泰。

あんねい・てんのう……[安寧天皇](名)第三代の天皇。綏靖天皇の第一皇子。御名は磯城津彦玉手見尊(みまのこと)。都を大和の片鹽浮穴宮に遷す。在位三十八年にして崩御。寿算五十七(一說に四十九)(在位一五〇)

あんねつせん[暗熱線](名)【理】スペクトルの「赤色外部の輻射線。赤外線。熱線。

あんのう[鞍嚢](名)乘馬の鞍の兩側にさげる革袋で、軍器を入れるもの。

あんの・じょう[案定](名・副)豫期した通り。

あんの・ほか[案外](名・副)あんがい。思の外。

あんのん[安穩](名・副)安くおだやかなこと。

あんば[鞍馬](名)鞍をおいた乘馬。

あんばい[按排](名)程よく按べること。

あんば・い[鹽梅](名)㊀料理の味かげん。㊁順序を程よく定めること。㊂程あひ。かげん。㊃身體のぐあひ。病勢。**—ず**[鹽梅酢](名)味を程よくした酢。三杯酢。

アンパイヤー[Umpire](名)審判員。主として【競技の場合に用ひる。

あんばこ[暗箱](名)寫眞器の要部で、內部を黑く塗り、革又は布の伸縮自在な蛇腹形の筒の前部にはレンズ、後部には磨硝子をつけたもの。

あんぱん[餡麵麭](名)餡を包んだパン。

あんび[安否](名)安きと否らざるとと。無事と否と。起居の様子。

アンビシャス[Ambitious](英・形)大望ある。「野心ある。

アンビション[Ambition](名)功名心。野心。

あんぶ[鞍部](名)連山の低い所。

あんぶ・く[按腹](名)腹部をもみ摩る按摩。腹部の筋肉をやはらげ、內臟器官の障害治療にも有效

あんぶつ[暗物](名)(あんじょう)(暗女)。

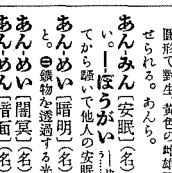
アンプリファイヤー[Amplifier](名)㊀無電やラヂオの受信の音響を擴大する器具。㊁擴大鏡。

アンプレザント・プレー[Unpleasant play](名)不快劇。

アンプロンプチュ[仏 Impromptu](名・副・形)㊀即席に。㊁音即興樂。㊂文即興詩。

あんぶん・ひれい……[按分比例](名)【數】一つの數を幾つかに分け、各部の比が豫め與へられた比に等しくなる樣にすること。比例配分。

アンペア[Ampere](名)㊀人[Andre Marie Ampère]フランスの物理學・數學・博物學者。パリ大學教授。アンペアの假說・學界に重視せられてゐる。(一七七五—一八三六)㊁理電流の強さの單位。一秒間に一クローンの電量が流れる時の電流の強さ。**—メーター**[Ampere-meter](名)【理】アンペアの單位を目盛にあらはした電流計。アンメーターともいふ。



〔一ターメーヤペンア〕

アンペラ[行燈](名)㊀【植】印度及び附近に產する莎草(かやつり)科の多年生草本。葉はなく、莖の基部に少數の鱗狀葉を有す。莖は八〇糎位。穗狀花序をなす帶綠褐色の花を開く。㊁「アンペラ」の莖で編んだ筵。**—ぼう**……[一幅](名)アンペラで造った【帽子。

アンペル(名)【植】アンペラ。

あんぼう[安歩](名)しづかにあるくこと。

あんぼう……[罨法](名)【醫】炎症又は充血を去る爲に患部を温め又は冷やす治療法。

あんぼう・ぼう……[安奉線](名)南滿洲鐵道株式會社の經營に屬する安東・奉天間の鐵道。全長二七四粁餘。日露戰役當時我が陸軍が輕便鐵道を急造したのを滿鐵が廣軌式に改造したもの。

あんぼつ(名)鑑識の一種。昔、江戸の町奴籠として用ひられたもの。あんだ。

あんぼんたん[安本丹](名)㊀愚者を罵っていふ語。あはう。ばか。㊁【動】かさご(笠子)。

あんま[按摩](名)㊀身體を打ち又はもんで筋肉を調整し、血液の循環をよくする療法。㊁あんまとり。㊂めくらの人。盲人。**—とり**[按摩取](名)あんまとり。㊁めくらの人。

あんまり[暗昧](名)㊀くらいこと。㊁おろかなこと。

あんまり(副)あまりに。法外に。

あんまろく[菴摩勒](名)【植】大戟(たかだち)科の落葉喬木。印度地方・支那南部に產し、葉は線狀長楕圓形で對生、黃色の雌雄兩花を開き、果實は藥用に供せられる。あんら。

あん・みん[安眠](名)こころよく眠ること。うまい。**—ぼうがい**……[安眠妨害](名)夜更けてから囁いて他人の安眠を妨げること。

あん・めい[暗明](名)㊀くらいこととあかるいこと。㊁纖物を透過する光線の度合。

あんめい[暗冥](名)くらやみ。暗黑。

あんめん[暗面](名)㊀暗い方面。㊁墓面。醜惡の方面。**—びょうしゃ**……[暗面描寫](名)【文】社會や人生の墓面の醜惡な方面に題材を求めて描寫すること。

あんも[餡餅](名)あんもち。もち。

あんもく[暗默](名)㊀意思を外面にあらはさぬこと。**—の承諾**(句)はっきりとはいはないが、承諾の意思のあること。

あんもち[餡餅](名)餡でくるみ、又は餡を中に「入れた餅。

アンモニウム[Ammonium](名)【化】窒素一分子と水素四分子からなる基で、種種の酸基と化合して鹽類を生ずる。

アンモニヤ[Ammonia][安母尼亞](名)【化】窒素と水素との化合物で、刺戟性の惡臭ある無色の氣體。製氷・藥劑に用ひられる。**—すい**……[一水](名)アンモニヤの水溶液。**—ソーダ・ほう**……[一曹達法](名)【化】工業的に炭酸曹達を製する法で、食鹽の冷濃溶液中にアンモニヤガスを飽和せしめ、これに壓力を加へて炭酸瓦斯を通じ、沈澱した重炭酸曹達を分離・加熱すれば炭酸曹達を得る。ソルヴエー法。

あん・もん[案文](名)したがきの文書。

あんもん[按問](名)罪を調べること。

の・つぶく[暗夜闇夜](名)くらい夜。やみよ。**—**[暗夜礫](名)暗夜に飛んで來る小石。轉じて不意に加へられる打擊。

あん・ゆ[暗喩](名)【文】表面に譬喩(ひゆ)らしく見せず、譬へるものと譬へられるものとを一つにしてあらはす修辭法。「時は金なり」の類。いん(ゆ)(隱喩)。

あんよう……[安養](名)【佛】㊀心を安んじ身を養ふこと。㊁國內に住んで心を養ひ、佛に等しい智德を備へること。㊂安養淨土。**—かい**[安養界](名)【佛】(あんようじょうど)〈安養淨土〉。**—じょうど**……[安養淨土](名)【佛】(こくらくじょうど)〈極樂淨土〉。**—ほうじょう**[安養寶國](名)【佛】(こくらくじょうど)〈極樂淨土〉。

あん・ら[奄羅](名)【植】あんまろく。

—おんら

〔奄羅園〕(名)【佛】中印度吠舎厘(ベーシャリ)國にあった釋迦の庵園で、この精舎で維摩經などを說いた。

あん・らく〔安樂〕(名) 安らかに樂しいこと。**—いす**〔安樂椅子〕(名) 意遣の椅子より大きく、肱掛をつけ、スプリングを設け、よりかかって、前後・左右に動きなどする裝置の椅子。**—じゅいん**…ゐん〔安樂壽院〕(名)【佛】京都市伏見區竹田町にある眞言宗の寺で、保安四年(一七八三)鳥羽天皇が鳥羽離宮の北殿に設けられた寺。**—じょうど**(やうど)〔安樂淨土〕(名)【佛】(ごくらくじょうど)(極樂淨土)。**—せかい**〔安樂世界〕(名)【佛】(ごくらくじょうど)(極樂淨土)。

あんりゅう(りう)…〔暗流〕(名) ❶表面にあらはれぬ流。❷外部にあらはれぬなりゆき。

あんりょ〔安慮〕(名) 安心。

あんるい(るゐ)〔暗涙〕(名) 人知れず流す涙。

アンレスト〔Unrest〕(名) 不穩。不安。

あんろ〔暗路〕(名) ❶暗い路。❷砲臺内の地下の交通用のトンネル。

あんろくざん〔安祿山〕(名)【人】支那唐の叛臣。もと、營州柳城の胡人。姓は康。玄宗の親任を受けたが、遂に叛して、天寶十四年大燕建武皇帝と稱したが至德二年、嗣子慶緒に弑せられた。(七五七)

い(ゐ)

い ❶五十音圖「あ行」の第二音。❷脣を平たく開き、舌の前部を高め、硬口蓋に接近させて發する母音。❸以の草體。

いぃ ❶五十音圖「い行」の第一音。❷中古までは「い」を主音とし「うゐ」を從音とした重母音で、「うい」と發音した。❸「爲」の草體。

い伊〔名・副〕❶これ。この。ただ。❷【地】イタリ

い〔膽〕(名)【生】(たんのう)(膽囊)。

い〔寢〕(名) 寢ること。眠ること。(古語)

い〔蜘蛛網〕(名) 蜘蛛の絲。蜘蛛の巣。(古語)

い〔意〕(名) ❶心。❷思。考。❸わけ。意味。❹趣意。おもむき。❺私心。私慾。❻意志。意思。❼意識。

—到りて筆隨ふ(句) 思ふままに詩歌・文章をすらすらとつくり出すといふ。**—となさず**(句) 心にかけない。**—に中る**(あたる)(句) 思ふ通りになる。**—に介ず**(句) 氣にかけない。**—に介せず**(句) 熱心に注意する。**—を得ず**(句) 理解に苦しむ。**—を致す**(句) ❶病をなほすこと。❷病をなほす人。醫者。**—は仁術なり**(句) 醫は人の危急を救ふ愛の道である。

い〔醫〕(名)

い〔異〕(名) ❶ことなること。ちがふこと。❷不思議。

い〔移〕(名) 中古、八省などで五にとりかはした文書。

い〔彝〕(名) ❶支那で宗廟の祭に用ひた銅器。❷人の常に守るべき道。則。常。**—を秉(とる)る**(句)(詩經大雅烝民篇の句)人道を固く守る。

い〔易〕(名)たやすいこと。

い〔夷〕(名) ❶えびす。蠻人。❷平らか。安らか。❸あぐら。**—を以て夷を制す**(句) 支那の傳統的外交政策で、他國民を爭はせておいて、自國の安全を計るといふ。

い〔衣〕(名)きもの。ころも。きぬ。着ること。

い〔履〕(名) ❶支那で、玉座の後に立てた屏風で、斧の形を赤地の絹に繡したもの。天子が諸侯に對面する時に用ひた。❷ついたて。

い〔氣〕(名) いき(息)。(古語)

い〔汝〕(代) なんち(汝)。(古語)

い〔蟶〕(名)【動】環形動物の一種。體は圓筒形。雌雄異體。海濱の砂泥の中に埋沒して生活する。ゆむし。

い〔五〕(數) いつつ(五)。(古語)

い〔五十〕(數) ごじふ(五十)。いそ。(古語)

い(接頭) 動詞に冠して語勢を強める語。「—行く」。(古語)

い(接尾) 名詞の下に添へて語勢を強める語。「妹—」。(古語)

い〔齊〕(接頭) 神事の場合に不淨を忌む意に用ひる語。「—垣」。(古語)

イ(名) 異本の語句を傍註する時に用ひる符號。

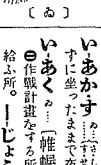
い〔井〕(名) 地を掘り下げて、地下水を汲み上げ又は吸ひあげるしかけにしたもの。ゐど。井戸。

い〔堰〕(名) 用水をせきとめてある所。(井堰)。

い〔亥〕(名) ❶十二支の一で、最後に位するもの。❷方角の名で、西北の北によった方。❸昔の「時」の名で、今の午後十時。

い〔猪〕(名) ❶【動】ゐのしし(猪)及び豕の總稱。❷「猪の牙」の略。

い〔蘭・莞草・燈心草〕(名)【植】燈心草科の多年生草本。濕地に自生し、又、水田に栽培する。個匏を地下莖を有し、地上莖を抽く。莖は細長く、一米位に達し、中に白色の髓がある。葉は莖基に鱗片狀



〔ゐ〕

箱形をなす。夏季、莖の上部に分岐した花穗を側生し、綠褐色の細花を開く。莖は還元は蠟表とし、髓は燈心とする。とうしんぐさ。

い〔居〕(名) ゐること。なること。〔ゐぐさ〕

い〔胃〕(名) ❶【生】內臟の一で、消化器の主要なもの。前方は食道に、後方は腸に連り、形は囊狀をなし、橫隔膜の下、肝臟の下方に橫たはる。內部に胃腺があって、胃液を分泌する。❷二十八宿の一で、西方に位するもの。

い〔蝟〕(名)【動】はりねずみ。

い〔緯〕(名) ❶よこ。❷よこいと。ぬき。❸(いと)

い〔威〕(名) 人を畏服させる勢。威光。**—ありて猛からず**(句)(論語述而篇の句)威嚴があってしかもやさしい所がある。**—を醫らす**(句)(唐書魏徵傳の句) 機嫌をなほす。怒を解く。**—を振るふ**(句) ゐばる。勢を示す。

い〔帷〕(名) 周圍にめぐらしたたれぎぬ。たれぎぬ。とばり。**—を下す**(句)(漢書董仲舒傳の句) 塾を開いて教授する。

い〔遺愛〕(名) ❶故人の生前に愛した遺物。❷古人の仁愛の遺風。**—じ**〔遺愛寺〕(名)【佛】支那江西省の廬山に在る寺。

いあいぃぁぁ〔居合〕(名) 卻進の一派。坐ったままですばやく刀を抜き、敵を斬倒す技。峰林重信に始まる。**—ぬき**〔居合拔〕(名) 見世物の一。身體の自由を束縛したり、極く狹い間隙に於いて、長い刀を

いあい…ぁぁ〔射合〕(名) いあふこと。

いあう…ぁぁ〔射合ふ〕(他動、ハ四)(いあうの)の口語。

いあおぁぁぉ〔位襖〕(名) 位階によって色を異にしたお襖。

いあかぁ…ぁか〔居明す〕(自動、サ四) 寢ずに坐ったまま夜をあかす。

いあくぁ…〔帷幄〕(名) ❶とばりとあげばりと。❷作戰計畫をする所。❸大元帥麾下の軍機を計畫し給ふ所。**—じょうそう**(ぢやう)〔帷幄上奏〕(名)【法】參謀總長・軍令部總長・陸海軍大臣が、內閣に相談せずに、天皇に軍要軍事問題を直接上奏すること。

いあつぁ…〔威壓〕(名) 威力を以ておさへつけること。おどしておさへつけること。「を射てあてる。

いあつ(てあてる)ぁ…(てあてる)〔射中つ〕(他動、タ下一)矢

いあつまるぁ…(あつまる)〔居集まる〕(自動、ラ四)あつまってゐる。(古語)

いあてるぁ…(てあてる)〔射中てる〕(他動、タ下一)「いあつての口語。

いあわす(あはす)〔居合はす〕(自動、サ下二)ちやうどその場にゐる。折よくゐる。

いあわせる(あはせる)〔居合はせる〕(自動、サ下一)(いあわすの)の口語。

いあん〔怡安〕(名) 樂しみ安んずること。

いあん〔醫案〕(名) 治療の方案。

いあん〔慰安〕(名) 慰めて心を安らかにする。

—かい…ゐ〔慰安會〕(名) 慰安の爲に開く會合。

いあんじん〔異安心〕(名)【佛】祖師の道とちがった教義を唱ふること。「—異端」。